愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第135集

瓶子窯跡

2005

（財）愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第135集

へいじかまあと

瓶子窯跡

2005

（財）愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

茶入
（一部修復したものを含む）

茶陶・特注品

窯道具類

量産品

赤津地域の量産品　擂鉢と銭甕

序

「やきもの」の町として著名な瀬戸市は、愛知県の北東部に位置します。市内には古代から近世にかけて、さらに近・現代までの窯業関連の遺跡がいたるところに分布しています。盆地を囲む丘陵地には無数の窯が築かれており、最盛期には方々から幾筋もの煙が立ち昇っていた、そのような情景が想像されます。

さて、調査を行いました瓶子窯跡は、赤津地区にある江戸時代の陶器窯跡です。この場所は、茶陶の一つである「茶入」が焼かれた窯として知られており、残念なことに、ごく最近まで度々の盗掘の憂き目に遭ってきました。調査の結果、17世紀代にやはり多くの優品が作られていたことがわかりました。また、この窯の経営には尾張藩が強く関わってきたことを示す資料が新たに発見されました。当時の窯業形態をはじめ、尾張藩の茶の湯、茶陶の世界での瀬戸の地位など、多岐にわたる問題に、今後大きな意味をもつ資料となるでしょう。

地域にはまだ多くの重要な資料が残されており、その解釈も未だ完成されたものではありません。本報告が地域の財産として埋蔵文化財の保護・活用に寄与することにつながれば幸いです。

平成18年3月

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
理事長　古池庸男

例　言

1. 本書は愛知県瀬戸市凧山町に所在する瓶子窯跡（へいじかまあと：県遺跡番号 3504）の発掘調査報告書である。
2. 調査は東海環状自動車道建設に伴う事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査対象面積は本調査 1,300 ㎡および試掘調査（200 ㎡）である。
3. 発掘調査は平成 15 年 4 月～ 6 月にかけて実施し、整理および報告書作成作業は平成 16 年 4 月から平成 18 年 3 月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は、（株）アコードの支援を受けて、藤岡幹根（主査：現小牧市立一色小学校教諭）・　樋上　昇（主任）・武部真木（調査研究員）が担当して行った。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、瀬戸市教育委員会、（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、瀬戸市歴史民俗資料館、国土交通省愛知国道事務所をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆は、森　勇一、鵜飼雅弘、鬼頭　剛、堀木真美子、武部真木が分担し、編集は武部が行った。
第 1 章 1（鬼頭）、第 5 章 1（森・鬼頭）、第 5 章 2（堀木）、第 6 章 1（鵜飼・武部）、その他（武部）
7. 整理作業は武部真木が担当した。作業にあたっては下記の方々、関係機関の助力を得た。
古橋佳子、山口典子（研究補助員）、中村たかみ、後藤恵里、斉藤佳美、牧ゆかり、三浦里美、
伊藤ますみ、服部里美、山田有美子、前田弘子、服部久美子、村上志穂子（以上整理作業員）、
金子知久（写真工房　遊）、（株）アイシン精機、（株）フジヤマ、（株）テイケイトレード、
（株）東都文化財保存研究所、（株）ウエルオン
8. 本書に示す座標数値は座標数値は国土交通省に定められた平面直角座標第 Ⅶ 系に準拠する。海抜表記は東京湾平均海面（T.P.）の数値である。ただし表記は旧測地系（日本測地系）とした。
9. 遺物の登録は、本書図版の掲載番号を元に整理を行った。
10. 写真および図面などの調査に関わる記録類は、愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
（財）愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
〒 498-0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802-24（ 0567-67-4161）
11. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒 498-0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802-24（ 0567-67-4164）
12. 本書を作成するにあたり、下記の多くの方々から多大なご指導とご助言を得た。記して感謝したい。
（敬称略）
青木　修、青山双男、赤羽一郎、赤松和佳、砂澤祐子、稲垣正宏、井上喜久男、江崎　武、
岡　佳子、岡本直久、尾野善裕、金子健一、河合君近、佐藤公保、佐藤　隆、佐藤豊三、
佐野　元、下鶴　弘、鈴木　徹、鈴木裕子、住田誠行、関　一之、関　明恵、瀬戸口龍一、
高橋健太郎、高部淑子、立神次郎、谷　晃、中村和美、中村　憲、楢崎彰一、西田宏子、
西村徳次郎、能芝茂樹、野場喜子、服部　郁、深野信之、福岡猛志、藤澤良祐、曲田浩和、
森村健一、柳生延夫、山下廣幸、山下峰司、山本祐子

目次

第１章　遺跡の立地と環境

1．瓶子窯跡周辺の地形・地質 …… 1
2．近世赤津村周辺の歴史的環境 …… 2

第２章　調査の経緯と概要

1．調査の経緯 …… 7
2．調査の経過 …… 7
3．整理作業 …… 8
4．窯体調査の概要 …… 8
地磁気探査結果／瓶子窯跡周辺の範囲確認試掘調査／
（第１号窯の調査）（第２号窯の調査）（出土遺物の概要）

第３章　層序

1．基本層序 …… 13
2．ベルトＡ …… 13
3．ベルトＢ …… 14
4．ベルトＣ …… 14
5．ベルトＥ …… 14
6．ベルトＤ …… 17
7．その他 …… 17

第４章　遺物

1．出土遺物の概要 …… 20
2．碗類 …… 24
天目茶碗／小天目／丸碗／端反碗／平碗／
筒形碗／小碗／小杯／その他碗類
3．皿類（小皿類） …… 27
鉄絵皿／反り皿／輪禿皿／折縁皿／丸皿／
輪花皿・菊皿・型打皿／その他小皿類
4．中皿・盤・鉢類 …… 29
中皿・盤類／型打皿／鉄絵鉢・折縁鉢・その他大皿類／
片口／煙硝擂／擂鉢／風炉／蓋物／鬢盥
5．瓶・壺・甕類 …… 36
有耳壺／小壺／短頸壺／茶壺／銭甕／徳利・花瓶／
浸瓶／桶・水甕・その他甕類
6．香炉・蓋・人形・その他 …… 39

香炉／蓋／灯明皿／人形類／水滴・硯／水指／
その他／瓦類／仏飾具／茶釜・鍋／
土師質鍋・皿／加工円盤／その他
7. 茶入 …… 42
8. 窯道具 …… 49
匣鉢／焼台／エブタ／匣蓋／栓／トチ類／
色見／乳棒／その他
9. 文字陶片資料・その他文字資料 …… 53
陶片資料の分類と内容／その他文字資料／墨書
10. 木製品・金属製品・石製品 …… 61

第５章　自然科学分析
1. 瓶子窯跡でみられる堆積層序とその年代 …… 63
2. 瓶子窯跡出土遺物の胎土分析 …… 67

第６章　まとめと考察
1. 陶片の人名について …… 71
柳生兵助について／その他の尾張藩士
2. 瓶子窯跡の生産の状況 …… 74
生産の内容／生産技術／茶陶の生産体制について／
瓶子窯跡の役割

登録遺物一覧表　1～19
遺　物　図　版　1～103
写　真　図　版　1～48
報告書抄録

CD-ROM 内容目次

1. 報告書 PDF データ
2. 筆書・刻書陶片資料画像
3. 胎土分析試料画像
4. 茶入 修復前画像

挿図 目次

図 1　瓶子窯跡周辺の地形・地質図…… 1
図 2　愛知県瀬戸市域でみられる地質…… 2
図 3　近世赤津村窯跡分布図…… 3
図 4　江戸時代瀬戸窯分布図…… 3
図 5　調査遺跡位置図（S=1/5,000）…… 4
図 6　瓶子窯跡周辺地磁気探査結果（S=1/800）…… 8
図 7　調査区周辺現況測量図（S=1/800）…… 9
図 8　第 1 号窯窯体構造図・出土遺物 …… 10
図 9　第 2 号窯窯体構造図・出土遺物 …… 11
図 10　調査区全体図 …… 13
図 11　ベルト A・B・C 土層断面図（S=1/80）…… 15
図 12　ベルト D・E 土層断面図（S=1/80）…… 16
図 13　調査区平面図（1）（S=1/200）…… 18
図 14　調査区平面図（2）（S=1/200）…… 19
図 15　NR01 下層出土遺物の分布（S=1/400）…… 22
図 16　擂鉢口縁部の形状 …… 31
図 17　擂鉢口縁部分類（1）…… 32
図 18　擂鉢口縁部分類（2）…… 33
図 19　擂鉢 内面擂目の分類 …… 33
図 20　銭甕の形状と窯印 …… 37
図 21　茶入胎土の分類　概念図 …… 42
図 22　茶入窯詰の方法　想定図 …… 48
図 23　匣鉢 III 類断面 …… 49
図 24　クレ（S=1/4） …… 52
図 25　墨書　（名古屋城三の丸遺跡出土）…… 55
図 26　分析試料採取地点図 …… 63
図 27　地点 1（NR01）の層序断面写真 …… 64
図 28　地点 2 の層序断面写真 …… 64
図 29　地点 1 における層序と放射性炭素年代値 …… 65
図 30　地点 2 における層序と放射性炭素年代値 …… 65
図 31　茶入胎土のスペクトル図 …… 67
図 32　Fe_2O_3-Al_2O_3 図 …… 69
図 33　瀬戸市内の窯業原料の Al_2O_3-Fe_2O_3 図 …… 69
図 34　K_2O-CaO 図 …… 70
図 35　陶片 人名より推定される尾張藩士 …… 73
図 36　刻書人名のある窯道具 …… 77
図 37　高麗茶碗と瓶子窯跡腰高碗 …… 78
図 38　刻書陶片（烏帽子遺跡 ,S=1/3）…… 79

挿表 目次

表 1　グリッド別擂鉢破片数 …… 20
表 2　出土器種一覧 …… 21
表 3　NR01 下層の出土遺物 …… 23
表 4　擂鉢口縁部　分類・出土地点別破片数 …… 30
表 5　擂鉢口縁形態と擂目の関係 …… 34
表 6　匣鉢 II 類　内面に残る重跡 …… 50
表 7　文字陶片資料の分類別点数 …… 53
表 8　陶片資料のグリッド別分布 …… 54
表 9　文字資料の内容 (1) …… 56
表 10　文字資料の内容 (2) …… 57
表 11　文字資料の内容 (3) …… 58
表 12　文字資料の内容 (4) …… 59
表 13　文字資料の内容 (5) …… 60
表 14　出土木製品の樹種と年代 …… 61
表 15　地点 1 における放射性炭素年代測定結果 …… 65
表 16　地点 2 における放射性炭素年代測定結果 …… 65
表 17　分析試料一覧 …… 68
表 18　化学組成値 …… 68
表 19　瓶子窯跡出土遺物個体数成 …… 75
表 20　瓶子窯跡出土窯道具と瀬戸美濃諸窯での分布状況 …… 76

第１章　遺跡の立地と環境

1. 瓶子窯跡周辺の地形・地質

瓶子窯跡のある愛知県瀬戸市は、濃尾平野の周りをとり囲む丘陵地と山地の東側、名古屋市の北東部にあたる（図 1）、調査地点の南東約 3.5km には標高 629m の猿投山が、北東約 6km には標高 701m の三国山が連なる。猿投山と三国山とを結ぶ南北方向にのびる山陵は、名古屋市を流れる主要河川である庄内川・矢田川の分水嶺にあたる。この猿投山―三国山とを結ぶ山陵は、さらに南西の知多半島までのびており、猿投―知多上昇帯（桑原，1968）とよばれる第四紀を通じて隆起運動が継続していた地域として知られている。調査地点のある瀬戸市鳥山町は矢田川の上流部にあたり、伊勢湾にそそぐ河口から約 45.7km の距離にある。調査地点の西約 120m には矢田川の最上流部にあたる赤津川が流れる。赤津川は約 3.7km 東方にある猿投山―三国山の山陵付近から西方へ流れ、調査地点の鳥山町で屈曲し、南西方向へ流下方向を変化させる。調査地点はちょうどこの屈曲部付近にあたる（図 1）。赤津川は調査地点から南西約 4km で山口川、さらに西方約 2.7km では矢田川と名称を変え、庄内川と合流してから後は庄内川として伊勢湾にそそぐ。

地質学的に、愛知県には三河湾（渥美湾）にそそぐ豊川付近を通り、長野県の諏訪湖にかけて北東―南西方向にのびる中央構造線がある。中央構造線で分けられる太平洋側を外帯（三波川帯・秩父帯・四万十帯）、陸側を内帯（領家帯・美濃帯）とよぶ。瀬戸市域には内帯が広がり、美濃帯の中・

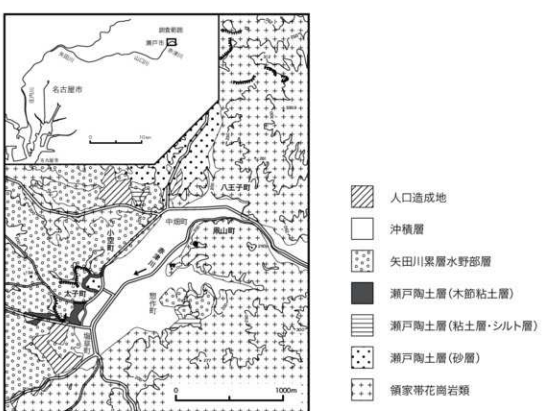


図１　瓶子窯跡周辺の地形・地質図

●は調査地点を示す．等高線は国土地理院発行の 1/25000 地形図「瀬戸」・「猿投山」を，地質図は水野ほか（1986）を基に作成．

古生層（近藤，1988）と中生代白亜紀～新生代古第三紀の領家帯の花こう岩類（仲井，1970；領家研究グループ，1972; Nakai, 1976；仲井，1982）を基盤岩として、それらを新生代第三紀中新世後期から第四紀更新世、完新世の堆積物が覆っている（図 2）。瓶子窯跡のある瀬戸市猴山町周辺は、基盤岩類とそれを覆う堆積物とが明瞭に区分される場所にあたっており、調査地の東側半分には領家帯の花こう岩類が露出する山地が広がる。西側半分には新生代新第三紀中新世後期以降の堆積物が分布する丘陵地や平地となっている。瀬戸市域には基盤岩類に囲まれた盆地状構造を示す地形が認められ、盆地は南から赤津・品野・水野・上半田川・下半田川と呼称される場合もある（水野ほか，1986）。それらのうち、調査地点は赤津盆地にあたり、瀬戸市猴山町・中畑町から惣作町を通り、塩草町に至る北東 - 南西方向に延びた盆地状構造を呈している。本盆地には花こう岩の風化によるマサ化した未固結堆積物がみられ、盆地底は標高約 170m の堆積範囲の狭長な谷底平野を形成している。調査地点は領家帯の花こう岩類からなる北西方向にのびる尾根において、西方へ開析する谷の標高およそ 200m の北側斜面に位置している（図 1）。

（鬼頭 剛）

図 2　愛知県瀬戸市域でみられる地質

水野ほか (1986) を基に作成．

【文献】

近藤直門，1988, 多治見地域，日本の地質 5 中部地方 II, 共立出版，45-46.

水野 収・伊藤竹次・深見洋治郎・片 征治・石川輝海，1986, I 大地，瀬戸市史 資料編二 自然，瀬戸市，1-100.

仲井 豊，1970, 愛知県三河地方の花崗岩類，地球科学，24, 139-145.

Nakai, Y., 1976, Petrographical and petrochemical studies of the Ryoke granites in the Mikawa-Tono district, central Japan, Bull. Aichi Univ. Educ., (Nat. Sci), 25, 97-112.

仲井 豊，1982, 中部地方領家帯の武節花崗岩，日本地質学会第 89 年学術大会講演要旨，404.

領家研究グループ，1972, 中部地方領家帯の花崗岩類の相互関係，地球科学，26, 1-21.

2. 赤津村周辺の歴史的環境

旧赤津村を含む瀬戸市域は、記録によれば古代尾張国山田郡に含まれる。天文 17 年（1548）から元亀 3 年（1572）にかけての間に山田郡は廃止となり、矢田川を境に北側は春部郡、南側は愛智郡となった。江戸時代になって春部郡は春日井郡、愛智郡は愛知郡と変更された。春日井郡に含まれていた赤津村は、大正 14 年（1925）に瀬戸町に吸収合併となり、瀬戸町は昭和 4 年（1929）に瀬戸市となり現在にいたる。

江戸時代の幕藩体制下において、瀬戸市域は 18 の村で構成されており、そのうちの瀬戸村、赤津村、下品野村、上水野村、下半田川村の 5 つの村の地点で「連房式登窯」の存在が確認されている。

これまでの調査から、いずれの村も 16 世紀半ば頃まで戦国期以来の大窯による陶器生産は活発

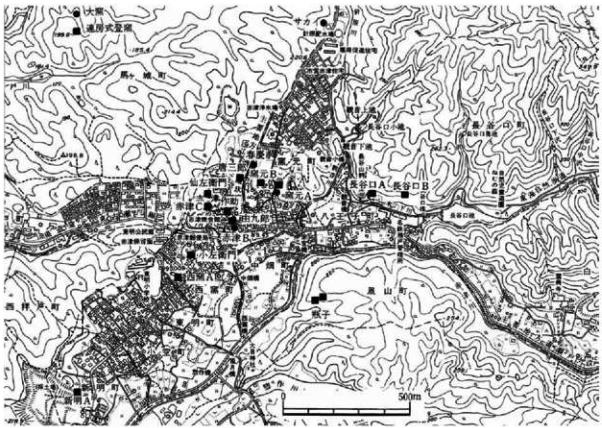


図 3　近世赤津村窯跡分布図（青木 2000）

瓶子窯跡	17 世紀	大窯・連房連結窯
風山 A 窯跡	16 世紀	連房式登窯 大窯
赤津口窯跡	16 世紀	大窯
白山社窯跡	16 世紀	大窯
赤津 B 窯跡	17 世紀	大窯
春慶窯跡	17 世紀	大窯
窯元 A 窯跡	17～18 世紀	大窯 連房式登窯
西窯 A 窯跡	17～19 世紀	連房式登窯
唐三郎窯跡	17～19 世紀	連房式登窯
小左衛門窯跡	17～19 世紀	連房式登窯
由九郎窯跡	17～19 世紀	連房式登窯
赤津 C 窯跡	17～19 世紀	連房式登窯
仙左衛門窯跡	17～19 世紀	連房式登窯
作助窯跡	17～19 世紀	連房式登窯
長谷口 B 窯跡	19 世紀	連房式登窯
長谷口 C 窯跡	19 世紀	連房式登窯

図 4　江戸時代瀬戸窯分布図
（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 に加筆）

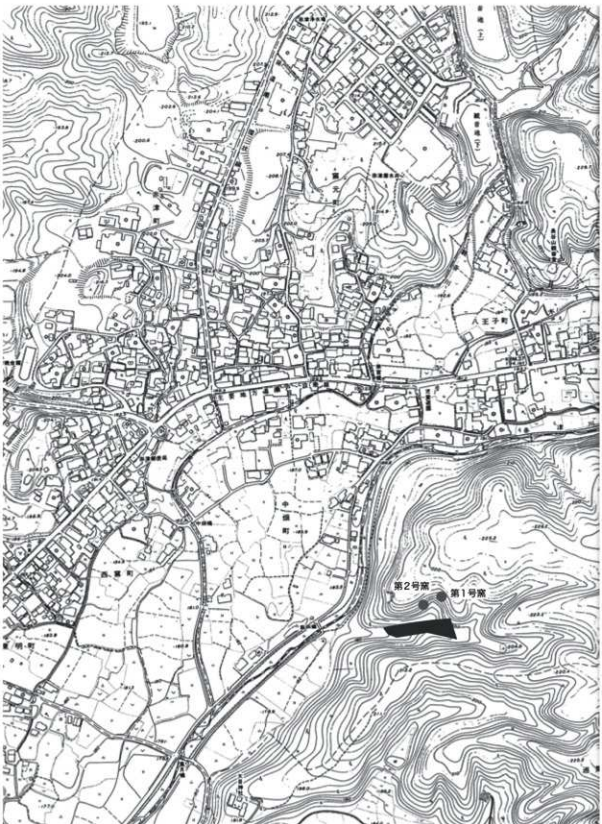


図５　調査遺跡位置図（S=1/5,000）

であったが、続く16世紀後半から末の織豊期においては、いち早く連房式登窯を導入して桃山茶陶を生産した美濃窯に拠点が移り、瀬戸窯は活動の希薄な空白期であったことが考古資料から示されている。これが多数の陶工が美濃へ移動した所謂「瀬戸山離散」と表現される状況の一つである。記録には、その後江戸初期の慶長15年（1610）に尾張藩主、徳川義直が美濃から瀬戸・赤津へ陶工を召喚し、御窯屋として保護した記録があり、この時期以降が瀬戸の近世窯業興隆の大きな契機と考えられている。ただし、考古資料ではこれら御窯屋による生産に先行する時期の資料も少なからず確認されており、空白期といえども完全に生産を停止していた訳ではなく、一部地域では継続していたと考えられている。

江戸時代の瀬戸窯業生産の内容についてみると、その特徴の一つに各村ごとに生産内容に独自性が認められるようになったことがあげられる。天目茶碗、小皿類、擂鉢の主要三器種をそれぞれ量産していた大窯期とは異なり、瀬戸村では碗、皿類の食膳具や植木鉢、水甕、火鉢類などの住用具、赤津村と下品野村では擂鉢、半胴、片口など調理具や貯蔵具、上水野村と下半田川村では徳利や神仏具などの器種がそれぞれ生産されており、こうした器種別分業が江戸時代中期以降に顕著になっていくようである。また、瀬戸村・赤津村以外の地点では発掘調査事例が少ないため断片的な資料での比較となるが、生産のピークとなる時期、また19世紀初めに始まる磁器生産への取組み方も各村によって独自の動きが認められる。

瓶子窯跡の所在する赤津村の近世窯業生産は、藩主義直が慶長15年に美濃国郷ノ木村（岐阜県土岐市曽木町郷之木）から利右衛門（のち唐三郎）と仁兵衛の兄弟を呼び戻し保護を加えたのがその始まりとされている。さらに万治元年（1658）には分家の太兵衛が加わって「御竈屋三軒」と呼ばれ、この者らは名古屋城内の御深井窯や横須賀御殿（愛知県東海市高横須賀町）、戸山別邸（東京都新宿区戸山）など藩が管掌する御用窯で度々勤めたという。尾張藩は1620年に拠点を清州から名古屋に移しており、この頃始まった殖産興業策のひとつでもあったと解釈されている。

近世赤津村の窯跡分布（図3）をみると、これまでに大窯6地点、連房式登窯13地点、大窯と連房式登窯の連結窯1地点、その他に新明窯、江戸初期の茶入散布地として知られるサカイ窯が登録されている。大窯期の生産はここでも織豊期にかかる第3段階後半まで継続するものは少なく、江戸時代前期（第5段階）に新たに生産を開始する。ただし、連房式登窯の導入には即結びつかず、大窯の形態が残るのが特徴である。

調査した瓶子窯跡の位置は、赤津村の近世の窯跡のほとんどが赤津川以北の丘陵部集落内に造られたのとは対照的であり、集落から離れ単独で存在する特異な立地であることが指摘されていた。またこの窯の周辺は、多くの茶入が散布する場所として古くから知られており、その骨董的評価の高さからごく近年まで周辺の物原は激しく盗掘が行われていた[*1]。

この窯で生産された茶入の評価を高めてきた理由はその名称にもある。「瓶子窯」の名は小堀遠州の門下の茶人が記したとされる『茶器弁玉集』（寛文12年（1672）に編纂）「瀬戸竈所之次第」に「一　瓶子竈　藤四郎此竈ニテ唐物ヲ焼ト云説アリ」とあり、陶祖藤四郎が唐物写しの茶入を焼成したという伝説の窯の名称として挙げられている。勿論、調査した本窯は藤四郎の活動したとされる鎌倉時代の窯ではない。ただ『茶器弁玉集』の成立年代と本窯の操業年代はほぼ一致しており、なおかつ「茶入」を最も大量に焼成していた窯であることは確かであり、ひとまず「瓶子窯」と呼称されている[*2]。

【註】

*1…安藤政二郎　1941『瀬戸ところどころ今昔物語』大瀬戸新聞社　明治末期から大正初年にかけて瀬戸古窯址の調査が行われるようになったが「その後増加して昭和3.4年頃には出土の瓶子や鉢、碗が高価になるというので瀬戸赤津の失業労働者群が密集し、ゴールドラッシュともいうべき一時代を現したことがある。」

「華仙氏の古窯探り瓶子窯を転覆する」に窯跡乱掘の逸話が伝えられている。加藤華仙氏（日展特選作家）ら一部の研究者グループによる発掘調査が行われるはずであったが、瓶子窯で貴重品が発掘されるという情報が広がり「好事家、失業者などがワンサと押しかけ、二十日程の間に、窯址は址方もないほど掘り返されてしまった。」

*2…ただし「ヘイジ窯」と呼ばれていた可能性はある。『瀬戸市史　陶磁史篇一』では「うふふはむへへし」と刻まれた直径９cm 程度の壺の底らしい陶片について紹介されており、ここでは混同を避け遺跡に「平次窯」の文字を当てている。また安藤政二郎 1941『瀬戸ところどころ今昔物語』（大瀬戸新聞社）では「赤津地方の言い伝えによれば平次という窯焼が焼いていたので「へいじ窯」の名が伝えられた」とある。

【参考文献】

秋田幸純 1996『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 63 集

青木　修　2000『瓶子窯跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第 22 集

藤澤良祐 2001「瀬戸美濃大窯製品の生産と流通―研究の現状と課題―」「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム資料集

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2002『江戸時代の瀬戸窯』企画展図録

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2003『江戸時代の美濃窯』企画展図録

（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』企画展図録

1969『瀬戸市史　陶磁史篇一』

1993『瀬戸市市　陶磁史篇四』

1998『瀬戸市史　陶磁史篇六』

第２章　調査の経緯と概要

1. 調査の経緯

瓶子窯跡の発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴う事前調査として、国土交通省愛知国道事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 15 年４月から６月の期間で実施した。調査面積は 1,300 ㎡（+200 ㎡）である。調査担当者は、藤岡幹根（主査・現小牧市立一色小学校教諭）、樋上　昇（主任）、武部真木（調査研究員）である。

2. 調査の経過

瓶子窯跡は瀬戸市鳥山町（31-4 番地）に所在する（図５）。平成 10･11 年度において、既に（財）瀬戸市埋蔵文化財センターの調査が行われ、窯体２基（第１、第２号窯）および作業場と思われる平坦面が確認されている（図７）。

業務支援スタッフ

（株）アコード
　魚津洋由（現場代理人）
　西村匡広（調査補助員）
　島軒　満（土木測量技師）

溝川伸浩・多田博信
（重機オペ：（株）アクセス）

2003 年の今回の調査地点は、それらの南側に展開する物原と想定され、現況は東西方向にのびる谷地形で湿地状を呈していた。実際には調査範囲の一部に物原の堆積層の末端がかかる、といった状況であった。調査範囲は南北約 20m、東西約 100m を測り、谷埋積土のうち窯跡に関連する江戸時代前期の遺物を含む層は、表土から深さ約 1.5 ～ 2m であった。

平成 15 年４月１日から現況測量、調査範囲設定、機材搬入等を開始した。４月７日から（４月 24 日まで）重機による表土掘削を行ったが、湿地部分は絶えず湧水があり作業は困難を極めた。最終的には調査区南辺に沿って排水路を確保したのち、重機進入路用に鉄板を敷設しつつ掘削を行い、掘削土の排出を完了した。４月 21 日から発掘作業員により調査区西側から、谷底の自然流路と物原末端の堆積層にベルト数ヶ所を設定し、人力掘削を進めた。６月 27 日、ラジコンヘリによる調査区全景の写真撮影と測量を実施した。６月 30 日、機材を撤収して調査を完了した。

なお、本調査に先立つ平成９年度に瓶子窯跡一帯の地磁気探査を行っている。この結果をもとに愛知県教育委員会文化財保護室の指導により試掘調査を行い、調査成果と遺跡の重要性を鑑み、道路用地を遺跡南側にスライドする形で工事計画に修正が加えられた。

搬入路　鉄板敷設作業

遺物実測

3. 整理作業

第一次整理作業（洗浄および注記）は、平成 15 年度中に当センター瀬戸事務所において、整理作業員が行った。

第二次整理作業（接合・復元・実測等）については、平成 16 年 4 月から平成 17 年 9 月まで愛知県埋蔵文化財センターにて行った。出土遺物総量は 27 ℓ コンテナ約 870 箱の分量となった。

なお一部の資料について、陶器類の実測を（株）アイシン精機、文字陶片資料の実測およびデジタルトレースを（株）フジヤマ、陶器類のデジタルトレースを（株）テイケイトレード、（株）ウェルオン、木製品の保存処理および実測を（株）東都文化財保存研究所に、茶入等の修復を住田誠行氏に委託した。また遺物の写真撮影は（写真工房遊）金子知久氏に依頼して行った。

4. 窯体調査の概要

地磁気探査結果

平成 9 年度に行った地磁気探査の結果について概要を記しておく。（測定および解析方法についての記述は省略する。記録類は当センターが保管している。）

測定では遺跡周辺の遺物散布状況と現況地形をもとに凡そ 120m × 80m の範囲に任意の方向の 10m グリッドを設定し、この間でさらに 1 m の格子を設定して網羅的に測定を行った。測定した範囲と測定結果を図 6 に示す。（図中の地形はおおまかなスケッチをもとにしている。）測定値解析の結果、窯体の存在が推定される地磁気異常の分布範囲は、A 地点（7a ～ 9e の間）、B 地点（9d 付近～ 11b の間）、C 地点（2e ～ 3f の間）、D 地点（8g ～ 9f の間）であった。

このうち丘陵部南向き斜面にあたる A,B の両地点では、周囲に夥しい量の窯道具、近世陶器片に

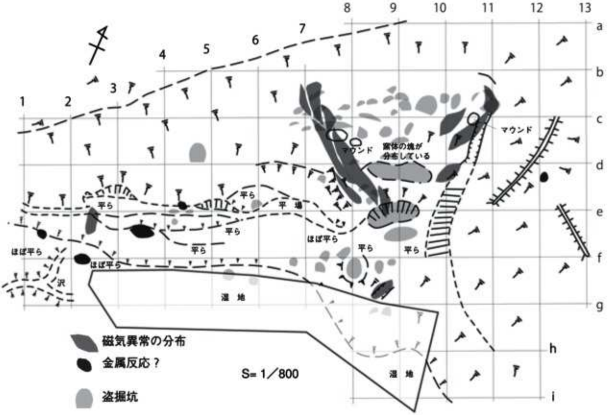


図 6　瓶子窯跡周辺地磁気探査結果（S=1/800）

混じり窯体の一部と思われる焼土塊が多く集中して散布していることなどから、ほぼこの地点に窯体が埋没しているものと予想された。A 地点は長軸方向で約 32m、短軸方向で約 5m を測り、規模等から連房式登窯が存在したものと推定された。また、B 地点は異常範囲が複数の小範囲に分かれており、小さな窯が複数存在した、あるいは規模の大きい窯体が分裂、崩落して埋没している、との２通りの解釈が可能であった。

C 地点、D 地点は先の２地点と比較するとかなり小規模であり、A,B 地点から遅れた窯体の一部か、または単独で小規模な窯体を構成するものと推定された。C 地点付近は近世茶入の陶片が多く散布していたこともあり、未だ実態が不明である茶入焼成用素焼き窯の存在も可能性の一つに想定された。

瓶子窯跡周辺の範囲確認試掘調査

平成９年度７～８月にかけて（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが道路建設計画用地内で 200 ㎡の調査を行った。窯体（推定）の前方急斜面から谷入り口にかけての範囲に幅１～2m、長さ５～ 10m のテストトレンチを 19 箇所に掘削し、堆積断面観察、遺構確認、遺物出土状況等の調査を行った。

磁気探査結果をふまえ、さきの C,D 地点にそれぞれトレンチを設定したが、両地点とも窯体等に関連するの遺構は確認されなかった。また、金属反応のみられた地点については調査の結果、盗掘等による金属系の廃棄物に反応した可能性が高いことが分かった。

遺物の出土状況では、窯体焚口部分（推定）の前方に長径７m前後の大規模な盗掘坑があり、とりわけこの付近では物原堆積層が厚く、一部で最

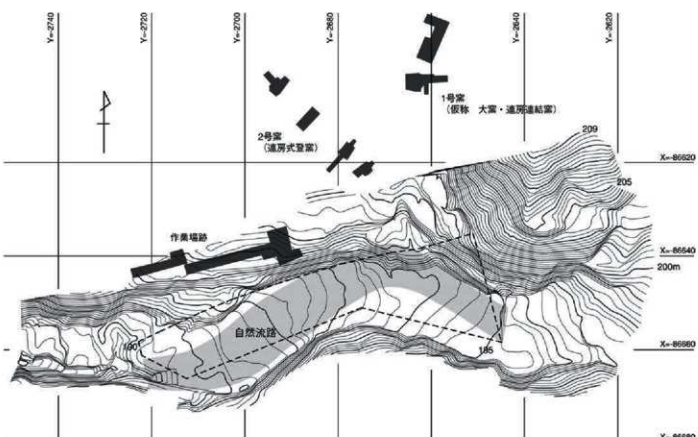


図７　調査区周辺測量図（S=1/800）

（点線内が今回の調査範囲）

大2.3mにも達した。

遺構では、谷入り口に近い丘陵上の平坦部で整地層とみられる堆積層と石垣の一部が確認された。また、この付近で検出された遺物には、ほぼ完形に近い肩衝茶入（828）、大海茶入（822）各1点がある。

以上の試掘調査によって、建設計画用地内には物原が含まれ、さらに窯体焚口の一部も影響を受ける可能性が高いことがわかった。

次に（財）瀬戸市埋蔵文化財センターの調査成果から窯体の位置および構造、先行する出土遺物の分析等について概要を整理しておく。

第1号窯の調査

窯体は、丘陵の南向斜面中段から頂上よりやや下がった位置に構築されている。連結部分は未確認であるものの、前部が「大窯」、中程から後方が6室の「連房式登窯」という特殊な構造であることがわかった。現段階では「大窯・連房連結窯」（仮称）と呼称されている。

大窯部分は、燃焼室と焼成室各1室から構成される。その間に分炎柱と昇炎壁が構築され、分炎柱の先端は昇炎壁と密着し一体となる構造である。昇炎壁は分炎柱側で高く50cm程度であり、側壁付近では10cm程度と低くなる。①焼成室左側手前にむかって傾斜する、②焼成室床面にクレを使用した支柱三列が設けられる、ことが特徴にあげられる。

連房式登窯部分は、焼成室（房）のみであり6室が確認された。狭間柱は丸底形匣鉢を数段積み重ね周囲に粘土を貼付け固定するもので、各房に幅20cmのもの5本が並ぶ。各房の床面傾斜は20度前後で一定しており、僅かに段を形成する。有段斜狭間の構造を持つ。天井は両壁と狭間柱の状況から、いわゆる蒲鉾形を呈する「割竹式」の構造が推測される。出入口は各房の左側手前に設けられる。

補修の痕跡は大窯部分焼成室の両壁で認められるほか、連房部分の狭間孔の一部を粘土で塞ぎ縮小した痕跡がある。

窯体主軸の方向はN－22°－Eであり、丘陵稜線に直交する。残存部の全長は15.4m、大窯部分の最大幅が3.92m、連房部分では幅2.4～

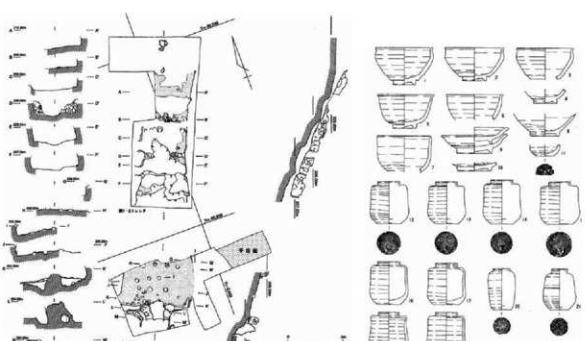


図8　第1号窯窯体構造図・出土遺物（青木 2000）

2.9m、各房の奥行は 90cm を測る。焚口と末端までの比高差は 6.2m である。

第２号窯の調査

同じ丘陵斜面で第１号窯の約 20m 西に構築されている。燃焼室と 14 ～ 15 室（房）の焼成室をもつ、有段斜狭間構造の連房式登窯である。狭間柱は各房に７本が並ぶ。第１房、第４房、第 10・11 房では丸底形匣鉢を基礎に使用した天井支柱が確認されている。第４房の右側で出入口が確認されている。特徴としては、①瀬戸・美濃の連房式登窯の中で、特に規模が長大であること、②各室（房）の規模等が一律でなく、第 11 房付近までは床面は水平で 40 ～ 50cm の段差をもって続くのに対し、14・15 房は床面が傾斜し、段差も縮小する、などがあげられる。

改修・補修の痕跡は、各室（房）壁面を中心に多く認められる。燃焼室壁面は廃業時にはかなり幅が縮小されている。また分炎柱も築窯期には独立してあったものが、その後昇炎壁に組み込まれたことがわかった。

残存長は 28.3m、幅 2.6m 前後を測り、主軸の方向は N － 46.5° － W、焚口と末端との比高差は 12.2m となる。焚口は第１号窯より 5.4m 低い位置であるが、末端は丘陵頂部に達しほぼ同じレベルである。

出土遺物の概要

特異な出土状況が確認されている。第１号窯の第３トレンチでは、燃焼室の昇炎壁手前に並べるようにして置かれた素焼状態の茶入 10 点が出土している。出土地点が燃焼室であったことから、

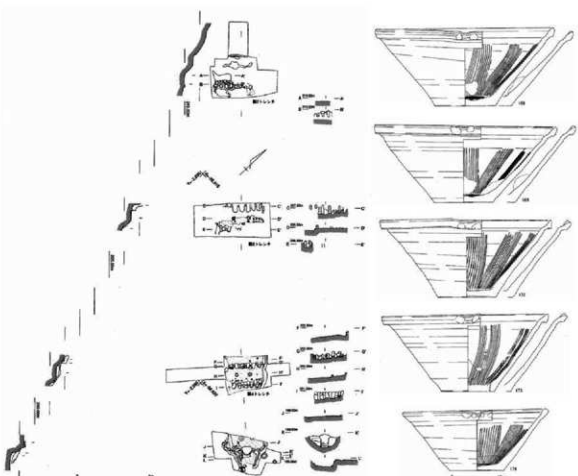


図９　第２号窯窯体構造図・出土遺物（青木 2000）

この窯の製品と断定できないものであり、また窯体廃棄に伴う儀式的な遺構の可能性が推定されている。また、天目茶碗の削り出し輪高台（I類）と内反り高台（II類）では、I類が大窯部分、II類が連房部分と出土地点が異なることが確認されている。連房部分の床面直上で検出された丸碗、端反碗は瀬戸窯編年第５小期（17 世紀後半）の年代に比定される。

第２号窯の出土資料は、第１号窯に比較して器種構成は多様であり、出土の傾向として、碗・皿類は普遍的にみられるが、第６トレンチでは擂鉢、第７トレンチでは灯明皿が目立つなど器種ごとに窯詰めされた状況が想定される場合がある。第６トレンチ（第 10・11 室付近）では口縁部が受口状となる擂鉢I類、口縁部が玉縁状に内側へ折り返された擂鉢II類があり、床面に設置したトチの上に最大３個体が重ねて置かれた状態であった。これらは瀬戸窯編年第４小期（17 世紀後半）に位置づけられるもので、廃業の時期を示す資料と考えられる。操業期間は、第５トレンチ資料の丸碗、鉄絵皿等に瀬戸窯編年第２・３小期と位置づけられるものが含まれることなどから、17 世紀中葉から後半までと考えられる。その他、底部外面に「□□懐上」とヘラ描きされた祖母懐壺１点が出土している。

窯体の西側、谷に沿ってのびる作業場とされる平坦面からは、第２号窯より更に多器種となり、土管や瓦などが含まれる。第１号窯、第２号窯の廃業時と同じ瀬戸窯編年第４小期から５小期に属する資料が多い。

【参考文献】

青木　修 2000『瓶子窯跡』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第 22 集

1993『瀬戸市史　陶磁史篇』四

1998『瀬戸市史　陶磁史篇』六

第3章　層　序

1. 基本層序

調査地点の堆積状況は、谷最深部を埋める旧流路を含む自然堆積と窯体方向から崩落した物原末端の再堆積部分とに大別される。調査では遺物を含む包含層が認められる範囲において、谷にほぼ直交するA～Fの5ヶ所のベルトを設定した（図10）。各ベルトで共通して認められた堆積状況は概ね次のように分けられる。

Ⅰ層…物原部分の表土
Ⅱ層…物原（再堆積層）（Ⅱ-a層物原上層、Ⅱ-b層物原下層）
Ⅲ層…谷の表土、上位堆積層（水田耕作土層を含む）
Ⅳ層…谷の湿地状堆積の上層
Ⅴ層…谷の湿地状堆積下層（第Ⅴ-a層、第Ⅴ-b層、両者含めて旧流路NR01）*1
Ⅵ層…ベース（中世以前）

各ベルトにおいて、第Ⅵ層以下の腐食土あるいは黒色土層は、遺物等を基本的に含まない。黒色粘土中に含まれる炭化物について放射性炭素年代測定（AMS14C）を行ったところ、中世以前の年代を得た。そのため、各地点で確認される第Ⅵ層をベースと捉え、ここまでを操業時に関わる旧流路の堆積層、すなわち近世瓶子窯跡の調査範囲とした。また、第Ⅵ層以下の湿地堆積層において可能な範囲でトレンチ調査を行ったが、遺物は確認されなかった。（第5章1）

次にベルトA～Eについて断面図を掲載し詳述する。

【註】
*1…遺物採り上げの際に第Ⅴ-a層は第4層、第Ⅴ-b層は第6層として作業を行った。

2. ベルトA

調査範囲で最も下流に位置するベルトである。二次堆積を含む物原の広がりはこの地点までは及んでおらず、谷を埋める堆積層を確認した。no.9層が表土、調査前の地表面（標高191.6m）である。no.10,11,12,13層は遺物をほとんど含まない暗灰色～灰色の粘性の強いシルトの水平堆積層であり、ここでは層厚は約50cmあり、第Ⅲ層に相当する。このうちno.10,11,12層はややしまりがあり、少量の炭化物が混じり鉄分の沈着がみら

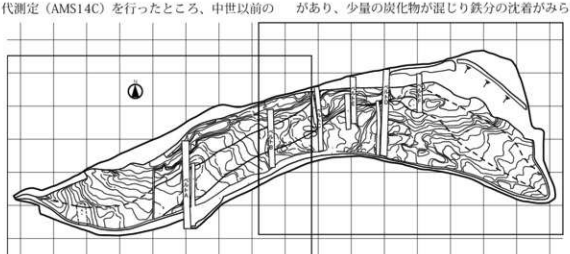


図10　調査区全体図（太枠は平面図別付）

れる。調査に入る伐採以前は細い樹木の茂る林であったが、近隣住民が記憶するところでは、戦中の一時期に谷の入り口付近で短期間水田耕作が行われていたという。伐採後の現況でも大きな水流は認められず、雨水等は絶えず谷上方から緩傾斜を網の目状に細く広がって流れており、特に谷理積層の上層は湿地状の堆積環境であったと思われる。

以上の部分までを重機で掘削し、やや多くの遺物が含まれ始めた以下の層について人力で掘削作業を行った。第Ⅳ層に相当する no.1,2,3 層は、ほぼ谷の幅全体に及ぶ層厚約 40cm 前後のシルト～細粒砂の水平堆積層であり、近世陶器の小片がまばらに混じる。

その下 no.4 層砂質シルト層は、この地点では谷の幅全体に及ぶほぼ水平の堆積が確認されたが、同様の堆積がやや上流に位置するベルト B においては約 8m と幅が狭くなり、しかも比較的大きな陶片が多く含まれることなどから主な遺物包含層、第Ⅴ層（第 V-a 層）とした。その直下 no.6 層は更に多くの陶片を含み、しかも最下層では遺物集中地点が認められた。ベルト A においては幅 4.7m、深さ 40cm 前後の狭い範囲となり、シルトと細粒砂が互層に堆積がする（第 V-b 層）。各ベルトでこのような比較的強い流れがあったことを示す同様の堆積が連続して確認されたが、ベルト以外の地点では掘削段階で上下層の峻別が困難であった。したがって、第 V-a,V-b 層をあわせて旧流路、NR01 と認識し取り扱うことにする。

no.7 層が第 VI 層に相当する腐食土を多く含む黒色シルト～粘土層であり、NR01 最下層とは明瞭に分層可能である。前項で述べた通り操業時以前の堆積層であるため、調査対象外とした。

3. ベルト B

ベルト A から約 13m 上流（東側）に位置し、北側丘陵上が市調査の作業場跡に相当する。窓体により接近するため当然ではあるが、遺物量はベルト A に比較して急激に多くなる。第Ⅳ層には no.17,18,19 が相当する。NR01 は調査区北側では花崗岩質の地山を削って流れており、第 V-a 層には no.20,21,22,23,24 層が、第 V-b 層には no.6 層が相当すると思われる。第 V-a 層の段階で幅約 8m、第 V-b 層では幅約 5.3m を測る。炭化物はここでは no.22 層でのみ検出された。NR01 南側端では近世陶器の製品、窯道具などが特に多く検出された。なお、no.8 層で数点の遺物が検出されたが、精査の結果、上位の層から軟弱な腐植土層に沈み込み混入したものと判明した。

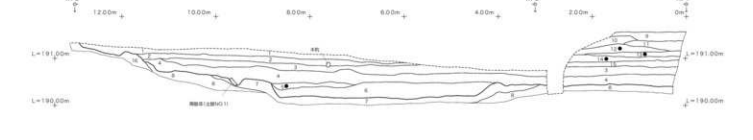
4. ベルト C

ベルト B のさらに約 7m 上流に位置する。ここで崩落した物原末端の堆積層がかかるため遺物量は極端に増加する。第Ⅱ層は no.25,26 層であり、このうち no.25 層はビニールが混入するなど盗掘による撹乱土坑と思われる。no.26 層は第 V-a 層の直上に堆積する。谷部分の流路が水平に埋まった後に、最初に窯体方向から崩落してきたと考えられる。大量の陶片の間を砂質シルトが充填し、遺物では窯体の一部や素焼の陶片を比較的多く含むという特徴がみられる。no.28,29 層はベルト以外では分層が困難であったが、第 V-a 層に連続する可能性があり比較的撹乱の少ない部分と考えられる。全体がグライ化した砂質の泥に上層と同様に夥しい量の遺物を含む。炭化物が集中する部分を no.29 層としたが、平面では捉えられなかった。これらが堆積したことによって、主な流路が南側に移動した可能性も考えられる。

5. ベルト E

ベルト C と D の間に位置する両窯体（第 1,2 号窯）の前方ほぼ正面に当たり、物原部分にのみベルトを追加設定した。第Ⅱ層は no.35（第Ⅱ-a 層、物原上層）、no.36,37,38,39,40,41,42（第Ⅱ-b 層、物原下層）が相当し、no.35 層にガラス瓶が混入する。この地点の特徴として、製品陶片はもとより炭化物や窯体など構造物の一部や焼台などが最

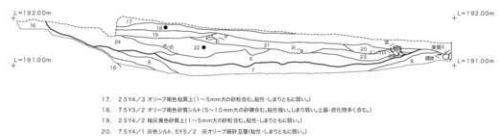
ベルトA



1. 5Y3/1　オリーブ黒色砂質シルト(1～5mm大の砂粒含む,粘性・しまりともに強い)
2. 5Y4/1　灰色シルト質細砂粒状(1～30mm大の砂粒含む,粘性・しまりともやや強い,1/2ブロック採入)
3. 5Y3/1　オリーブ黒色細砂(1～5mm大の砂粒多く含む,粘性・しまりとも強い)
4. 7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質シルト(1～50mm大の砂礫多く含む,粘性やや強いしまり弱い)
5. 7.5Y3/2　オリーブ黒色シルト(粘性強いしまりやや弱い,炭化物混じる)
6. 10Y4/1　灰色シルト(10Y3/2　オリーブ黒色細粒砂互層(粘性・しまりともやや弱い)
7. 7.5Y2/1　オリーブ黒色シルト(1～5mm大の砂粒含む,粘性強いしまりやや強い,鉄塩土層)
8. 10Y3/2　オリーブ黒色砂質シルト(粘性強いしまりやや弱い
9. 表土
10. 5Y5/2　灰オリーブシルト(1～5mm大の砂粒含む,粘性・しまりともやや強い,炭化物が認められる)
11. 10Y5/1～4.5Y　にぶい黄色シルト(粘性・しまりともにやや強い,炭化物が認められる)
12. 5Y2/2　黒オリーブシルト(粘性・しまりともにやや強い,炭化物が認められる,炭化物混じる)
13. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト(1～5mm大の砂粒含む,粘性やや強いしまり弱い,炭化物が認められる,炭化物混じる)
14. 5Y3/2　オリーブ黒色粘質土(1～5cm大の砂礫含む,粘性強いしまりやや弱い,鉄塩・炭化物混じる)
15. 5Y5/2　灰オリーブ細礫砂 2.5Y5/4　黄褐色砂互層(粘性・しまりとも弱い)

ベルトB

図中の●は炭化物を含む層を示す



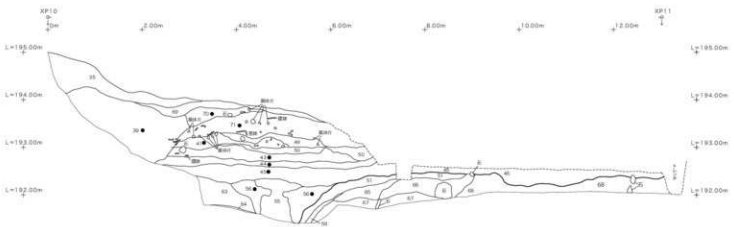
17. 2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質土(1～5mm大の砂粒含む,粘性・しまりともに強い)
18. 7.5Y3/2　オリーブ褐色砂質シルト(5～10mm大の砂礫含む,粘性強いしまり弱い,土器・炭化物多く含む)
19. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土(1～5mm大の砂粒含む,粘性・しまりともに強い)
20. 7.5Y4/1　灰色シルト、5Y5/2　灰オリーブ褐砂互層(粘性・しまりともに強い)
21. 7.5Y4/1　灰色砂質シルト(1～5cm大の砂礫含む,粘性・しまりともに強い)
22. 2.5Y3/3　極オリーブ褐色砂(粘性強いしまり強い,土器・炭化物多く含む,6ブロック採入)
23. 7.5Y4/1　灰色シルト(1～5mm大の砂粒含む,粘性強いしまり強い)
24. 7.5Y4/1　灰色シルト(1～5mm大の砂粒含む,粘性・しまりともに強い)
※ 20～24は検査土、第4層下面性の掘り上げを行った。

ベルトC

25. 2.5Y3/1　黒褐色粘質土(腐葉土層 ビニール混じる,盛場化)
26. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質土(0.1～5cm大の砂礫混じる,粘性やや強いしまり強い,腐植非・土器多く混じる)
27. 5Y3/2　オリーブ黒色粘質土(5Y5/2　灰色細砂混入,粘性強いしまり強い)
28. 5Y4/1　灰色シルト、5Y 5/2　灰オリーブ褐砂質ム(1～1cm大の砂粒含む,粘性強いしまりやや弱いと縞多く入る)
29. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質シルト(0.1～3cm大の砂礫多く含む,粘性・しまりともにやや強い,炭化物・土器多く含む)
30. 2.5Y4/4　オリーブ褐色砂質土(1～5cm大の砂粒多く含む,炭化物混じる,粘性・しまりともに強い)
31. 5Y3/2　オリーブ黒色粘質土(1～5cm大の砂礫多く含む,粘性・しまりともに強い)
32. 5Y3/2　オリーブ黒色粘質土(1～5cm大の砂礫多く含む,粘性強いしまり強い)
33. 2.5Y3/2 黒褐色シルト(0.1～1cm大の砂粒多く含む,粘性強いしまりやや弱い)
34. 5Y3/2　オリーブ褐色シルト(粘性強いしまり強い,炭化物・土器多量に含む)
※ 27～31は検査土、第4層下面性の掘り上げを行った。

図11　ベルトA・B・C土層断面図（S=1/80）

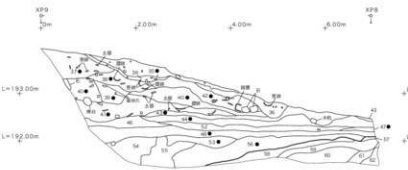
ベルトD



49. 2.5Y3/2　黒褐色土(腐食土層,粘性・しまりとも強い有電気土も.)
50. 2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土(0.1~1cmの砂粒含む,粘性・しまりともやや強い)
51. 2.5Y3/2　黒褐色粘質土(腐食土層,粘性やや強い,しまり強い)
52. 2.5Y5/2　黄褐色砂質シルト(0.1~2cmの砂粒含む,粘性やや強い,しまり弱い)
53. 2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土(明色時・粘土ブロック混入,粘性・しまりともやや強い)
54. 2.5Y5/2　暗灰黄色シルト(10YR5/2　にぶい黄褐色砂質土混層
55. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘砂(炭化物が層状,縞状?)
56. 5Y4/2　灰オリーブ砂質シルト(0.1~3cmの砂礫含む,鉄錆の斑点物,土器片混じる,粘性やや強いしまり強い)
57. 5Y層に同じ
58. 5Y層に同じ
59. 2.5Y4/1　黒灰色シルト(粘性やや強いしまりやや弱い)
60. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト(3~5φとやや粗子種い混ざりの混層状のもの.)
61. 7.5Y3/1　オリーブ黒色砂質土(粘性・しまりともに強い.)
62. 7.5Y4/1　灰色砂質土(粘性・しまりともに強い)
63. 5Y4/1　灰色砂質シルト(0.1~1cmの砂礫含む,粘性・しまりともやや強い)
64. 5Y3/1　オリーブ黒色粘質土(0.1~2cmの砂礫含む,粘性やや強いしまりやや強い,腐食土層)
65. 5Y4/1　灰色砂質シルト(0.1~5cmの砂礫含む,粘性・しまりともやや強い,6層ブロック混じる.)
66. 2.5Y5/4　黄褐色細粒砂(2.5Y5/1　黄灰色シルト混入,粘性・しまりとも強い)
67. 2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂(2.5Y5/1　黄灰色シルト混入,粘性・しまりとも強い)
68. 8層に同じ
69. 2.5Y3/1　黒褐色シルト(0.5~1cmの砂礫含む,粘性強いしまり強い,腐食土層)
70. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土(10YR5/1褐灰色シルト混入,0.1~5cmの砂礫含む,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む,粘性・しまりとも弱い.)
71. 2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質シルト(0.1~2cmの砂礫含む,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む,粘性やや強いしまり強い)
※　69-70-71は,粘質土層で遺物の取りよせ性行った.

図中の●は炭化物を含む層を示す

ベルトE



35. 10YR4/6　褐色砂質土(10YR5/2　灰黄褐色シルト混入,3~2cmの砂粒含む,粘性やや強いしまりやや強い,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む,ガス入る.)
36. 2.5Y3/1　黒褐色シルト(0.5~1cmの砂粒含む,粘性強いしまり強い,腐食土層.)
37. 10YR4/6　褐色砂質シルト(10YR5/1褐灰色シルト混入,0.1~5cmの砂礫含む,粘性やや強いしまりやや強い,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む.)
38. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土(10YR5/1褐灰色シルト混入,0.1~5cmの砂礫含む,粘性・しまりともやや強い,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む.)
39. 2.5Y4/2　暗灰黄色シルト(10YR5/1褐灰色シルト混入,0.1~5cmの砂礫含む,粘性やや強いしまりやや強い,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む.)
40. 2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土(0.1~2cmの砂礫含む,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む,粘性やや弱く,しまり強い)
41. 5Y3/1　オリーブ黒色砂質シルト(0.1~1.0cmの砂礫含む,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む,粘性・しまりともに強い)
42. 2.5Y3/2　黒褐色砂質土(0.1~2.0cmの砂礫含む,腐植片・焼土・土器・炭化物多く含む,粘性・しまりとも強い)
43. 2.5Y3/2　暗オリーブ褐色シルト(2.1~1cmの砂粒含む,炭化物多く含む,腐食土層,粘性強いしまり強い)
44. 2.5Y3/2　黒褐色砂質土(0.1~2.0cmの砂礫含む,鉄錆の斑点物,土器混じる,粘性・しまりともやや強い)
45. 5Y4/2　灰オリーブ砂質シルト(0.1~3cmの砂礫含む,鉄錆の斑点物,土器混じる,粘性強いしまり強い)
46. 2.5Y3/3　黒褐色細砂(10YR5/1褐灰色シルト,粘質ロバラン混入,粘性・しまりともに強い)
47. 2.5Y4/2　暗灰黄色細砂　5Y5/2　灰オリーブシルト互層(1~5cmの砂粒含む,鉄錆の斑点物含む,粘性・しまりともやや強い)
48. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質土(0.1~1cmの砂粒含む,炭化物と鉄錆含む,粘性・しまりとも強い)
※　35は斜面上層.36~42は斜面下層.43-44は第4層で遺物の取り上げを行った.

図 12　ベルト D・E 土層断面図（S=1/80）

も多く含まれていることが挙げられる。本来の灰原に近い堆積層が幾度も掘り返され再堆積したものと思われる。第 III 層と第 IV 層については不明である。第 V-a 層には no.43,44,52 層が、第 V-b 層には no.46,48,53,54,56 層が相当すると考えられる。no.55 層は幅 50cm 前後の噴砂の痕跡であり、この影響によって第 VI 層が陥没している。推定される NR01 の右岸は調査区外の北側にあたり、2 基の窯体の正面方向に向かって小規模な谷地形が存在するものと思われる。ベルト E 地点では NR01 埋土にも多くの炭化物が含まれる。

6. ベルト D

ベルト C の約 10m 上流で、両窯体（第 1,2 号窯）の前方ほぼ正面に当たる。第 II 層として no.69,70,71（第 II-a 層）、no.41,49,50（第 II-b 層）が確認できたが、no.50 層より乾電池が検出されたことから、以上のすべてが現代の攪乱による再堆積層と考えられる。また、no.39 などは最も新しい盗掘による攪乱土坑の痕跡と思われる。第 III 層、第 IV 層については不明であり、第 V-a 層には炭化物と少量の陶片を含む no.43,44 層が相当すると考えられる。第 V-b 層にはベース直上の no.45,56,63 層が相当すると思われる。ベルト E の場合と同様に no.55 層など噴砂の影響によって周囲が大きく落ち込んでいる。NR01 右岸はここでも確認できず、NR01 は調査区域の北寄りのちょうど物原の堆積層の真下辺りを流れていたと思われる。ベルト D 地点では NR01 埋土にも多くの炭化物が含まれる。

7. その他

調査範囲は窯体のある南向き斜面の下方、西側に開口する谷地形に沿って東西幅約 80m、南北幅 28m を測る。したがって東側が高く、検出面では東側で標高 194m、西側で 189.2m であり比高差は約 5m 弱である。前述のように調査は谷部分の自然堆積層と物原部分に分けられるが、湿地でありかつ窯体から距離をおいた地点であったため、（盗掘坑を除いて）溝、土坑等の人工的な遺構は全く検出されていない。ただし、NR01 での特徴的な遺物出土状況および物原の堆積層序といったものが、間接的ながらも窯の操業時に拘わる人為的な働きかけを探る手掛りを含んでいると考えられる。なお、NR01 の北側に集中した杭列は、年代測定の結果、近世後期以降のものであることがわかった（表 14）。

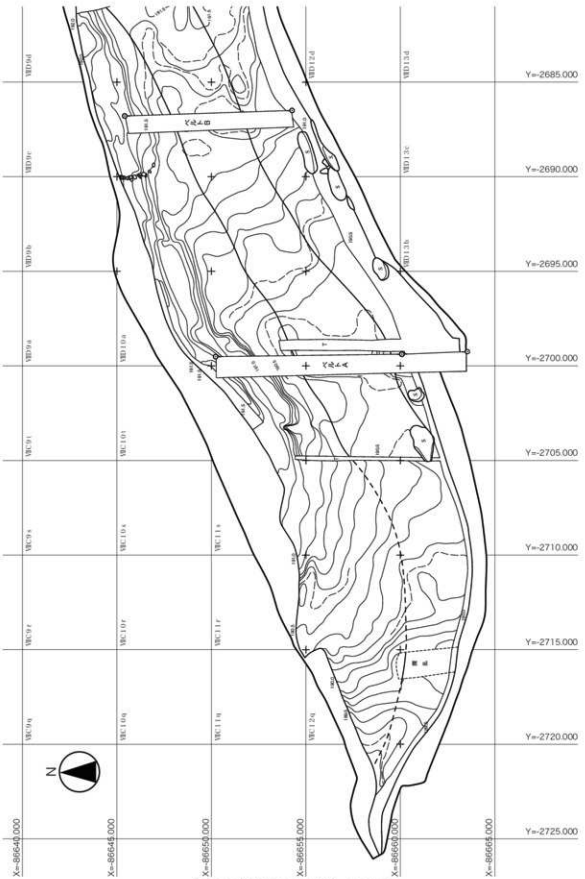


図13　調査区平面図（1）　S=1/200

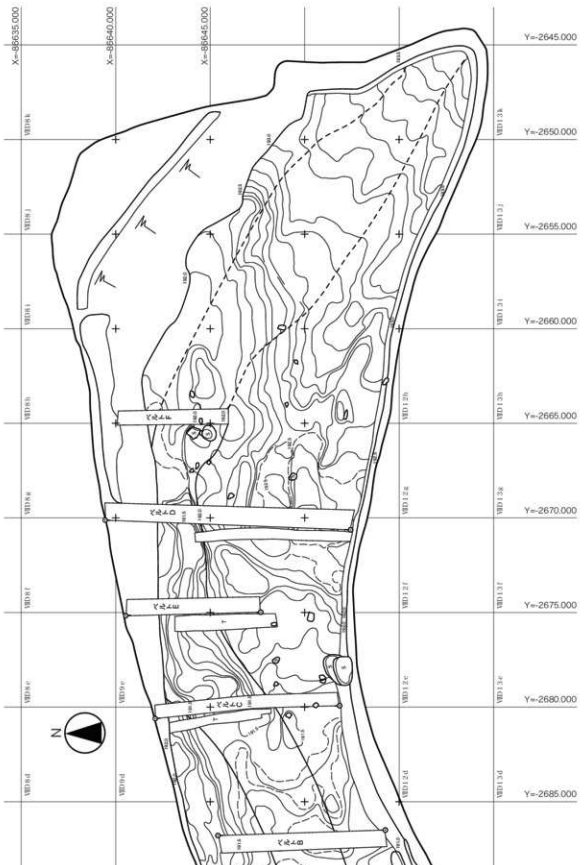


図 14　調査区平面図（2）　S=1/200

第4章　遺　物

＜出土遺物の概要＞

出土した製品器種および窯道具類は試掘調査、本調査分を併せてコンテナ約 870 箱にのぼる。但し、調査では匣鉢やトチ、ヨリ土、窯体の一部など窯道具類は選択して採集したため、この中には含まれていない。

出土した製品の器種と窯道具類について、採集品[*1]および瀬戸市発掘調査資料と併せて表２に示している。今回新たに確認されたものでは、未施釉で素焼段階の天目茶碗と茶入[*2]、特殊な形態の碗や瓶類、人形や陶硯など製品のほか、使用痕のある鍋類や煙管、下駄など陶工の活動を示すもの、窯道具では文字・記号の記された陶片資料、特殊な形態の匣鉢、トチ類などがある。

遺物の分布状況について、最も量が多く広範囲にみられた擂鉢の様相で概観することができる。表１は擂鉢の破片数をグリッド別に示したものであり、やはり物原部分が最も多く、物原末端から自然流路下流部にかけて崩落した資料の一部が残存していた状況が窺われる。上流域には分布がないことから、生産に関る作業場や搬入出用の通路などは、主に窯体の西側のみに展開したと想定される。

また、盗掘による影響を除外できると予想されるNR01 下層では、遺物は流路の中心を外した部分に集中して残存していた（図 15、表３）。これを左岸の上流部（A 地点）、左岸の下流部（B 地点）、右岸の作業場跡に沿った南側（C 地点）の各地点で比較すると、匣鉢は窯体・物原に最も近いA地点に多く、C 地点は製品のうち小型のもの、碗・皿類の割合が高く、その他漆器椀など木製品も含まれる。B 地点は距離にして約 10m の範囲を設定したが、地点８～16 に詳細をみると擂鉢、銭甕、天目茶碗、徳利、茶入など、器種単位のまとまりが数地点で確認できる。器形や重量の水流への抵抗の仕方により、見かけ上集まっているという見方もできるが、少なくとも完形に近い素焼の茶入数点が半径 30cm の範囲内に分布しており、器種ごとのまとまりで検品・廃棄の作業を行っていた可能性が考えられる。

遺物実測図等は、出土地点により自然流路（NR01）と物原部分とに分けて配置したが、煩雑を避けるため記述は器種ごとに一括して行った。ただし、茶入、瓦、土師器類、窯道具、文字資料、木製品、金属製品、石製品などの資料については出土地点を分けず配置している。

【註】

*1…試掘調査時の表面採集品など

*2…素焼状態の茶入は市調査（青木 2000）で確認されているが、施釉された焼成品と形態は不一致であった。今回の出土品は製品と同形態である。

表１　グリッド別　擂鉢破片数

グリッド	VIIC-t	VIID-a	b	c	d	d,e	e	f	f,g	g	h	i	j	計
区外北								866						866
9		3		4	2587	102	4052	6916	105	7326	2756			23851
10		96	500	1064	1605		631	894		169	49	19		5027
11		622	**1181**	**604**	**300**		202	63		53	12	3		3040
12		**363**	**638**	201							1		1	1204
13	1	93	12		3									109
計	1	1177	2331	1873	4495	102	4885	8739	105	7548	2818	22	1	34097

底部1/2以上破片の器種別カウントを行った範囲　物原堆積層　9d,9e,9f,9g,10d　自然流路　11b,11c,11d,12a,12b

表２　出土器種一覧

		市史	市調査	県調査	
碗類	端反碗	●	●	◎	
	丸碗	●	●	○	
	碗（その他）		●	○	
	天目茶碗 I類	●	●	◎	
	天目茶碗 II類	●	●	◎	
	天目茶碗（未施釉）		●	○	
	筒形碗		●	△	
	平碗		●	○	貼付高台
	小碗			○	
	小坏		●	○	
	小天目			○	
皿類	反り皿	●	●	○	
	輪禿皿	●	●	◎	
	折縁皿	●	●	○	
	丸皿		●	△	
	皿		●	○	
	鉄絵皿	●	●	◎	
	輪花皿			△	
	菊皿			○	
	中皿	●	●	○	
	花皿（型打皿）			○	
	卸目大皿		●	△	
	鉄絵鉢		●	△	
	折縁鉢			○	内面に三叉トチン跡
	向付	●	●	△	
	片口 I類		●	△	
	片口 II類		●	○	
	控鉢			△	乳鉢か？
	煙硝罐	●	●	○	
	擂鉢 I類	●	●	◎	I 類が圧倒的に多い
	擂鉢 II類	●	●	◎	
	銅罐（小型擂鉢）			△	
壺・瓶類	有耳壺	●	●	○	
	短頸壺			○	肩衝小壺か？
	小壺			○	
	茶入	●	●	◎	
	茶入（未施釉）		●	◎	
	花瓶	●	●	○	
	小瓶		●	○	
	長頸壺		●		
	浸瓶	●		○	
	水注			△	
	徳利	●	●	◎	
	銭壺	●	●	◎	
	甕		●		
	桶		●	△	
	半胴			△	
	水甕	●		△	

		市史	市調査	県調査	
その他	袴腰形香炉	●	●	○	
	筒形香炉	●	●	○	
	盤	●		○	
	蓋物			○	
	茶釜		●	△＊	
	鍋		●	△	
	風炉			△	
	風炉（未施釉）		●		
	灯明皿		●	○	
	平瓦		●	○	
	敷瓦			○	
	蓋		●	○	
	筒形容器		●	○	
	土管		●	△	
	土師器皿		●	○	
	祖母懐香（茶壺）		●	○	
	水指			○	筒形容器含む
	人形			△	馬、牛など
	狛犬			△	3点
	賢盥			△	
	仏鼎具			○	
	水滴			△	2点
	鬼卸			△	1点
	土師器内耳鍋			○＊	
	土師器焙烙			○＊	
	陶硯			△	2点、無釉
窯道具類	色見		●	○	
	エブタ		●	○	
	匣蓋		●	△	
	輪トチ		●	◎	
	足付板トチ		●	○	
	クレ		●	△	
	栓		●	△	
	匣鉢I類（丸底）		●	○	
	匣鉢IIA類（平底）		●	○	
	匣鉢IIB類（切匣鉢）		●	○	
	焼台			○	
	匣鉢III類（小型切匣鉢）		●	○	
◎特に多い、○多い、△少ないが、ある					
＊印は使用痕（スス付着）あり					
市史…『瀬戸市史　陶磁史篇』六					
市調査…（財）瀬戸市埋蔵文化財センター（青木2000）					
県調査…本報告分					

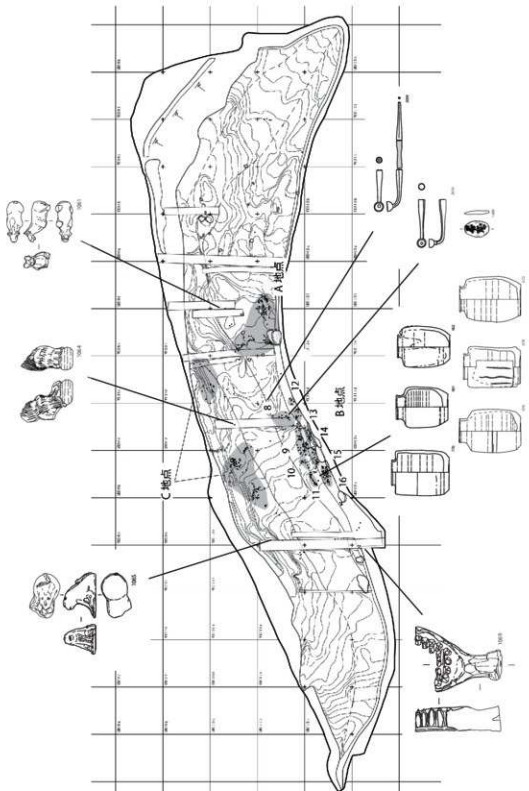


図 15　NR01 下層出土遺物の分布　S=1/400

表3　NR01 下層の出土遺物

器種＼出土地点	A地点	B地点										C地点
		8	9	10	11	12	13	14	15	16	計	
天目茶碗	9	3	14	2	3	0	3	0	2	10	37	12
丸碗	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	6	3
端反碗	0	0	1	0	0	0	1	1	1	0	4	7
筒形碗	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
その他碗	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
鉄絵皿	0	1	3	0	0	0	0	1	1	1	7	4
輪禿皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	9
反り皿	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	2	1
その他皿	2	0	2	0	1	0	0	0	1	0	4	2
擂鉢	22	4	11	1	5	1	3	7	2	9	43	13
煙硝擂	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1
片口	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1	4	0
鉢	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
銭甕	10	1	6	1	0	2	5	3	5	9	32	5
筒形容器（有耳壺など）	0	0	0	0	1	0	1	0	1	3	6	0
徳利	4	1	0	2	1	1	4	0	0	5	14	1
茶壺	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
香炉	1	0	1	0	2	0	0	0	3	1	7	2
茶入	5	0	2	1	6	1	1	1	0	2	14	9
仏飯具	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
小壺	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	2
蓋物	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
蓋	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
陶製硯	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
瓦	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
土管	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
器種不明、その他	1	0	2	0	1	0	0	1	0	0	4	0
文字陶片	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
土師器皿	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
土師質鍋	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
焼台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
乳棒	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
トチ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0
匣鉢	31	3	1	2	5	1	0	1	2	4	19	8
漆椀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
木製品	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
煙管（金属）	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
砥石	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
計	87	16	46	12	28	7	19	19	20	57	224	88

＊接合後、ポイントで取り上げた遺物の器種別の個体数。小破片は除外している。

1．碗類

＜天目茶碗＞

（NR 図版 1，図版 2，図版 4，物原 図版23，図版24）

削り出し輪高台の I 類と内反り高台の II 類がある。I 類は高台周辺を除き鉄釉が施される。

I-A 類（5，8 ～ 11,15,283）は体部の立ち上がりが強く、器高が高い。口縁部は直に立ち上がり、屈曲部に明瞭な稜をつくる。口縁端は短く外折し、屈曲部までの距離は長い。高台は高く、高台の断面形が方形から逆台形を呈する。高台脇の幅は基本的に狭い。素焼資料（1 ～ 3，279 ～ 281）では、体部は下方から屈曲部上位まで削りを施し、その後口縁端部から屈曲部までナデ仕上げしていることが確認できる。なお、2 は内面見込の少し上位で螺旋状にめぐる凹線が確認でき、これは粘土紐の接合痕かと思われる[*1]。

I-B 類（4，6，7，12,13,16,18 ～ 25,282,285 ～ 287）は口縁部がほぼ直か若干内傾して立ち上がり、屈曲部は丸みを帯びるが稜はまだ残存する。口縁端から屈曲部までの距離は短くなる。高台は高く、高台内の削りは浅いものもあり、接地面に凹みをもつものもみられる。高台脇の幅は狭いものがみられる。素焼資料 282 は外面の屈曲部やや下から削りを施すため、鋭い稜は形成しない。

I-C 類（17,26 ～ 32,289 ～ 291）の口縁部はやや内傾し、屈曲部の稜は不明瞭であり、口縁端から屈曲部までの距離が短い。高台は低く、高台径も小さくなる。高台脇の幅がやや広く、器高は低くなる。

I-D 類（34 ～ 41,292 ～ 295）は口縁部付近全体が丸く内傾する。高台は低く、高台脇の幅が広い。砂を多く含んだ粗い胎土のものが混じる。

その他 284 は灰色の緻密な他とは異なる胎土で、全体に薄手で焼き締まっている。口縁部に明瞭な屈曲部をもたず、高台脇にもほとんど面を形成しない。口縁部はやや長く真直ぐに立ち上がり、端部が短く外反する。

II 類は比較的軟質の焼成のものが目立ち、すべて高台周辺に錆釉を化粧掛けする。なお、II 類の素焼片は高台部分で多く確認している（註　器種別個体数カウントデータを参照）が、口縁部まで復原できるものがないため図示していない。

II-A 類（77）は器高が高く、口縁部が短く緩やかに内傾し僅かに括れる。高台周辺を除き鉄釉を二重掛けする。高台径は広い。

II-B 類（72,74,75,301,303）は体部が直線的に開き、口縁部は短く立ち上がる。高台径が広い。高台周辺に薄い錆釉を施す。

II-C 類（76,78,302,304 ～ 307）は高台径が狭く、器高が低く扁平となる。高台周辺に薄い錆釉を施す。

II-D 類（73,299,308）は特徴的に高台周辺に濃い錆釉を施すもので、口縁端部は短く真直ぐに立ち上がり終息する。高台周辺を除き鉄釉を二重掛けする。高台径は広い。

その他 300 は高台脇を削り、削り出し輪高台で I 類と思われるが、体部は八の字状に開く。高台周辺を除き鉄釉が施される。

＜小天目＞（NR 図版 4，物原 図版 23）

口径 6.5 ～ 7.0cm、器高約 6.0cm、高台径約 4.0cm 前後。すべて削り出し輪高台であり、高台周辺を除き鉄釉が施される。口縁の屈曲部が明瞭なものと、丸みをもつものがある。（80 ～ 86、296 ～ 298）

＜丸碗＞（NR 図版 3，物原 図版 25）

体部が丸みをもって立ち上がり、上方は直線的にのびる。すべて削り出し輪高台であり、高台周囲を除き灰釉または鉄釉が施される。釉薬が二重掛けされるものもある。

A 類（71,333）は器高が高く、体部中程より直線的に立ち上がる。高台幅は狭く高台外側は直に削り出し断面逆台形を呈する。

B 類は底部にかけて器壁が厚くなるもので、体部の立ち上がりが強く高台径がやや狭いもの（67,68）、腰が張り高台径がやや広いもの（69,70,335）がある。

C 類（52,334）は体部が内湾気味となる半球形の碗で、体部器壁の厚さはほぼ一定して薄い。断面方形、逆台形の削り出し輪高台が付く。52は鉄釉に灰釉が流し掛けられ、334は高台周辺を除き薄く灰釉が施される。

その他 53 は体部が若干内湾する丸碗で、底部は厚い。鉄釉・灰釉の掛け分けである。339 は内外面に鉄絵皿と同様の蘭竹文が付く。

＜端反碗＞（NR 図版 3、物原 図版 24）

体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部が玉縁状になる。削り出し輪高台で、断面は方形を呈する。

A 類（54,315）は口縁端部が短く外反し、玉縁をつくらない。高台幅は狭く、やや外傾し断面は逆台形を呈する。高台周辺を除き 54 は鉄釉、315 は灰釉が施される。

B 類（57 ～ 59,64,65）は高台径が狭く、やや内傾するものが多い。高台脇の回転ケズリの幅が狭く体部の腰の張りが弱い。口縁端部が外反し玉縁状に近くなる。高台周辺を除き鉄釉が施される。

C 類（60 ～ 63,66,309 ～ 314）は高台径が広く、高台脇の削りの幅がやや広く腰の張りが強い。口縁端部が明瞭な玉縁状となる。高台周辺を除き鉄釉が施される。

＜平碗＞（NR 図版 3、物原 図版 24）

体部は八の字状に開く。底部は断面方形となる貼り付け高台で、高台内には回転糸切り痕が残る。高台周辺を除き灰釉が施される。体部がやや丸みを帯びる 47 は口径 13.6cm、316 は 14.8cm。体部が直線的となる 48,317,319 は 15cm 前後、318 は口径は 16.8cm とそれぞれに大小がある。糸切り痕を残す灰釉碗の底部を「平碗」とするならば、一定量の出土が認められる。

＜筒形碗＞（NR 図版 2、物原 図版 25）

個体数はごく少ない。42 は削り出し輪高台で、高台脇はナデ調整、見込には茶溜りを形成する。高台周辺を除き鉄釉が厚く施される。43 は口径 8.4cm と小型のもので、高台部分を欠損する。345 は断面三角形の削り出し高台。

＜小碗＞（物原 図版 25）

口径 10cm、器高 5.2 ～ 5.7cm、高台径 4.2cm 前後の小型の丸碗を小碗とした。337,338 体部は丸く半球形を呈する。削り出し輪高台で、高台周囲を除き灰釉を施す。

＜小杯＞（NR 図版 2、物原 図版 25）

高台周辺を除き灰釉が施される。削り出し高台。348 は厚手で体部が丸みをもつ。44,349 は口縁部が外反し、349 は体部中位に沈線がめぐる。350 の体部はわずかに外反しつつ開く。

＜その他　碗類＞

（NR 図版 3、物原 図版 24,25,40）

丸碗のタイプでやや特殊な調整を施すものがある。灰釉など鉄釉以外の釉薬が掛けられるものが目立つ。個体数は少なく、少量生産された一群と思われる。49 は腰が強く張り、体部は直線的に上方へのびる。口径 14cm に対して器高は 6.9cm と扁平な腰折碗のような形態で、腰部を横方向に手持ち箆ケズリする。全面に灰釉を施したのち高台接地面のみ釉を拭きとる。50 もやや腰の張る丸碗で、口径 12.8cm、鉄釉が施される。51 は高台径が 6.5cm と広く、腰が強く張り体部は直線的にのびる。高台周辺を除き灰釉が施される。

320,321,331 はやや腰が張り、体部が若干開くもので、高台周辺を除き灰釉が施される。320,321 は幅の狭いやや高い高台が付く。331 は幅の広い削り出し輪高台。

328 は大振の深い碗で腰が強く屈曲する。体部は直線的に上方にのび口縁端は細く終息する。断面が逆台形を呈する削り出し輪高台で、腰部屈折部周辺まで灰釉が施される。口径 14.2cm、器高 9.4cm。327 も腰が屈曲し体部の立ち上がりは強い。高台内は内反りとなる削り込み高台か。全面に灰釉が施され、こまかい貫入が入る。高台接地面のみ釉が拭き取られる。

腰高碗は体部の立ち上がりが強く、器高は比較的高い。腰部がわずかに折れる。323～326,330は高台内を渦巻き状に削り込む。330はさらに高台脇が削られわずかにくぼむ。器高7.5cmと9.0cmの大小のタイプがある。高台周辺を除き、やや白濁した灰釉系の釉薬が施される。同様の高台の碗が窯元A2土坑資料にもみられる。独特の釉薬や形態、高台の調整など高麗茶碗を模したものであろうか。

口径に対して器高が低く、体部が丸みをもつ扁平な碗を浅碗とした。342は貼付高台、55,56,343,344が削り出し輪高台で、343は高台脇に段を344は高台周辺に濃い錆釉を化粧掛けする。

その他に、607は口縁部に切込を入れ花弁状に作る深碗である。体部下半に稜をもち、以下をカンナ削りする。体部下半を除き白濁した灰釉が施される。608は切り高台で、貼付け輪高台に4ヶ所の切込がカットされている。体部下半に幅の狭い回転ケズリ調整する。胎土は精良で、高台周辺を除き灰釉が施される。609高台は2.4cmと高く、長石釉が施される。

【註】

*1…陶芸家青山双男氏よりご指摘あり。一部の素焼茶入にもみられる。右下写真参照

粘土紐接合部分と思われる部位
（上：土師質皿、下：天目茶碗）

2．皿類（小皿）

＜鉄絵皿＞（NR 図版 5、物原 図版 27 ～ 29）

高台は低い削り出し高台で、短い体部が丸みをもって立ち上がる。内面に鉄絵が描かれ、全面に長石釉を施し、円錐ピン 3 個を挟んで重ね焼きする。口径は大小に分かれるようであるが、形状はほぼ同じである。内面の鉄絵文様により A ～ C 類に分類する。

A 類（119,397,400）は「風」などの文字、松などが描かれるもの。

B 類（110 ～ 115,398,399,401,404,406 ～ 412,414 ～ 415,419 ～ 421）は蘭竹文が比較的のびやかに描かれるもの。C 類よりタッチが多い。112 底部は削りが省略された平底。

C 類（116 ～ 118,402,403,405,413,416 ～ 418）は草葉文や蘭竹文などが、省略されて描かれる。

＜反り皿＞（NR 図版 4、物原 図版 26）

体部は腰に稜をもち上方が緩やかに外反する。全面に灰釉を施す。釉薬、形状などから A ～ E 類に分類する。

A 類（88,357,358）は体部上方の外反が強い。器壁の厚さは一定し比較的薄い。高台は高く貼付高台。

B 類（87,89 ～ 91,359,360）の釉薬は長石分が多く、不透明で白濁した釉薬が全面にやや厚く施される。円錐ピン 3 個を挟んで重ね焼きする。高台は削り出し高台、貼付高台の両者がある。90 の内面と破面に一部ススが付着する。

C 類（92 ～ 94,361,367,368）は透明の灰釉を全面に施す。円錐ピン 3 個を挟んで重ね焼きする。高台は削り出し高台、付高台の両者がある。

D 類（362 ～ 364）は体部上方の外反が少ないもの。透明の灰釉を全面に施す。円錐ピン 3 個を挟んで重ね焼きする。高台は削り出し高台、付高台の両者がある。364 は口縁部が一部欠け、破面にススが付着する。

E 類（95,365,366）は輪禿皿と同様の形状の削り出し高台であり、高台周辺を除き薄く灰釉が施される。ピン跡はみられず、直接重ね焼きする。

＜輪禿皿＞（NR 図版 4、物原 図版 26）

釉薬と内面凸帯の有無などから A ～ G 類に分けられる。釉薬は高台周辺と凸帯部分を除いて施される。A ～ C 類、F 類は鉄釉、D ～ E 類は灰釉。

A 類（102,103,377,380,382 ～ 387）は内面の凸帯が明瞭で、体部は丸く立ち上がる。103 は高台脇にかけてススが付着する。

B 類（378,379,381）は内面の凸帯がなくなり円形の凹みとなったもの。

C 類（104）は内面底部と体部の境が明瞭に屈折するもの。内面の凸帯はなく円形の凹みとなる。

D 類（96,98,369 ～ 374）は凸帯を形成せず円形の凹みのみ。体部上方はやや強く外反する。

E 類（97,99 ～ 101,375 ～ 376）は凸帯を形成せず円形の凹みのみ。体部中程の器壁が厚く先端の外反は少ない。

F 類（105,388）は内面の凸帯が明瞭で、体部上方が外折する折縁皿の形態。

＜折縁皿＞（NR 図版 5、物原 図版 29）

口縁部が外折するもの。121 は内面には鉄釉で松文を描き、高台周辺を除き灰釉が施される。貼付高台か。内面にピン跡は無く、外面高台内に円錐ピン 3 個の跡が残る。120 は口縁端部が内に折れ先端が短く上に突出する。内面に鉄釉で草葉文を描き、口縁周囲のみに薄く灰釉を施す。断面逆台形となる削り出し高台で、直接重ね焼きする。426 は灰釉、427 は高台周辺を除き鉄釉が施される。底部も器壁が薄く、貼付け高台か。

＜丸皿＞（物原 図版 29）

長石釉が厚くかかる。形状は鉄絵皿と同様で削り出し高台のもの、底部を碁笥底状につくるものとがある。422 は高台周辺を除いて、424 は全面に長石釉が施される。422 は使用痕があり、口縁欠損部にススが付着する。

＜輪花皿・菊皿・型打皿＞

（NR 図版 6、物原 図版 29,40）

輪花皿 133 は無釉または部分的に透明釉は掛る。口縁端を 9 ～ 10 個所つまみ輪花状に作る。高台は欠損して不明。体部下半は細かい単位でヘラナデ調整する。430 は胎土が緻密で焼締まっている。無釉で外面体部下方をヘラナデ、上方はナデ調整、口縁端 4 ヶ所を摘み波状にして 6 弁につくる。断面逆三角形の低い削り出し高台が付く。431 は灰釉が施される。432 は口縁端部を僅かに凹ませるのみ。断面方形の幅が広く低い削り出し高台が付く。高台周辺を除き鉄釉が施される。

型打皿 433 は内面に布目が残る。長石釉が施される。434 と 435 はおそらく同型である。434 は長石釉か。435 は発色不良で釉薬は不明。内面に細かい布目が残る。断面三角形の付高台がつく。602 は円形でない型打の皿と思われる。全面に鉄釉が施される。

菊皿 436 は外面体部下位を篦削りし、腰に稜をもつ。口縁端を篦でカットし、外面は縦に篦で線を刻み、内面は縦のノミ彫りが入る。断面が丸みを帯びた台形の貼付高台で、全面に長石釉、部分的に緑釉が流し掛けされる。高台接地面の釉を拭き取りする。

＜その他の小皿類＞（物原 図版 29）

425 は幅広の折縁となる段皿の形状で、直径 13cm、全面に鉄釉（錆釉）が施される。胎土は緻密で硬く焼締まっている。底部に火膨れあり、全体に歪んでいる。高台周辺に重ね焼きの溶着痕あり。

428,429 は口縁端部が僅かに内湾して立ち上がる浅い小皿で、小型の盤のような形状。高台は高く断面隅丸方形の貼付高台。高台周辺を除いて鉄釉が施される。

3．中皿・盤・鉢類

＜中皿・盤類＞（NR 図版 6、物原 図版 29,30）

中皿 129 口縁部はやや厚みをもち、端部がわずかに立ち上がる。体部は中位が内側に少し凹む。幅の広い低い削り出し輪高台で高台周辺を除き鉄釉が施される内面にはピン跡あり。442 は体部の括れが大きく中位に段を形成する。全面に鉄釉が施され、高台接地面のみ釉を拭き取りする。443,444 口縁端部が短く内側に折れる、または立ち上がる。鉄釉が施され、削り出し高台と高台内の釉を拭き取りする。444 内面には工具ナデの痕跡が明瞭に残る。446 体部はわずかにカーブしつつ広がり、口縁端部は丸く収まる。

盤類 127,439 の口縁端部は丸く、短く立ち上がる。全面に灰釉が施され、削り出し高台の接地面のみ釉を拭き取りする。437,438 は貼付け高台で 128 は鉄釉。440,441 は灰釉、高台部分のみ釉を拭き取りする。445 は幅の狭い断面方形の削り出し高台で高台付近を除き灰釉が施される。469 のような折縁鉢かもしれない。

その他 130,451 は体部上方が折れて立ち上がり、さらに端部が外折する、浅い鉢のような形状。断面逆台形の削り出し高台がつく。高台周辺を除き鉄釉が施される。

＜型打皿＞（NR 図版 6、物原 図版 31,32）

型打皿 A 類（122,124,460 ～ 466,474）は、まず轆轤で皿を成型したのち、内型を用いて外面と口縁端部をヘラまたはノミ状工具で削り整形する。ここでは 16 葉の花弁をもつ花形皿としている。体部中位から口縁部で花弁を表現し、花弁と比較して底部の器壁は厚い。花弁がめぐる内面中央には円形の浅い凹みが形成される。高台はやや高い貼付け輪高台。460,461,463 内面には布目が明瞭に残り、全面に鉄釉、灰釉が流し掛けられ、高台部分のみ釉を拭き取りする。466 内面には大型の足付板トチが溶着している。462,474 は花弁部分の器壁が薄く、内面に布目痕が明瞭に残る。高い貼付輪高台がつき、高台周辺を除き黄褐色を呈する灰釉あるいは鉄釉系の釉薬が二重掛けされる。ピン 3 個を置いて重ね焼きしたようであるが、高台の溶着痕は多くみられる。

型打皿 B 類は A 類とは成形方法が異なり、個体数も少ない。各花弁は厚さは均一でなく、中央が盛り上がる。花弁を独立して成形した可能性も考えられる。123,475 は器壁が厚く、表面は滑らかに調整され、重ね焼きの痕跡はない。475 は三角形の板状の足が三ヶ所に貼付けられる。足も含め全面に鉄釉が二重掛けされ、三足の接地面のみ拭き取られる。

＜鉄絵鉢・折縁鉢・その他鉢、大皿類＞

（NR 図版 6、物原 図版 30,31,33）

鉄絵鉢（笠原鉢）476 高台は内側の削りが浅く、断面は隅丸となっている。体部下方にやや丸みを帯びて開き、上方は直線的で口縁端が外折し、内面に稜をつくる。内面には鉄釉で稲穂文が描かれ、全面に長石釉、一部に緑釉が流し掛けされる。

折縁鉢は径 25cm、30cm 前後のものがある。469 は断面方形の高台が付き、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端が短く外折する。全面に鉄釉が施される。470 は断面逆台形の幅広の削り出し高台が付き、高台周辺を除いて鉄釉が施される。口縁端は短く外反する。高台内に径 2.5cm 前後の団子トチが付着する。471 は断面三角形の低い高台が削り出され、口縁は緩く外折し端部は丸くやや肥厚する。全面に長石釉が薄く施され、高台内は拭き取られる。内面に三叉トチンの痕跡が 3 ヶ所確認できる。その他 126 は口縁を欠くが体部が直線的に開き口縁部が外折し、内面に僅かな突起を形成する。全面に薄く鉄錆釉が施され、擂目のない擂鉢といった様相である。

その他の鉢・大皿類について。125 は断面方形の削り出し高台で全面に鉄釉を二重掛けし、高台接地面のみ釉を拭き取りする。468 は体部のやや深い丸い鉢で、口縁端部が丸く肥厚する。断面台形の削り出し高台が付き、高台の周辺を除き灰釉が施される。452 も体部の丸い鉢で口縁端部は丸く終息する。低い幅広の高台周辺を除き鉄

釉が施される。447も深くて丸い体部の鉢であろう。鉄釉が施され、外面下半は釉を拭き取りする。大型のものでは448は断面逆台形の幅広の削り出し高台が付き、高台周辺を除き鉄釉が施される。内面にはピン跡と高台痕が残る。449は口縁端部の内側が丸く肥厚するやや深い器で底部周辺は不明、全面に鉄釉が施される。450は体部下方が丸く立ち上がり、口縁にむかって大きく外反する。鉄釉が施される。

卸大皿（472,473）は断面方形で幅が狭く低い削り出し高台がつく。内面見込には鋭い工具で卸目が刻まれている。外面高台付近を除き鉄釉が施される。

＜片口＞（NR 図版7、物原 図版34）

体部が直線的に立ち上がるI類と体部下半が丸くなるII類とがある。

I類144は体部下端が面取りされ、高台は付かず回転ヘラ削り調整の平底である。口縁端部は面をなし、底部は厚く、体部中位より上は器壁が薄くなる。体部下方から内面口縁周囲まで鉄釉（錆釉）が施され、口縁端部の釉は拭き取られる。488の高台は幅の広い低い削り出し高台。見込と外面底部や口縁端部に使用による摩滅の痕跡が認められる。

II類は口縁端部が丸く終息するA類と、端部が折り返され玉縁状に厚くなるB類に分けられる。どちらも断面方形の削り出し輪高台が付く。A1類は腰部の張りが強く、体部がやや内傾する。485,481は高台周辺を除き全面に、142の内面は口縁周辺のみ鉄釉が施され、見込には径7.6cmの高台溶着痕が認められる。A2類（141,143,478,480）は腰部が丸く体部上方は直線的に立ち上がる。器壁は比較的薄く、高台周辺を除き鉄釉が施される。B類は口径19cm前後の482～484は、体部外面の轆轤目が残るものが多い。高台周辺を除き鉄釉が施される。口径27cm前後の486,487は表面に轆轤目はみられず平滑で、口縁に縁帯を形成する。

＜煙硝擂＞（NR 図版9、物原 図版35）

口縁部は内側に丸く折り返され、断面方形の削り出し高台が付く。折り返しが大きいもの、短く密着するものがある。体部外面中程から口縁内面

表4　擂鉢口縁部　分類・出土地点別破片数

分類／出土地点		物原下層	物原上層	表土	青灰色シルト	第4層	第6層	計	
I類	B-1	451	165	241	277	377	165	1676	1794
	B-2	23	5	5	12	8	3	56	
	B-3	7	3	15	16	9	12	62	
	C-2	782	383	675	173	172	96	2281	3400
	C-1	223	134	155	56	56	32	656	
	C-3	173	102	125	30	18	15	463	
	D-1	212	165	224	84	97	50	832	1607
	D-2	232	142	231	90	58	22	775	
	E	106	42	61	16	12	12	249	249
	A	39	13	31	18	9	8	118	118
II類	F-1	76	57	78	35	42	28	316	1669
	F-2	162	106	162	47	70	38	585	
	F-3	243	117	193	79	82	54	768	
その他		15	7	11	9	8	1	51	51
計		2744	1441	2207	942	1018	536		8888

＊形状の判るものすべてについてカウントを行った。（各形態により口径の大小はあるが考慮していない。）

＊「第4層」「第6層」はNR01堆積層

＊「青灰色シルト」は物原崩落土の先端で、NR01に達した部分

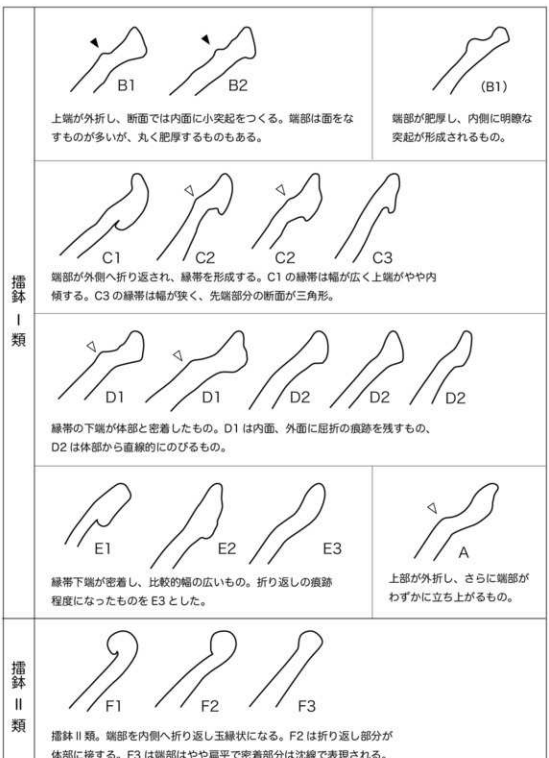


図 16　擂鉢口縁部の形状

擂鉢Ⅰ類

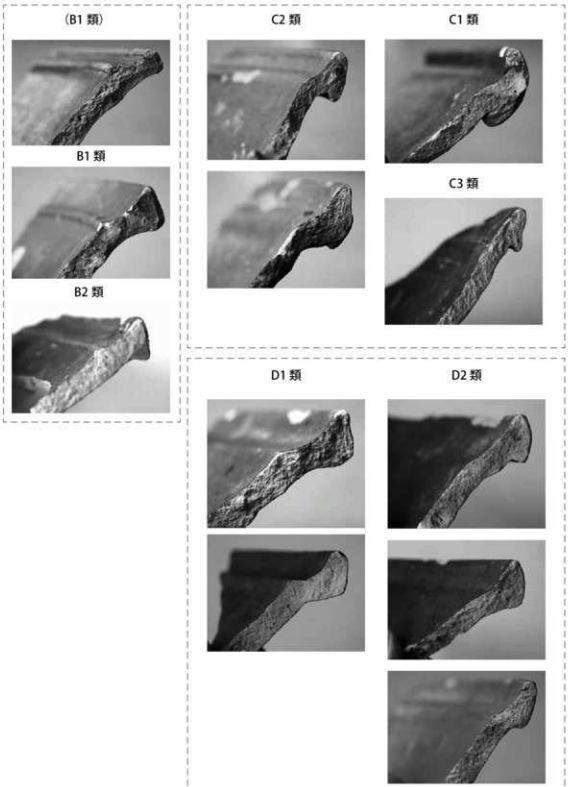


図 17　擂鉢口縁部　分類（1）

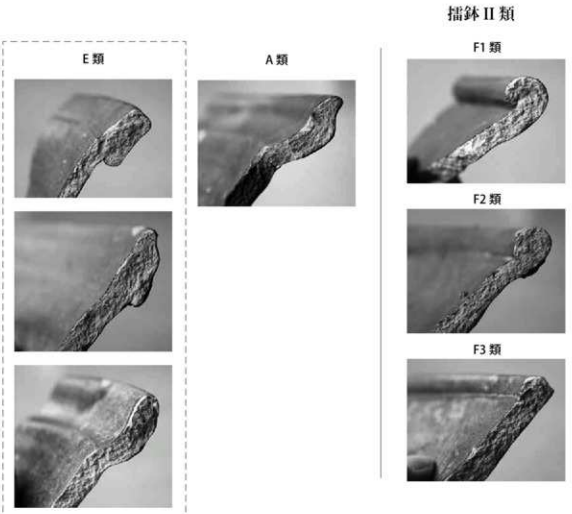


図 18　擂鉢口縁部　分類（2）

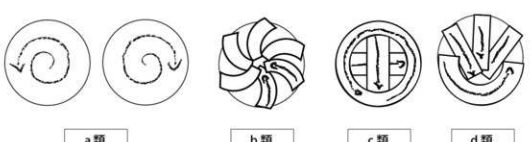


図 19　擂鉢内面擂目の分類

表5　擂鉢口縁形態と擂目の関係

口縁部形態＼擂目分類		a	b	c	d	e	その他
I類	B1		6	1	28		
	B3				1		
	C1		1		7		
	C2	1			20		
	C3				3		
	D1				5		
	D2	1	1		4		
	E1			1			
	E2				1		
	A1						
	A2			1			
II類	F1	2					
	F2	11	1				
	F3	7			3		
その他					1		

にかけて鉄釉、柿釉などが掛けられ、外面にはさらに灰釉が流し掛けされる。口径は14～18cm前後であり、見込から体部の立ち上がりは丸くなるものが多いが、189のように屈曲する場合がある。497のように数個を直接重ね焼きする。（187～191,496～499）

＜擂鉢＞

（NR図版14～22、物原 図版43～45）

コンテナ数では出土遺物の約半分を占める。

高台はなく、すべて平底である。口縁部形態・見込擂目の形状を分類し、それぞれにカウントを行った（表4、図16～19）。

まず、口縁上部が折れ縁帯を形成するI類と、口縁部を内側に折り返すII類とに分けられる。

I類…口縁上部が外折するもの。

B類は口縁上端が外折し、内面に小突起あるいは稜線を形成するもので、B1類は端部が厚みを増し面をもち、B2類は端部の上下端が突出し断面がT字状となるもの、B3類は端部が丸く肥厚するもの、に分類した。全体に器壁は厚く、錆釉が掛けられるものが目立ち、柿釉のものはない。

C類は口縁端部が外側へ折り返され縁帯を形成する一群であり、擂鉢全体で最も多くを占める。C2類は縁帯が平らな面を形成し、下端は体部と密着しない。C3類は体部が上方までほぼ直線的にのび、縁帯は平らな面を形成し、下端は体部と密着するが、折り返し部分が明瞭なもの。C1類の縁帯は幅広で丸みを帯び、下端は体部と接するが完全には密着しない。上端が突出してやや内傾する。体部は上方の外折は少ない。

D類は縁帯が体部と完全に密着し、折り返し部分が表面上では不明瞭となるもの。端部の断面が三角形を呈するもので、錆釉が施されるものはない。D1類は体部上方が強く外反するもの、D2類は体部の外反は少なくほぼ直線状となる。

E類は幅広の縁帯が痕跡程度となり、ほぼ直線状にのびる体部に密着する。内面に小突起あるいは稜線を形成する。錆釉が施されるものはない。E1類は口縁端が丸く縁帯部分は厚い。E2類は縁帯部分の厚みがほぼ消滅したもの。

A類は口縁部が外折し、さらに端部が短く立ち上がるもので、受け口状を呈する。A1類は各屈曲部が明瞭なもの、A2類は屈曲が緩やかで端部が肥厚する。錆釉が施されるものはない。

その他として、胎土が全く異なる649～651（図版45）の擂目は、見込中央から放射状に引かれ、細かく密に内面全体に及ぶもので、瓶子窯跡出土擂鉢の中でも特異な存在である。

II類…口縁端部を内側へ折り返すもの。

F1類は端部が玉縁状となり、折り返した先端が体部に密着しない。体部上端はやや外折する場合が多い。

F2類も端部は玉縁状で、折り返した先端が体部に密着する。体部上端は直線的となる。

F3類は端部の断面がやや扁平となり、折り返した先端の密着部分が沈線で表現される。

図19は内面見込の擂目の技法の分類、表5は底部から口縁部が残存し、擂目の形態との組み合わせについて示したものである。擂鉢I類では、口縁B・C・D類は、主にd類の擂目をもつグループ、擂鉢II類は主にa類の擂目をもつグループ

に分けられる。I 類の中で A 類と E 類はともに量が少なく不明な点が多い。II 類のうち F3 類には d 類との組み合わせもみられる。

赤津村の擂鉢形式との関係では、擂鉢 I 類のうち瓶子 B1a・B2・B3 類は赤津 IA 類に、瓶子 C 類が赤津 IB 類、瓶子 D 類が赤津 IC 類に対応し、II 類擂鉢では瓶子 F1 類が赤津 IIA 類、瓶子 F2 類が赤津 IIB 類、瓶子 F3 類が赤津 IIB 類の新しい段階に対応するものと思われる[*1]。

瓶子 B1b 類は大窯期擂鉢の II 類[*2]の系譜を引く、B 類の中でも古い様相を残すものと考えられる。また、瓶子 C1 類の釉調は B 類とほぼ同様で柿釉が施されるものはなく、垂下した緑帯が完全には密着しない C2 類と併行する古い段階のものと考えられるが、上端が内傾しかつ緑帯の幅が広く拡張されるという点が、他の C 類と大きく異なる。瓶子 A 類や E 類は、鉄釉でもやや光沢のあるものが含まれ、口縁付近に幅広の屈曲部や緑帯を形成する点がなどが類似する。瓶子窯跡では最も新しい様相を示すものと考えられる。I 類擂鉢の変化は、体部上方が屈折するものから直線的なものへ推移する、とされてきたが、瓶子 C・D 類では口縁部緑帯が密着していく過程の各段階で、屈折するものと直線的なものの両者があり、それぞれが別系統として変化していった可能性を指摘しておきたい。

これらの編年観は主に瀬戸窯編年第 3 小期から第 5 小期に対応するとされるもので、擂鉢の生産量のみでいえば、第 4 小期～第 5 小期の中にピークがみられる。ただし、詳細には第 3 小期の I 類に古い様相は比較的多く認められ、第 5 小期は I・II 類ともに新しい様相が含まれる。以上を生産期間の幅と考えたい。

＜その他 鉢類＞

145 は口径の大きい、大型の銭甕のような形状である。145 は口縁端部を平らにつくり、口径 21.8cm、器高 16.1cm で底部付近の器壁が厚い。口縁周辺から外面全体に鉄釉が施される。内面は無釉である。

453 は底部径 9.2cm、壺下半のような形状であるが、底部付近にかけて器壁は厚く、底面を除き内外面に鉄釉が施される。内側は丸く、底から体部中程にかけての部分、および外面底部周囲に著しい摩滅が認められることから、乳鉢として使用されたと考えられる。

＜風炉＞（図版 47）

素焼状態のもの 663,664 と鉄釉の施されたもの 665 がある。663 は口縁部と思われる破片で、端部を内側に折り、上端は幅広の面を形成する。664 は窯の一部と円柱状の足が確認でき、外面の胴部下半には墨書と思われる文字の一部がみえる。665 は窯と底部の一部で、外面底部を除き鉄釉が施される。底部端には一部に剥離した痕跡が残り、足が付いたものと思われる。

＜蓋物＞（NR 図版 2、物原 25）

蓋受けをもつ容器で、丸い体部をもち、高台は断面逆台形の削り出し高台。蓋受けと高台周辺を除き鉄釉（柿釉）が施される。大中小があり、口径は 6.2cm、9.5cm、13.0cm がある。45,46,346,347

＜鬢盥＞（NR 図版 6、物原 図版 40）

口縁端部は細く収まる。140 の底部は長径 8.6cm、幅の広い楕円形を呈する。底部を除いて鉄釉が施される。606 底部は長径 9.5cm の長楕円形。底部を除き鉄釉が施される。

【註】

*1…1998『瀬戸市史　陶磁史篇』六

*2…藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第 10

4. 瓶・壺・甕類

＜有耳壺＞（NR 図版 9、物原 図版 39）

頸部の短い壺で、肩部に２個の紐状の耳が貼付けられる。胴部はほぼ直線的で筒状を呈し、底部は平底であり、内面に錆釉、外面底部付近を除いて鉄釉が施される。

182 は頸部の短い広口の壺で、口縁端部は強く短く外折する。肩部に紐状の耳２つが横方向に貼付けられる。561 ～ 563 の口縁端の屈折は緩くは短く外反する。

183 ～ 186,564 は筒形の胴部をもつ容器の底部で回転ケズリする平底である。186 は胴部下端を面取する。胎土は黄白色のものが多く、183 のみ緻密であり、削り調整で薄く仕上げられている。184 は胴部下方から底部に錆釉が施される。185 底部は回転糸切痕が残る。

有耳小壺（192,550,551）がある。192 は口径 5 cm、肩は緩やかで丸い胴部をもつ。高台付近から内面口縁部付近まで鉄釉が施される。550 はおそらく規格品ではなく、やや特異な形状である。口径 6.6cm、高さ 7.1cm、幅の狭い肩をもち、屈曲して胴部に続く。底部は厚い平底であるが、胴部下端に装飾的に三足が付く。全面に鉄釉に灰釉が二重掛けされる。

＜小壺＞（NR 図版 8、物原 図版 25）

体部径に比べ口の大きい小型の容器の一群で、口縁端部が内傾する。蓋受は作り出されていない。高台周辺を除き鉄釉が施されるものが多い。167 ～ 169 は最大径 11cm、高さ 7 cm 前後、体部上位が内側に屈曲するもので、削り出し輪高台、削り込み高台がある。164 は器壁が薄く小振りで、上位が張る丸い体部をもつ。削り込み高台で灰釉が施される。352 ～ 354 は器高 4.5cm 前後とやや扁平で、体部の湾曲は強い。削り出し高台、削り込み高台、平底がある。

174 は胴部が丸く膨らむ壺で、底部は回転ケズリ調整、外面の底部付近を除いて鉄釉（灰釉）が二重掛けされる。

＜短頸壺＞（NR 図版 6、物原 図版 39）

直立する短い頸部をもち、口縁端部は若干肥厚してわずかに外反する。肩は不明瞭で丸みをもった胴部に続く。外面の高台周辺を除き鉄釉が施され、灰釉が流し掛けられるものがある。断面が台形の削り出し輪高台。137 のみ口縁端部は外反せず、貼付輪高台が付く。これらは扁衝小壺に繋がる形態の壺であろうか。（135 ～ 137,552）

＜茶壺＞（NR 図版 9、物原 図版 39）

179,180 の口縁は玉縁状を呈し、やや内傾する頸部から丸みをもった肩、胴部へ続く。181 も口縁は玉縁状を呈し、ほぼ直立する頸部下から水平に広がり肩は屈折して直線的な胴部が続くと思われる。肩部に扁平な紐状の耳４つが横方向に貼り付けられる。胎土は緻密で硬く焼締まったものが多い。553,555 ～ 558 は肩に明瞭な稜をもつ。559,560,565,566 はやや丸みをもつ胴部から底部片である。566 は大きく歪んでおり、外面胴部下方まで鉄釉が施される。底部は回転ケズリ調整で、底面まで釉が流れているが、溶着していない。トチ等で浮かせた状態で窯詰めされていたものと思われる。

＜銭甕＞（NR 図版 12,13、物原図版 41,42）

糸切り未調整の平底の容器で、底部周辺は薄く錆釉、体部外面下方にかけては鉄釉を、内面は鉄釉または灰釉を施すものがある。口縁端部のみ釉を拭きとりする。底部径が大きく体部が筒状となるもの（I 類）、体部下方が丸みをもつもの（II 類）がある。

I 類（240,244,245,249,620,621）の内面は轆轤目が強く、底部周辺の器壁も比較的薄くつくる。窯印が押されるものは少ない。

II 類は体部下方が丸みをもつもので、形状と窯印等からさらに A、B、C 類に分けられる。A 類は本窯の主要な形態であり、体部下方または底部にスタンプで a;「上」、b;◇に「一」、c;花押状、d;重ね「○○」などが押される。B 類（618,627 ～ 633）は底部径が小さくやや小振りのもので、ス

タンプは体部下方に□枠に小左衛門、あるいは底部に○に小(e 類;その他)と押されるものがある。225 は口縁部に別個体の口縁部が溶着しており、窯詰めの方法は、ヨリ土を用いて口と口、底と底を合せて積み上げたと思われる。稀に同方向に重ねて 2 個体が溶着したものも認められた。C 類(617,619,623 ～ 626)は体部下方が張る大振りのもので、スタンプは下と読める「上」を反転した文字が押される。

615 は底部径 8.7cm あり、大型であるが銭褒とほぼ同じ形状、調整である。底面に花押状のスタンプが押される。

＜徳利・花瓶＞

(NR 図版 10,11、物原 図版 37,38)

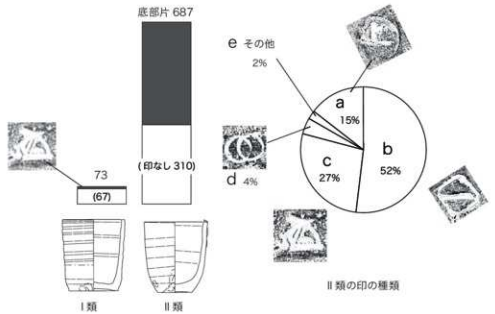
花瓶と特定できるものは少なく、口頭部が水平に開く A 類(455)と外反してラッパ状に開く B 類、広口で大型の C 類(456,542)がある。221,544 ～ 546 は口縁部を欠損しているが、A 類と思われ、浮游環など頸部に耳が付く。455,542 は灰釉、456 は鉄釉が施される。その他特殊な形状となるもの(219,543)がある。219 口頭部はラッパ状に開き端部が外折する形態で、水平方向にのびる広い肩は明瞭な稜をもつ。鉄釉が施される。543 は規格品ではなく、特異な形状である。頸部が数段括れる細い徳利状のもので、削り出し輪高台、外面は鉄釉が二重掛けされ、胴部下方から底部にかけて錆釉が施される。その他についてはすべて徳利とした。

徳利 I 類は最大径が 15cm 以内のもので、A 類(195 ～ 202,518,519,525)は口縁部がラッパ状に開き、撫肩で中程が最大径となる瓜形の丸い胴部をもつもの。削り込み高台である。

B 類(203 ～ 205,521,521,522,533)は短い口頭部が外反して開き、端部が短く折れ受け口状となる。肩は明瞭な稜をもち、最大径となり筒状の胴部となる。底部は削り出し輪高台である。

C 類(214 ～ 218,520,523,524,526 ～ 531)は短い口頭部が外反し、丸い肩をもつ。底部は削り出し輪高台。

徳利 II 類は最大径が 15cm 以上のもので、A 類(220,535 ～ 537,549)は底部径が大き



印のタイプ	a	b	c	d	e	なし	合計
I類	0	0	6	0	0	67	73
II類	55	196	102	16	8	310	687

* 底部 1/4 以上残存の破片についてカウント
2003 年調査資料のみ(試掘調査分を除く)

図 20　銭甕の形状と窯印

く、全体に丸みをもった胴部をもつ。220の胴部は球形に近い。549は高台内にヘラ描きがある。537は胴部に数ヶ所凹みをつくる。B類（222,223,534,538 ～ 541）も底部径が大きく、体部下方に向かって径が最大となる下膨れの形態で、胴部中程を若干凹ませる。内面底部に凸凹を残すものが多い。底部周辺に錆釉を施し、その上から釉を二重掛けする。

＜小瓶＞（NR 図版 8、物原 図版 38）

176 ～ 178,547,548は底部径が3.0 ～ 4.0cmの小型の瓶であり、形状は、細くのびる口頸部から丸みをもった胴部にスムーズに続く。底部を回転糸切りし、底部付近を除き鉄釉が施される。177は胴部中程に凹みがめぐる。172,173も鉄釉小瓶。173は底部に穿孔があり、色見に転用されたと思われる。

＜漫瓶＞（NR 図版 7、物原 図版 35）

全体の形状がわかる個体は少ないが、146,489は体部から丸みをもって続く天井部の中心を少しずらした位置に、口径7cm前後の円筒状の口が上方またはやや斜めにして取り付けられる。494は断面長方形の扁平な板状の把手である。高台は断面方形の削り出し高台で、内面は全面に、外面は高台付近を除き鉄釉（柿釉）が施される。内面の調整は粗雑で、轆轤目が強く凸凹が残るものが多い。150は平底であるが、胴部の形状と内面全体に施釉されていることから漫瓶に含めた。（146 ～ 150,489 ～ 495）

＜水甕・甕＞（物原 図版 48）

口縁部が装飾的に段をもって開く大型の甕形の製品668を水甕とした。口径33.7cm、残存高は31.6cm、高台を部分を欠損している。胴部下方に縦方向の長楕円形の剥離痕が残り、装飾的に三足が付き、また胴部中位の2ヶ所にも円形に近い剥離、欠損部分があり、把手等が付く可能性がある。その他製品と同様の砂粒をほとんど含まない黄白色の胎土で、やや軟質の焼成である。内外とも表面は平滑に仕上げられており、底部付近を除き全体に鉄釉が二重掛けされる。胴部中位の径6cm前後の欠損部は、意図的に穿孔し利用した痕跡とも考えられる。確認したのは破片も含め、この1個体のみであった。

669は口径40.1cm、器高27.7cm、大型の半胴甕のような形状である。口縁端部は平らに作り、底部は幅広の低い削り出し高台。口縁端部と底部付近を除き鉄釉が施される。体部中位やや下に1ヶ所、径2.5cmの穿孔があり、使用されていたものと思われる。

＜桶＞（物原 図版 33）

477は口縁にかけて若干広がる筒状の容器で、底部を欠損する。口径33.0cm、口縁端部は平らな面を形成する。から6cm下に凸帯がめぐり、箍が表現される。内外面に鉄釉が施され、外面は二重掛けされる。

5.香炉・蓋・人形・その他

＜香炉＞（NR 図版 8、物原 図版 36）

体部が直線的で筒形の筒形香炉（A 類）と口縁部が丸く外へ折り返され、腰が強く張り出す袴腰形香炉（B 類）とがある。どちらも外面腰部の屈曲部までと内面口縁部周囲に鉄釉を主とした釉が二重掛けされる。口縁端部の釉は拭き取られることが多い。見込中央に高台溶着痕が認められるものがある。

A1 類は外面体部と底部境を面取りして体部下端に三足が付くが、ほとんど装飾程度であることが多い。158,159,160,511 ～ 516 は体部外面に波状文が櫛描きされる。516 は断面三角形の削り出し輪高台。A2 類は体部がやや内傾し、下端を大きく面取りするもの（156,517）で、高台は削り込み高台である。未施釉でススが付着するものなどがあり、匣鉢その他に転用されたと思われる。A3 類 157 は A1 類とほぼ同じであるが、体部下端を丸く整形するもので、足は付かず平底で糸切痕を残す。

B 類（151 ～ 155,500 ～ 510）は口縁部の折り返しが強いものから小さいものがあり、体部は真直ぐ上に立ち上がるかやや内傾する。断面逆台形の低い削り出し輪高台が付く。151 は体部が高く上へのび、外面は轆轤目が強く残る。155 は体部が短く断面三角形の低い高台が付く。

＜蓋＞（NR 図版 10、物原 図版 40）

落とし蓋の形態となる I 類、被せ覆う形態となる II 類（593 ～ 597）、円板状の蓋の下面に環状の突起がめぐる III 類（213,586 ～ 588）がある。

I 類は轆轤成・整形ののち、体部が直線的に開き端部がやや外反するもの（A 類 206 ～ 210,567 ～ 575,577,580 ～ 585）、下方が丸みをもって立ち上がり端部が強く外反するもの（B 類 211,212,576,578,579）がある。中央に円錐形あるいは団子状の紐が貼付される。下面は回転糸切り未調整で、上面と端部周辺に鉄釉を施す。I 類の口径は 6.0cm、13cm 前後が多い。567 は粘土ひもを環状に、585 の紐は装飾的に松毬を模してつくる。

II 類は轆轤成・整型で平坦な天井部をもち体部がほぼ垂直に続く。紐は付かず、内外面に鉄釉または錆釉を施し、端部のみ釉を拭きとる場合が多い。597 は体部が短く円板状を呈する。下面は露胎となる。594 は天井部がやや丸く、体部内面は露胎となる。

＜灯明皿＞（NR 図版 4 ～ 6、物原 26 ～ 29）

A 類（389 ～ 393,396）の皿は口縁端部が短く直立し、内面に長方形または三角形の芯置きが付く。391 は芯置きが短い三角形で、皿の口縁部の立ち上がりが長い。底部は回転糸切りし、すべて外面下半部分を除き鉄釉が施される。392,393 は底部がやや突出する。

B 類（394,395）の内面に付く芯置きは、紡錘形で中心に溝が通る。底部は削り込み高台。395 は口縁欠損した部分にススの付着が認められる。

C 類 107 は全面に鉄釉が施され、高台内のみ拭き取る。削り出し高台。

D 類は平底の焼き締め小皿で、106,423 は表面が平滑であり、109 は内外面に轆轤目を強く残す。底部に回転糸切り痕が残る。108 は削り込み高台。

その他 134 は器壁が薄く直径 11.4cm、内面は扁平な長楕円形の芯置き部分のみ施釉する。外面は全面に鉄釉を施し、高台は付かず不安定な丸底である。

＜人形など＞（図版 70）

1065 は蹲踞の姿態から狛犬と思われる。円柱状の体部を基本に後脚と細長い紐状の尾を貼付ける。胴部底に円形の板を付足し、その上に前脚を置き胴部を支える。耳は欠損でなく、はじめから作られなかったようである。底部を除き鉄釉が施される。高さ 5.1cm。1064,1066 も狛犬で、それぞれ別個体と思われる。1066 は下顎の部分で、牙と舌の表現があり、黒色の鉄釉が施される。1064 は玉と右前脚で、表面は箆で線刻さ

れる。薄く鉄釉が施される。1062は馬でタテガミの表現がある。胴部の後部から途中まで焼成前に穿孔されている。四肢は欠損、錆釉が施される。1061は牛であろう。全面に柿釉が施される。1063は人形頭部で下部には軸を入れるための孔が作られている。全面に黒色の鉄釉が施される。1070は動物形で、側面に四肢の表現があり、臥牛かと思われる。胎土は緻密で底面を除いて部分的に灰釉が施される。

＜その他＞

1060は幅3.8cmの長方形の蓋で、上部中央に紐が付く。灰釉系の釉が施される。1069は調理器具にある「鬼卸」（右下写真）の形状に似ている。断面は方形に近い短い取手がつき、そこから扇状に粗い卸目にあたる部分が続く。卸目と透し部分は削り出しで成型している。残存長は13.6cm、厚みは3.7cmあり、かなり重量感がある。卸目のある面のみ鉄釉が施される。

1067,1068は陶製の硯である。1067は硯に筆置部分が付くもので、赤褐色で硬質に焼締まっている。1068は欠損しているが方形に近い大型のものとみられる。隅が面取されており、墨堂は外形よりかなり小さく作られ、単純な方形や円形ではないことから特殊品と思われる。軟質の焼成で白色を呈する。硯は両者とも未施釉である。

＜水滴＞（図版70）

1058の平面形は菱形を装飾したような形状で、天井部中央に小孔が付けられている。天井部と下部の函状部分のパーツからなり、側面下方は丸みを帯びている。底面を除いてに錆釉が施される。1059は菱形の板状の製品であるが、中央に小孔があり水滴の上部になると思われる。型押で花弁が表現されている。上面に志野釉が施される。

＜水指＞（図版46）

胎土が緻密で形態が特徴的な容器の一群を水指に含めた。注文品、一点物と思われる製品を含む。

652,653は瓢箪形の上半であり、口縁端部はやや厚く作られる。茶褐色の鉄釉が施される。654～656は口縁部が短く外反するもので、654は削り込み高台。外面胴部は部分的にノミ状工具による任意の削りが施される。焼締めの風合に近い薄い錆釉が施される。657口縁は外反したのち端部がやや直立して受口状を呈する。口縁部に把手か飾耳が付く可能性がある。胴部は直線的で底部付近で丸く窄まる。高台は付かない。

658は胴部が直線的となる筒状の容器で、口縁端部は内側に折り返す。口縁付近から底部近くまで鉄釉が施される。659,660は口径の大きいもので、659,661は胴部に耳が付く。鉄釉が施される。

662口縁部は水平に開き、八角形に整形される。頸部内側に蓋受が作られる。胴部は丸く下方にかけてやや広がり、底部は平らとなり高台が付くと思われる。胴部には装飾として2条の波条の凸帯がめぐり、高台周辺を除き鉄釉が施される。

その他に634は筒状の銭甕に類似する形状であるが、胎土がやや緻密で器壁を薄く作る。下地に全面に錆釉を施し、内外面の口縁から体部中位まで鉄釉が二重掛けされる。口径11.2cm。

＜瓦類＞（図版63～66）

屋根瓦と思われるものは、緩やかに曲がる平瓦のみ、凸面に薄い鉄釉または錆釉が施される。側面など端部はヘラでカットされる。凸面は側面付近は縦方向の、その他は横方向の工具ナデ。凹面に布目がみられるもの、横方向の工具ナデするものがある。胎土は黄白色でその他製品とほぼ同じである。

市販されている「鬼卸（オニオロシ）」（竹製）

966,968 は平らな板状を呈し、塼か敷瓦と思われる。片面の部分的に薄い鉄釉を施す。轆轤上で調整したとみえ、片面には同心円の回転削り痕が残る。胎土は瓦に同じ。

＜土管＞（図版 47）

図示したのは 1 点のみ。轆轤で引き上げて成形する。口縁部が窄まるもので、口縁部上端に平坦面をつくる。口縁部が受口状となるタイプもある。外面に鉄釉を施したあと、上端部の釉は拭き取られる。胎土や釉調は瓦類と同様である。

＜仏餉具＞（NR 図版 8）

161 ～ 163 は半球形の坏部に脚部はやや開いた高い高台となるもので、高台下部と高台内を除いて鉄釉が施される。161 は特に脚部が高い。

＜茶釜・内耳鍋＞（図版 67）

陶製茶釜は、979,980,984 のような肩部の径が最も大きく底部にむかって窄まる平底のもの（A 類）と、981,983 のように胴部中程にかけて若干膨らみをもつもの（B 類）があり、いずれも底部は平底で回転削り調整する。A 類には肩部に穿孔を施した半円形の板状の耳が確認できる。982 は縁を刻み装飾を加えた耳の一部。B 類は肩に稜をもち、胴部上位に断面三角形の低い凸帯がめぐる。979 は全面に錆釉、981,983,984 は無釉である。これらはすべて使用されており、底部から胴部下半にはススが厚く付着する。

985 は口縁が受口状となる陶製鍋で、口縁内側に耳の剥離痕が残る。胴部外面はケズリ調整する。外面に薄い鉄釉が施される。これも使用され、外面にススが付着する。

＜土師質鍋・皿＞（図版 68,69）

土師質の鍋では 1000 ～ 1003 など半球形内耳鍋と 1005 ～ 1007 のホウロクがある。1003 は内面はナデ、底部付近は工具ナデ調整、外面中位から底部は回転ケズリ調整する。1006 の外面体部中位より底部は回転ケズリ調整する。1004 は厚手で胎土に砂粒を多く含む。全体の形状は不明。すべて使用されたもので、内面には付着によるヨゴレ、外面にはススが付着する。

土師質の皿はすべてロクロ成形である。主体となるのは中、小型皿の A、B 類である。A 類 1012 ～ 1057 は口径 11 ～ 12cm、器高 2.0 ～ 2.5cm、底部はほとんど突出せず回転糸切りの平底である。体部は比較的短く、底部から八の字状に若干丸みをもって開く。体部中程に稜を形成するものもある。口縁端部は細く収まる。底部際のみやや器壁が厚い。B 類 989 ～ 996 は口径 4.6 ～ 5.1cm、器高は 0.8cm 前後の小型で、体部が極端に短く、端部がわずかに斜め上方に立ち上がり面をもつもの。底部は回転ケズリ調整する。

その他に 988 は口径が 6.6cm、B 類を若干大きくしたような形態であるが、底部は回転糸切りでこの個体以外は確認していない。986,987 は口径に対し器高が高い、やや深いタイプで、986 は A 類を深くしたような形態で、内面にススが付着する。987 体部は直線的に開き、端部は丸い。器壁の厚さが一定して薄い。

＜加工円板＞（図版 101）

1559 ～ 1563 は陶器片の周囲を整形して作られている。1559 の外周囲がすべて研磨されており、道具として用いられたかもしれない。

＜その他＞（図版 101）

窯の操業時期とは直接関連しないと考えられる混入品などがある。1558 は須恵器で、1 点を確認した。断面方形でやや潰れた高台が付く杯。1551 ～ 1553 は磁器染付丸碗。1554 は陶器小瓶、胴部中位が張り、高台は断面方形の削り出し高台。胴部上位に呉須で笹絵が描かれる。1555 は蕎麦猪口で、削り込み高台。呉須絵が描かれ、全面に透明釉が掛けられる。18 世紀後半か。1556 は陶器で湯呑、焼成不良で軟質。胴部中央で少しくびれ、口縁付近も歪ませる。胴部上半に鉄絵で斜格子文が描かれる。1557 は磁器、小杯。

6. 茶入

「瓶子窯」跡として遺跡を著名にしてきた器種である。第1、第2号窯の2基の窯体の生産品全体に占める茶入の割合は18.3%と極めて高く、5メートルメッシュ×12グリッドの範囲では素焼も含め722個を数えた[*1]。出土した茶入は、口頸部（口造り、捻り返し、轆）、肩部、胴部（腰、裾、土見）、底部（畳付）の各部位によって様々な形態・調整技法がみられ細分化が可能である上に、施釉方法や釉薬との組合せは更に多様となる。こうした状況こそが茶陶の注文生産という特殊な生産体制によるもの、また瓶子窯跡の特性であると思われる。そこで形態を基準とした分類は行わず、肩衝形、丸壺形といった表現を用いることにした。これとは別の分類の視点として「精良な細土を用い、薄く轆轤挽き」するものと「やや粒子の粗い土を用い、厚造り」するタイプが存在し、胎土と制作技法上のいくつかの特徴が関係することが指摘されている[*2]。本報告ではこれを分析の手掛かりに、まず胎土の特徴により5つのグループに大別し、その上で「形態」と「整形」「施釉」方法の傾向を抽出することを試みた。

＜底部処理法＞

a「轆轤糸切り」…轆轤は右回転のみ

b「回転篦ケズリ」…同心円の痕跡が残る

c「削り込み高台削り」

＜腰部処理法＞

a「轆轤水挽き」…成形の後、特に調整を施さない

b「ナデ仕上げ」…指またはコテのような工具を用いてナデ調整する

c「篦削り」…砂粒の移動が確認できる平坦な面の工具ケズリ

d「カンナ削り」…幅の狭い単位の工具ケズリ

e「縦篦削り」

f「化粧掛け」…腰部に錆釉を塗布

＜3　内面施釉方法＞

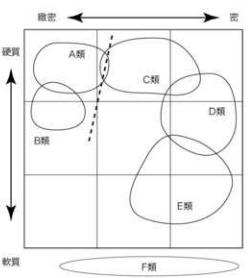
a　無釉

b　外面と同釉（地釉のみも含む）を塗布

c　錆釉を塗布

＜胎土の分類＞

主に破断面の肉眼観察による「粒度の粗密」、「焼成の良否と色調」を組み合わせた分類基準を図21に示す。このうち「色調」は胎土の特性のほか、焼成温度に起因する変化も含まれている。また主観的な判断であるため、実際には各々の分類の境界は明確なものではなく、明らかに暫移的に連続する部分が認められる。既に指摘されているように、精良・緻密で製作される器種が茶入ほか



A類；精良で砂粒をほとんど含まず粘り気が強い
暗灰色～灰色を呈し硬く焼締まる
破面は比較的滑らか

C類；精良で粘り気が強く、わずかに細い砂粒を含む
灰色～淡灰色を呈し、硬く焼締まる
破面は若干ザラつきがみられる

D類；削り、ナデ調整の表面に砂粒の移動がみられる
淡灰色～黄白色を呈し焼成は普通～やや硬質
破面は凸凹してザラつきがみられる

E類；削り、ナデ調整の表面に砂粒の移動がみられる
黄白色～白色を呈し、焼成は軟質
破面は凸凹してザラつきがみられる

B類；精良でほとんど砂粒を含まない
白色を呈し、比較的硬く焼けたものが多い

F類；素焼、未施釉。

図21　茶入胎土の分類　概念図

一部に限定されるもの、天目茶碗、皿など他の器種の胎土に類似するものとに大別することは可能であり、本報告ではひとまず前者をⅠ群（A類とB類）、後者をⅡ群（C・D・E類）として記述を進めることにする。この中でC類はA類に近似する様相も含んでいるが、特に精緻なつくりであるⅠ群を抽出するという意味でⅡ群に含めることにする。なお、胎土の粗密の分類と基準が異るが、最も軟質の焼成である未施釉（素焼）の一群をF類としてまとめる。

＜F類＞

未施釉、素焼きの製品を一括する。大半が肩衝形であり、679は口径4.4cm、器高8.2cm、底部径4.1cm、胴部径6.8cmで、稜のある明瞭な肩が衝く。口頸部が直に立ち上り口縁端部を玉縁につくる。胴部は下位で若干丸く窄まる。撫肩衝形が比較的多く、胴部は緩やかな曲線で下位に向かって徐々に窄まる。口頸部の高いものと低いものがあり、やや内傾するものが多い。その他小振りの竿子形がみられる。残存率の高い個体でみると器高は8.4～10cmに分布する。

670,672,677,678,684はヒビ割れのような目立った欠損がないものの表面に黒斑がみられる。腰部を除き基本的な調整は、器面の釉薬に影響する口頸部から肩部の、胴部上半にかけてはナデ仕上げし、胴部中程はケズリの痕跡を残したままであることが多い。胴部に胴紐が巡るものと無いものとがある。腰部から底部の処理では多くが轆轤水挽きのみかさらにナデ仕上げ（674,675）を施し、右回転轆轤糸切りして離す。671,673,679,680は切り離し後、幅の狭い単位でカンナ削りし、底部も回転篦削りする。676は腰部下方を削り面取し、底部を回転篦削りする。685は糸切りの後、任意の縦篦削りし、丸ノミ状工具の痕跡を残す。678は胴部中位以下に縦に篦筋3条と2ヶ所に縦の削ぎ篦が入り、胴部下位を巡るように篦取りする。こうした織部風の装飾をするものが僅かに認められる。670,671は削り込み高台削りである。

＜B類＞

精良で緻密な胎土であり、断面は白色～灰白色を呈し比較的硬く焼けている。形態は肩衝形を中心に鶴首形（686）、瓢箪形（688,691）、丸壺形（687,690）がみられる。このB類は底部も含め全般に薄作りであり、かつ丁寧な調整を施す。

瓢箪形または締腰形と思われる底部692は、糸切りしたのち腰部に縦篦削りが施される。690,691は腰部を篦削りし、691はさらにナデ仕上げする。底部は回転篦削り。

肩衝形上半部701,702は、明瞭な肩が衝き胴部は筒状に伸びる。口頸部は高く、端部はわずかに外反する。697は器壁が特に薄く、撫肩で外面の轆轤目に釉が溜り縞状を呈する。695は竿子形で口頸部が短く端部を強く捻り返す。696,700,704,706,707,709,710は器壁が特に薄く、軽量で細身のものが含まれる。腰部をカンナ削りするため底部の器壁が薄い。さらにナデ仕上げを施し、底部を回転篦削りする。703は腰部をカンナ削りで整形したのち底部を糸切りしている。706は側面に強く縦の篦筋が入り、おそらく胴部が6つに分割される。

釉薬は鉄釉系を基本にした二重掛けである。釉際はほぼ水平であり、施釉の際に保持した指跡を残すものが多い。出土する茶入は、破損の他に多くが釉薬の発色不良により意図した「景色」の効果を得られず廃棄されたと思われるが、B類は釉薬に光沢が残る資料が比較的多く、また外面に著しい降灰がみられる資料が少ない。これらは確実に匣鉢の使用が想定される。釉の層は薄いものが多い。703は施際から肩にかけて黄橙色、肩から胴部下位は明～暗褐色に発色し、半透明で胴紐が透けてみえる。691の胴部もほぼ同様である。腰部は基本的に無釉である。内面は、無釉のもの、錆釉または外面と同釉を塗布するもの（693,694,696）がある。

＜A類＞

甕単(712～714)、丸壺(718～720)、擂座(727～729)、耳付(734～736)、文琳(721,722)、肩衝、尻膨、芋子形のような形態がある。肩衝形を除く形態はやや小振りである。715,716のような特に細身の形態もみられる。胎土は緻密で暗灰色～灰白色であり硬く焼締っている。器壁は底部付近を除いて全般に薄く、破砕して小片となったものが多い。

甕単形は胴部中央やや上で括れ、口径2.3cm、底径2.5cm前後、713で器高6.2cm。口縁端部は短く立ち上がり、細く終息する。腰部は轆轤水挽きのまま未調整であり底部は糸切りする。

丸壺形は718が口径2.7cm、頸部の高さ1.2cm、器壁は特に薄く、肩際に段をもつ。720は底径2.6cm、胴紐が巡る。腰部は轆轤水挽きのまま未調整であり底部は糸切りする。

擂座形はこのほか破片10点ある。口縁端部は短く僅かに外反して細く終息する。口縁から下1.4cmに6～8個の擂座が貼付される。擂座は同じ土を用い、断面は三角形、箆で整形される。底部は不明である。

耳付形の口縁部形状は擂座形とほぼ同じで、細い紐状の耳2個が縦に貼付される。734は腰部に任意の縦箆削がみられる。

文琳形の口頸部は短く、端部を緩やかに捻り返す。肩際からすぐ胴部は丸く膨らみ、胴紐がめぐる。胴部下半は不明であるが、器高は低く6.0cm前後と推定される。

底部の処理はほとんどが轆轤右回転糸切りであり、750のみ特殊で、削り込み高台の高台内に渦巻き状の細線がみられる。腰部は多くが轆轤水挽き後未調整である。釉薬は、光沢の無い艶消しが多い。また腰から下は基本的に無釉、露胎であるが、自然釉と思われる透明釉が覆い褐色の色調を呈する場合がある。内面は化粧掛けせず無釉であり、底部に円または楕円形の降灰の痕跡が残る。725,739,740は底部に輪トチの痕跡が残る。

＜C類＞

小振りの一群の胎土はA類と同様であり区別が困難であるが、破断面がやや凸凹しザラつきが認められるものをまとめた。肩衝形のほかに鶴首(762)、甕単(751,752,765)、丸壺(753,754,757,758,760)、擂座(763,764)、耳付(766)、文琳(767,800,801)、大海(761)のような形態や器高4cm前後の小型のもの(767,768)がある。肩衝形は撫肩衝、芋子、締腰、尻膨形などがある。

鶴首形762の頸部は高さ3.4cmで、口径2.8cm、口縁端部は僅かに外反する。胴部上位に胴紐がめぐる。外面はナデ調整で釉層は薄くほとんどが剥離している。A類726より若干器壁が厚い。

甕単形は、751で器壁の厚みが一定しない点を除き、A類とほぼ同じである。765は底部を円座につくり、轆轤糸切り、腰部は削りの後ナデ仕上げする。

丸壺形は頸部の高さが2.0～2.4cmあり、A類718より若干高い。753は肩際に明瞭な稜を形成しない。外面に鈍い光沢のある鉄錆釉を施す。腰部は轆轤水挽き未調整、底部は右回転轆轤糸切り。

擂座形はA類とほぼ同じである。若干器壁が厚い。

耳付形766は同形の別個体は確認しておらず、一点物かもしれない。内湾する頸部をもち、口径2.7cm、口縁端部は丸く、やや内傾する。肩はやや撫肩気味で緩く屈曲する。頸部中程から肩の稜にかけて縦に紐状の耳が2ヶ所付けられる。外面は長石分の多い白濁した灰釉が施される。内面は無釉で轆轤目が強く残る。残存高は6.8cmで、腰部以下は不明である。この胎土と釉薬の色調は人形(臥牛,1070)とほぼ同様である。

文琳形もA類とほぼ同じである。ただ767は器壁が厚く、器高が特に低い。

大海形761は扁平な広口の壺形を呈する。口径5.6cm、頸部は真直ぐ立ち上がり、端部を緩く捻り返す。幅広のやや丸い肩をもち、最大径は8.4cmである。外面は鉄釉系の釉薬を二重掛けし、

内面にも同地釉を施す。同形の破片は底部も含めてほとんどみられない。

770は口径3.9cm、器高9.1cm、底部径5cm、明瞭な肩が衝き胴部が円筒状となる肩衝形で、胴紐がめぐる。788も肩に稜をもち口径3.4cm、器高8.4cm、底部径3.7cm、胴部中程に胴紐がめぐる。外面の釉薬は灰緑色に発色している。腰部はカンナ削り、底部は回転削り調整。内面下半は轆轤目が明瞭である。772は口径4cm、内面に同釉を施す。形状はA類748に類似する。776は口径3.9cm、器高9.6cm、底部径4.4cm、撫肩衝形で底部に向かってやや窄まる。内面に同釉を施し、底部に直接匣鉢が溶着している。781は口径3.6cm、器高8.1cm、底部径3.5cm、焼き歪みがあり、上部に付着物が多い。胴部下位に稜をもち、面取状になる。腰部以下と内面に錆釉を施す。787は口径4.4cm、器高8.6cm、底部径3.7cm、内面に轆轤目が強く残る。締腰形755,756は胴部の上位がわずかに括れ、括れ部分の少し下に胴紐がめぐる。外面には柿釉、756は内面にも同釉を施す。790,791は胴紐の上側、胴部上半に細く浅い篦筋がめぐる。780は口縁部は不明であるが、胴部上位で僅かな括れをつくり、腰部下方で丸く窄まる。内面に同釉を施す。底部に扁平な輪トチと匣鉢が溶着する。774,776～778,785,786は内面に同釉を、779は錆釉を施す。

792は明瞭な肩をもたず胴部中央の径が最大となり全体が丸みを帯びる竿子形で、口径3cm、器高8cm、底部径2.4cm。胴紐がめぐる。この形態が最も多く、やや細身のもの793,802,806,813やや最大径がやや下方となるもの794がある。いずれも口頸部は短く、口縁端部を僅かに捻り返す。外面は柿釉に灰を二重掛けし、腰部および内面は無釉であるものが多い。腰部の処理では回転轆轤糸切りのほか、任意の縦篦削りするものは803,804,810,816,817があり他に803は特に細い単位で削り、811は縦篦削りの後底部を円座につくる。818は底部糸切りの後、縦方向を刷毛状の工具で調整している。

その他特殊なものでは、819は胴部下位に縦に篦筋を掻き入れ、底部に近い位置に段を削り出し、段より下を篦で縦方向にカットしている。820は円座であるが、底部が薄作りで器壁の厚さがほぼ等しく内面にも括れを形成する。768はやや扁平な小型の壺形で、胎土が精良であるにもかかわらず成型・整形が雑である。

＜D類＞

白色から黄白色を呈し、わずかに砂粒を含み破面はザラつきが認められる一群で。硬く焼き締まったものも含まれ、焼成は比較的良好である。碗、皿類の胎土に同様の胎土がみられる。甕単(821)、大海（822）、文琳（876）、肩衝形がある。

甕単形821は口径2.8cm、口頸部は真直ぐ立ち上がりほとんど外反しない。腰部は無釉でナデ仕上げしている。A,B,C類の同形品と比較して器壁が厚く、口縁部の形状や内面に同釉を施す点も異なる。

大海茶入822は試掘調査時の採集資料である。腰部に一部欠損があるだけのほぼ完器で、口径8.9cm、器高7.6cm、底部径5.8cm、最大径は13.8cmである。器壁は全体に厚手で、扁平な壺形を呈する。頸部はほとんどなく、口縁端部が短く外反する。肩はつくらず胴部は強く湾曲して底部に続く。底部は幅4cmの輪状の設置面を残して削り込み、碁笥底状となる。外面は鉄釉系の釉薬を二重掛けし、底部付近と内面は無釉である。同形の別個体は確認していない。

文琳形786は口径4cm、胴紐はない。A,C類のものより器壁が厚く、内面に同釉を施す点が異なる。

肩衝形はバリエーションが多く、その中に全体が精緻なつくりのもの、成型をはじめ各工程が粗雑なものが混交している。全体が分かる主な資料について詳述する。825は口径4.2cm、器高11.3cm、底部径4.4cmと特に器高が高い撫肩衝形である。上部には付着物が多い。内面に同釉を施す。826は口径3.4cm、器高8.4cm、底部径3.4cmの締腰形で、胴部中央やや上寄りでわ

ずかに括れる。しかしC類のものより器高が高くバランスが異なる。軟質の焼成であり、釉薬は発色不良で灰緑色を呈する。なお同様な軟質の焼上りで灰緑色の個体はまれに見られる。834は口径4.3cm、器高8cm、底部径4.8cm、広口の口縁で器高はやや低く、腰部に稜をもち面取り状となる。外面の釉際ラインが水平ではなく斜めにつき、内面は同釉を施す。833,871も腰部が面取状となる。833は口径3.6cm、器高7.3cm、底部径3.2cm、腰部にヨリ土が付着する。871は胴部が同幅で器高が低い。832は口径2.6cm、器高6.7cm、底部径3.2cmと小型で、口頸部は直に立ち上がり、肩の傾斜が大きく腰部は直線的に窄まる。胴部中程に幅広の胴紐がめぐる。823,824はそれぞれ口径2.7と3.5cm、器高8.9と9.3cm、底部径3.6と4.5cm。口頸部は緩やかに外反し、肩が丸く、肩の径が最大となり、底部が厚く手取りが重い。823は内面に錆釉、824は同釉を施す。853も底部が厚く同タイプか。827,828は口径3cm、器高9.0cmと8.6cm、底部径4.4cmと3.2cmであり、口頸部は短く立ち上がる。胴部中程の径が最大となり、肩、腰部ともに丸い。827は底部を円座につくり、内面に同釉を施す。828の器壁はやや厚手で、胴部中程に胴紐がめぐる、完器である。829,830も胴部中程の径が最大となり、肩に稜をもつ。口径3.4cmと3.3cm、器高8.4cmと8.3cm、底部径4.2cmと3.5cm。831は口広で口径3.5cm、器高8.4cm、底部径3.9cm、頸部はほとんど無く、口縁部は短く外反し、肩に稜をもつ。全体がずんぐりとした形で、底部が薄く手取りは軽い。835は口径3.3cm、器高8.6cm、底部径4.5cmで、肩は丸く、僅かに胴部下方に向かって開く形となる。腰部は下位で丸く窄まる。879も腰部の径が最大となるタイプで、腰部以下底部も回転削り、内面には轆轤目が明瞭で、錆釉を施す。836は口径3.3cm、器高8.7cm、底部径4.6cm、口頸部は直に立ち上がり、肩は丸く、肩の径のまま底部に続く。腰部下位を丸く整形する。器壁はやや厚く、内面に同釉を施す。144も同タイプか。837は口径4cm、器高8.5cm、底部径4.2cm、口頸部は直に立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。肩に面をもつ。内面に同釉を施す。

874,875は小振りで、肩が丸く底部は削り込み高台削りするもので、腰部に錆釉、内面に同釉を施す。口径2.8cm、器高7.3cm、底部径3.1cmで、875は腰部の錆釉を掻き取るように刻書がある。

847,848は比較的口径が大きく、器高が低く胴部が丸く膨れた形態で、口頸部の器壁が胴部と比較して急に薄くなる。内面に同釉を施す。847は口径3.8cm。848は底部径3.8cm。

肩部以下胴部が同径で筒状となるタイプは、底部に接する腰部下位を僅かにカットし面取りする。底部を削りで調整するものは、底部器壁が比較的薄い。883は内面に錆釉、881,884などは同釉を施す。底部径は4.2cm、5.0cmのものがあり、887は底部径2.9cm、胴部は細身で筒状である。

855は全体が不明であるが、口径2.9cm、口頸部は緩やかに外反する。骸際と肩に稜をもち、その間は縦の篦筋で充填される。

872,873は胴部に細い篦筋が入るもので、872の篦筋はやや深く、胴部上半の黄白色の不透明な釉が掛る部分では隠れている。内面に轆轤目が明瞭に残る。

1566（図版61）は器壁の厚い底部に渦巻き状の凹線が見られる。

＜E類＞

黄白色から白色を呈し、砂粒をほとんど含まない胎土の一群で、気泡が入るなど軟質の焼成である場合が多い。碗、皿類の胎土に同様の胎土がみられる。ほとんどが肩衝形である。

890,891は、小型で特に器壁が厚く。手取りも重く粗雑なつくりである。890は口径2.7cm、器高4.3cm、底部径3.8cm、891は締腰形で底部径3.8cm、両者は内面に同釉を施す。1266は肩衝形で器高が低く、器壁が厚く粗雑なつくりである。

肩衝形はD類と同じく、バリエーションが多く、

精緻なつくりのもの、成型をはじめ各工程が粗雑なものが混交している。

892,897 など、大振りでやや傾斜する肩に稜のあるタイプ、撫肩のタイプは底部も比較的薄作りで、D 類とほぼ同じである。892 の内面は無釉であるが、同釉または錆釉を施すものが多い。

898,899 は腰部を面取状につくるもので、D 類の同形と比較すると内面底部が凸凹し、轆轤目が強く残る。口縁端部も捻り返し、玉縁状をなす。

937 は口径 4.2cm、器高 8.3cm、底部径 5.2cm、口広の口頸部は内傾したまま外反しない。胴部は筒状となり、腰部下位に削り出して段をつくる。内面に同釉を施す。939 は口径 3cm、器高 8.6cm、底部径 5.2cm、胴部を筒状につくり、底部際の腰部を面取しないためこの部分の器壁が厚い。口頸部は直に立ち上がり、端部を強く捻り返す。外面には薄い鉄錆釉、内面には轆轤目が強く残り同釉を施す。930 も胴部を筒状につくる。口径 3.6cm、口頸部はやや内傾し、口縁端部は外反しない。941,942 は筒状の胴部外面に斜めの轆轤目を意図的に残すもので、「桜貝手」を意識したものか。内面に同釉、錆釉を施す。口径 3.7cm、底部径 3.5cm。

918 は胴部が同径でも肩部と腰部下位が丸くなるもので、底部を糸切りした後、腰部を横方向に任意に箆削りする。このような調整はこれ 1 点のみである。内面に同釉を施す。口径 4cm、器高 8.9cm、底部径 3.8cm。

911 ～ 917 は器高がやや低く、胴部中程に僅かに括れをもつもので、器壁はやや厚く胴部にやや幅の広い凹線がめぐる。内面に同釉を施す。

943,946 は竿子形で、頸部はほとんど無く、口縁端部を短く捻り返す。943 は外面は轆轤目が残り、内面に錆釉を施す。946 は口径 3cm 、内面に同釉を施す。944 ～ 946 は口径が胴部径に近い口広のタイプで、945 は内面に同釉を施す。

949 は締腰形の胴部下半資料で、器壁はやや厚く胴部に細い筋目が入る。947 は胴部を分割するように縦に箆筋が入る。内面に同釉を施す。948 は底部際で丸く窄まる形態の下半部で、腰部を削り出して凸部をつくり、錆釉を施す。器壁はやや厚く、内面にも錆釉を施す。その他、底部を円座につくるもの 952、削り込み高台削りのもの 950、腰部を縦の箆削り調整するもの 951,953,954 がある。すべて内面に同釉を施す。925 は厚手の底部で、糸切りの後まだ柔らかいうちに付着した粗い砂粒が残る。胴部器壁は薄作りの製品であり、この場合は、底部削りの工程が途中で省略されたものと思われる。

<胎土の違いによる形態等の特徴>

肩衝形を除く甕単形・丸壺形・鶴首形といった形態は、胎土が緻密な I 群と II 群の C 類にほぼ限られる。これらは口径も小さく全般に小振りで手取りは軽く、A 類は特に腰部、底部を削るなど器壁を薄く作り細かな細工が可能な土が選択されたと考えられる。肩衝形は明瞭な肩が衝くものや同形のものが目立ち、最も強い規格性がみえるグループといえる。切り型（型紙）のような明確なモデルの存在を思わせる。A・B 類は胎土に含まれる鉄分の量が異なるもの（図 31,32）、焼成温度の違いが色調に現れているもの両者が含まれるが、A 類は B 類と比較して全体に釉薬の発色が良く、これについては窯詰めの方法等に起因する可能性が考えられる。

II 群のうち C 類にのみ肩衝以外の形態がみられる。底部が若干厚く手取りがやや重い。D・E 類は器壁が厚い。E 類は特に底部が厚くほぼすべて肩衝形であるが、器高や形状、各部位のバランスなど多様であり、精緻なものから稚拙ともいえる粗雑な成形のものまでが含まれる。

素焼の F 類は軟質であるために残存する底部からの推定であるが、ほとんどが肩衝形になると思われる。底部はやや厚手であり、おそらく D・E 類の肩衝と同タイプの素焼段階の資料と考えられる。

その他に、内面の施釉の有無、あるいは外面腰部の化粧掛けの有無と胎土との関係でみると、I 群と C 類では内面、腰部ともに施釉するものは少ない。逆に D・E 類では多くの個体で内側に外

面と同じ釉（地釉）を施すものがみられる。また、腰部に錆釉を施すものがわずかにみられるが、形態に共通性はみられず、窯ごと独自性の強い個性的な形態かと思われる。

＜茶入の窯詰め技法について＞

瓶子窯跡では茶入専用と思われる特殊な窯道具が確認されている。置き跡、溶着資料等を手掛かりに窯詰の方法について幾つかの組み合わせが想定できる（図 22）。

・単独型

匣鉢 III 類とした小型の切り匣鉢を用いる。エブタの上に茶入 1 個を輪トチ、あるいは足付き板トチ B 類を挟んで置き、その上に匣鉢を伏せるようにして被せる。このタイプの匣鉢の内面に茶入口縁部が溶着する資料がある（1152,1153）。

図 22　茶入窯詰の方法　想定図

また、エブタの上には複数個の III 類匣鉢を並べた痕跡が確認されている（1105,1109）。III 類匣鉢は上部に物を重ねた痕跡はなく、窯詰では高温となる最上段に置かれたと考えられる。

・2 ～ 4 個型

匣鉢 IIB 類とした円形平底の切り匣鉢を用いる。輪トチ、あるいは足付き板トチ B 類を挟んで茶入を置く。匣鉢の内面底部にみられる径 5cm 前後の置き跡は、間隔も狭いため茶入の痕跡と考えられる。

・その他

エブタの上に輪トチを挟んで数個（3 ～ 4 個以上か）を置く。匣鉢を用いず裸焼きする。1110 のように複数個の輪トチが付着したエブタが確認されている。輪トチは径 5cm 前後で、細い紐状で不整円形。自然釉が厚くかかり、最上段に置かれたと思われる。

【註】

*1…第 6 章表 19 に示す。器種別に底部 1/2 以上残存する資料の個数で示す。底部以外の部位の点数は含まれていない。

*2…井上喜久男 1998　伝瓶子窯跡出土の採集品資料を基にしている。「前者は胎土が白色～灰白色に焼き上がっているものが多く、薄い鉄釉が施されており、唐物写しと考えられるものが認められ、後者は黄白色～淡褐色を呈して重く、腰から底に鉄化粧が施されるものが存在し、唐物茶入の形態から離れているものがほとんどである。」

【参考文献】

井上喜久男 1998「瓶子窯跡にみる瀬戸茶入」『楠崎彰一先生古希記念論集』真陽社

井上喜久男 2004「瀬戸茶入の製作年代」『野村美術館研究紀要 13』

尾崎直人 2004「高取の茶入―その特質と成立の経緯―」『野村美術館研究紀要 13』

7. 窯道具

＜匣鉢＞（図版 71 ～ 74,80 ～ 82）

丸底匣鉢（I 類）と平底匣鉢（II 類）、その他に下面を開口部とし、伏せて使用するタイプ（III 類）がある。

I 類丸底匣鉢（図版 72）では外面底部に布目が残る A 類、外面底部は回転糸切りし、未調整で手の平の圧痕が明瞭に残る B 類があり、底部付近の内径は 14 ～ 15cm、深さは 9 cm 程度のものが多い。内面の径が 9.6cm と特に小さく薄手の 1079 を C 類とした。小天目を入れ用いたと思われる。1080 は底部端に穿孔があり、残存部分で 5 ヶ所を数える。I 類内面には輪トチ、輪トチと天目茶碗が溶着したものが確認できる。

II 類平底匣鉢（図版 71）の底部は基本的に回転糸切り未調整である。A 類はロクロ目の強い体部が直線的に立ち上がるもので、径は 19 ～ 22cm のものが多く、高さはバリエーションが認められる。内面底部中央に輪トチ、または高台痕が確認でき、一度に 1 個を入れ使用した場合が多いとみられる。1075,1076 は小口径の小型のもので、1076 は側面に直径 2.0cm 前後の円形の孔 3 ～ 4 つがカットされている。孔の高さは一定せず、うち一つはヨリ土で埋めて塞いでいる。B 類は、体部 2 方向にヘラで窓がカットされる。焼成時に窯変の効果を意図した、いわゆる「切匣鉢」と呼ばれるものであり、赤津・小長曽窯跡、瀬戸・城ヶ根窯跡でもこの種の匣鉢が確認されている（第 6 章表 20）。表 6 に示すように、窓の形状は円形と逆三角形 2 つが並ぶタイプがあり、1084 では相対してこれらがセットとなる。1093 は円形窓を縮小するためか、下端にヨリ土が充填されている。内面底部には、輪トチまたは径 5 cm 前後の置き跡 3 ～ 4 個が確認でき、痕跡の密集度より茶入専用の匣鉢であったと思われる。また、1089 では外面底部に茶入口縁部の溶着がみられる。

III 類（図版 80 ～ 82）は口径 9.5cm 前後、天井部の直径は 6.0cm、高さ 10.5 ～ 11cm。天井部内面に茶入の口縁部が溶着したものがあり、コップを伏せるようにして使用するもので、外面上部は自然釉が厚く掛り、窯内の最上部に置かれたと思われる。側面 2 方向にヘラで円形か長楕円形の窓がカットされており、窓の位置によりさらに 3 つに細分できる。

A 類は 2 方向の窓の高さが同じで、天井部よりやや下がった低い位置にカットされるもので、III 類中では最も器壁が厚い。内面は天井部のみ赤く変色している（写真図版 48）。

B 類も高さは同じであり、A 類より高い天井部すぐ下の位置にカットされる。器壁は A 類よりも薄手で表面・断面に黒色の斑点（鉄分か）が目立つ。全体に強く火を受けており外面上部の降灰

スリットの上端の高さが同じで、やや下がった位置。器壁は厚く、胎土は粗い。内面はほとんど変色していない

スリットの上端の高さが同じで、側面最上部。器壁はやや厚く、胎土、表面に黒色斑点がみられる。内面全体に激しく火がまわり変色している。

スリットの上端の高さが異なり、一方は高く、反対側は低い位置。器壁は薄く、胎土は精良で白色。内面の変色は部分的。

図 23　匣鉢 III 類断面

表6　匣鉢Ⅱ類　内面に残る痕跡　（2003年調査採集品より 図版未掲載）

	内径(cm)	深さ(cm)	置き跡 (径cm×個数)	高台跡(径cm)	側面の窓	備考
匣鉢ⅡA類	11.0	-		4.0	無	裏、置き跡9.6
	12.0	8.0		4.8	無	
	13.0	9.3	なし		無	
	15.0	4.2		6.0	無	
	15.0	8.3	4.5		無	
	15.1	-		7.9	無	
	16.5	12.0		6.5	無	
	17.0	10.5	5.8		無	
匣鉢ⅡA類・ⅡB類	-	10.9	5.3		不明	
	-	11.7	4.8		円形	輪トチ
	-	10.5	5.0		円形	
	12.5	-	7.0		不明	
	13.9	-	3.8(周囲4.8)		不明	
	14.8	11.5	5.0×(2)		円形	
	16.0	-		6.0	下寄り、小円	
	16.0	14.1	なし		不明	
	16.0	11.8	5.3		円形	
	16.5	10.7	6.0×(2)		有	
	16.5	-	5.5×(3)		円形1と逆三角形2	
	16.7	-	5.0×(3)	7.2	不明	輪トチ1
	17.0	-	5.0		逆三角形	輪トチ
	17.0	10.5	5.3		不明	
	17.0	11.2	有		不明	
	17.0	10.7	4.2		横長円形	輪トチ
	17.0	12.3	4.5×(2)		円形	
	17.0	-	4.2×4		円形1と逆三角形2	底面完存
	17.5	-		8.0	不明	
	17.6	-	5.8×(3)		不明	
	17.6	10.2	5.5		円	輪トチ
	18.0	-	5.3×(3)		逆三角	裏、鉄釉溶着5.2
	18.0	-	5.8×(2)		逆三角	
	18.0	-	4.6		不明	
	18.0	-	5.0×(2)	9.0	不明	
	18.0	-	4.7×(2)		円形	輪トチ
	18.0	-	5.0×(2)		円形	輪トチ
	18.0	10.4	4.8		円形	輪トチ
	18.5	-	5.0×(3)		逆三角形2	
	19.0	-	4.5×(3)		不明	輪トチ
	19.0	-	5.0×(2)		不明	
	19.0	-	5.3×(2)		不明	
	19.5	11.0	5.7×(2)		不明	
	19.6	15.2	5.5×(2)		有	輪トチ2

が著しく、内面も変色している。

C類は2方向窓の高さがそれぞれ異なり、内面の変色は天井部と高い位置にカットされた窓の周辺に認められる。胎土は比較的密で白色を呈する。

＜焼台＞（図版79）

直径13.5cm、高さ約10cmの円柱形を呈するA類（1144,1145）と、直径7.5cmで最大厚4.0cm前後で上面を水平にすると下面が斜めとなるB類（1140～1142）がある。1143は直径は9.0cmとB類よりやや大きく、高さ（厚さ）が5.4cmと一定のものをC類とした。A類は粗い砂を多く含む胎土であり、B類は製品の胎土に近い。B類は一般に大窯で用いられる形態であり、ここでは第1号窯の大窯部分で使用された可能性が高い。

＜エブタ＞（図版 75 ～ 77）

平面形により 4 つに分類され、それぞれ厚手のもの、やや薄いものとがある。正円に近い形状のものを A 類、幅の広い楕円形を呈するものを B 類、正方形または隅丸正方形を呈するものを C 類、細長い長方形、または隅丸長方形を呈するものを D 類とした。側面の調整をみると、やや薄いものは丸みをもった未調整、厚手のものは平坦な面を形成する傾向がみられる。

両面に降灰や重複する置き跡、溶着痕がみられ、あるいは破損後再利用したようなもの 1113 もあり、複数回使用されたものが多い。径 5 cm 前後の円形の置き跡が同時に密にみられるため、茶入か小瓶のような製品を載せて焼成したと考えられる。また、径 10cm 前後と径 5 cm 前後の置き跡がセットとなるもの 1105,1108,1109 は、匣鉢 III 類と茶入の痕跡である可能性が高い。1106 は銭甕の口縁部を塞ぎ、その上に製品 1 点を載せて使用したものと考えられる。

＜匣蓋＞（図版 77）

ロクロ成形の浅い皿状を呈する 1115,1116 があり、それぞれ直径 30cm 弱、19.9cm である。降灰の痕跡でみると、凸部を上、凹部を上に使用した両者がみられる。

＜栓＞（図版 42）

635 の 1 点がある。直径 14cm の円錐形を呈し、平坦面の中央には取手を差し込むための径 3.0cm、深さ 3.3cm の円形の凹みがあり、凸面は全体に不定方向のユビナデの痕跡が残る。

＜トチ類＞（図版 78,79,83）

輪トチは組状にしたヨリ土を環にしたもので、直径約 7.5、5.0cm のものが多く、12cm 前後、あるいは 5.0cm のものがある。潰れて扁平となった上部に製品の高台痕が残るものが多い。

足付き輪トチは、輪トチの下面に断面三角形のピン 3 個が付くものであり、輪トチ断面が円形に近いもの 1128、潰れて扁平になったもの 1127 がある。数は少ない。

足付き板トチは、円板状の板トチにピンが付くもので、さらに 4 つに分類される。円板の上下面は回転糸切り未調整で側面をナデ調整するものが A 類で、下面に円錐ピン 3 個が付く。円板の直径は 12cm 前後（1117 ～ 1119）、と 9 cm 前後（1120 ～ 1123）の大小があり、ピン先に鉄釉が付着するものがあるが、特に被熱の痕跡はみられない。B 類（1200 ～ 1209）は使用方法とピンの形状が特異なもので、円板の調整は A 類と同様であるが上下を逆にして使用する。上面にやや長い円錐ピン 2 個と、あと一つは低く短い組を横にした断面三角形のものを貼付ける。ピンも含め上面は強く火を受け赤変がみられる。C 類 1124 は円板の上下・側面をすべてナデ調整し、下面に円錐ピン 3 個が付く。D 類 1125 は厚さの一定しない円板下面にやや大きめで粗雑なピンが付くものである。上下面とも赤変はみられない。

1128 は大型の鉢の破損品を再利用したもので、内面に輪トチ 3 個が配置されている。

＜色見＞（図版 82）

施釉した製品片に穿孔するもの（A 類）、陶片全面に施釉し、試し焼きのような用途が想定できるもの（B 類）がある。

A 類 1187 ～ 1199 の孔は直径 1.0 ～ 2.0cm であり、用いられる器種は擂鉢の体部、鉄絵皿底部が多い。173 のような小瓶が用いられる場合がある。その他 1181 は小皿の底部に 3 mm 程度の孔があけられ、全面に鉄釉が掛けられている。1180 は粗雑な削りで整形されたリング状を呈し、これも全面に鉄釉が掛けられている。

B 類 1182 ～ 1184 は茶入片であり、破面も含めて全面に鉄釉が施される。1184 は内面に陶片資料 1499 と類似するヘラ描きがある。1175 ～ 1179 はミニチュアの釜のような形態で製品の可能性もあるが、作りが粗雑で底部が抜けた状態のものが含まれることから、窯道具の一種とした。

その他 1138 は組状にしたヨリ土の一部を交

差、密着させて環をつくるもので、部分的に鉄釉が施されている。

＜乳棒＞（図版 83）

1214,1215 は乳棒の先端と思われる陶製品である。上部は柄を差し込むための凹みが作られ、1214 の口付近には固定のための釘孔がある。先端は半球形を呈し、この部分は無釉である。外面上部に鉄釉が施される。いずれも使用されていたもので、顕著な摩滅痕が認められる。

＜その他の窯道具＞

1210 ～ 1213 は無釉の小型の容器状のもので、底部径は約 5 cm、底部は回転糸切りする。1211,1212 は口縁部をヘラでカットして 3 ～ 4 つの山形の突起を作る。多治見市・小名田窯下窯で「筒トチ」として同様のものが報告されている。

1223 ～ 1233 は粗砂粒を多く含んだヨリ土で、トチとして製品間あるいは匣鉢間に挟み込まれ使用されたと思われる。

1218 ～ 1222 は低い皿状のもので、トチの一種であろう。1216,1218 は底部を除き施釉されている。その他は無釉で、1217 は底部に直径 2.4cm の孔が空いている。1219 ～ 1222 は底部が回転糸切りの同規格の皿である。胎土は 1210 などと同じである。

図 24 の 1564 はクレと思われる。第 1 号窯の大窯部分焼成室の天井を支えた窯内支柱の一部と考えられる。直径 21.6cm、高さ 25.5cm の円柱形を呈し、胎土には粗い砂粒を多く含み、側面は強く火を受けて変色している。円柱の上下の面にはヨリ土の付着もみられ、数個を積み重ねて使用したと思われる。

その他に図示していないが、ヨリ土を握った塊が付着する破損した匣鉢の破片が多数検出されている。おそらく縮小率の小さい匣鉢を中間に挟み、ハリとして用いたと考えられる。

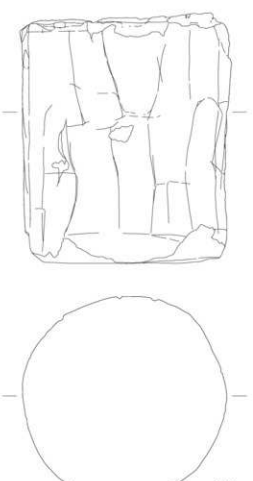


図 24　クレ　S=1/4

8. 文字陶片資料・その他文字資料

文字あるいは記号が記された陶片資料が多数出土した。窯跡の出土資料としては、これまでに窯道具、あるいは製品に紀年銘を持つ事例が僅かに報告されているが、今回出土した資料の形態は勿論のこと、集中して大量に検出された事例も初例となる。瓶子窯跡の特性として第一に挙げられる「注文生産」の実際を直接かつ具体的に示すものと考えられる。また、記された文字の内容は操業期間の実年代に結びつく重要な資料であることがわかった[*1]。

＜陶片資料分類と内容＞

何らかの整形を加え、文字・記号を記し製品と同様に窯内で焼成された陶片類をとりあげる。陶片の成形方法および形状等から大きく３つに分類できる。

Ⅰ類：粗く破砕し、方形または三角形に周囲を整形した小陶片

Ⅱ類：円形、楕円形、長方形で板状に成形したもの

Ⅲ類：やや大形の陶片を用いるもの

そして文字または記号を記す手法は、以下の３つに分類できる。

a類：鉄釉（錆釉）で筆書きする

b類：焼成前に刻む

c類：釉を掻き取るように刻む

内容のうち判読できたものでは、「人名」が最も多く、次いで人名の略号と思われる１～２文字の漢字または仮名、花押、数字、記号等が記されている（表９～13）。

Ⅰ類は279点、Ⅱ類は23点を数える。これらは長さ、幅ともに約５cm以内の大きさに揃っており、サイズおよび人名を主体とする文字の内容が同じであることから、両者は同じ性格のもので、焼成時に特定の製品を区別する目印と考えられる。Ⅰ類は主に碗、茶入、擂鉢等の製品の高台部

表７　文字陶片資料の分類別点数

	手法a	手法b	a,b	c	計
Ⅰ　類	277	1	1		279
Ⅱ-1類	7	9	1		17
Ⅱ-2類		6			6
Ⅲ　類	2	54		5	61
				計	363

分や底部を除く、小片に加工し易い体部を選択して用いている。陶片の周縁はほとんどが破砕したままの状態であるが、細かく敲打を加えるもの、研磨するものが僅かにみられる。文字を記す手法はａ類にほぼ限定され、約半数が同じ文字を両面に記している。文字の内容のパターンは豊富であり、人名でも「名字と名前」（図版84,85）「名字のみ」「名前のみ」（図版86～89）「名字または名前の略号」（図版90～93）が漢字や仮名で記され、「数字または記号」など簡単なものも多い。名字を有する主な人名には「柳生兵助」「奥田太郎左」「奥田源左衛門」「荒川孫四郎」「石川八郎兵衛」「黒柳久之丞」「下方太郎兵衛」「岡本伝左」「田邊四郎□」「半岩弥五兵」「高木安右衛門」など一部は複数点が検出されている。これらの人名については第６章において詳述するが、二代藩主徳川光友の時代に仕えたとされる尾張藩士に比定できる人物が存在することがわかった。

Ⅱ類は厚さ0.6～1.0cmの板を手捏ね成形するもので、表面に手の平や指の圧痕が明瞭に残る。平面形は楕円形、円形、長方形、三角形に近いものなどがある（図版93,94）。胎土は製品と同様の精良なもの（1類）、やや粗いもの（2類、1491～1496）とがあり、１類は人名に関連する内容が多く、２類はやや大きく厚みがあり、「一」「○」など簡単な記号が刻まれるもので占められ、記号中心であるという内容はむしろⅢ類に近い。Ⅱ-1類では手法ａ類が７点、b類が９点、a・b類両方を用いるもの１点がある。これらは粘土板成形から文字記入まで乾燥前の一連の作業として行われており、何らかの道具として専用に製作されたものである。したがって、Ⅱ-1類のサイズおよび形状が本来の標準であったとも考えられる。

表８　陶片資料のグリッド別分布　（点数）

文字陶片資料の分布（I・II類）

グリッド	VIIC-t	VIID-a	b	c	d	e	f	f,g	g	h	計
区外北							15				
9					2	15	106	5	93	25	
10				4	2	3	10		2	1	
11			5	1	1	1					
12		1	1								
13	1										
	1	1	6	5	5	19	131	5	95	26	294
										その他	8
										計	302

文字陶片資料の分布（III類）

グリッド	VIIC-t	VIID-a	b	c	d	e	f	f,g	g	h	計
区外北							1				
9					5	7	5		5	1	
10		1		8	5	1					
11		3	8	2							
12		3	1	2							
13											
		7	9	12	10	8	6		5	1	58
										その他	3
										計	61

＊物原にかかるグリッドは VIID9e,9f,9g、表の上方が北にあたる。
その他は表土、自然流路（NR01）

III 類（図版 94 ～ 98）は、61 点を数える。前述の I・II 類と大きさが異なり、長さが 5 cm を超えるものが目立ち、形状は一定しない。また、陶片に用いられる部位には体部の他に、碗の高台や茶入底部が含まれる。手法 a 類は 1546「弥兵衛」を含む 2 点のみで、b 類 54 点、c 類 5 点と器面を刻む手法が大半を占める。なお、b・c 類には、器面が硬い状態（乾燥または素焼後）に刻みを加えたと考えられる場合が多くみられるのも特徴である。文字の内容は記号と思われる簡単なものが多く、同じ記号が複数みられることから窯記号のような目印である可能性が高い。III 類は鉄釉が施されたものが多く、意図的に未施釉の部分を作り通常の製品とは異なる範囲に施釉するもの（1 類）、破片の全面に施釉するもの（2 類）、通常の製品と同様に施釉するもの（3 類）がある。穿孔のない色見が 1 類の 1502 は天目茶碗の体部片を用いたもので、内面は口縁端部を除き全面に、外面は中央を帯状に残すようにして施釉する。外面の無釉部分 2 ヶ所に 2 種類の記号を刻み、内面にはピン跡のような小さな溶着痕 3 つが残る。蓋のように用いた可能性も考えられる。このような溶着痕とセットになる資料は他に 1518,1520 などがある。2 類は 2 点、すべて茶入の小片であり、茶入での釉薬の発色を確認したとも考えられる。

以上の陶片資料の出土地点の分布を表 8 に示す。その他の陶器、窯道具類を含む物原の堆積状況と同様に、2 基の窯体の焚口正面方向から谷底の流路下流に流されている状況が読み取れるが、焼成した窯を特定する材料は得られていない。I・II 類は窯体に近い物原堆積層に集中して多く含まれており、自然流路内には比較的少ない。軽量な小片であるため、遺物のほとんどは流出してしまったものと考えられる。一方、III 類は物原よりもむしろ自然流路内に残存する状況が窺われる。おそらく I・II 類とは使用方法が異なり、また、分布域も窯体付近というより、作業場から廃棄される場合があったと推測することができよう。

ここで、以上の陶片資料の性格についてまとめておきたい。

まず I 類および II-1 類は、基本的に「人名」を記すものであり、人名には陶工以外の武士階級（尾張藩士）を含むこと、などから製品の注文主を区別するための「付け札」と考えられる。おそらく匣鉢の中で一緒に焼成され、検品の際に廃棄され

た窯道具の一つであろう。更に想像を逞しくすれば、文字の筆致がそれぞれに異なり複数の手によるものと想定されること、「殿」「様」など敬称、尊称の文字が全くないことなどから、注文主が直接筆書きした可能性も否定できないであろう。その注文品とは「茶陶」に他ならず、中でも「茶入」の可能性が最も高いと考えられる。

次に II-2 類および III 類の記号は、陶工あるいは工房の区別のための窯印を記したものと思われ、その機能の一つに色見や試し焼きの目印のようなものが想定される。やはり、窯出しの際に廃棄される性質のものである。どの器種に付随して使われたものか限定できないが、c 類の手法を用いる資料に錆釉を施されたものはなく、天目茶碗にみられるような黒く発色した鉄釉が多くを占める。少なくとも擂鉢や窯印を押される銭褒の類ではなかったと思われる。

＜その他文字資料＞

陶片でなく、本来の形状のまま文字を記した窯道具類、製品成形した後乾燥する以前に押印した窯印などがある。

1535,1543 ～ 1550 は陶片ではなく本来の形状で使用されたと思われる。匣鉢の外面に刻書したもの（1535,1538）、匣鉢の内面に（1543 ～ 1545,1547,1548）、エブタの両面に（1549）、下面となる片面のみ（1550）に鉄釉で筆書きしたものがある。1544,1545,1547,1548 は平底匣鉢の内面底部に大きく書かれている。明瞭な置き跡もみられないことから、切り匣鉢ではないと思われる。1550 の文字は「渡半」とも読める二文字の間に花押が追加されたものと推定され、その裏側には直径 5 cm 前後の置き跡が間隔も密で並んでおり、茶入（または小壺）をのせ焼成したものと思われる。いずれも手法 a の I・II 類と比較して文字は明らかに太く大きいが、内容はやはり「人名」か。

銭褒と乳鉢と思われる鉢の底部付近に押印された窯印がある。（逆い○）、花押、「上」、（四角に一）といった既に報告されているものの他に、記号（625 ～ 628）や「上」を反転して「下」のように見えるもの（622 ～ 624）、長方形枠に「小左衛門」とあるもの（633）、同じ花押タイプが鉢の底部に押印されたものが新たに確認された。また、615 は複雑な印をもつもので 1 点のみ確認された。長さ 35mm、幅 21mm 方形枠に複数の文字が入るものと○に「又」と読める印と二つが底部に押された銭褒であり、残念ながら文字は判読不明である。器形では瓶子窯跡の銭褒の中ではやや新しい様相を示す。

＜墨書＞

1540 ～ 1542 は以上の窯道具とは性格が異なり、焼成後に加えられた文字、墨書資料である。1540 は茶入の外面底部に「十三ノ内 三郎左」とある。やや時期は下るが器物の所管を示す墨書は名古屋城三の丸遺跡でみられる[*2]。こちらは皿の裏側で「十六之内　御勝手方」とある（図 25）。1542 は内面い鉄絵我施された灰釉折縁皿の底部に花押状の記号がみられる。1541 は香炉の底部に墨跡がみられるが判読不明である。

【註】

*1…先行概要報告した時点から若干の変更を加えた。本報告を正式としたい。武部真木 2004「資料紹介　瓶子窯跡窯出土の文字陶片」『研究紀要 6』愛知県埋蔵文化財センター

*2…梅本博志 編 1990『名古屋城三の丸遺跡 I』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 15 集

図 25　墨書　（名古屋城三の丸遺跡出土）

表9　文字資料の内容（1）

E-	形態	手法	内面	外面	赤彩間	器種	径mm	残	厚さ	備考
1234	I	a	柳生兵助	なし		鉢	55	27		破面やや摩滅
1235	I	a	柳生　□	柳生　□	○	鉢か	40	27		破面やや摩滅
1236	I	a	柳□兵助	や		鉢	43	36		
1237	I	a	柳生兵助	なし		端反鉢	-	41		
1238	I	a	柳	なし		小型の鉢	32	28		
1239	I	a	柳	なし		茶入か	34	25		破面に鉄釉付着
1240	I	a	柳	や		鉢	39	32		
1241	I	a	柳	なし		鉢か	26	27		
1242	I	a	柳	なし		皿	39	34		周囲打ち欠き
1243	I	a	兵助	兵助	○	茶入	38	26		破面に鉄釉付着
1244	I	a	兵助	兵助	○	茶入	-	20		
1245	I	a	魚太左	なし		鉢	47	22		周囲打ち欠きか
1246	I	a	徳田	□□□		鉢	-	33		
1247	I	a	徳田太郎左	なし		端反鉢	34	31		破面丸く削る
1248	I	a	徳田太郎左	□□や		天目茶碗	35	36		周囲打ち欠き
1249	I	a	徳田太郎左	なし		丸鉢	38	26		
1250	I	a	徳田太郎左	や		鉢	28	28		
1251	I	a	徳田太郎左	なし		鉢	36	33		
1252	I	a	徳川善左衛門	なし		鉢か	37	27		
1253	I	a	徳川善左衛門	なし		茶入	-	-		
1254	I	a	徳川	なし		鉢	42	23		破面に鉄釉付着
1255	I	a	徳川	不明		天目茶碗	40	30		破面に鉄釉付着
1256	I	a	徳□	なし		茶入	-	-		
1257	I	a	魚太	魚太	○	茶入口縁部	37	36		
1258	I	a	池村三右	なし		天目茶碗	35	31		
1259	I	a	池村三右	なし		小型の鉢	33	26		破面に鉄釉付着
1260	I	a	池村	なし		小型の鉢か	35	22		
1261	I	a	荒川□四郎☆	なし		鉢	41	30		
1262	I	a	荒川與四郎☆	なし		鉢	39	27		
1263	I	a	荒川與四	☆		小型の鉢か	34	32		
1264	I	a	荒川□四郎一	なし		茶入か	32	29		周囲打ち欠きか
1265	I	a	荒川□四郎一	なし		茶入	36	31		
1266	I	a	□四郎	や		鉢	-	27		
1267	I	a	□カ四郎	なし		鉢	44	23		
1268	I	a	久野市右衛門	なし		徳利・花瓶	56	35		
1269	I	a	久野市右	なし		端反鉢	58	24		
1270	I	a	久野市□	□		鉢か皿	-	-		
1271	I	a	黒柳　吉□	久之丞		茶壺か	60	29		周囲打ち欠き
1272	I	a	なし	久之丞		鉢	37	24		
1273	I	a	久之丞	久之丞	○	茶入	35	21		
1274	I	a	くろ久	□王□		端反鉢	43	23		
1275	I	a	くろ久	くろ久	○	鉢	37	20		周囲打ち欠き
1276	I	a	□藤助兵衛	なし		天目茶碗	45	36		
1277	I	a	石くろ	石くろ		擂鉢	41	31		
1278	I	a	石川八郎兵衛	なし		鉢	31	28		
1279	I	a	岡本辰左	なし		端反鉢	42	31		周囲打ち欠きか
1280	I	a	住口	助左		鉢	31	26		破面に自然釉付着
1281	I	a	下方太郎兵衛	なし		皿	33	28		
1282	I	a	半之助	織邊		擂鉢	52	27		破面に自然釉付着
1283	I	a	不明	なし		鉢	40	28		
1284	I	a	□村	や		鉢	-	29		
1285	I	a	志ま	志ま		茶壺か	56	35		周囲打ち欠き
1286	I	a	羽田	なし		小型の鉢	32	30		
1287	I	a	角田	なし		鉢	44	21		
1288	I	a	川嶋	川嶋	○	鉢	35	28		破面に鉄釉付着
1289	I	a	川澄カ	川澄カ	○	鉢	41	27		
1290	I	a	門右	なし		トナ	38	27		
1291	I	a	半弥	半弥		擂鉢	41	24		破面に自然釉付着
1292	I	a	なし	鹿丈		茶壺か	37	23		
1293	I	a	代田	や		鉢	47	22		
1294	I	a	喜合	なし		不明	40	39		破面に自然釉付着
1295	I	a	松屋　夫	なし		鉢	42	40		
1296	I	a	月仙	月仙		容器か	46	22		破面やや摩滅
1297	I	a	なし	月仙		擂鉢	44	17		
1298	I	a	月仙	なし		天目茶碗	48	27		
1299	I	a	伴右	伴右	○	擂鉢か	42	29		破面に鉄釉付着
1300	I	a	伴右	伴右	○	擂鉢か容器	37	27		
1301	I	a	七助	七助		茶入	38	30		周囲打ち欠き
1302	I	a	七助	七助	○	茶入	28	21		
1303	I	a	次郎兵	なし		丸鉢	48	26		
1304	I	a	次郎兵	なし		天目茶碗	35	33		
1305	I	a	次郎兵	なし		天目茶碗	35	28		
1306	I	a	□	□□	○	擂鉢	40	34		破面に鉄釉付着
1307	I	a	不明	不明	○	擂鉢か容器	36	28		
1308	I	a	弥助	弥助	○	擂鉢	52	37		
1309	I	a	弥之助	なし		茶入	29	25		破面に鉄釉付着
1310	I	a	半左衛門	川平		丸鉢	40	30		

表10　文字資料の内容（2）

E-	形態		手法	内面	外面	表裏同	器種	縦mm	横	厚さ	備考
1311	I		a	なし	川平		茶入	32	20		
1312	I		a	川	平		茶入	42	24		破面に自然釉付着
1313	I		a	不明	不明		碗か	30	-		
1314	I		a	平	川		擂鉢か容器	55	42		
1315	I		a	平	川		容器か	32	26		
1316	II	1	a	川平	なし		楕円形粘土板	43.8	30	7.5	
1317	I		a	平左	平		茶壺か	41	27		破面に自然釉付着
1318	I		a	平左	平左	○	茶壺か	40	40		
1319	I		a	平	平		香炉	36	34		
1320	I		a	平	なし		茶入	43	28		
1321	I		a	田邊四郎□	なし		端反碗	35	27		
1322	I		a	平岩弥ヵ五兵	なし		碗	33	31		破面やや摩滅
1323	I		a	福留	なし		天目茶碗	44	29		
1324	I		a	福留	なし		端反碗	34	31		周囲打ち欠きか
1325	I		a	伊織□	伊織□	○	茶入	50	26		
1326	I		a	松平	松平	○	擂鉢か容器	39	32		
1327	I		a	松理ヵ	□		端反碗	32	27		
1328	I		a	山本	山本	○	碗	42	27		
1329	I		a	村上	なし		碗	40	21		
1330	I		a	岩田	なし		碗	43	27		破面に鉄釉付着
1331	I		a	大田	大田	○	碗	38	22		破面に鉄釉付着
1332	I		a	善左□	□□□	○	擂鉢	44	35		
1333	I		a	藤兵衛	なし		擂鉢	44	23		
1334	I		a	中川	中川	○	擂鉢	41	26		
1335	I		a	新左	新左衛門	○	碗	36	26		
1336	I		a	彦次	なし		天目茶碗	36	28		周囲打ち欠き
1337	I		a	新左	新左	○	茶壺か	36	24		破面に鉄釉付着
1338	I		a	三平次	三平次	○	擂鉢か	43	28		周囲打ち欠き
1339	I		a	なし	三之丞		碗	36	21		破面に自然釉付着
1340	I		a	三丸	三丸		茶入	35	33		
1341	I		a	なし	三水		茶入	37	29		破面に自然釉付着
1342	I		a	□六兵衛	や		天目茶碗	41	31		
1343	I		a	立田三	なし		碗	40	25		破面やや摩滅
1344	I		a	□松吉郎	なし		碗	-	32		
1345	I		a	用ヵ門	用門	○	擂鉢か	40	29		周囲打ち欠き
1346	I		a	□主	なし		端反碗	31	28		
1347	I		a	助右	助右	○	茶入	46	19		破面に鉄釉付着
1348	I		a	なし	傳久		擂鉢	36	30		
1349	I		a	清右衛門	不明		擂鉢	52	30		
1350	I		a	吉兵衛	吉兵衛	○	茶入	41	28		
1351	I		a	□人	□人	○	擂鉢	38	22		
1352	I		a	□な	左衛門		茶入	42	21		
1353	I		a	代□	なし		碗	-	32		灰施釉
1354	I		a	七□兵（□=朗または之）	七□兵（□=朗または之）	○	茶壺か	36	25		
1355	I		a	平□	平	○	碗	-	27		破面に自然釉付着
1356	I		a	吉左	吉左	○	端反碗	35	33		
1357	I		a	松助	松助	○	擂鉢	48	29		
1358	I		a	七郎	七郎	○	碗か	26	23		破面やや摩滅
1359	I		a	不明	滝		小型の碗	36	22		
1360	I		a	なし	山三		茶入	35	29		
1361	I		a	清兵衛	清兵衛	○	擂鉢	37	30		
1362	I		a	弥兵衛	弥兵衛	○	擂鉢	45	25		
1363	I		a	弥兵	不明		碗	33	25		破面に鉄釉付着
1364	I		a	藤兵衛	藤兵衛		不明	39	34		破面に鉄釉付着
1365	I		a	藤兵衛	なし		茶入	44	24		周囲打ち欠きか
1366	I		a	弥九郎	弥九郎	○	丸碗	47	37		
1367	I		a	なし	不明（保留）		茶入か	34	29		
1368	I		a	なし	四郎左		天目茶碗	32	30		破面に自然釉付着
1369	I		a	四郎左	四郎左	○	不明	38	24		
1370	I		a	七左	花□		擂鉢	46	29		
1371	I		a	なし	長左		擂鉢	43	24		
1372	I		a	□□左	□□左	○	茶入	-	38		
1373	I		a	佐左	佐左	○	碗	50	24		破面に自然釉付着
1374	I		a	庄太	庄太	○	擂鉢	37	28		
1375	I		a	庄太	庄太	○	碗	56	34		
1376	I		a	川平左	川平左	○	擂鉢	43	40		
1377	I		a	〆ニ吉左	なし		茶入	-	27		
1378	I		a	勘□（□=右または左）	なし		端反碗	35	29		周囲打ち欠きか
1379	I		a	秀右	なし		端反碗	33	30		
1380	I		a	弥九	弥九	○	擂鉢か容器	40	29		
1381	I		a	伊左衛門	なし		皿	-	19		
1382	I		a	積太	積太	○	茶入	45	37		
1383	I		a	や吉	や		端反碗	-	34		周囲打ち欠き
1384	I		a	吉□	□□		端反碗	-	27		
1385	I		a	□次	□次	○	皿	-	29		
1386	I		a	□兵	□		端反碗	-	36		
1387	I		a	□□	吉左	？	天目茶碗	-	25		周囲打ち欠き

表11　文字資料の内容（3）

6.	形態	手法	内面	外面	表裏同	器種	耀mm	境	厚さ	備考
1388	I	a	兵	?		椀	35	26		
1389	I	a	山口	山口	○	鉢Ⅱ	43	26		
1390	I	a	兵左	なし		天Ⅱ手椀	51	30		
1391	I	a	い口九小	九カ小	○	小型鉢	51	32		
1392	I	a	口古	や		椀か皿	-			
1393	I	a	なし　不明			鉢Ⅱ	34	31		
1394	I	a	参	なし		皿か	-	29		破面に鉄釉付着
1395	I	a	尊	尊	○	鉢Ⅱか容器	37	29		
1396	I	a	半カ	置		容器か	34	23		
1397	I	a	置	半		丸椀	41	30		
1398	I	a	なし	伊		青磁か	40	31		
1399	I	a	山	仙		容器か	45	34		周囲打ち欠き
1400	I	a	山	山		丸椀	39	30		
1401	I	a	仙	山		端反椀	48	42		破面に鉄釉付着、やや摩滅
1402	I	a	山	なし		鉢か	43	37		
1403	I	a	田	なし		天Ⅱ手椀	-	28		
1404	I	a	徳	徳	○	椀か、厚手	37	27		破面に鉄釉付着
1405	I	a	なし	古		椀	52	33		破面に鉄釉付着
1406	I	a	惣	惣	○	玉人	34	33		
1407	I	a	丸	丸	○	鉢Ⅱ	45	26		破面に自然釉付着
1408	I	a	伊	伊	○	玉人	-			
1409	I	a	月	月	○	椀	39	29		
1410	I	a	小	なし		端反椀	-	22		
1411	I	a	伊右	なし		椀か容器	55	44		
1412	I	a	小椀	なし		天Ⅱ手椀	40	34		
1413	I	a	林	なし		小型鉢か	32	27		破面に自然釉付着
1414	I	a	兵	なし		反り皿	36	34		
1415	I	a	太	太	○	不明	41	34		
1416	I	a	多	多	○	椀	33	29		破面に自然釉付着
1417	I	a	十九	十九	○	玉人	42	31		
1418	I	a	兵	兵	○	椀	36	32		
1419	I	a	國	なし		椀か	35	29		破面に鉄釉付着
1420	I	a	百	なし		椀	41	26		
1421	I	a	百	なし		椀か	32	25		
1422	I	a	十	十	○	片口底部か	28	26		
1423	I	a	十	十	○	鉢Ⅱ	32	30		
1424	I	a	十	十	○	椀	35	25		
1425	I	a	十	十	○	端反椀	39	21		
1426	I	a	十	十	○	椀	35	34		周囲打ち欠き
1427	I	a	十	十	○	鉢Ⅱ	36	30		破面に自然釉付着
1428	I	a	八	なし		玉人	46	24		
1429	I	a	なし	万		鉢Ⅱか容器	35	28		
1430	III	3	a 井三	なし		椀（高台）	48	27		
1431	I	a	八	なし		椀	37	36		
1432	I	a	八	なし		椀	41	21		
1433	I	a	八	なし		天Ⅱ手椀	36	24		
1434	I	a	八	なし		天Ⅱ手椀	34	32		
1435	I	a	大	大	○	玉人	26	22		
1436	I	a	小	小	○	玉人	24	22		
1437	I	a	小	小	○	玉人	35	19		
1438	I	a	小	小	○	小型や椀	33	26		
1439	I	a	不明	なし		施釉器	47	32		破面に自然釉付着
1440	I	a	又	又	○	椀	38	19		志野釉、破面に鉄釉付着
1441	I	a	記号	なし		椀	33	24		
1442	I	a	正	正	○	鉢Ⅱ	40	20		
1443	I	a	長	なし		端反椀	40	28		破面やや摩滅
1444	I	a	左	?		椀	36	28		破面やや摩滅
1445	I	a	○に・	なし		端反椀	39	34		周囲打ち欠きか
1446	I	a	○	なし		皿	27	25		周囲打ち欠きか
1447	I	a	おせき	おせき	○	玉人	41	34		
1448	I	a	ひこ	鈴木		椀か	36	29		
1449	I	a	とく	とく	○	端反椀	38	24		破面に自然釉付着
1450	I	a	はやと	はやと	○	椀か皿	54	25		
1451	I	a	不明	なし		天Ⅱ手椀	-	32		
1452	I	a	たひ	たひ	○	椀	37	21		破面に自然釉付着
1453	I	a	たひ	たひ	○	椀	37	26		
1454	I	a	はや	はや	○	端反椀	30	26		
1455	I	a	くに	くに		椀か	-	23		周囲打ち欠き
1456	I	a	くに	くに	○	玉人	30	25		
1457	I	a	口や	なし		天Ⅱ手椀	51	47		
1458	I	a	や	なし		端反椀	42	28		
1459	I	a	なし	や		玉人	37	27		周囲打ち欠き
1460	I	a	なし	や		玉人	35	24		
1461	II	1	b や	なし		三角形粘土板	33.7	22	7.1	
1462	I	a	や	なし		玉人口縁部	46	30		
1463	I	a	や	なし		椀	-	22		
1464	I	a	や	なし		玉人	36	30		

表12　文字資料の内容（4）

仮-	形態	手法	内面	外面	表裏同	器種	縦mm	横	厚さ	備考
1466	I	a	や	なし		容器か	53	32		硬質に自然釉付着
1467	I	a	十	半		香炉か容器	39	27		硬質に鉄釉付着
1467	I	a	や	なし		茶入底部	42	31		
1468	I	a	半十	なし		茶入	-	28		
1469	I	a	半十	半十	○	茶入か	39	19		
1470	II	I	半十	なし		焙烙形貼上板	44.8	16.1	6.5	
1471	I	a	安左	鈴木		擂鉢	40	33		
1472	I	a	安左	あな	○	擂鉢	33	37		
1473	I	a	安左	なし		天目茶碗	47	26		
1474	II	I	b　あさ	なし		焙烙形貼上板	32.5	27.8	7	
1475	II	I	b　あさ	なし		長方形貼上板				
1476	II	I	b　あさ	なし		長方形貼上板				
1477	II	I	b　あさ	自然釉かかる		長方形貼上板	35.5	22.2	6.2	
1478	II	I	a　高木[三]	なし		焙烙形貼上板	50	45.4	7.2	
1479	II	I	a　高木左右衛門	-		焙烙形貼上板	42.4	29.4	6	
1480	I	a	安	なし		茶壺か	40	26		
1481	I	a	安	なし		碗	26	23		
1482	II	I	b　なし	成		焙烙形貼上板	32.8	22.6	6.8	
1483	II	2	b　の	自然釉かかる		円形貼上板	38.2	35.4	15.7	
1484	II	I	b　山	なし		焙烙形貼上板	27	31	5	
1485	II	I	b　なし	大		焙烙形貼上板1/2	29.8	22.7	6.4	
1486	II	I	ab　舞　石助右口	書　之		焙烙形貼上板	42	28	8	
1487	II	I	a　口子	□□	？	焙烙形貼上板	42.7	29	10.7	
1488	II	I	a　十左	なし		焙烙形貼上板	46.6	26.6	5.2	
1489	II	I	a　長左	なし		焙烙形貼上板	39.4	26.7	6.3	
1490	II	I	a　貴下	なし		焙烙形貼上板	43.2	30.5	7.8	
1491	II	2	b　なし	一		焙烙形貼上板	58.5	35	10	
1492	II	2	b　一	なし		焙烙形貼上板	53.1	40.7	12.8	
1493	II	2	b　○			円形貼上板	45	45	13	
1494	II	2	b　○			円形貼上板	52	43	12	
1495	I	-	b　○	○		瓶類か碗	47	35		
1496	II	2	b　○			円形貼上板	49	45	11	
1497	I	ab	なし	短「三」書「佐」		碗	39	37		内面のみ施釉
1498	III	I	b　なし	やか		天目茶碗	52	48		外面部分施釉
1499	III	2	c　2文字	2文字	○	茶入	47	42		内外面全面施釉
1500	III	3	b　なし	四本		碗（高台）	61	52		
1501	III	3	b　なし	あか		茶入	53	35		
1502	III	I	b　なし	小口		天目茶碗（高台）	78	64		外面部分施釉
1503	III	I	b　なし	□		天目茶碗	90	59		外面部分施釉
1504	III	I	b　なし	「III」		碗	-	-		外面未施釉
1506	III	I	b　なし	「II」		天目茶碗	70	42		外面未施釉
1507	III	I	b　なし	「II」		天目茶碗	58	37		外面部分施釉
1508	III	I	b　なし	「II」		天目茶碗	45	42		外面部分施釉
1509	III	I	b　なし	記号		天目茶碗	64	53		外面部分施釉
1510	III	I	b　なし	「IIII」		天目茶碗	58	42		外面部分施釉
1511	III	I	b　なし	川		碗（高台）	57	-		
1512	III	I	b　なし	小カ		天目茶碗（高台）	72	61		
1513	III	I	c　なし	「III」		天目茶碗	68	55		外面部分施釉、周囲摩滅
1514	III	I	c　なし	「III」		天目茶碗	87	75		外面部分施釉
1515	III	I	b　なし	「II」		天目茶碗（高台）	74	57		
1516	III	I	b　なし	□		天目茶碗	102	55		内面部分施釉
1517	III	I	c　なし	記号		端反碗	72	-		口縁部欠損
1518	III	I	b　なし	記号		天目茶碗	85	68		外面部分施釉、内面トチ痕３
1519	III	I	b　なし	□		天目茶碗（高台）	84	77		内面トチ痕３
1520	III	I	b　なし	1～2文字		天目茶碗（高台）	74	61		内外面部分施釉
1521	III	3	b　なし	「-」		碗（高台）	45	30		
1522	III	I	b　なし	2文字		天目茶碗（高台）	108	72		外面部分施釉
1523	III	I	b　なし	合カ		天目茶碗	60	48		内外面部分施釉
1524	III	I	b　なし	合		天目茶碗	68	59		外面部分施釉
1525	III	I	b　なし	□		碗（高台）	63	44		
1526	III	I	b　なし	□ □		天目茶碗	62	54		内外面部分施釉
1527	III	I	c　1文字か	なし		茶入	29	26		硬質も全面施釉
1528	III	I	b　なし	「合」か		天目茶碗	-	-		外面未施釉
1529	III	I	b　なし	□		天目茶碗（高台）	68	49		
1530	III	I	b　なし	も／長カ		天目茶碗	41	30		2個体混着、高台打ち欠き
1531	III	3	b　なし	□		天目茶碗（高台）	73	67		
1532	III	I	b　なし	1文字か		碗（高台）	86	67		外面部分施釉
1533	III	I	b　なし	、（カ カ）久		天目茶碗（高台）	69	66		
1534	III	I	b　なし	□		天目茶碗（高台）	73	67		内面のみ施釉
1535	III	I	b　なし	たかよ		香炉か	-	-		内面のみ施釉
1536	III	3	b　なし	2～3文字		香炉か	67	41		
1537	III	3	b　なし	□鉢		擂鉢	(77)	39		
1538	IV	-	b　なし	記号		摺鉢	-	-		
1539	III	I	b　なし	□		香炉か	59	-		
1540	V	-	c　なし	十三ノ内三郎左		小型の壺	56	-		
1541	V	-	c　不明		なし	香炉底部				
1542	V	-	c　？	花押状		皿				

表13　文字資料の内容（5）

E-	形態	手法	内面	外面	赤彩同	器種	径mm	残	厚さ	備考
1543	IV	a	施設行	なし		擂鉢	-	-		破面に自然釉付着
1544	IV	a	なし	□		擂鉢底部	-	-		
1545	IV	a	2~3文字	なし		擂鉢	-	-		
1546	III 1	a	弥兵衛	弥兵衛		天目茶碗高台	-	49		周囲打ち欠きか
1547	IV	a	2~3文字	なし		擂鉢	-	-		
1548	IV	a	□と/や	なし		擂鉢	-	-		
1549	IV	a				エブタ				
1550	IV	a	なし	渡か作か		エブタ				
	I	a	□	なし		天目茶碗	-	27		
	I	a	不明	不明		天目茶碗	-	-		
	I	a	早か	□	○	小型の碗	40	18		
	I	a	川	手		端反碗	35	22		
	I	a	なし	□□		茶入	37	29		
	I	a	兵	なし		容器か	58	33		
	I	a	□田	なし		碗	-	29		破面に自然釉付着
	I	a	?	なし		碗	38	29		
	I	a	□	□	?	皿か	-	-		
	I	a	盤	盤□（□=右または左）		端反碗	32	25		
	I	a	十か	なし		碗	-	22		
	I	a	?	なし		碗	-	29		
	I	a	不明	なし		端反碗	-	31		
	I	a	不明	なし		不明	-	-		
	I	a	不明	なし		不明	-	-		
	I	a	□か	なし		皿	54	31		
	I	a	不明	なし		茶入	-	-		
	I	a	不明	不明	?	茶入	-	-		
	I	a	不明	なし		碗	-	31		周囲打ち欠き
	I	a	不明	なし		碗か	44	21		
	I	a	大	なし		碗か				破面に鉄釉付着
	I	a	くの	なし		小型の碗	30	22		
	I	a	不明	不明		端反碗	27	21		周囲打ち欠きか
	I	a	五	なし		茶入	49	30		周囲打ち欠き
	I	a	不明	不明	?	茶入	-	-		
	I	a	□や□	□や□	?	小型の碗か	-	27		
	I	a	不明	なし		端反碗	-	31		
	I	a	不明	なし		碗か皿	-	-		
	I	a	□ろ	なし		碗か皿	-	32		
	I	a	小左	なし		天目茶碗	44	30		
	I	a	村	なし		碗か	-	-		
	I	a	志水	なし		茶入か	44	30		周囲打ち欠き
	I	a	帝	なし		碗か	-	-		
	I	a	□	□		碗か容器	-	-		
	I	a	□	なし		碗か	-	25		
	I	a	不明	1~2文字		端反碗	-	-		
	I	a	不明	なし		碗か	-	-		
	I	a	2文字	なし		皿	52	29		
	I	a	2文字	1文字か		端反碗	63	41		
	III 1	b	なし	記号		天目茶碗高台	78	67		外面無釉
	III 1	b	なし	「田」		天目茶碗（高台）	75	67		外面無釉
	III 1	b	なし	「○」「田」		天目茶碗	63	60		外面無釉
	III 1	b	なし	「H」		天目茶碗	82	66		外面無釉
	III 1	b	なし	「田」		天目茶碗	55	33		外面無釉
	III 1	b	輪トチ	「十」		天目茶碗（高台）	87	74		外面無釉
	III 1	b	なし	□の		天目茶碗	41	44		外面無釉
	III 1	b	なし	記号		碗	-	-		
	III 1	b	なし	かか		天目茶碗	59	44		外面無釉
	III 1	b	なし	「○」と「I」か		天目茶碗	41	34		外面無釉
	III 1	b	なし	「H」		天目茶碗	55	48		外面無釉
	III 1	b	なし	「三」		天目茶碗（高台）	54	52		外面部分施釉
	III 1	b	「一」	なし		碗（高台）	69	59		外面部分施釉
	III 1	b	なし	「七」		丸碗	56	48		外面部分施釉
	III 1	b	なし	「田」		天目茶碗（高台）	86	76		外面部分施釉
	III 2	b	なし	「三十」		天目茶碗（高台）	88	76		外面無釉
	III 3	b	なし	「十」		碗（高台）	58	45		
	III 3	b	なし	「I」		天目茶碗	76	48		外面部分施釉
	III 3	b	なし	「H」		碗（高台）	52	48		

10. 木製品・金属製品・石製品

＜木製品＞（図版 101,102）

自然流路 NR01 より出土した漆椀 9 個体、下駄 1 点、板材 11 点、杭がある。このうち一部の資料について放射性炭素年代測定（AMS 法）と樹種同定の分析を行った（表 14）。

漆椀は内面は朱、外面は黒漆塗である。形態、文様など実測可能なものは 3 点にとどまった。樹種はブナ属 3 点、クリ、カツラ各 1 点、モクレン属 1 点、トチノキ 3 点であった。これらの部材は江戸時代「入手や加工が容易で大量生産の点からみて極めて一般性が高い」[*1] と考えられるグループに含まれる。また、2 点について 16 世紀中葉～後葉と 17 世紀中葉の年代を得ている。これらは本窯操業時に使用され廃棄された可能性が高い。2002 の文様は家紋と思われるが、判別できない。2003 は小型の花弁を組み合せた花文様を複数配置している。体部に並んで 2 ヶ所の穿孔がある。

下駄（2004）はクリを用いている。一木から台部と歯を作り出し、平面形は隅丸方形である。残存長 17.7cm、幅 9.0cm。

2005 のアカマツ板材は部分的に著しく摩滅している。2007,2008 加工痕のある有抉材で樹種はアカマツである。2008 は片面が著しく炭化している。

杭列は小規模な群として数ヶ所で確認されており、流路の岸寄りの部分に流れに直交する方向に並ぶものが多い。杭は丸木の先端を粗く削り加工したもので、樹種同定の 5 点はすべてアカマツという結果を得た。3 点の年代測定結果は 18 世紀半ば、19 世紀であり本窯の操業年代以降、この

表 14　出土木製品の樹種と年代

図版番号	種別	木取りなど	樹種	14C年代を暦年代に較正した年代	出土地点	整理no.
2001	漆椀		クリ		VIID10b　第4層地点no.200,201	54
2002	漆椀		モクレン属		VIID10b　第4層地点no.210	52
2003	漆椀		トチノキ		VIID10b　第4層地点no.209	51
2004	下駄	追板目	クリ		VIID11b　第4層地点no.45	2
2005	板材	追板目	サワラ		VIID10b　第4層	55
2006	板材	柾目	ヒノキ	cal AD 1,520-1,595 (79.5%)	VIID9f　物原下層	65
2007	板材	柾目	スギ		VIID10b　青灰色シルト層	63
2008	板材		アカマツ	cal AD 1,730-1,785 (45.7.%)	VIID9d　青灰色シルト層	62
	板材		アカマツ	cal AD 1,520-1,595 (77.5%)	VIID9g　第6層	58
	板材		アカマツ	cal AD 1,555-1,605 (46.0%)	VIID10b　青灰色シルト層	63
	板材	柾目	アカマツ		VIID9g　第6層	58
	板材	板目	アカマツ		VIID9e　第28層	60
	板材	柾目	アカマツ		VIID9d　青灰色シルト層	62
	漆椀		トチノキ	cal AD 1,635-1,675 (55.8%)	中央 青灰色シルト層	61
	漆椀		トチノキ		VIID11b　第4層	50
	漆椀		トチノキ		中央 青灰色シルト層	61
	漆椀		ブナ属	cal AD 1,515-1,595 (77.3%)	VIID11b　第4層地点no.44	1
	杭		アカマツ	cal AD 1,870-1,920 (41.9%)	VIID10b　第4層地点no.152	5
	杭	芯持ち丸木	アカマツ	cal AD 1,810-1,890 (60.5%)	VIID12c　第6層地点no.193	57
	杭	芯持ち丸木	アカマツ	cal AD 1,725-1,775 (34.3%)	地区・層位不明	68
	杭	芯持ち丸木	アカマツ		VIID11g　第4層地点no.418	28
	杭	芯持ち丸木	アカマツ		VIId10e　第4層・ベルトC地点no.459	36
	漆器		カツラ		VIID10d　第4層	47
	漆器		ブナ属		VIID11a　第4層	48
	漆器		ブナ属		VIID11a　第4層	49

谷底の湿地部分において何らかの人為が加えられたと考えられる。

なお、以上の放射性炭素年代測定（AMS 法）と樹種同定の分析は（株）パレオ・ラボ　山下秀樹氏、植田弥生氏に委託して行った。また漆椀の実測・保存処理は（株）東都文化財保存研究所に委託した。

＜金属製品＞（図版 103）

煙管（2009.2010）と銭貨（2011 ～ 2013）がある。

煙管は NR01 より出土し、2009 は羅宇の木質部分（タケ）*2 が残存していた。検出時の雁首と吸口の間は 4.6cm であり、全長は 17.2cm。火皿下の脂返しの湾曲が比較的小さく、羅宇接合部の補強帯はない。17 世紀末～ 18 世紀初か。2010 は雁首のみで、火口の下、首との接合部に補強帯をもち、脂返しは大きく湾曲する。17 世紀後半か。

銭貨は 3 点とも「寛永通宝」（古寛永）である。

＜石製品＞（図版 103）

砥石 4 点がある。いずれも破損品で全体の形状は不明であるが、近世遺跡で共通してみられる規格品と思われる。2014 は平面が幅の狭い長方形で、横断面が比較的厚いタイプ。側面観では使用による凹みが明瞭である。2015 ～ 2017 は平面形がやや幅のある長方形である。破損し剥離しているが、横断面が薄い形状であったと思われる。2014 の石材は泥質凝灰岩、その他 3 点は凝灰質泥岩。

その他に、図示していないが、ナイフ形石器 1 点（チャート）、薄片 1 点（下呂石）が包含層中より出土した。

【註・参考文献】

*1…北野信彦 2002「第 4 節　郷上遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」『郷上遺跡』愛知県埋蔵文化財センター報告書第 98 集　また、分析者（植田）報告では苅安賀遺跡（一宮市）の江戸前期資料においても漆器の木胎樹種は複数種あり、ブナ属とトチノキが多いという同様の傾向が確認されている。

*2…パリノサーヴェイの分析報告による。羅宇の材には木製（紫檀、黒檀、ヤマブキ）と竹製があるが、タケ亜科の利用が一般的とされる。

小泉　弘 1983『江戸を掘る』柏書房
兵庫県埋蔵銭調査会 1996『日本出土銭貨総覧』

第５章　自然科学分析

１．瓶子窯跡でみられる堆積層序とその年代

鬼頭　剛（愛知県埋蔵文化財センター）
森　勇一（愛知県立津島東高等学校）

＜はじめに＞

瀬戸市鳥山町の瓶子窯跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定の結果を報告する。

＜試料および分析方法＞

瓶子窯跡では調査区東側の２地点において深掘による層序断面図を得た（図 26）。それぞれの地点で層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。加速器質量分析法は 125 μｍの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。^{14}C 年代値の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。^{14}C 年代の暦年代への較正には CALIB4.3 を使用した。

＜分析結果＞

深掘層序

地点１は調査区東側の遺構 NR01 の層序確認のために掘り残されたベルト部分で（図 26）、遺構検出面（標高 191.88）から深度約 1.1m の層序断面を得た（図 27）。下位層より、標高 190.78 ～ 190.92m は地層全体が灰色を帯びる細礫混じりの粘土層からなる。粘土層の固結度は低く、未分解の植物片を含む。堆積構造は確認されず、礫は無秩序にとり込まれる。標高 190.92 ～ 191.05m は全体に黒褐色を呈する腐植質粘土層である。本層も未分解の植物片が含まれる。標高 191.05 ～ 191.20m は地層全体が青灰色を帯びた塊状・均質な粘土層からなる。堆積構造はみられない。未分解の植物片を含む。層厚１～ 2cm の極粗粒砂層がレンズ状に挟まれる部分もある。標高 191.20 ～ 191.56m は地層全体が灰色を呈する粘土層である。粘土層中には細礫から粗粒砂サイズの粒子が無秩序に取り込まれている。堆積構造はみられない。径３～ 4cm ほどの炭化材を多く含む。本層からは 17 世紀の考古遺物を産出する。標高 191.56 ～ 191.88m には黄灰色の粘土層である。本層も下位層と同様に地層中に細礫から粗粒砂サイズの粒子が無秩序に取り込まれている。本層からも 17 世紀の考古遺物が産する（図

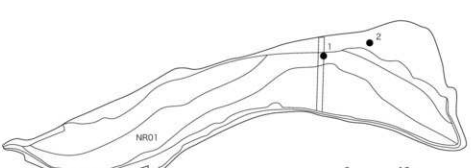


図 26　分析試料採取地点図

29)。

地点2は調査区東側において遺構NR01から外れた地点で（図26）、遺構検出面（標高192.77m）からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させた（図28）。下位層より、標高191.77～192.17mは花こう岩を起源とする中礫サイズの礫層からなる。礫の風化は著しく、手ガリにより容易に崩すことができる。標高192.17～192.27mは基質支持の中礫層からなる。基質は黒褐色を呈する腐植質粘土と極粗粒砂により充填される。礫は花こう岩のみからなり、風化の程度が著しい。下位層である礫層が灰白色、本層が黒褐色を呈するその色調の違いにより、地層境界は明瞭である、標高192.27～192.47mは黒褐色を呈する腐植質粘土層である。地層中には極粗粒砂サイズの砂粒子が無秩序に含まれている。また、未分解の植物片を含む。本層と下位層の基質部分との境界は不明瞭であり、漸移的に変化する。標高192.47～192.67mは地層全体に青灰色の砂粒子の混じる粘土層からなる。未分解の植物片が含まれる。本層から17世紀の考古遺物を産する。標高192.67～192.77mは全体に黄灰色を呈する淘汰良好な極粗粒砂である。本層からも17世紀の考古遺物を産する（図30）。

＜放射性炭素年代測定＞

地点1で4層準、地点2で4層準の合計8試料の放射性炭素年代値を得た（表15・表16）。地点1の最下位層にあたる細礫の混じる粘土層から採取した木片（標高190.86m）は480 cal yrs BP(PLD-2919)、その粘土層を覆う黒褐色腐植質粘土層（標高190.92～191.05m）の下部（標高190.93m）で採取した木片が465 cal yrs BP(PLD-2920)の数値年代であった。17世紀の考古遺物を含む礫～粗粒砂混じりの粘土層（標高191.20～191.56m）から得た炭化材（標高191.34m）は430, 355, 330 cal yrs BP(PLD-2921)、最上位層である礫～粗粒砂混じり粘土層（標高191.56～191.88m）の標高191.80mから採取した木片では280, 170, 150, 5 cal yrs BP(PLD-2922)と，今回の試料中ではもっとも新しい年代値を示した。

いっぽう、地点2の最下位層の風化花こう岩の砂層を覆う中礫層の、基質から採取した炭化物は、標高192.17mの試料が665 cal yrs BP(PLD-2923)、ほぼ同じ層準（標高192.18m）の試料で950, 935 cal yrs BP(PLD-2924)、考古遺物を産する極粗粒砂混じりの粘土層（標高192.47～192.77m）の炭化物（標高192.46m）で970 cal yrs BP(PLD-2925)と、地点1の試料に比べて古い値を示した。

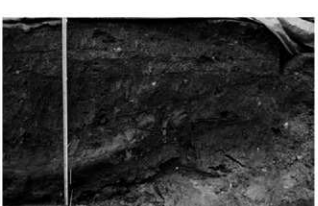


図27　地点1（NR01）の層序断面写真
東側より撮影，メジャーの長さは1m

図28　地点2の層序断面写真
西側より撮影，手ガリの長さは0.4m

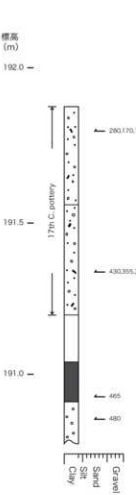


図 29　地点 1 における層序と放射性炭素年代値
矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層準を，矢印右側の数値は放射性炭素年代測定による暦年代較正値（cal yrs BP）を示す

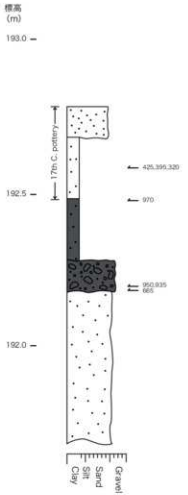


図 30　地点 2 における層序と放射性炭素年代値
矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層準を，矢印右側の数値は放射性炭素年代測定による暦年代較正値（cal yrs BP）を示す

表 15　地点 1 における放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	暦年代較正値 (1σ, BC/AD)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	1σ暦年代範囲 (BC/AD, probability)	Lab code No.(method)
190.86	細礫混じり粘土層	木片	340±30	-26.8	480	AD1520,1595,1620	505–460(93.1%)	AD1490-1525(52.8%) AD1555-1605(46.2%) AD1610-1630(21.0%)	PLD-2919(AMS)
190.93	黒褐色腐植質粘土層	木片	370±25	-26.8	465	AD1485	485–430(54.5%) 355–330(35.5%)	AD1470-1520(64.3%) AD1595-1620(35.7%)	PLD-2920(AMS)
191.34	礫～粗粒砂混じり粘土層	炭化物	340±25	-26.3	430,355,330	AD1520,1595,1620	395–350(47.5%) 455–425(31.7%) 340–320(20.8%)	AD1495-1525(31.8%) AD1580-1600(47.6%) AD1610-1630(20.6%)	PLD-2921(AMS)
191.80	礫～粗粒砂混じり粘土層	木片	185±30	-27.9	280,170,150,5 AD1670,1780,1800 1940,1945		210–165(50.3%) 285–270(17.9%) 160–145(17.4%) 15-5(14.4%)	AD1665-1680(18.0%) AD1740-1755(15.3%) AD1755-1785(34.3%) AD1790-1805(18.7%) AD1935-1945(13.6%)	PLD-2922(AMS)

表 16　地点 2 における放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	暦年代較正値 (1σ, BC/AD)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	1σ暦年代範囲 (BC/AD, probability)	Lab code No.(method)
192.17	中礫層	炭化物	710±30	-24.7	665	AD1285	670–650(100%)	AD1275-1300(98.1%) AD1375-1375(1.9%)	PLD-2923(AMS)
192.18	中礫層	炭化物	1040±30	-25.3	950,935	AD1000	960–930(100%)	AD885-1020(100%)	PLD-2924(AMS)
192.46	黒褐色植粗粒砂混じり腐植質粘土層	炭化物	1090±30	-26.4	970	AD980	995–960(60.4%) 1050–1030(38.5%)	AD900-920(36.5%) AD945-945(1.1%) AD955-995(62.4%)	PLD-2925(AMS)
192.57	植粗粒砂混じり粘土層	木片	320±30	-27.7	425,395,320	AD1525,1555,1630	430–355(82.9%) 330–310(17.1%)	AD1520-1595(82.6%) AD1620-1635(17.4%)	PLD-2926(AMS)

＜考察＞

流路跡（NR01）の埋積時期

瓶子窯跡で確認された層序について、地点1の遺構NR01を埋積する層序全体は粘土からなる細粒粒子が卓越した。層序の下部にあたる木片（標高190.86m）が480 cal yrs BP(PLD-2919）や標高190.93mの木片が465 cal yrs BP（PLD-2920）を示した。瓶子窯跡からは17世紀半ば～後葉の相対年代を示す考古遺物の出土が報告されており（青木編，2000; 武部，2004）、今回得られた数値年代は、出土する遺物から推定される値よりも180年ほど古い。この値は，流路跡である遺構NR01が少なくとも480年前以降から埋積が進行してきたことを示し、その後、標高191.20～191.88mにみられる17世紀の遺物を含む粘土層が堆積したことになる。

いっぽう、地点1近傍の地点2は、地点1から東へ約8m隔たっており、考古遺構NR01からは外れた位置にあたる。そのため、流路跡が形成されるよりも前の、考古学的な基盤層が保存されていると考えられる。地点2の層序の下部（標高191.77～192.27m）は中礫サイズの礫層からなり，地点1に比べて明らかに大きい粒子から構成されていた。また、標高192.17～192.27mには基質が黒褐色腐植質粘土と極粗粒砂により充填された中礫層から構成された。このような礫や砂・粘土粒子が混然一体となった堆積物は、堆積物と水とが一体となって流下する土石流として堆積したものである。土石流のような流動形態は浸食力が大きく、下方へ流下するのに伴って谷壁斜面や谷底を浸食し、周辺にあった礫や木片を巻き込んで流動する。この中礫層の基質から採取した黒褐色を呈する炭化物（標高192.17m）の数値年代は665 cal yrs BP(PLD-2923)であった。ところが、本試料とほぼ同じ層準（標高192.18m）の炭化物が950, 935 cal yrs BP(PLD-2924)、考古遺物を産する粘土層から採取した炭化物（標高192.46m）で970 cal yrs BP(PLD-2925)と、665 cal yrs BPよりも古い年代値をもつものがみられた。このように、下位層準よりも古い数値をもつ試料が混在する原因は、堆積物の流下中に二次的に古い年代値をもつ試料が混入した結果である。いずれにせよ、標高191.77～192.17mの花こう岩礫層の最上部に形成された地層境界付近の年代値がおよそ660年前の数値年代を示したことから、流路跡NR01の形成以前に，調査地点には粗粒な堆積物が上流部から供給されていたことを示すものである。また、二次的な混入が推定されるとはいえ、およそ900年前代の炭化物が地層中に含まれる事実は、木片等が炭化するような人為的な影響をその頃に被った可能性が示唆され興味深い。

謝辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボの山形秀樹氏にお世話になった。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の樋上　昇氏・武部真木氏には瓶子窯跡に関する考古学的情報を教えていただいた。図面のトレース作業は愛知県埋蔵文化財センター研究補助員の山口典子氏にお願いした。分析試料の整理・保管と原図の作成では整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

【文献】

青木　修編，2000, 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告　第22集　市内遺跡調査報告「「瓶子窯跡」」, 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター，126p.

武部真木，2004, 瓶子窯跡，平成15年度 愛知県埋蔵文化財センター「年報」，愛知県埋蔵文化財センター，16-17.

2．瓶子窯跡出土遺物の胎土分析

堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）

＜はじめに＞

瀬戸市瓶子窯跡は茶入の生産を行っていたとされる。この窯跡から出土した茶入には多種類の生地が確認された。肉眼による胎土の差が化学組成の違いを反映しているものかを解明するために、蛍光Ｘ線による化学分析を行った。

＜分析方法および分析装置＞

試料は瓶子窯跡出土の茶入試料および天目茶碗、祖母懐壺の16点である。詳細については表17に示す。なお胎土のタイプについての詳細な記載は（第４章）図21に従うものである。

分析試料の調整は、まず各試料の底部を中心に約２×３cmの小片に切り出し、測定面を#3000のカーボランダムを用いて研磨を実施した。測定箇所は鉱物などの含有物をさけた部分において、１試料につき２ケ所を設定した。分析装置は蛍光Ｘ線分析装置（エネルギー分散型、堀場製作所（株）製XGT-5000）。測定条件は管電圧30kV、測定時間100秒、照射径は100 μ m。検出器はRh。

＜分析結果＞

図31に各試料から得られたスペクトルを示す。いずれの試料からも、Al,Si,K,Ca,Ti,Mn,Feが確認され、これ以外の元素は確認されなかった。また、これらのスペクトル図より、FeおよびAlに差が確認された。

そこで、ファンダメンタル法による便宜的な化学組成値を算出し、比較を行った（表18）。この場合の測定値は、装置の分析精度や標準試料の問題から、一般に用いられている蛍光Ｘ線分析装置で得られた分析値とは直接比較検討はできない。

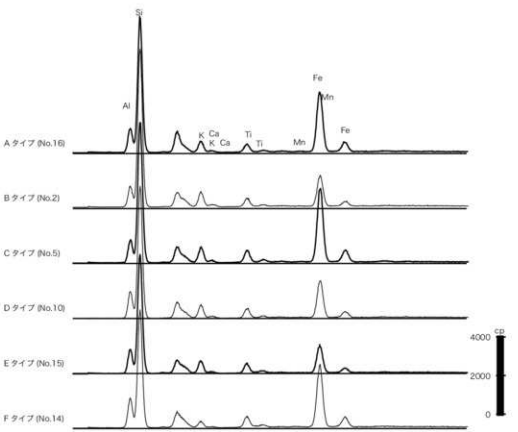


図31　茶入胎土のスペクトル

表 17　分析試料一覧

No.	胎土のタイプ	器形	備　考	グリッド	層位
No.01	B	胴衝/壺		VIID9f	トレンチB
No.02	B	胴衝/細	カンナ削り，回転削り	VIID9g	表土
No.03	A	丸壺	内外透明釉か	VIID9f	トレンチD
No.04	A	甑箪		VIID9g	表土
No.05	C	無胴衝	内外透明釉か	VIID9g	表土
No.06	C	無胴衝		VIID9g	表土
No.07	C	尻脆		VIID9g	表土
No.08	C	胴衝		VIID9g	崩落土
No.09	D	胴衝	内に同釉	VIID9g	表土
No.10	D	胴衝/綿腰		VIID9g	表土
No.11	D or E	胴衝/綿腰	内に同釉	VIID9g	表土
No.12	E	胴衝	黒色斑点，内に同釉	VIID9g	表土
No.13	E	胴衝	釉トチ付着	VIID9g	表土
No.14	F	尻脆	素焼	VIID9g	表土
No.15	E		天目茶碗類	VIID9g	ベルトC28層
No.16	A		祖母懐壺	中央	表土

表 18　化学組成値

	Al_2O_3	SiO_2	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	胎土のタイプ
No.01	18.55	77.43	1.73	0.07	0.86	0.02	1.35	B
No.02	13.25	82.71	2.04	0.13	0.73	0.01	1.13	B
No.03	19.84	75.21	1.89	0.08	0.87	0.02	2.11	A
No.04	20.33	75.14	1.81	0.06	0.79	0.02	1.88	A
No.05	17.48	77.63	1.69	0.03	0.84	0.01	2.32	C
No.06	19.19	77.08	1.54	0.05	0.68	0.02	1.45	C
No.07	20.00	75.67	1.73	0.03	0.74	0.01	1.84	C
No.08	18.89	77.22	1.43	0.11	0.77	0.01	1.59	C
No.09	14.20	82.99	1.13	0.05	0.81	0.01	0.83	D
No.10	23.19	72.91	1.79	0.09	0.76	0.02	1.25	D
No.11	14.37	83.06	1.02	0.23	0.46	0.06	0.84	DE
No.12	24.41	72.22	1.21	0.10	0.81	0.01	1.26	E
No.13	17.52	78.61	1.27	0.05	1.51	0.04	1.02	E
No.14	27.40	68.92	0.82	0.05	0.85	0.01	1.97	F
No.15	18.15	78.85	1.50	0.04	0.65	0.00	0.82	E
No.16	18.90	77.00	1.44	0.04	0.60	0.01	2.03	A

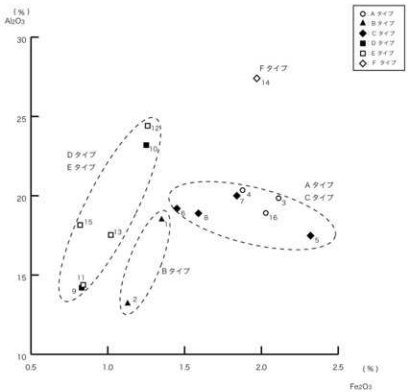


図 32　Fe_2O_3-Al_2O_3 図

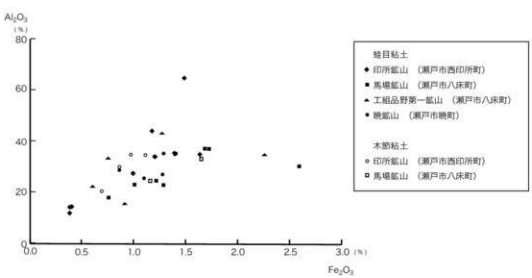


図 33　瀬戸市内の窯業原料の Al_2O_3-Fe_2O_3 図

しかし、今回の分析における同一条件下での結果の差異を明確に把握するには有効であると考えられる。ここで得られた数値をもとに Al_2O_3-Fe_2O_3 図を作したものが図 32 である。胎土のタイプに着目すると A および C タイプ、D および E タイプ、B タイプ、F タイプと 4 分することが可能と思われる。

＜考察＞

蛍光 X 線による化学分析の結果、胎土の質感の差と化学組成の間にある程度の相関関係があることが認められた。特に Al および Fe の含有量の違いによってそのことを把握することができた。

では、この Al と Fe の違いは何に由来するのであろうか。現在の瀬戸市内の窯業原料の分析値より作成した Al_2O_3-Fe_2O_3 図を示す（図 33）。この図よりは鉱山および粘土の種類によって、Al_2O_3-Fe_2O_3 の分布域が変化するとは想像しがたい。また今回の測定結果より、K_2O-CaO 図を作成したところ、胎土のタイプによるまとまりは見られなくなった（図 34）。

鉱物を多く含まない須恵器等の胎土分析は、これまで三辻（2000 ほか）らによる Rb/Sr の微量元素によるものが主流を占めている。これは、高温で焼成されたために粘土鉱物がアモルファスと化した焼成物に対しては、大変有効な分析である。元来、窯業原料の区分は化学組成値に加え，鉱物組成および粒度分布、酸化焼成物や還元焼成物、熱膨張率など多様な要素で行われている。今回行った分析では、分析装置の限界（Na および Mg の測定は、大気中の測定であることなどから不可能であった）から、主成分による胎土のタイプとの整合を測ったが，今後は微量成分による分析を行う必要があると思われる。ただし、今回得られた分析結果においても、胎土のタイプの差が化学組成の違いである可能性を示唆することができたことから、胎土の差を表す客観的なデータとして表現する手段となりうると思われる。

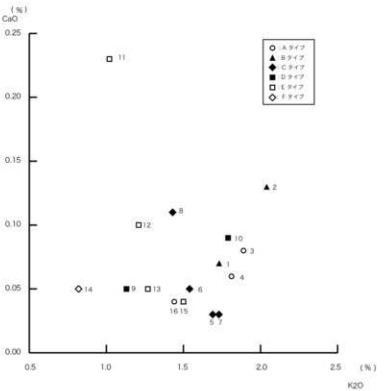


図 34　K_2O-CaO 図

第6章　まとめと考察

1.陶片の人名について

＜柳生兵助について＞

「兵助」は柳生家に代々伝えられる幼名のひとつであり、陶片の示す人物は柳生兵庫厳包（寛永二～元禄七、1625～1694年）である可能性が高い。柳生兵庫厳包は、尾張柳生の祖、柳生兵庫助利厳（如雲斎、天正七～慶安三、1579～1650年）の庶子として生まれる。初名は厳知、初め七郎兵衛、兵助、のち兵庫と称した。

尾張藩との関りは、父、利厳が尾張藩主徳川義直の時に兵法師範役として迎えられ、以来藩の御流儀と称されたことに遡る。利厳は慶安元年に小林[*1]に隠居し、その後京都に移り、慶安3年、72歳で歿す。厳包は寛永十九年（1642）に義直に召し出される。慶安3年（1650）亡父の隠居料の三百石を継ぎ、二代藩主徳川光友（藩主在任慶長十二～元禄六、1607～1693年）の時、相次ぐ加増により六百石を与えられるに至った。隠居後は浦連也を名乗り、小林の邸に住み、元禄七年70歳で歿す。墓は作らず、白林寺[*2]が菩提所とされた。

瓶子窯跡との関連で注目されるのは、江戸時代中期に成立した随筆『昔咄』（尾張藩士、近松茂矩著）にある記述である。

連也が大津町の屋敷内に庭を造ろうとすれば、門弟等が挙って竹木岩を贈ったため「なごや一番の仮山泉水なり」という有様となり、

「殊更物ずきも至極よく、見はらしハよし」「見事成る庭にて、瑞龍院様　泰心院様　御連枝様方も度々御成有りし。　泰心院様、おれも庭をすくが、連也が物ずきにハ不及と、御意ありしとぞ。又牡丹をすき、茶入をすきて、瀬戸にて大分やかせぬ。又鍔を物ずきて、古鉄及び山吉兵衛にすらせて、自分にしこみ、くさらかされし。」

とあり、瑞龍院（光友）と親しく交流しつつ、庭を造り、茶を嗜み、鍔をデザインするなど数寄者ぶりが窺われるエピソードの中に、「瀬戸（の窯）にて」「茶入」を制作したことが記されている。

また、大正9年成立の『をはりの花』[*3]のうち、陶工銘款の資料である「風の巻」に、「蓮也」の項が立てられている。

「蓮也ハ勤仕の暇に茶事を好ミ陶器を作るを娯楽と」し「其作自ら気格ありて上好なり」「蓮也ハ寛文年間に茶入一百を作り瀬戸に於て焼かしめたる事あり」

とあり、『昔咄』と若干異なる記述もみられる。報告者には史料の検証する力はないため、参考として提示するが、「蓮也」が作陶した伝承は比較的知られていたものかもしれない[*4]。

次に、これらの記述をもとにして、具体的な制作年代を探っていきたい。まず関連する陶片の人名には「柳生兵助」「柳生」「兵助」のほか「柳」「兵」など14点があり、さらに「柳生兵助」裏面と同じ平仮名「や」まで含めるとさらに増加する。同一人物を指すとすれば、最も数が多い。後に称したとされる「連也」あるいは「浦」を含む文字は検出されていないため、「柳生兵助」を用いた時期が手掛りになると考えられる。

『昔咄』記述の内容は、庭造りなどのエピソードに続き、趣味の牡丹、作陶、鍔の制作についてふれられており、隠居後の出来事と読み取ることができる。ただし、隠居という立場の性格からして、以降は活発な活動が控えられるとするならば、隠居以前にも藩士として仕えている間に、茶入の制作時期を求めることもできよう。「浦 連也」と名乗り始めた時期は判然としない[*5]が、寛文八年（1668）に上書して隠居を願い出た[*6]とあり、また小林の邸に居住した時期について「寛文年間」とするものがみられる。寛文八年より暫くして、少なくとも「柳生」を称することがなくなった可能性が考えられる。本氏柳生を名乗り、「兵助」の後にも「兵庫」「厳知」「厳包」の名が知られて

おり、「兵助」が長らくこの人物の通り名であった確証はないが、下限はこの辺り求められるのではないだろうか。

＜その他の尾張藩士＞

陶片には、尾張藩の家臣と思われる人物名がみられる。以下の履歴は、御目見以上の藩士の系譜を編纂した『士林泝洄』（延享元年（1744）松平君山撰）の記述を元にした。

下方太郎兵衛　（図版 85 1281）

下方貞名である可能性が高い。貞名は弥十郎、八郎右衛門ともいい、徳川光友の小姓として召し出され、慶安四年（1651）年に五十人頭として三百石を賜り、明暦四年（1658）に源次郎君（光友次男）の御傅となった。延宝元年(1673)に没す。

石川八郎兵衛　（図版 85 1278）

石川昭成である可能性がある。奥御番として召し出され、御供番、御目付、御鉄砲頭、御黒門頭を歴任し、万治二年（1659）に御用人、寛文五年（1665）に御側同心頭に就任した。延宝四年（1676）に致仕し、天和三年（1683）に没す。

田邊四郎□　（図版 87 1321）

田邊常之である可能性が高い。徳川義直の時代に召し出され、御目付、御鉄砲頭、御黒門頭などを務める。寛文元年(1661)に御国御用人となり、五百石を加増された。貞享四年（1687）に没す。

また、柳生兵助と以上３名の生没年をもとに、寛政七年（1795）より編纂が始まった尾張藩士の履歴集成である『藩士名寄』に人名を求めると、平岩弥五兵衛（図版 87 1322）、岡本傳左衛門（図版 85 1279）、池村三右衛門（図版 84 1258 ～ 1260）などが挙げられる。このうち平岩弥五兵衛は『士林泝洄』によれば平岩安武をさし、七歳で光友の扈従として召しだされ、奥御番、御馬廻を務めた人物である。

その他、生没年あるいは人物の関係から類推できるものがある。荒川孫四郎（図版 85 1261 ～ 1265）は荒川忠胤かもしれない。小姓として光友に召し出され、のち御馬廻になっている。小瀬（図版 91 1412）は小瀬忠次かもしれない。忠次は下方貞名の兄にあたり、小瀬伊織、新右衛門ともいわれた。義直の時小姓として召し出され、五十人頭、長囲炉裏頭を歴任し、万治二年（1685）には御用人、寛文十二年（1672）には大番頭をそれぞれ務めた。貞享二年（1685）に致仕、是安と号した。元禄二年（1689）歿す。

渡半（図版 90 1397, 図版 94 1490, 図版 100 1550）は陶片のⅠ類と粘土板Ⅱ類、さらにエブタにも記される名前であり、半十（図版 93 1468 ～ 1470）と組み合わせて考えると、渡辺半十郎の略称かもしれない。これは渡辺景綱をさし、新左衛門（1335, 新左 1337）とも称した。義直の時代に足軽頭、御船奉行を務める。慶安四年（1651）には御国奉行、寛文五年（1665）には御国御用人、寛文十一年（1671）には老中連判を命じられている。延宝三年（1675）御国御老中となる。延宝五年（1677）に没す。

以上、推定された主な人物の生没年を図 35 に示す。これによると陶片が作成された時期は、上限は寛永年間から下限は寛文～延宝の頃と推定される。ただし、柳生厳包の年齢と光友との関係からすれば、少なくとも上限は光友が藩主となった慶安三年以降に下るものと考えられる。

陶片の文字の訳読には、福岡猛志氏、曲田浩和氏、高部淑子氏、瀬戸口龍一氏（以上 日本福祉大学）、尾張藩士についての文献調査には、山本祐子氏、野場喜子氏（以上 名古屋市博物館）に御尽力いただき、多くの助言を得た。また、柳生延夫氏には柳生家に伝わる貴重な史料、陶磁器類の実見を快諾していただいた。

あわせて、ここに厚く御礼申し上げます。

（鵜飼雅弘・武部真木）

【註】

*1…前津小林村、現名古屋市中区小林町。邸跡はのちに

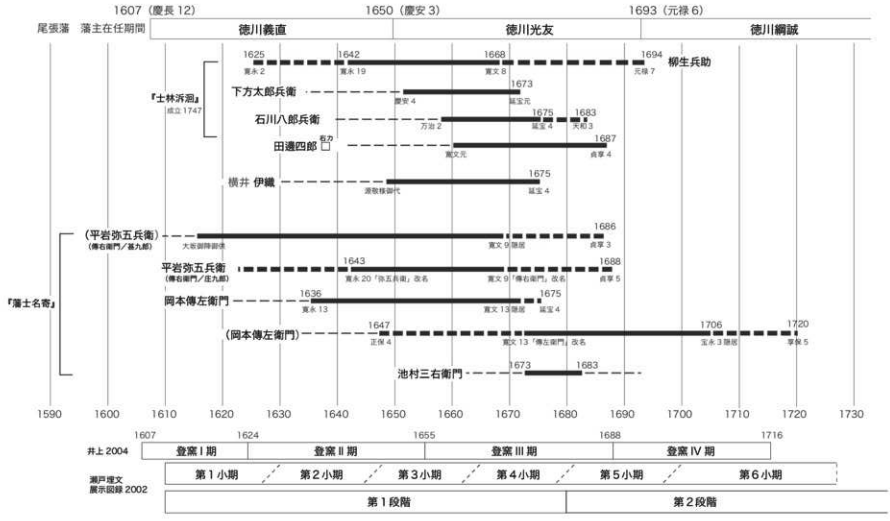


図 35　陶片人名より推定される尾張藩士

寺（清浄寺）となった。
*2…名古屋市中区矢場町。利厳が葬られて以来、尾張柳生家の菩提寺となる。
*3…幕末の尾張藩士で陶芸家、荊部陶痴の稿本を元に作られたという。昭和７年に陶器全集刊行会が複製刊行。ここでは「誧 蓮 也」の用字となっている。『陶器全集』第１巻　思文閣
*4…厳包よりのちの厳春（道機）も幼名は兵助と称し、作陶を行ったことが知られ、作品も残されている。生没年は寛保二年（1742）～文化五年（1808）であり、瓶子窯跡の操業期間とは大きく隔たる。ただ、柳生家の人物が作陶した伝承としては、これと混同された可能性も無視できない。
*5…貞享二年（1685）に剃髪して法体となり誧雍也と称した、とする説もある。岡本保和1983『尾張と三河の窯工』
*6…『名古屋市史』人物編二

２．瓶子窯跡の生産の状況

＜生産の内容＞

抽出したグリッドの範囲内（表１）の出土資料について、底部 1/2 以上の器種別個体数を表 19 に示す。

これらは第１号窯、第２号窯の両者の製品を含んでいる。しかも日常品、高級食器、注文品である茶陶が混在しており、それぞれ廃棄に至る基準が異なるため、数値は生産量をそのものを単純に反映していない。

擂鉢、銭甕は日常品器種であり、単純に使用不能の不良品のみが廃棄されることから、全体の10～17%という数値は大きく、この窯の主要な製品であったと考えられる。

碗類は全体の約３割を占めるが、この内の約半数が天目茶碗となっている。天目茶碗Ⅰ類・Ⅱ類は更に形式細分が可能であり、継続して大量生産された器種と考えられる。鉄釉を施す製品が主体となる瓶子窯跡では、灰釉碗の存在は少量ながら目立つ存在であり、これらは形態や高台形状に特徴的なものが多い。こちらは少量が作られた注文生産品であった可能性が高い。ただし、生産期間との関係は不明である。

皿類では量産品として灰釉・鉄釉輪禿皿があげられる。次いで鉄絵皿も一定量が認められる。鉄絵皿は、それぞれ繋がりが深いとされる上水野村穴田１・２号窯、下半田村かみた窯、尾呂窯で生産されている器種である。赤津村では量的な比較はできないものの、赤津Ｂ窯、窯元Ａ窯でわずかに認められるのみで、瀬戸村でも生産されていない。

茶入の個体数は擂鉢に匹敵する数値となっている。茶入資料としては極めて多くの量が焼成されたことを示している。ただし、この数値には素焼資料が含まれており、工程の各段階で大量に廃棄されたと考えられる。擂鉢など日常品の場合の歩留りより遥かに低く、「茶入」という器種の特性により完成品として持ち出された数は、多くなかったと推定される。

出土資料でみる限り、調理具、貯蔵具の日常品、高級食器の量産と注文品茶陶の少量生産という異なる生産体制の存在は明らかである。前者は、鉄絵皿の焼成、天目茶碗の量産など部分的に突出する特徴を除くとすれば、瀬戸窯編年第１段階～第２段階にかけての赤津村の一般的状況を示しているといえる。一方後者は、遺跡の今日までの評価の大部分を形成してきた特徴であろう。

＜生産技術＞

ここでは「素焼」の工程と「窯印」について取り上げることにする。

軟質焼成の資料は茶入、天目茶碗、銭甕、香炉、風炉、擂鉢に検出されているが、このうちの銭甕、香炉、擂鉢は数が少なく、焼成不良品と思われる。また、風炉（664）は素焼後に墨書（呉須か）で文字が書かれており、にわかに判断できない。以上を除くと、表 19 にみられるように大量の出土資料の存在から、茶入と天目茶碗について工程として素焼が行われたことが確実となった。

素焼茶入については形態に特徴があり、胎土Ａ・Ｂ・Ｃ類にみられる小型、薄手のタイプは少なく、Ｄ・Ｅ類の大型の肩衝形が多い。薄手の素焼製品は残存率が低くなるため、検出され難いとも考えられ

表 19　瓶子窯跡出土遺物個体数

	器種	個数	%	個数（%）	合計個数	%	備考
碗類	灰釉平碗（貼付高台）	35.0	0.89				
	灰釉丸碗	1.0	0.03				
	灰釉腰高碗（渦巻高台）	6.0	0.15	52（1.32）			
	素焼　腰高碗（渦巻高台）	1.0	0.03				
	灰釉碗	9.0	0.23				
	天目茶碗 I類	446.0	11.32				
	素焼天目茶碗 I類	66.0	1.68	670（17.01）			
	天目茶碗 II類	72.0	1.83		1238.0	31.42	
	素焼天目茶碗 II類	86.0	2.18				
	磁灰碗	41.0	1.04				
	丸碗	30.0	0.76				
	筒形碗	3.0	0.08				
	碗	413.0	10.48				
	素焼　碗	21.0	0.53				
	小杯	8.0	0.20				
皿類	鉄絵皿	87.0	2.21				
	反り皿	46.0	1.17				
	灰釉輪禿皿	279.0	7.08	328（8.32）			
	鉄釉輪禿皿	49.0	1.24				
	折縁皿	3.0	0.08				
	菊皿	1.0	0.03				
	輪花皿	3.0	0.08		533.0	13.53	
	型打皿	2.0	0.05				
	灯明皿	14.0	0.36				
	小皿	4.0	0.10				
	無釉皿	5.0	0.13				窯道具か
	中皿	4.0	0.10				
	皿	36.0	0.91				
鉢・盤類	大皿・大鉢	2.0	0.05				
	折縁鉢	1.0	0.03				
	鉢	11.0	0.28				
	盤	3.0	0.08				
	擂鉢	701.0	17.79		785.0	19.92	
	擂鉢櫛	49.0	1.24				
	鉢蓋	1.0	0.03				
	片口	12.0	0.30				
	蓋物	3.0	0.08				
	餐皿	2.0	0.05				
瓶・壺・甕類	有耳壺	14.0	0.36				
	茶壺	2.0	0.05				
	壺	2.0	0.05				
	小壺	12.0	0.30				
	茶入（粗）	301.0	7.64				
	茶入（緻密）	270.0	6.85	722（18.32）			
	茶疣　茶入	151.0	3.83		1267.0	32.16	
	徳利・花瓶	84.0	2.13				
	瓶	10.0	0.25				小瓶など
	涙瓶	7.0	0.18				
	水注	1.0	0.03				
	銚釐	411.0	10.43				
	茶疣　銚釐	1.0	0.03				全体でこの 1 点のみ
	甑	1.0	0.03				
その他	茶釜	1.0	0.03				使用
	鍋か釜	1.0	0.03				使用
	筒形香炉	5.0	0.13				
	袴腰形香炉	9.0	0.23	23（0.58）			
	香炉	9.0	0.23		89.0	2.26	
	建水	1.0	0.03				
	蓋	45.0	1.14				
	仏飯具	2.0	0.05				
	乳棒	1.0	0.03				
	不明	15.0	0.38				
土師質	土師質皿	24.0	0.61				
	土師質鍋	2.0	0.05		28.0	0.71	使用
	土師質焙烙	2.0	0.05				使用
合　計		3940.0	100.05		3940.0	100	

* 底部 1/2 以上残存する個体をカウントを行った。

** カウントは表 1 に示す 12 グリッドの範囲の出土資料について行った。

*** 匣鉢など窯道具類は選択して採集したため、カウントの対象としていない。

るが、底部片を抽出してみてもその傾向は変わらない。天目茶碗の底部片でみると、比率にして圧倒的に内反高台のⅡ類が多い。これは天目茶碗Ⅰ類では、一部について素焼が行われた事を示している。したがって、素焼は大型の肩衝形茶入とⅡ類を主とした天目茶碗、一部の天目茶碗Ⅰ類に限定される工程であったと考えられる。

同時期の素焼の技術は、瀬戸・美濃地域では現在のところ確認されていない。(財)瀬戸市埋蔵文化財センターの調査において、第1号窯の燃焼室より素焼茶入が検出されているが、このうち8点(no.12～19、図8)は採集品や今回の物原資料にもみられない形状であり、他の窯から持ち込まれた可能性が高い。瓶子窯跡廃窯以降に「素焼」の技法を取り入れ、茶入を焼成した窯が存在したことになろう。

次に、瓶子窯跡でみられた特殊な窯道具類につ

表20　瓶子窯跡出土窯道具と瀬戸美濃諸窯での分布状況

	遺跡名	匣鉢IIB類	匣鉢III類	足付き板トチB類	足付き輪トチ	筒トチ	文字資料	備　考
久尻村	元屋敷窯						「慶長」乳棒、「慶長十二」匣鉢採集品	美濃連房I期
上水野村	穴田1・2号窯跡	○					「寛（永力）拾五□（年力）」鉄釉筆書エブタ、匣鉢、匣蓋、「水野久之丞」墨書敷瓦、「里右衛門」刻書敷瓦	瀬戸第2小期～第3小期
笠原村	西窯				○	○	陶片	美濃連房I期～
笠原村	稲荷窯					○		美濃連房I期～
笠原村	窯下窯					○*		美濃連房I期～
笠原村	窯林窯					○		美濃連房I期～
笠原村	念仏窯				○			美濃連房I期～
唐津村	瓶子窯跡	○	○	○	○	○	鉄釉筆書陶片、匣鉢・刻書陶片	瀬戸第3小期～第5小期
久尻村	窯ヶ根窯			？	○		「慶長十九年」匣鉢、「元和」エブタ	美濃連房I～III期
水上村	田之尻窯	○			○		「貞享五年」刻書シッタ、「元□（和力）」栓	美濃連房III期
大川村	大川東3号窯				○			美濃連房III期
久尻村	八幡窯	○			○		刻書エブタ、焼台**	美濃連房II～III期
小名田村	窯下3,6,7号窯				○	○		美濃連房II～III期
（関市）	十六所窯				○			瀬戸第4小期～5小期
下半田川村	尾呂1				○	○		瀬戸第4小期～7小期
唐津村	西窯A窯跡				○		「おく乃入　ー□□□」刻書瓦片	瀬戸第5小期～第8小期
唐津村	小長曽窯	○						瀬戸第6小期
唐津村	城ヶ根窯	○	○					瀬戸第6小期
多治見村	平野西窯				○	○		美濃連房III期
下半田川村	下半田川A窯跡						「元文三年　□□　三太郎」刻書エブタ	瀬戸第7小期～第8小期
下半田川村	かみた1・2号窯跡				○	○	刻書筒トチ、エブタ、棚板、ツク	第7小期～11小期
瀬戸村	東本町A窯跡						刻書エブタ、「天保三歳」銘シッタ	瀬戸第7小期～第11小期
瀬戸村	経塚山西窯跡						「佐七」刻書シッタ、「利吉」刻書鉢、「寛政」銘匣鉢	瀬戸第8小期～第10小期
瀬戸村	古瀬戸小西窯						色見「与右衛門」刻書陶片、ヘダテ、筆書棚板	瀬戸第8小期～第11小期
	*□線を山形にカット	**図36を参照						

いて概観しておく。

まず、茶入専用の道具と考えられるものには匣鉢IIB類、匣鉢III類、足付き板トチB類が挙げられる。瀬戸美濃地域での使用状況をみると（表20）、15世紀代に操業した窯窯を17世紀にな再び利用し、茶入を焼成した小長曽窯（赤津村）では、匣鉢IIIB類に類似する「切匣鉢」が使用されている。瓶子窯跡資料と異なり、「火口」[*1]は体部を口縁部からV字状にカットするものである。城ヶ根窯（赤津村）資料は瓶子窯跡と同様の窯状となるタイプであり、ここでは匣鉢III類も検出されている。これらは瀬戸窯編年第6小期の資料とされている。その他に穴田1号窯（上水野村、第2～第3小期）、八幡窯(久尻村、美濃連房II～III期)、田ノ尻窯（水上村、美濃連房II期）で確認されており、いずれも焼成器種には茶入が含まれている。

足付き板トチB類の使用は、現在のところ類例がなく、瓶子窯跡のみである。意図的に傾斜を作ることは他の道具でも可能であるが、茶入底部まで焔を通す効果が求められたのかもしれない（写真図版40　837,903）。

窯印の記号や年号など文字を記す紀銘資料のうち、道具に人名を刻む、あるいは筆書きする資料は瓶子窯跡の操業期間とも重なる八幡窯で確認されている（図36）。資料はエブタ、焼台にヘラ描きするもので、「喜多郎」「関左衛門□」「彦右□」と記されている。また、穴田1・2号窯では明確な人名ではないが小判形のエブタ表裏や平底匣鉢内面に錆釉で筆書きするもののほか、製品敷瓦に「里右衛門」と刻むもの、焼成後「水野久之丞」と墨書したものが確認されている。

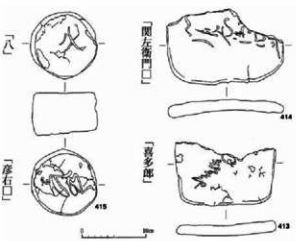


図36　刻書人名のある窯道具（土岐市八幡窯）

墨書を除き、これらは陶器製作の現場で作られたもので、人名は陶工（工房を含む）の可能性が高いと思われる。しかし、焼成室（房）以下の単位で製品を区別するための目印には、瓶子窯跡で多数検出されている陶片資料III類のような記号で充分に機能するはずである。敢て「人名」を記すという行為には、特に留意する必要があると思われる。

瀬戸窯編年の第1段階の窯道具類の詳細は不明であるが、瓶子窯跡と同時期以降にみられる技法として、素焼の工程、匣鉢III類の使用がある。また、瓶子窯跡に先行する可能性があるものとして、「切り匣鉢」の使用と制作現場での窯道具（製品）への人名の記銘行為（穴田窯）があげられる。近世初頭に陶工が招聘された美濃、特に中馬街道に面した東部地域の諸窯との強い繋がりが指摘されているが、窯道具類でみる限り、美濃東部地域に限定した系譜関係は不明瞭である。

＜茶陶の生産体制について＞

瓶子窯跡での「茶入」生産への比重は高く、先に挙げた素焼の工程の他にも数々の工夫がみられる。茶入の制作には、整形や焼成、風合などに適した胎土が求められ、ある基準で選択されている（第5章2）。それは、形態、あるいは素焼工程の有無や窯詰の方法など制作技法の違いにも影響したことがうかがわれる。

まず、窯詰の方法には複数のタイプが想定でき（図22）、茶入専用に考案された匣鉢III類もさらに3タイプに細分が可能であった（図23）。茶入生産に限定される多様な窯道具の存在からは、制作期間にある程度の時間幅が想定される。

今回検出された人名のある陶片、「付け札」資料は、匣鉢III類の製品の隙間に挟むにはやや大き過ぎ、製品と溶着する危険性が高い。直接証明

する資料はないものの、皿鉢Ⅱ類とセットで使用された可能性が最も高いと考えられる。付け札を使用した注文生産の形態は、限定された一部分であり、それは時間的にも限定された一時期であった可能性が高い[*2]。

次に、少量生産品として鉄釉以外の碗類を取りあげておきたい。このうち平碗と腰高碗としたものは、同様のものが第1号窯より出土している。丸碗も含めてこれらの碗類は鉄釉製品である天目茶碗、丸碗、端反碗より、口径も大きく器高も高い。この腰高碗は、高台内を削り込み兜巾状につくる渦巻高台であるもの（323～326,330）が多く、高台の際を削込むため断面では外側に稜を形成するもの（325,326,330）がある。以上の特徴は体部の均整とあわせて、竹節高台をもつ高麗茶碗を意識したものかと推定される（図37）。平碗の器形は大窯段階にも求められるが、ここでは碗類の中で唯一貼付高台で作られている。腰高碗と平碗、一部の丸碗については同形を複数個確認しているが、他に割高台のもの（608,609）や、口縁部を花弁状にカットするもの（607）など、特殊な形状のものはほぼすべて灰釉系碗に認められる。これらの釉薬の発色は多様であり、正確には灰釉には括れない不透明なものも多い。鉄釉製品として主に伝統的な茶陶を作りつつ、こちらは当時流行した茶陶の形態にモデルを求めた、ある意味実験的な一面をもつグループと位置づけることができよう。

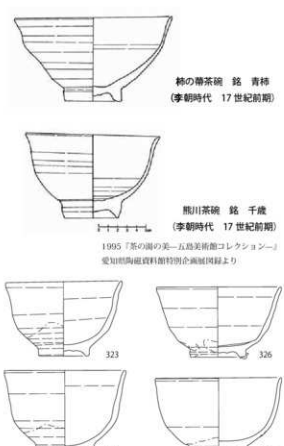


図37　高麗茶碗と瓶子窯跡腰高碗　S=1/4

＜瓶子窯跡の役割＞

近世初頭の尾張藩が主導した茶陶生産の環境について、整理しておきたい。

慶長十五年（1610）初代藩主義直により、濃州郷ノ木村から赤津へ招聘され、のち御窯屋と称される利右衛門（唐三郎）、仁兵衛、太兵衛の三家は、藩の御用を勤め数々の特権が認められた。そして御庭焼への出仕も義務づけられていた。

近世の窯業地の特殊な生産形態について、御用窯、藩窯、御留（止）焼、御庭焼などの名称があるが、尾張藩御庭焼に関連する論考の中で仲野泰裕氏は、藩の直接経営により高級贈答品など御用品を焼成した窯を「藩窯」、一層趣味性が高く好事的で、茶器などを場内や邸内に小規模な窯を用いて焼いたのが「御庭焼」と解釈でき、御用の主体者の範囲は藩のほか幕府や宮中など幅広く想定されるため、武家、宮家を含めた包括的な名称として「御用窯」を用いるべき、としている[*3]。

名古屋城御深井丸に築かれた御深井焼は、初代藩主義直の代、寛永年中（1624～1644年）に創始されたとする説が有力である。稼働は断続的であったようで、17世紀では寛永八年（1631）、正保元年（1644）のほかは直接的な記録は知られていない。仲野氏は、文献等も含め江戸後期までの資料からその内容を三段階に分けて捉えている。第1段階は「大窯の技術を踏襲した」「茶入を中心とした趣味的な性格の強い」窯であり、第2段階は「好みに沿った写し物の制作」を役割の

一つに含み、第３段階は「伝世の名器の写し作品の制作が盛んとなる」時期となり、初期の御庭焼的なものから、江戸後期には御用窯的性格が強く認められる状況へと変化する、とされている[*4]。

初期にも含まれる段階、瑞龍院（光友）御代には茶入に適した陶土「祖母懐土」が「御留（止）土」とされており、明確な規制が加えられている。また、鉄釉から灰を中心とする釉薬へ移行した第２段階には、銅器を写した光友銘大花瓶の伝世品が知られているが、名前のみである「光友」印銘は「臣下の者が呼び捨てにはできないので、本人が直接かかわる制作でなければ考えられない表記」であると指摘されている[*5]。そして「写し物」の制作は、江戸後期に藩士や御用達町人らへの下賜品としてさらに増加して「深井製」「賞賜」印が施された製品が焼かれるようになるが、すでに寛文年間（1661 ～ 1673）にも、この動きが認められるという[*6]。

横須賀御殿（愛知県東海市）は二代藩主徳川光友の潮湯治のために造営され、寛文６（1666）年に竣工した。伝世資料は知られていないものの、窯の存在は絵図や記録の記述に認められ、寛文６年から元禄３年（1690）の内、国元で過ごした13年間に横須賀御殿への御渡は29回に及んでいる[*7]。鳥帽子遺跡の発掘調査によって窯道具類、肩衝茶入、香炉、碗類などの陶片が得られ、やきものを好んだ光友が御庭焼を営ませた状況の一端が窺われるようになった[*8]。なお、色見として報告されている素焼陶片（計５点）は文字が刻書されており（図38）、明確に人名と判断できないものの、瓶子窯跡文字陶片資料のⅡ類に酷似し、同様の性格のものではないかと考えている。

戸（外）山焼は、新宿区戸山町にあった尾張藩下屋敷において、光友が延宝元年（1673）頃焼かせた御庭焼である。初期には赤津の御窯屋が江戸表にて御用を勤め、茶陶を制作した。

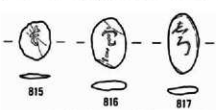


図 38　刻書陶片 S=1/3（烏帽子遺跡）

尾張藩に関連して、江戸時代前期には以上のような形態の窯が存在していた。瓶子窯跡について、赤津の御窯屋と直接結びつく資料は得られていない。しかし、諸処の状況により、茶人の制作が極めて独占的であったことは明らかである。

焼成品の性格から区分するならば、茶陶のうち天目茶碗や鉄釉碗類・皿類は藩御用の量産品、灰釉系の碗のほか茶入や建水・水指などの茶陶は注文品と推定される。そして一部の茶入はさらに趣味性の強い御庭焼的な製品であった可能性が考えられる。生産総量では、やはり擂鉢や銭褒などの日常品が主体であるが、部分的に（一時的に）、生産性の低い質的な完成度を求める茶陶の生産が行われたとみることができよう。

瓶子窯跡では一部の尾張藩士が茶陶の制作に関ったことが明らかとなった。少なくとも 17 世紀代に、茶陶生産に（職務以外で）藩士クラスが関る事例としては古いものと思われる。どのような立場が注文者と成り得ることができたのか、その他様々な問題点を含め今後の課題となろう。

（武部真木）

【註】

*1…「森田久右衛門江戸日記」「一茶入二火口付申とてハさやの内へ茶入壱つ置火たき申方さやきりかき置申由」ただし茶入１点を置くとすれば、この記述の「さや」は匣鉢Ⅲ類を指すものであろうか。

*2…具体的な資料との対応関係は、全く推測の域を出ないが、次のような状況を想定している。形態に独自性が強くみられた（胎土）D・E 類の茶入が「付け札」の注文者に関るものであり、「素焼」の工程を経て施釉され、そのあと「付け札」を用いて匣鉢Ⅱ類で本焼が行われた。

*3…仲野泰裕 1995「尾張焼を考える」（上）（下）『談交』49-5,6

*4…仲野泰裕 1993「尾張藩の御庭焼と御窯屋」愛知県陶磁資料館研究紀要 12

*5…註４に同じ

*6…仲野泰裕 1998「尾張藩御庭焼と御小納戸役」楢崎彰一先生古希記念論文集　真陽社
*7…註 4 に同じ
*8…小澤一弘「6　近世（1）横須賀御殿窯」1996『烏帽子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 63 集

【参考文献】
1980『名古屋市史』人物編二
1998『瀬戸市史　陶磁史篇』六
2002『江戸時代の瀬戸窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
2003『江戸時代の美濃窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
丸山和雄釈読 1978「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁』第 5 号　東洋陶磁学会
井上喜久男 1998「瓶子窯跡に見る瀬戸茶入」楢崎彰一先生古希記念論文集　真陽社
井上喜久男 2000「瀬戸茶入と唐物茶入」『茶の美術　茶道学体系五』淡交社
井上喜久男 2002「名物瀬戸茶入の考古学的再検討」『東洋陶磁史　その研究の現在』東洋陶磁学会
井上喜久男 2004「瀬戸茶入の制作年代」野村美術館研究紀要 13
武部真木 2005「資料紹介　瓶子窯跡出土の文字陶片」研究紀要 6　(財)教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 2005「近世の瀬戸・美濃窯—窯構造・窯道具の分類とその変遷—」『窯構造・窯道具からみた窯業』関西陶磁史研究会資料
佐藤　隆 2006「京焼系技術の源流をさぐる—周辺地域の窯構造・窯道具を中心に—」『京焼の成立と展開—押小路、粟田口、御室—』関西陶磁史研究会資料
服部　郁 1995「城ヶ根窯採集の近世陶器」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 XII』
仲野泰裕 2000「御用窯と御庭窯」『茶の美術　茶道学体系五』淡交社
1995『茶の湯の美—五島美術館コレクション—』愛知県陶磁資料館
2005『茶の湯　名碗』徳川美術館・五島美術館
青木　修 2000『瓶子窯跡』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
河合君近 2002『国指定遺跡　小長曽窯』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
加藤真司他 2000『八幡古窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会

これまでの調査成果より、以下のように整理することができる。

1. 生産内容と操業時期

・擂鉢を中心とした調理具・貯蔵具など日常品を量産する一方で、天目茶碗、茶入を主体とした茶陶の少量・注文生産が同地点で行われていた。

・量産品には、瀬戸窯編年第３小期前半～第５小期後半までの形式に比定される製品が含まれ、２基の窯の操業期間は、17 世紀第２四半期～ 17 世紀後半と考えられる。

・茶陶（茶入）の制作には、注文主として尾張藩士が関ったことが明らかとなり、その時期は 17 世紀第３四半期を中心とした時期が想定される。

・器種構成をはじめ窯道具からも、日常品器種の量産と茶陶の注文生産という異なる生産形態、二面性が窺われる。これが構造の異なる２基の窯体の存在と大きく関連し、また生産期間にも差異があったことを予想させる。

2. 茶陶の注文生産

・少量生産された茶陶（一部の碗形態や水指類、茶入）には形態と釉調に多様なものがみられ、多岐にわたる個別の注文に対応していたとみられる。

・尾張藩では、一部の藩士が注文生産を行うことができる立場にあり、注文者は制作の現場に深く関係する形で指示を行っていた可能性がある。

3. 瓶子窯跡の位置づけ

・陶工が招聘されたとされる美濃東部地域の中馬街道沿いの諸窯とは器種構成等から強い繋がりが指摘されてきたが、一方で瀬戸・美濃両地域内にない「素焼」の工程が取り入れられるなど、技術交流において独自のネットワークを形成していたと考えられる。

・日常品器種の生産という面では、赤津村の他の窯と同様であるが、「瀬戸茶入」生産に特化し、この器種としては異例ともいえる量産を行うなど、他にはみられない特別な地位にあったと考えられる。

・瓶子窯跡の茶陶の注文生産部門は極めて独占的で、何らかの規制が存在したことは明らかである。部分的に御用窯として機能し、御用の具体的内容は、藩士による茶入注文制作を含むものであった。

登録遺物一覧表

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径(脚・上部)	器高(厚み)	底径(横・下部)	口/12(上部)	底/12(下部)	備考
1	VIID11b	第6層no.71	素焼	天目茶碗	IA	13.3	8.4	5.1	1	12	
2	VIID11b	第6層	素焼	天目茶碗	IA	12.6	7.8	4.5	4	12	
3	VIID11b	第6層	素焼	天目茶碗	IA	12.2	7.85	4.6	10	12	
4	VIID11b	第6層	鉄	天目茶碗	IB	12.1	7.4	4.9	12	12	
5	VIID11b	第6層	鉄	天目茶碗	IA	11.4	7.8	3.9	7	12	
6	VIID11b	第6層no.70	鉄	天目茶碗	IB	11.8	7.75	4.5	10	12	
7	VIID10c	第4層no.171	鉄	天目茶碗	IB	11.2	7.3	4.3	9	12	
8	VIID12b	第6層no.2	鉄	天目茶碗	IA	12	7.5	4.4	9	12	
9	VIID10h	第6層	鉄	天目茶碗	IA	11.6	8.1	4.3	10	12	
10	VIID10b	第4層no.118	鉄	天目茶碗	IA	11.5	8.2	4.6	6	12	
11	VIID11b	第6層	鉄	天目茶碗	IA	12	7.6	4.05	6	12	
12	VIID11b	第6層	鉄	天目茶碗	IB	11.6	6.8	4.7	12	12	
13	VIID10c	第4層no.173	鉄	天目茶碗	IB	11.35	7.5	4.5	7	8	
14	VIID11b	第6層	鉄	天目茶碗	IB	11.4	7.5	4.7	11	12	
15	VIID12c	第6層no.279	鉄	天目茶碗	IA	11.1	8.1	4.6	9	10	
16	VIID12b	第6層no.29	鉄	天目茶碗	IB	11.7	7.2	4.3	9	12	
17	VIID10c	第4層no.174	鉄	天目茶碗	IC	11.6	7.2	4.6	3	12	
18	VIID10c	第4層no.175	鉄	天目茶碗	IB	11.7	7.1	4.7	5	12	
19	VIID11a	第4層no.6	鉄	天目茶碗	IB	11.8	7.3	4.3	12	12	
20	VIID12a	第6層no.246	鉄	天目茶碗	IB	11.35	7.4	5	6	7	
21	VIID9e	第6層	鉄	天目茶碗	IB	10.7	7.35	4.6	10	12	
22	VIID12b	第6層no.277	鉄	天目茶碗	IB	11.2	7.3	4.4	10	12	
23	VIID12b	第6層no.280	鉄	天目茶碗	IB	11.7	7.15	4.7	11	12	
24	VIID12b	第6層no.310	鉄	天目茶碗	IB	11.6	7.4	4.4	12	12	
25	VIID12b	第6層no. 4	鉄	天目茶碗	IB	11.2	7.1	4.7	9	12	
26	VIID12c	第6層no.183	鉄	天目茶碗	IC	10.8	7.3	4.6	5	8	
27	VIID12b	第6層no.53	鉄	天目茶碗	IC	11.1	7.2	4.1	6	12	
28	VIID10b	第4層no.128	鉄	天目茶碗	IC	11.1	6.7	3.7	9	10	輪トチ付着
29	VIID10d	第4層no.344	鉄	天目茶碗	IC	11.1	7.1	4	10	12	
30	VIID11c	第6層no.83	鉄	天目茶碗	IC	11.2	6.4	4.3	11	12	
31	VIID10b	第4層no.139	鉄	天目茶碗	IC	11.05	7	4.8	10	10	
32	VIID10c	第4層no.177	鉄	天目茶碗	IC	11.3	6.6	4.3	5	12	
33	VIID11c	第6層no.97	鉄	天目茶碗	IC	11.1	6.9	4.8	4	12	
34	VIID10g	第4層no.410	鉄	天目茶碗	ID	11	6.95	4.2	9	12	
35	VIID12b	第6層no.269	鉄	天目茶碗	ID	11.3	7.5	4.3	3	12	
36	VIID11c	第4層no.447	鉄	天目茶碗	ID	11.1	7.1	4.3	6	12	
37	VIID12c	第6層no.90	鉄	天目茶碗	ID	10.5	6.2	4.2	2	12	
38	VIID11c	第6層no.189	鉄	天目茶碗	ID	11	6.8	4.5	11	12	
39	VIID11c,d	第4層no.107	鉄	天目茶碗	ID	11	6.5	4.3	7	12	
40	VIID12c	第6層no.93	鉄	天目茶碗	ID	10.6	6.35	4.5	6	12	
41	VIID11e	第4層no.348	鉄	天目茶碗	ID	10.1	6.8	4.2	5	12	
42	VIID12b	第6層no.303	鉄	筒形碗		11.2	7.5	5.1	5	12	
43	VIID11a	第4層	鉄	筒形碗		8.4	*5.5	-	4	-	
44	VIID11b	第6層	灰	小杯		8.4	5.45	3.9	1	12	
45	VIID12c	第6層	鉄	蓋物		6.2	4.6	4.6	4	4	
46	VIID12c	第6層	鉄	蓋物		9.5	5.1	6.3	3	10	
47	VIID12c	第6層	灰	平碗		13.6	7.2	4	2	6	貼付高台
48	VIID10b	第4層	灰	平碗		15.7	7.4	5.5	7	-	貼付高台
49	VIID9d,9f,11e,12a	第4層,青灰色シルト層,斜面下層	灰	丸碗		14.0	6.9	5.8	2	12	腰部手持ちケズリ、細釉
50	VIIV10b	第4層no.207	鉄	丸碗		12.8	7.7	5.7	3	12	
51	VIID12b	第4層	灰	丸碗		12.7	7.5	6.5	5	6	
52	VIID11c	第4層	長石	丸碗（線込み）		10.9	7.7	6	3	12	
53	VIID11e	第4層	長石・鉄	掛分碗		10.1	8.0	5	-	12	
54	VIID12b	第4層	鉄	碗反碗	A	11.5	6.7	4.8	4	12	スス付着
55	VIID11c	第6層	鉄	浅碗		11.75	5.3	4.4	4	12	
56	VIID12b	青灰色砂質土層	灰	浅碗		12.5	5.4	4.7	12	12	
57	VIID11a	第4層no.109	鉄	碗反碗	B	11.3	8.3	4.5	11	12	
58	VIID11a	第4層no.108	鉄	碗反碗	B	10.2	6.7	4		11	
59	VIID12b	第4層	鉄	碗反碗	B	10.8	7.3	4.4	8	12	
60	VIID12b	第4層	鉄	碗反碗	C	11.1	7.1	4.2	9	12	
61	VIID10b	第4層no.204		碗反碗	C	11.1	7	4.6	9	12	
62	VIID12b	第6層no.298	鉄	碗反碗	C	10.3	6.9	4.4	9	12	
63	VIID12b	第6層	鉄	碗反碗	C	11.3	6.9	4.3	8	11	
64	VIID11c	ベルト目第4層no.448	鉄	碗反碗	B	11.7	7.2	4.4	5	12	
65	VIID10a	第4層no.112	鉄	碗反碗	B	11.3	7	4.4	9	12	
66	VIID10b	第4層no.202	鉄	碗反碗	C	11.6	6.8	4.7	2	12	
67	VIID11c	第4層no.235	鉄	丸碗	B	10.1	7	3.7	4	11	
68	VIID12b	第6層no.262	鉄	丸碗	B	9.9	7.6	4	5	12	
69	VIID10b	第4層no.146	鉄	丸碗	B	10.3	7.25	4.3	2	3	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
70	VIID12b	第6層no.270	鉄	天目茶碗	B	10.85	7.15	4	11	8	
71	VIID12b	第6層no.288	鉄	丸碗	A	11	7.9	4.9	10	12	
72	VIID9g	第4層	鉄	天目茶碗	IIB	14.2	7.4	4.9	6	12	
73	VIID9g	第4層	黒焼	天目茶碗	IID	18.6	*6.4	-	5	-	
74	VIID9e	第6層	鉄	天目茶碗	IIB	13.6	7.1	5.3	4	12	高台付近請釉
75	VIID11a	ベルトA第6層	鉄	天目茶碗	IIB	12.8	*5.9	-	4	-	高台付近請釉
76	VIID12b	第4層no.401	鉄	天目茶碗	IIC	12	5.5	3.9	5	12	
77	VIID12b	第6層		天目茶碗	IIA	12	7.8	4.3	3	12	高台付近請釉
78	VIID9h	第６層	鉄	天目茶碗	IIC	12.1	6.6	4.2	9	6	高台付近請釉
79	VIID11e	第4層	鉄	天目茶碗	II	12.8	6.6	4.4	1	12	高台厚減か
80	VIID11b	第4層	鉄	小天目		9.4	5.6	3.4	7	12	
81	VIID12b	第6層	鉄	小天目		9.6	6.2	3.8	5	12	
82	VIID9d	第4層no.226	鉄	小天目		9.5	5.6	3.8	11	12	
83	VIID9e	第6層	鉄	小天目		10.1	5.5	4	6	12	
84	VIID10g	第6層	鉄	小天目		9.9	5.5	4.2	6	12	
85	VIID10c	第6層	鉄	小天目		9.6	5.7	4	6	6	
86	VIID12b	第6層	鉄	小天目		9.9	5.6	3.6	-	12	
87	VIID9e	第6層	灰	反り皿	B	14.4	2.9	8.2	4	2	口縁部タール状付着物
88	VIID11b	第6層	灰	反り皿	A	13	6.6	3	5	5	
89	VIID12b	第6層no.10	灰	反り皿	B	14.2	3.35	8.4	10	12	
90	VIID10b	第4層	灰	反り皿	B	12.8	3.5	7.1	5	6	スス付着
91	VIID10c	第4層no.172	灰	反り皿	B	13.6	2.95	7.3	9	12	
92	VIID11b	第6層	灰	反り皿	C	13.2	3.3	7.3	8	12	
93	VIID11b	第6層	灰	反り皿	C	13.9	2.5	7.6	5	12	
94	VIID11c	第6層no.182	灰	反り皿	C	13.9	2.95	7.2	7	12	
95	VIID12c	第4層	灰	反り皿	E	14.9	*2.9	7.2	2	-	
96	VIID10b	第4層no.113	灰	輪禿皿	D	12.5	3.1	6.5	7	11	
97	VIID10b	第4層no.198	灰	輪禿皿	E	11.9	2.9	6	11	11	
98	VIID10b	第6層no.299	灰	輪禿皿	E	11.9	3.2	6	11	11	
99	VIID10b	第4層no.130	灰	輪禿皿	E	12	3.1	6	10	10	
100	VIID12b,12c	第6層no.300	灰	輪禿皿	E	13	3.8	6.4	7	12	
101	VIID12b	第6層no.54	灰	反り皿	E	13.2	3.1	7.2	4	12	
102	VIID10b	第4層no.145	鉄	輪禿皿	A	12.4	3.15	6.1	5	6	
103	VIID12b	第6層no.257	鉄	輪禿皿	A	13.3	3.55	5.9	4	11	スス付着
104	VIID12b	第6層	鉄	輪禿皿	C	12.7	3.6	6.3	6	12	
105	VIID11c	第4層	鉄	輪禿皿	G	12.6	*2.1	-	1	-	
106	VIIC13t	第4層no.425	-	灯明皿	D	10.95	2.5	4.9	11	12	
107	VIID10d	第4層no.343	鉄	灯明皿	C	10.9	2.1	6.6	6	6	
108	VIID11d	第4層	-	灯明皿	D	11.0	1.9	4.8	2	2	
109	VIID10d	第4層	-	灯明皿	D	10	2.1	4.4	5	6	
110	VIID12b	第6層no.291	長石	鉄絵皿	B	11.3	2.3	7.5	10	12	
111	VIID10c	第4層no.176	長石	鉄絵皿	B	11.3	2.4	7.5	11	12	
112	VIID12c	第6層no.489	長石	鉄絵皿	B	11.4	2.35	7.9	9	12	
113	VIID11b	第4層	長石	鉄絵皿	B	11.8	2.2	6.6	9	12	
114	VIID11b	第4層	長石	鉄絵皿	B	11.3	2.7	7.0	10	12	
115	VIID11c	第6層no.187	長石	鉄絵皿	B	11.9	2.3	7.2	9	12	
116	VIID10b	第6層no.127	長石	鉄絵皿	C	11.4	2.45	7.0	12	12	
117	VIID9d	第4層no.225	長石	鉄絵皿	C	11.7	2.45	7.4	11	12	
118	VIID10b	第4層no.167	長石	鉄絵皿	C	11.2	2.3	7.2	10	12	
119	VIID12c	第6層	長石	鉄絵皿	A	12.7	2.65	7.6	3	6	
120	VIID12b	第6層no.286	灰	折縁皿		11.6	3.8	5.6	9	10	
121	VIID10c,d	第4,6層,青灰色砂質土層	灰	折縁皿		13.9	2.85	6.9	5	11	ピン跡なし
122	VIID9e	第6層	鉄	型打皿（花形）	A	26.3	5	-	4	-	内面布目痕
123	VIID11b,12c	第4,6層	鉄・灰	型打皿（花形）	B	26.3	4.3	-	4	-	轆轤に灰釉流し掛け
124	VIID9d,10c,11f,12b	第4層,第4層no.366,青灰色砂質土層,青灰色シルト層	鉄	型打皿（花形）	A	-	4.9	12.9	-	5	貼付高台
125	VIID12b	第6層	鉄・灰	大皿		-	4.2	17	-	10	
126	VIID10d	第6層	錆	折縁鉢		32.6	*7.9		3	-	
127	VIID9c,d,10d	第4層,青灰色シルト層	灰	中皿		19.2	2.7	11.8	7	7	
128	VIID11d	第4層	鉄	中皿		-	2.7	10.3	-	2	
129	VIID12b	第6層no.50	鉄	中皿		23.2	5.4	12.8	4	6	
130	VIID10b	第4層no.203	鉄	皿		20.4	4.85	11	1	4	
131	VIID11b	第4層	鉄	鉢		11.6	6.5	10.3	7	12	
132	VIID12a	第4層	鉄	皿		13.7	3.9	6.7	4	6	貼付高台，擬釉
133	VIID12b	第6層	未施釉	輪花皿		1.36	2.1	-	5	-	
134	VIID11b,12b,11c	第4層	鉄	灯明皿		11.4	2.7	1.1	6	12	内面一部施釉，外面丸底
135	VIID9e	第6層	鉄・灰	短頸壺		5.4	12.5	6.6	1	12	
136	VIID11b	第4層	鉄・灰	短頸壺		-	12	7	-	12	
137	VIID12b	第4層	鉄	短頸壺		6.1	14.6	7.2	2	12	貼付高台
138	VIID12c	第6層no.86	-	水注		-	*6.1	4.2	-	12	焼成不良

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
139	VIID12b	第6層no.73	鉄	不明		6.2	9.65	4.6	11	12	上面に接合痕
140	VIID9d	第4層	鉄	餐皿		8.6	3.4	8.4	3	5	
141	VIID11b,12c	第6層	鉄	片口	IIA2	18	12.6	9.2	3	6	
142	VIID11b,12b	第4層,第6層no.276	鉄	片口	IIA1	13.3	11.1	9.2	7	12	内面高台痕（径7.6cm）
143	VIID11a	第4層	鉄	片口	IIA2	16.3	8.1	-	4	-	
144	VIID12b	第6層no.26	鉄	片口	I	18.2	13.35	16	3	6	
145	VIID11e	第4層	鉄	鉢		21.8	16.1	12	4	1	胎土緻密
146	VIID12b	第6層	鉄	浚瓶		6.5	*	-	8	-	
147	VIID12b	第6層	鉄	浚瓶		-	9.8	-	-	-	
148	VIID9g	第6層	鉄	浚瓶		-		13	-	12	
149	VIID11d	第4層	鉄	浚瓶		-	7.2	12.5	-	12	
150	VIID11a	第4層	鉄	浚瓶		-	12.4	12.6	-	6	平底
151	VIID12b	第6層no.15	鉄・灰	胴張形香炉		16.8	7.2	10.8	4	7	
152	VIID11b	第4層	鉄・灰	胴張形香炉		16	4.8	-	4	-	
153	VIId12c	第6層	鉄	胴張形香炉		14.1	5.7	11.2	4	3	
154	VIID11e	第4層no.317	鉄	胴張形香炉		-	*	-	5	5	内面に高台痕
155	VIID12b	第6層	鉄・灰	胴張形香炉		15.1	4.3	10.2	2	3	
156	VIID12b	第6層	未施釉	筒形香炉		16.1	6.7	9.6	1	12	内面に高台痕
157	VIID11b	第4層	未施釉	筒形香炉未成品か		18.8	5.9	15.3	5	12	
158	VIID12b	第4層	鉄	筒形香炉		16	7.5	13	1	5	内面に高台痕
159	VIID11a	第4層	鉄	筒形香炉		18	6.8	14.5	10	12	
160	VIID12b	第6層no.18	鉄	筒形香炉		18	7.02	14	3	5	
161	VIID12b	第6層	鉄	仏飾具		8.9	5.35	4.9	4	8	
162	VIID12b	第6層no.24	釉	仏飾具		10.3	8.6	8	10	10	
163	VIID12b,c	第6層	鉄	仏飾具		8.9	5.35	4.9	8	5	
164	VIID10c,11d	第4層	長石	小壺		5.2	5.0	3.8	6	11	
165	VIID11c	第4層	長石	鉢		10.6	4.4	6.6	11	10	
166	VIID11b	第4層	鉄	小杯		6.3	2.5	3.8	7	12	
167	VIID10b	第4層no.138	鉄	小壺		9.4	6.7	6.2	3	11	溶着
168	VIID12b	第6層	鉄	小壺		9.7	6.7	6.9	2	11	
169	VIID10b	第4層no.135	鉄	小壺		9.3	7.7	6.7	11	9	
170	VIID12b,9h	第4層,斜面下層	鉄	鉢		12.7	4	-	2	-	
171	VIID12b	第4層	鉄	有耳水注		3.7	7.7	4.3	9	12	
172	VIID9g	第6層	鉄	小瓶		2.3	8.1	3.6	6	12	
173	VIID9g	第6層	鉄	小瓶		-	7.8	4.8	-	12	色見に転用
174	VIID12c	第6層	鉄	小壺か瓶		-	5.2	4.2	-	12	
175	VIID11b	第4層	鉄	小壺か瓶		-	3.2	4.1	-	12	
176	VIID11b	第4層	鉄	小瓶		-	*5.9	3.7	-	-	
177	VIID12b	第6層no.17	鉄	小瓶		-	*8.2	3.8	-	12	
178	VIID11b	第6層no.105	鉄	小瓶		-	*6.5	5	-	9	
179	VIID12b	第4層	鉄	茶壺		10	6.5	-	1	-	
180	VIID12b	第6層no.284	鉄	茶壺		10.9	8.3	-	5	-	
181	VIID11b	第4層	鉄	茶壺		10	4.9	-	3	-	
182	VIID10b	第4層	鉄	有耳壺		14.8	7.5	-	2	-	内面に鎬輪
183	VIID12b	第6層no.278	鉄	筒形容器		-	8	12	-	12	内面高台痕（径6.8cm）
184	VIID11c	第4層no.231	鉄	筒形容器			*7.0	12		7	内面・底部付近鎬輪、底部回転ケズリ
185	VIID12b	第6層 no.80		筒形容器			*6.25	12		12	底部付近鎬輪
186	VIID12b	第6層 no.308	鉄	筒形容器			*4.37	14.3		5	底部回転ケズリ
187	VIID9f	第6層	鉄	擂鉢痕		14	6.8	6.3	5	6	
188	VIID11b	第6層no.69	鉄	擂鉢痕		14.2	7.1	7.1	10	12	
189	VIID12b	第6層no.14	鉄・灰	擂鉢痕		14.7	7.4	7.1	12	12	
190	VIID11b	第6層	鉄	擂鉢痕		16.2	8.3	8.3	9	12	高台摩滅
191	VIID9g	第6層	鉄・灰	擂鉢痕		18	8.8	9.1	12	12	内面摩滅
192	VIID12c	第6層	鉄	有耳小壺		5	6	-	1	-	
193	VIID12b	第6層no.281	鉄	筒形容器		10.8	13	7.3	5	12	胴部底部回転ケズリ、内面鎬輪
194	VIID11c	ベルト8第4層no.434,456	-	筒形香炉未成品か		20.8	8.1	17.6	4	10	スス付着
195	VIID12a	第4層	鉄・灰	唐利	IA	5.5	18	-	2	-	
196	VIID12b	第6層no.49	鉄	唐利	IA	4.1	17.15	7	11	5	
197	VIID11b	第6層	鉄・灰	唐利	IA	5.3	17.5	-	5	-	
198	VIID12c	第6層	鉄	唐利	IA	5.2	4.5	-	7	-	
199	VIID12b	第6層no.255	鉄	唐利	IA	5.4	12.6	-	3	-	
200	VIID11b	第6層	鉄・灰	唐利	IA	12.5	16.4	7.2	-	12	
201	VIID12b	第6層no.250	鉄・灰	唐利	IA	-	19.1	6.2	-	-	
202	VIID12b	第6層no.66	鉄・灰	唐利	IA	-	16.7	6.5	-	12	
203	VIID10b	第4層no.142	鉄・灰	唐利	IB	5	10	-	4	-	
204	VIID11d	第4層no.223	鉄・灰	唐利	IB	-	13.3	8.2	-	12	
205	VIID12b	第6層no.315	鉄・灰	唐利	IB	-	8	13	-	10	
206	VIID10d	第6層	鉄	蓋	IA	7.6	2.3	4	8	12	
207	VIIC12c	第4層	鉄	蓋	IA	7.25	1.8	3.9	9	12	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
208	VIID11b	第6層	鉄	蓋	IA	6.8	1.2	4	9	12	
209	VIID11b	第4層	鉄	蓋	IA	6.3	1.8	3.4	9	12	
210	VIID11c	第4層	鉄	蓋	IA	6.1	1.7	3.6	11	12	
211	VIID12b	第4層	鉄	蓋	IB	5.2	1.6	2.9	9	12	
212	VIID12b	第6層	鉄	蓋	IB	5.1	1.3	2.7	10	12	
213	VIID11c	第4層	鉄	蓋	III	6.6	0.9	4.4	8	12	
214	VIID12b	第6層no.249	鉄	徳利	IC	-	15.9	6.3	-	12	
215	VIID12b	第6層no.78	鉄	徳利	IC	-	16	7.4	-	12	
216	VIID12b	第6層no.282	鉄	徳利	IC	4.1	15	-	-	-	
217	VIID9g	第6層	鉄	徳利	IC	-	18.5	7	-	12	
218	VIID10d	第4層no.218	鉄	徳利	IC	-	16.35	6.8	-	11	
219	VIID11b	第4層	鉄	花瓶		5.8	*9.3		7		
220	VIID12c	第6層	鉄・灰	徳利	IIA	-	9.7	11.6	-	12	
221	VIID12b	第6層	錆	花瓶		-	9.1	7.65	-	12	
222	VIID11b	第6層no.67	鉄・灰	徳利	IIB	3	17.2	9.2	-	12	体部に窪み
223	VIID10b	第4層no.168	鉄・灰	徳利	IIB	-	16.1	11.8	-	12	体部に窪み
224	VIID12c	第6層no.486	鉄	銭壺	IIA	9.8	11.6	7.6	9	12	印 角に「一」
225	VIID11d	第4層no.222	鉄・灰	銭壺	IIA	11.3	11.2	5.8	10	12	印 角に「一」
226	VIID12b	第6層no.289	鉄	銭壺	IIA	10.7	11.5	6	12	12	印 角に「一」
227	VIID11d	第4層no.221	鉄	銭壺	IIA	10.1	12.5	6.6	10	12	印 角に「一」
228	VIID11c	第6層no.179	鉄	銭壺	IIA	10.4	12.85	6.5	12	12	印 角に「一」
229	VIID12b	第6層no.309	鉄	銭壺	IIA	11.2	11.85	6.2	12	12	印 角に「一」
230	VIID12b	第6層no.55	鉄	銭壺	IIA	11.4	13.2	6.6	12	11	印 角に「一」
231	VIID12b	第6層no.58	鉄	銭壺	IIA	10.7	12.7	7.4	10	12	印 花押状
232	VIID11c	第4層no.230	鉄	銭壺	IIA	10.7	11.8	6.2	9	12	印 花押状
233	VIID10b	第4層no.115	鉄	銭壺	IIA	11	13.2	6.1	12	12	印 花押状
234	VIID12c	第6層no.82	鉄	銭壺	IIA	10.8	13.2	6.8	8	12	印 花押状
235	VIID11c	第4層no.238	鉄	銭壺	IIA	10.8	13.2	6	5	12	印 花押状
236	VIID12b	第6層no.56	鉄	銭壺	IIA	10.1	13.1	7	7	12	印 花押状
237	VIID12b	第6層no.311	鉄	銭壺	IIA	10.45	13.05	6.8	12	12	印 重ね□
238	VIID11c	第4層no.106	鉄	銭壺	IIA	10.4	12.6	6.2	11	12	印 『上』
239	VIID11e	第4層no.400	鉄	銭壺	I	10.8	12.9	6	11	12	印 『上』
240	VIID11e	第4層no.386	鉄・灰	銭壺	IIA	10.6	11.9	7.8	8	12	内面灰釉
241	VIID13a	第4層no.428	鉄・灰	銭壺	IIA	11.2	10.75	6	6	12	内面灰釉
242	VIID10d	第4層no.216	鉄	銭壺	IIA	10.2	12.8	5	12	12	印 『上』
243	VIID11e	第4層no.325	鉄	銭壺	IIA	11.2	13.3	6	6	12	印 『上』
244	VIID11e	第4層no.357	鉄	銭壺	I	10.7	12.63	8.6	5	12	
245	VIID11f	第4層no.370	鉄	銭壺	I	11.1	13.4	8.6	4	12	
246	VIID12b	第6層no.256	鉄	銭壺	IIA	10.3	12.9	6	12	12	
247	VIID13a	第4層no.429	鉄	銭壺	IIA	10.9	13.3	6.5	10	10	
248	VIID12c	第6層no.483	鉄	銭壺	IIA	11	13.3	6	9	12	
249	VIID11e	第4層no.352	鉄・灰	銭壺	I	11.3	13	8.2	5	12	内面灰釉
250	VIID12b	第6層	鉄	擂鉢	B	31.3	13.9	8.9	3	3	
251	VIID11c	第6層no.101	錆	擂鉢	B	37.8	14.8	12.7	1	12	
252	VIID12b	第6層no.81	錆	擂鉢	B	32.5	15.8	11.7	2	1	
253	VIID12b	第6層no.65	鉄	擂鉢	B	29	11.65	10	1	8	
254	VIID12b	第6層no. 25	錆	擂鉢	B	31.3	13.4	9.2	5	10	
255	VIID12b	第6層no.27	錆	擂鉢	C1	34.5	15.6	12	5	7	
256	VIID12c	第6層no.477	錆	擂鉢	C1	37.9	20	10.8	2	1	
257	VIID11b	第6層no.75	鉄	擂鉢	C3	35.4	17.2	12.1	2	12	
258	VIID12c	第6層no.475	鉄	擂鉢	C2	37.4	16.4	-	2	-	
259	VIID11c	第6層no.104	錆	擂鉢	F3	36	18.2	12	10	6	
260	VIID11c	第6層no.98	鉄	擂鉢	F2	27.7	7.7	-	2	-	
261	VIID12b	第6層no.273	鉄	擂鉢	F2	26.4	11.7	-	3	-	
262	VIID12b	第6層no.79	錆	擂鉢	F2	28.5	12.7	11.2	3	12	
263	VIID12c	第6層no.487	鉄	擂鉢	F1	26.2	13.1	10.1	1	7	
264	VIID12b	第6層	鉄	擂鉢	F2	23.2	*	6	2	-	
265	VIID12b	第6層no.266	未施釉	擂鉢	F3	25.6	11.1	-	3	-	
266	VIID10b	第4層no.126	鉄	擂鉢	B	33	15	10	8	12	
267	VIID10b	第4層no.125	鉄	擂鉢	B	31.4	15.2	7.1	5	2	
268	VIID10b	第4層no.123	錆	擂鉢	B	34.3	16.1	11.6	12	12	
269	VIID11f	第4層no.367	鉄	擂鉢	C1	36.7	10	-	2	-	
270	VIID11e	第4層no.353	鉄	擂鉢	C2	34.1	15.05	-	5	-	
271	VIID11f	第4層no.399	鉄	擂鉢	C2	35.5	10.3	-	2	-	
272	VIID11e	第4層no.350	鉄	擂鉢	-	-	13.6	11.7	-	12	
273	VIID10b	第4層no.119	錆	擂鉢	D1	33	11.1	-	6	-	
274	VIID11e	第4層no.318	鉄	擂鉢	C2	32.9	16.7	11.9	2	12	
275	VIID11b	第4層no.196	錆	擂鉢	D2	33.15	15.75	9.9	12	12	
276	VIID11e	第4層no.405	鉄	擂鉢	D1	33.6	15.6	11	-	1	
277	VIID12b	第4層no.22	鉄	擂鉢	D2	32.1	15.1	10.8	10	12	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縁・上部)	器高 (厚み)	底径 (構・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
278	VIID11e	第4層no.350	鉄	擂鉢	F3	29.3	13.45	9.8	1	12	
279	VIID9d	ベルトC第26,28,29層	素焼	天目茶碗	IA	13.1	7.9	4.8	5	12	
280	VIID10c	ベルトB第22層	素焼	天目茶碗	IA	11.8	7.9	5	2	12	
281	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	天目茶碗	IA	11.6	7.5	3.8	3	12	
282	VIID9e	ベルトC第28層	-	天目茶碗	IB	12.2	6.8	-	2	-	
283	VIID9g	ベルトD第45層	鉄	天目茶碗	IA	10.9	7.2	4.3	5	6	
284	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	端反碗	IB	11.3	7.2	4.5	2	12	
285	VIID9d	茶褐色シルト層no.32	鉄	天目茶碗	IB	11.9	7.4	4.6	10	12	柚輪　削り出し高台
286	VIID9f	ベルトE第40層	鉄	天目茶碗類	IB	11.8	7.5	4.6	2	8	
287	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄?	天目茶碗	IB	11.3	6.7	4.6	6	12	
288	VIID10d	青灰色シルト層no.35	鉄	天目茶碗	IC	11	7.1	4.1	7	7	
289	VIID9g	斜面（物原）下層	鉄	天目茶碗	IC	10.7	7	4.7	9	12	
290	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	天目茶碗	IC	11.1	6.6	4.7	7	12	
291	VIID12b	灰色粗粒砂層	鉄	天目茶碗	IC	11	6.8	4.5	10	12	
292	VIID9f	ベルトD第45層	鉄	天目茶碗	ID	11.2	6.65	4.4	11	12	
293	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	天目茶碗	ID	10.9	6.5	4.5	9	12	
294	VIID9g	ベルトD第41層	鉄	天目茶碗	ID	11.2	7.4	4.5	4	12	
295	VIID11d	廂壁	鉄	天目茶碗	ID	11	6.3	4.2	7	11	削り出し高台
296	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	小天目		9.6	5.2	4.8	3	12	
297	VIID11a	青灰色砂質土層	鉄	小天目		9.3	5.7	4	8	11	削り出し高台
298	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	小天目		9.85	5.15	3.7	6	12	
299	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	天目茶碗	IID	13.4	6.6	5.1	5	12	底部下方にへラ描
300	VIID9f	ベルトE第40層	鉄	天目茶碗	I	13.2	5.9	3.8	4	1	
301	VIID9h	表土	鉄	天目茶碗	IIB	11.85	6.1	4.5	1	12	高台付近猿輪
302	VIID9f	ベルトE第39層	鉄	天目茶碗	IIC	12.6	5.65	3.8	3	12	高台付近猿輪
303	VIID11a	青灰色砂質土層	鉄	天目茶碗	IIB	12.2	6.5	4.5	4	10	高台付近猿輪
304	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	天目茶碗	IIC	12	5.65	3.9	6	6	
305	試掘	T16	鉄	天目茶碗	IIC	11.8	5.5	4	11	12	
306	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	天目茶碗	IIC	12	5.8	4.2	5	11	高台付近猿輪
307	VIID11d	廂壁	鉄	天目茶碗	IIC	12.2	5.7	4.2	4	12	高台付近猿輪
308	VIID11a	黄褐色土層	鉄	天目茶碗	IID	11.9	7.3	4.6	4	12	高台付近猿輪
309	VIID9e	ベルトC第26層	鉄	端反碗	C	11.9	7.05	4.4	4	11	高台付近猿輪
310	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	端反碗	C	11.5	6.6	4.5	5	12	
311	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	端反碗	C	11.2	6.45	4.2	4	12	
312	VIID9d	青灰色シルト層no.34	鉄	端反碗	C	11.6	6.7	4.2	5	9	
313	VIID9e	トレンチ仁東サブトレ	鉄	端反碗	C	10.4	7.3	4.5	4	12	
314	VIID9h	斜面（物原）下層	鉄	端反碗	C	11	6.7	4.3	10	12	
315	VIID9d	茶褐色シルト層	灰	端反碗	A	11.2	6.9	4.7	8	12	
316	VIID9h	斜面（物原）上層、（サブトレ）	灰	平碗		4.85	7.5	5.3	1	12	貼付高台
317	VIID9e	斜面（物原）下層	灰	平碗		14.5	6.2	4.5	4	12	貼付高台
318	VIID9f	ベルトE第40層	鉄	平碗		16.8	*6.2	-	1	-	
319	VIID9f	斜面下層	灰	平碗		13.4	6.7	4.8	4	12	貼付高台
320	VIID9e	斜面（物原）下層	灰	平碗		13.9	7.6	6.3	1	4	
321	VIID9e	斜面（物原）下層	灰	碗		13.2	7.6	6.4	3	5	削り出し高台
322	VIID9g	斜面（物原）上層	灰	碗		12.6	7.5	4.4	2	7	
323	VIID9d	青灰色シルト層	灰	腰高碗		12.2	7.9	5.2	6	12	鉋巻高台
324	VIID10c	青灰色シルト層	灰	腰高碗		12.4	7.5	5.2	6	11	鉋巻高台
325	VIID9e	斜面（物原）上層	灰	腰高碗		12.7	8.9	6	4	7	鉋巻高台
326	VIID10j	北壁精査	灰	腰高碗		13.1	7.5	5.7	6	5	鉋巻高台
327	VIIC11r	表土掘削	灰釉系	碗		12.15	8	6.4	2	4	総釉
328	VIID10b,11b	青灰色砂質土層	鼠石	碗		14.1	9.4	6.2	1	11	
329	VIID9d	ベルトD第26層	鉄	丸碗		12.8	7.9	6.0	2	12	
330	VIID9f	斜面（物原）下層	灰	丸碗		13.2	8.1	5.8	3	11	鉋巻高台
331	VIID9e	表土	灰	丸碗		14.1	6.55	6.3	6	12	
332	VIID10d	ベルトC第28層	鉄	丸碗		12.2	7.45	5.1	5	12	スス付着
333	VIID9f	斜面下層	鉄	丸碗		10.9	7.1	4.4	6	12	
334	VIID9f	斜面（物原）下層	灰	丸碗	C	11.2	7.25	4.7	2	12	
335	VIID9f	斜面下層	鉄	丸碗	B	10.4	7.4	4.4	5	12	
336	VIID10b	青灰色砂質土層	鉄	碗		10.0	*5.2		2		
337	VIID10d	青灰色シルト層	鼠石	小碗		10.1	5.2	4.1	7	12	
338	VIID9d	ベルトC第26層	鼠石	小碗		10.5	5.7	4.2	7	12	
339	VIID9f	ベルトE第41層	鼠石・鉄	丸碗		-	5.5	5.5	-	12	鉄絵（蘭竹文）
340	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	碗		-	*4.1	4.2	-	12	
341	VIID11c	ベルトB第18層	灰	碗		-	*	6	0	6	兵須粕、貼付高台
342	VIID9d	青灰色シルト層	灰	浅碗		12.9	5.2	4.8	10	12	
343	VIID11a	褐灰色砂質土層	鉄	碗		12.2	4.7	4.7	5	12	
344	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	碗		13.8	4.1	4.8	2	12	
345	VIID9h	斜面下層	鉄	筒形碗			*5.8	5.2		6	
346	VIID9e	斜面（物原）上層	鉄	蓋物		13	5.8	-	2	0	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
347	VIID9d	青灰色シルト層no.38	鉄	蓋物		6	3.6	4.5	11	10	
348	VIID12a	暗灰色砂質土層	灰	小杯		7.9	5.5	3.5	1	10	
349	VIID10c	青灰色砂質土層	灰	小杯		8	4.8	3.9	6	11	
350	VIID9d	赤褐色シルト	灰	小杯		8.2	4.8	3.8	5	12	
351	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	鉢		12.2	5.4	4.15	4	11	
352	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	小壺		7.4	4	5.6	2	2	
353	VIID9e	ベルトC第26層	鉄	小壺		8.8	4.5	6	3	4	
354	VIID11a	暗灰色シルト層	鉄	小壺		7.1	4.6	4.6	3	3	
355	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	香炉か匣鉢		10.8	4.5	6.1	3	12	
356	VIID12a	暗灰色砂質土層	灰	鉢		13	7.8	6.9	4	4	
357	VIID11d	青灰色砂質土層	灰	反り皿	A	13.8	3.15	6.6	1	6	
358	VIID10b,11b	暗灰色砂質土層	灰	反り皿	A	13.8	3.4	6.8	3	6	
359	VIID9f	ベルトE第39層	灰	反り皿	B	14	3.7	8.5	4	7	
360	VIID9f	ベルトE第35層	灰	反り皿	B	14.6	3.5	8	3	6	
361	VIID9e	斜面（物原）上層	灰	反り皿	C	13.9	3.05	7.8	2	12	
362	VIID9e	斜面（物原）下層	灰	反り皿	D	13.8	3.1	7.4	3	6	
363	VIID9e	斜面（物原）下層	灰	反り皿	D	13.2	3.9	7.7	-	-	溶着資料
364	VIID9d	ベルトC第26層	灰	反り皿	D	13.9	2.9	7.4	11	12	溶着資料、スス付着
365	VIID9g	斜面（物原）上層	灰	反り皿	E	14.3	3.4	6.6	3	12	
366	VIID9f北	斜面（物原）下層	灰	反り皿	E	14.5	3.9	6.7	8	12	
367	VIID9g	ベルトD第3層	灰	反り皿	C	13.7	5.4	7.8	6	12	溶着資料
368	VIID11d	南壁	灰	反り皿	C	14.2	7.5	7.9	11	12	溶着資料
369	VIID10e	斜面（物原）上層	灰	輪禿皿	D	12.4	3	6.6	9	12	
370	VIID9h	表土	灰	輪禿皿	D	12.2	2.9	2.7	10	10	
371	VIID9f北	斜面（物原）下層	灰	輪禿皿	D	12.3	3	6.4	10	12	
372	VIID9d	茶褐色シルト層no.30	灰	輪禿皿	D	12.2	3.2	6.9	10	11	
373	VIID10d	青灰色シルト層no.42	灰	輪禿皿	D	12.3	3.4	6	6	11	
374	VIID9f	トレンチD	灰	輪禿皿	D	11.9	2.7	5.8	6	12	
375	VIID11a	サブトレA	灰	輪禿皿	E	12.3	3.1	5.8	9	12	
376	VIID9h	斜面（物原）上層	灰	輪禿皿	E	12.5	3.1	6.7	11	11	
377	VIID11a	青灰色砂質土層	鉄	輪禿皿	A	12.3	2.75	6	4	12	
378	VIID9g	斜面（物原）上層	鉄	輪禿皿	B	12.4	3	6	4	12	
379	VIID10f	斜面（物原）上層	鉄	皿	B	-	9.1	6.2	-	-	溶着資料
380	VIID9f	斜面（物原）上層北部	鉄	輪禿皿	A	11.4	2.5	5.8	5	12	
381	VIID9g	斜面（物原）下層	鉄	輪禿皿	B	12	2.9	6.2	5	12	
382	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	輪禿皿	A	12	3.15	5.8	3	12	
383	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	輪禿皿	A	12.6	3.25	5.7	3	12	
384	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	輪禿皿	A	13.6	3.5	5.7	7	12	
385	VIID9f	トレンチD	鉄	輪禿皿	A	11.9	3.2	6	6	12	
386	VIID9f	トレンチD	鉄	輪禿皿	A	12.3	3.1	6.05	5	5	
387	VIID11d	南壁	鉄	輪禿皿	A	12.6	3.7	6.1	2	9	
388	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	輪禿皿	A	14.6	3.4	6.2	10	12	
389	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	灯明皿	A	9.4	2.0	5.4	3	12	
390	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	灯明皿	A	9.2	1.9	5.2	9	12	
391	VIID9e	斜面上層	鉄	灯明皿	A	9.6	2.6	5	1	6	
392	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	灯明皿	A	10.0	2.0	5.3	3	3	
393	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	灯明皿	A	9.2	2.0	4.3	6	6	
394	VIID11c	トレンチB	鉄	灯明皿	B	8.5	1.8	4.6	5	6	
395	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	灯明皿	B	8.2	1.9	4.6	5	6	スス付着
396	VIID9e	表土	鉄	灯明皿	A	9.5	1.85	50	3	12	
397	VIID9d	青灰色シルト層	灰	鉄鉢皿	A	13.1	2.4	8.3	9	12	
398	VIID9f北	斜面（物原）下層	長石	鉄鉢皿	B	12.8	2.45	7.7	4	12	
399	VIID9d	青灰色シルト層	灰	鉄鉢皿	B	12.2	2	7.1	11	12	
400	VIID9d	ベルトC第28層	長石	鉄鉢皿	A	11.3	2.7	6.9	6	10	
401	VIID11a	表土	長石	鉄鉢皿	B	12.4	2.1	7.6	4	11	
402	VIID12b	暗灰色砂質土層	長石	鉄鉢皿	C	11.8	2.65	7.1	7	12	
403	VIID9f北	斜面（物原）下層	長石	鉄鉢皿	C	11.2	2.2	6.6	11	11	
404	VIID10c	ベルトB第22層	長石	鉄鉢皿	B	12.6	2.1	7.6	8	12	
405	VIID10e	ベルトC第25層	長石	鉄鉢皿	C	11	2.05	7	3	7	
406	VIID11c	ベルトB第4層no.433	長石	鉄鉢皿	B	10.4	5.8	7.8	-	-	5枚溶着資料
407	VIID9f	トレンチD	長石	鉄鉢皿	B	11.6	6.8	8.2	6	10	溶着資料
408	VIID11a	トレンチA第4層no.1	長石	鉄鉢皿	B	11.6	2.6	6.5	7	12	
409	VIID9d	ベルトB第26層	長石	鉄鉢皿	B	12.1	2.2	7.6	10	12	
410	VIID10h	ベルトF第6層	長石	鉄鉢皿	B	11.7	2.3	7.6	11	12	
411	VIID11a	サブトレA	長石	鉄鉢皿	B	11.8	2.4	6.9	9	12	
412	VIID11a	暗灰色シルト層	長石	鉄鉢皿	B	11.4	2.6	7.15	3	12	
413	VIID9d	ベルトC	長石	鉄鉢皿	C	11.4	2	6.6	10	12	
414	VIID9e	ベルトC第28層	長石	鉄鉢皿	B	11.3	1.9	7.3	10	11	
415	VIID9f	ベルトE第39層	長石	鉄鉢皿	B	11.7	2.2	7.5	11	12	
416	VIID9e	表土	長石	鉄鉢皿	C	11.2	2.5	7.5	9	12	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
417	VIID12b	暗灰色砂質土層	長石	鉄絵皿	C	11.2	2.1	7.4	11	12	
418	VIID11a	青灰色砂質土層	長石	鉄絵皿	C	11.5	2.3	7.6	7	12	
419	VIID9f北	斜面（物原）下層	長石	鉄絵皿	B	11.2	2.3	7.1	7	8	
420	VIID9g	ベルトD第40層	長石	鉄絵皿	B	11.3	2.4	7.3	7	12	
421	VIID11c	トレンチB	長石	鉄絵皿	B	11.3	2.3	7	10	12	
422	VIID9e	斜面（物原）下層	長石	丸皿		10.8	2.4	7	10	12	スス付着
423	VIID9f	斜面下層	鉄	灯明皿（重ね）	C	10.4	2.0	4.6	1	6	
424	中央部	表土	灰	丸皿		9.4	1.5	4.8	6	12	総釉
425	VIID11,12b	第4,6層no.59,暗灰色砂質土層	鉄?	皿		13.35	2.15	6.35	10	12	
426	VIID9e	斜面（物原）下層	灰	硯反皿		13.8	3.5	7	2	12	溶着資料
427	VIID10c	トレンチB	-	硯反皿		12.6	3.8	5	1	6	
428	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	皿		13.1	3.85	5.4	1	5	
429	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	皿		13.6	3.7	4.8	3	10	
430	VIID9d	青灰色シルト層	未施釉	輪花皿		12.2	3.5	3.8	2	6	削り出し高台、6弁
431	VIID9d,中央部	青灰色シルト層、青灰色砂質土、表土掘削	灰	輪花皿		12.9	3.4	5.6	6	10	花弁28枚
432	VIID10e	斜面（物原）下層	鉄	皿		15	3.7	4.6	1	12	
433	-	表採	長石	型打皿		13.7	1.7	-			布目痕
434	VIID11a	サブトレA	長石?	型打皿		12.9	2.5	-	1	-	
435	-	表採	無釉	型打皿		12.3	3.4	4.8	3	12	布目痕
436	VIID9e,f	斜面（物原）下層,ベルトE41層	長石＋銅緑釉	菊皿		14	3	8	2	1	御深井釉　花弁28枚
437	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	盤		18.6	3.5	7.9	4	8	
438	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	盤		18.7	3.0	7.8	3	12	
439	VIID9e	斜面（物原）下層	長石	盤		21.6	1.7	11.8	2	1	
440	VIID9f	斜面（物原）下層	灰	盤か皿		-	2.3	13	-	2	
441	VIID9f	トレンチD	灰	盤か皿		-	2.7	13.3	-	4	
442	VIID9d	ベルトC第28層	鉄	中皿		22.3	3.4	10.4	1	2	
443	VIID11c	ベルトB第18層	鉄	中皿		19.4	4.8	9.7	1	12	
444	VIID9f	斜面（物原）下層	長石	中皿		22.2		10	2	3	
445	VIID9h	表土	灰	大皿		-	2.75	12.8	-	4	
446	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	大皿		26.1	5.7	12.6	1	7	
447	VIID9d,e	青灰色シルト層,斜面下層	灰	大皿・鉢		-	5.3	13.8	-	3	
448	VIID9g	表土	鉄	鉢		33.2	8.9	16.1	1	6	
449	VIID9g	表土	鉄	鉢		36.4	*33.8	-	1	-	
450	VIID9f	ベルトD崩落土	鉄	鉢		35.2	6.3	-	2	-	
451	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	皿		20.1	5.1	10.7	2	3	
452	VIID11d	廃墅	鉄	鉢		22.6	6.4	13.9	2	2	
453	VIID9g	ベルトD第41層	鉄	鉢			*15.0	9.2		4	内面・底部摩滅
454	VIID9g	表土	鉄	擂鉢		-	*9.8	10.3		12	櫛目ヘラ描き
455	VIID11c	ベルトB第23層	鉄	花瓶		13.7	*	-	2	-	
456	VIID9f,10e	ベルトC第25層,斜面下層	鉄	花瓶		19.2	*3.6	-	3		
457	VIID10f	斜面（物原）上層	鉄	筒形香炉		10.9	8	4.8	1	4	
458	VIID9f	斜面下層,北壁崩落土	鉄	筒形香炉		10.8	7.45	5.8	3	12	
459	VIID10h	ベルトF・斜面下層	鉄・灰	水指か		16.2	*12.5	-	1	-	
460	VIID9e,11a,12a	斜面（物原）下層,青灰色砂質土層	鉄・灰	型打皿（花形）	A	24.2	5.2	12.2		2	布目痕
461	VIID11b,c,12c	第6層,ベルトB18層	鉄・灰	型打皿（花形）	A	26.1	6.1	12.9	4	2	布目痕
462	VIID9d,e	青灰色シルト層,ベルトC第29層,表土	鉄	型打皿（花形）	A	26.2	4.2	13.2	1	2	布目痕
463	VIID10a,b	青灰色シルト,青灰色砂質土層	鉄・灰	型打皿（花形）	A	-	3.5	13.2	-	1	布目痕
464	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄・灰	型打皿（花形）	A	-	3.3	13	-	3	花弁16枚
465	VIID9d	青灰色シルト層	鉄・灰	型打皿（花形）	A	-	2.25	14	-	3	花弁16枚
466	VDII9g	ベルトD第35層	鉄	型打皿（花形）	A	-	4	13	-	3	
467	VIID10c	トレンチB	鉄	大皿		-	3.3	14	-	1	
468	VIID9e,9d	青灰色シルト層,斜面下層、ベルトC26層	灰	鉢		26.4	*5.6	15.6	1	6	御深井釉？
469	VIID10d	ベルトC第26層	鉄	折縁鉢		24.6	6.4	12.4	2	4	
470	VIID10d	青灰色シルト層	鉄	折縁鉢		30.6	8.5	14.8	2	2	
471	VIID9d	青灰色シルト層no.33	黄瀬戸釉？	折縁鉢		31.4	8.2	17.7	8	12	内面に三叉トチ痕３
472	VIIC11a	黄褐色土層	鉄	卸皿		-	3.9	11.2	-	-	2点は同一個体
473	VIIC11r	表土掘削	鉄	卸皿		-	*	11.4	-	-	2点は同一個体
474	VIID9e,10c,11c,1 1d,12c	第4層,第6層no.99,ベルトC第19層,トレンチB,ベルトB第22層,南壁,南壁精査	無釉	型打皿（花形）	A	27.1	7	14.5	5	9	布目痕

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (最・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
475	VIII09d,e,g,10d	ベルトC第26,28層,青灰色シルト層,斜面下層	鉄	型打皿（花形）	B	26	8.9	12.4		12	三足
476	VIII09d,e,10c,11d	ベルトC第26層,斜面下層,角型,青灰色シルト層		鉄絵皿		35	9.9	18	5	7	
477	-	試掘表採	鉄・灰	鉢		33	*15.7	-	2	-	
478	VIII09d	青灰色シルト層	鉄	片口	IIA2	15.9	10	9.4	2	5	
479	VIII09f	斜面（物原）下層	鉄	片口	IIA	-	6.8	10.4	-	12	
480	VIII09d	ベルトC第28層	鉄	片口	IIA2	17.2	11.1	11	5	4	
481	VIII11b	暗灰色砂質土層	鉄	片口	IIA1	16.6	8.6	-	3	-	
482	VIII09f	トレンチD	鉄	片口	IIB	19.2	10.7	-	1	-	
483	VIII10d	青灰色シルト層	鉄	片口	IIB	18.5	11.55	10.7	3	12	
484	VIII09e,f	斜面上層,下層,表土	鉄	片口	IIB	18	12.7	10.8	3	7	
485	VIII09e	トレンチD東側サブトレ	鉄	片口	IIA1	12.8	8	7.6	3	7	
486	VIII09f,北	斜面（物原）下層	鉄	片口	IIB	26.7	8.9	-	2	0	
487	VIII09g	ベルトD第4層	鉄	片口	IIB	27.4	11	-	4	-	
488	VIII10d	青灰色シルト層	鉄	片口	I	14.8	9.5	13	3	5	
489	VIII11c	トレンチB	錆	湊甕		7.5		-	11	-	
490	VIII09e	ベルトC第28層	鉄	湊甕		-	12.1	15.1	-	12	
491	VIII10f	トレンチD	鉄	湊甕		-	10.5	15	-	3	
492	VIII09d	青灰色シルト層	鉄	湊甕		-	8.2	13.6	-	12	
493	VIII09f	トレンチD	鉄	湊甕		-	8.3	13.4	-	12	
494	VIII11c	ベルトB第18,21層	鉄	湊甕		-	*	-	-	-	
495	VIII10d	青灰色シルト層	鉄	湊甕		-	13.9	13.7	-	12	
496	VIII10f	ベルトE第42層	鉄	擂鉢縁		15	8.5	7.7	5	12	
497	VIII09g	斜面（物原）上層	鉄	擂鉢縁(溶着)		17.07		8.3		12	4枚重ね
498	VIII09h	表土	鉄	擂鉢縁		17	*6.5	-	3	-	
499	VIII09h	斜面（物原）下層	鉄・灰	擂鉢縁		16	8.1	8.6	11	12	
500	VIII09g	表土	鉄・灰	焙烙形香炉		13.6	5.7	9.6	6	9	内面に高台痕
501	VIII11c	ベルトC第18層	鉄・灰	焙烙形香炉		14.6	6	10.8	4	8	
502	VIII09d	ベルトC第26層	鉄・灰	焙烙形香炉		15.4	6	10	2	6	
503	VIII09h	表土	鉄・灰	焙烙形香炉		17	6	12.4	1	1	
504	VIII09g	表土	鉄	焙烙形香炉		16.6	5.6	9.6	3	6	内面に置き跡
505	VIII09d	青灰色シルト層	鉄	焙烙形香炉		16.4	5.65	9.6	5	3	
506	VIII09g	斜面（物原）上層	鉄	焙烙形香炉		15.2	5.1	8.9	1	4	
507	VIII10c	ベルトC第19層	鉄・灰	焙烙形香炉		14.8	5.05	11	1	2	
508	VIII09e	斜面（物原）下層	鉄	焙烙形香炉		14	5.6	10.9	1	6	
509	VIII012b	灰色粗粒砂層	鉄	焙烙形香炉		15.1	5.1	11.4	2	3	
510	VIII09f	表土	未施釉	焙烙形香炉		14.2	5.2	10.3	3	2	
511	VIII09e	斜面（物原）上層	鉄	筒形香炉		16.9	6.75	14	3	3	
512	VIII10d	青灰色シルト層no.36	鉄	筒形香炉		17.3	7.3	14.7	11	11	内面に置き跡
513	VIII10c	青灰色砂質土層	鉄	筒形香炉		18.7	7.7	16.1	4	4	
514	VIII09d	青灰色シルト層	鉄	筒形香炉		18.6	7.8	16.2	1	4	
515	中央部	表土	鉄	筒形香炉		17.6	7.2	15.4	3	12	内面に高台痕、径7.2cm
516	VIII09e	斜面（物原）下層	鉄・灰	筒形香炉		16.4	7.9	10.3	9	5	
517	VIII09d	ベルト第26層	未施釉	筒形香炉		16.4	6.8	9.9	3	7	内面に置き跡、削り込み高台
518	VIII09f	斜面（物原）下層	鉄	徳利	IA	4.4	4.8	-	5	-	
519	VIII09f	斜面（物原）下層	鉄	徳利	IA	5	4.5	-	11	-	
520	VIII09g	斜面（物原）下層	鉄	徳利	IC	7	5	-	9	-	
521	VIII09e	トレンチC東サブトレ	鉄	徳利	IB	5.2	3.1	-	5	-	
522	VIII09f	トレンチD	鉄	徳利	IB	5.3	4.1	-	6	-	
523	VIII11c	ベルトB第4層no.438	鉄・灰	徳利	IC	-	7.5	-	-	-	
524	VIII09e	斜面（物原）下層	鉄・灰	徳利	IC	-	7.4	-	-	-	
525	VIII09g	斜面（物原）下層	鉄・灰	徳利	IA	-	13.3	-	-	-	
526	VIII09g	崩落土(斜面上層)	鉄	徳利	IC	-	*8.25	7.3	-	10	
527	VIII09g	斜面（物原）下層、(集積)	鉄	徳利	IC	-	14	7.3	-	12	
528	VIII10d	青灰色砂質土層	鉄	徳利	IC	5.4	10.5	-	5	-	
529	VIII09h	斜面（物原）下層	鉄・灰	徳利	IC	-	*11.6	-	-	-	
530	VIII09g	斜面（物原）上層	鉄	徳利	IC	-	*10.9	7.5	-	12	
531	VIII09g	斜面（物原）下層	鉄・灰	徳利	IC	-	15.6	8	-	12	
532	VIII09e	斜面（物原）下層	鉄	徳利	IB	-	10	-	-	-	
533	VIII09g	斜面（物原）上層	鉄・灰	徳利	IB	-	11.9	-	-	-	
534	VIII09f	ベルトD第45層	鉄	徳利	IIB	-	21	9.8	1	12	
535	VIII10f	斜面（物原）下層	鉄	徳利	IIA	-	*7.4	9.4	-	5	
536	VIII09d	ベルトC第26層	鉄	徳利	IIA	-	*20.2	9.1	-	5	
537	VIII11c	トレンチB	鉄・灰	徳利	IIA	-	*14.5	10.1	-	5	
538	VIII09d	青灰色シルト層	鉄・灰	徳利	IIB	-	*16.2	11.3	-	11	
539	VIII09e	斜面（物原）下層	鉄	徳利	IIB	-	*5.4	9	-	5	
540	VIII09g	斜面（物原）下層	鉄	花瓶？	IIB	-	*8.45	10.5	-	5	
541	VIII09h	斜面（物原）下層	鉄	湊甕	IIB	-	*7.1	12.2	-	12	
542	VIII09d	ベルトC第26層	灰	花瓶		16	6	-	2	-	卵深井戸か

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
611	中央部	南壁トレンチ内	鉄	銭壺	IIA	10.5	11.9	6.3	12	12	印 角に「一」
612	VIID11c	ベルトB第4層no.443	鉄	銭壺	IIA	11	12.5	6.6	12	12	印 重ね○
613	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	銭壺	IIA	11.4	13.5	7	6	12	印 重ね○
614	VIID11c	ベルトB第4層	鉄・灰	銭壺	IIA	10	13	6	12	12	内面灰釉
615	VIID9f	トレンチD	鉄	鉢	-	-	*13.05	8.9	-	6	印 花押状
616	VIID10f	斜面（物原）上層	鉄	銭壺	IIA	12	13.6	7	5	12	印 「上」
617	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	銭壺	IIA	12.8	13.8	6.4	1	12	印 「上」
618	VIID9e	斜面（物原）下層	未施釉	銭壺	IIA	10.6	12.8	4.4	11	12	-
619	VIID9g	ベルトD第4層	鉄	銭壺	IIC	-	*5.7	7.1	-	12	角印と丸に「又」
620	VIID9g	斜面（物原）上層	鉄	銭壺	I	10	13.4	8	4	12	内面鎬釉
621	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	銭壺	I	9.3	13.05	8	3	12	-
622	-	試掘各段	鉄・灰	銭壺	IIC	-	*13.5	*5.6	-	12	印「下」、内面灰釉
623	-	試掘	鉄	銭壺	IIC	13.1	13.1	6.5	1	12	印「下」
624	-	試掘	鉄	銭壺	IIC	-	*9.25	6.8	-	12	印「下」
625	-	試掘T11	鉄	銭壺	IIC	-	*9.8	6.4	-	12	印 記号
626	-	試掘	鉄	銭壺	IIC	-	*7.4	5.9	-	12	印 記号
627	-	試掘T11	鉄	銭壺	IIC	-	*6.4	5.9	-	12	印 記号
628	-	試掘T8	鉄	銭壺	IIC	-	*6.3	6.1	-	12	印 記号
629	VIID9f	斜面上層	鉄	銭壺	IIC	-	*8.3	5.4	-	12	印 丸に小
630	-	試掘	鉄	銭壺	IIC	-	*6.4	5	-	12	印 丸に小
631	VIID9f	表土	鉄	銭壺	IIC	-	*2.2	6.1	-	12	印 丸に小
632	VIID9f	ベルトD第48層	鉄	銭壺	IIC	-	*4.2	5.6	-	10	印 丸に小
633	VIID9g	斜面上層	鉄	銭壺	IIC	-	*7.25	5.4	-	4	印 角に「小左衛門」
634	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	筒形容器	-	11.2	12.6	-	4	-	-
635	VIID11c	第4層no.178	-	栓	-	14	4.2	-	-	-	-
636	VIID9g	ベルトD第45層	鉄	壺鉢	C1	37.5	17.5	6	12	1	-
637	VIID11c	第4層no.440,ベルトB	鉄	壺鉢	C1	35	15.05	12.5	3	5	-
638	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	壺鉢	C2	36	5.3	-	1	-	-
639	VIID10d	青灰色シルト層	鉄	壺鉢	D1	29.9	6.2	-	2	-	-
640	VIID11c	ベルトB第4層no.441	錆	壺鉢	D2	30.4	15.3	11.8	2	4	-
641	VIID11c	ベルトB第4層no.432	鉄	壺鉢	?	28	13.9	9.2	10	12	-
642	VIID9e	斜面下層	錆	胴壺	-	10.0	*3.1	-	1	-	-
643	VIID9f	斜面下層	錆	胴壺	-	10.3	4.7	4.4	1	1	-
644	VIID9g	斜面下層	鉄	胴壺	-	14.0	*4.1	-	1	-	-
645	VIID9e	斜面下層	錆	胴壺	-	-	*2.4	4.4	-	4	-
646	VIID9f	斜面下層	錆	胴壺	-	-	*1.4	4.2	-	7	-
647	VIID9g	斜面（物原）下層	鉄	壺鉢（沼着）	F1	-	-	-	-	-	5個体
648	VIID10b	青灰色砂質土層	鉄	壺鉢	D1	26.5	10.45	9.4	5	12	-
649	VIID9f	トレンチD	錆	壺鉢	?	*36.2	*14.0	-	2	-	胎土緻密、硬質
650	-	試掘T.11	自然釉	壺鉢	?	*32.4	*6.95	-	1	-	胎土緻密、硬質
651	VIID9f	トレンチD,T11	鉄	壺鉢	?	*35.8	*6.7	-	2	-	胎土緻密、硬質
652	VIID9e,9f	ベルトE第41層,斜面下層	鉄	水指	-	12.8	*5.9	-	7	-	-
653	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	水指	-	14.2	6.7	-	4	-	-
654	VIID11a	第4層	鉄	建水・水指	-	15.2	7.5	6.9	1	4	手持ケズリ（丸ノミ）
655	VIID11b	第4層,第6層	鉄	建水・水指	-	13.2	*5.1	-	3	-	手持ケズリ（丸ノミ）
656	VIID9d	ベルトC第26層	鉄	建水・水指	-	14	6.8	-	3	-	-
657	VIID11a,9d,10c,d,11b,10d,10c	第4層、青灰色砂質土層、青灰色シルト層,黒灰色砂質土層	鉄	建水・水指	-	14.8	*8.3	8.0	3	5	-
658	VIID9d	青灰色シルト層	鉄・灰	建水・水指	-	14.4	16.2	14.8	1	3	-
659	VIID9e	ベルトC第26層	鉄	水指	-	26.4	*8.3	-	2	-	-
660	VIID9f	斜面下層	鉄	水指	-	22	*7.0	-	2	-	-
661	-	表土	鉄	水指	-	-	*8.7	-	-	-	-
662	VIID9d,10d,10b,11c,11a	第4層,青灰色シルト層,青灰色シルト層,黒灰色砂質土層,サブトレA,トレンチB	鉄	水指	-	18.4	*15.8	*13.9	2	*	蓋受つき、内面・高台付近油滴釉
663	VIID9e	斜面下層	素焼	風炉	-	31.0	7.4	-	2	-	-
664	VIID9g,9f,9d	ベルトD第39層,トレンチD,斜面下層,表土	素焼	風炉	-	-	15.0	-	-	7	墨書か
665	-	試掘	鉄	風炉	-	-	*10.1	-	-	-	-
666	VIID10d	青灰色シルト層		鋳型、窯部材か	-	6.9	3.0	9.8	-	-	-
667	VIID12c	第6層no.472	鉄	土管	-	14	15.1	-	4	-	-
668	VIID9d,e,10e	ベルトC第28,29層,ベルトD第26層,斜面下層,青灰色砂質土,青灰色シルト層	鉄	水壺	-	33.7	*30.9	-	7	-	-
669	VIID10,11,12b,10,12c	第4,6層,青灰色砂質土層	鉄	壺	-	40.1	27.7	33.1	2	7	-
670	VIID11b	第6層	素焼	茶入	F	3.4	9	4.3	11	12	黒斑あり、削込高台
671	VIID11b	第6層	素焼	茶入	F	3.5	*9.9	4.7	6	12	削込高台

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	最高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
611	中央部	南壁トレンチ内	鉄	鉄鉢	IIA	10.5	11.5	6.3	12	12	印 角に「一」
612	VIID11c	ベルトB第4層no.443	鉄	鉄鉢	IIA	11	12.5	6.6	12	12	印 重ね□
613	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	鉄鉢	IIA	11.4	13.5	7	6	12	印 重ね□
614	VIID11c	ベルトB第4層	鉄・灰	鉄鉢	IIA	10	13	6	12	12	内面灰釉
615	VIID9f	トレンチD	鉄	鉢		-	*13.05	8.9	-	8	印 花押状
616	VIID10f	斜面（物原）上層	鉄	鉄鉢	IIA	12	13.6	7	5	12	印『上』
617	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	鉄鉢	IIA	12.8	13.8	6.4	1	12	印『上』
618	VIID9e	斜面（物原）下層	未施釉	鉄鉢	IIA	10.6	12.8	4.4	11	12	
619	VIID9g	ベルトD第40層	鉄	鉄鉢	I	-	*5.7	7.1	-	12	内印と丸に「又」
620	VIID9g	斜面（物原）上層	鉄	鉄鉢	I	10	13.4	8	4	12	内面鎬輪
621	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	鉄鉢	I	9.3	13.05	8	3	12	
622		試掘表採	鉄・灰	鉄鉢	IIC		*13.5	*5.6		12	印『下』、内面灰釉
623		試掘	鉄	鉄鉢	IIC	13.1	13.1	6.5	1	12	印『下』
624		試掘	鉄	鉄鉢	IIC		*9.25	6.8		12	印『下』
625		試掘T11	鉄	鉄鉢	IIC		*9.8	6.4		12	印 記号
626		試掘	鉄	鉄鉢	IIC		*7.4	5.9		12	印 記号
627		試掘T11	鉄	鉄鉢	IIC		*6.4	5.9		12	印 記号
628		試掘T8	鉄	鉄鉢	IIC		*6.3	6.1		12	印 記号
629	VIID9f	斜面上層	鉄	鉄鉢	IIC		*8.3	5.4		12	印 丸に小
630		試掘	鉄	鉄鉢	IIC		*6.4	5		12	印 丸に小
631	VIID9f	表土	鉄	鉄鉢	IIC		*2.2	6.1		12	印 丸に小
632	VIID9f	ベルトD第48層	鉄	鉄鉢	IIC		*4.2	5.6		10	印 丸に小
633	VIID9g	斜面上層	鉄	鉄鉢	IIC		*7.25	5.4		4	印 角に「小左衛門」
634	VIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	焙烙型容器		11.2	12.6	-	4	-	
635	VIID11c	第4層no.178	-	柁		14	4.2	-	-	-	
636	VIID9g	ベルトD第45層	鉄	擂鉢	C1	37.5	17.5	6	12	1	
637	VIID11c	第4層no.440,ベルトB	鉄	擂鉢	C1	35	15.05	12.5	3	5	
638	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	擂鉢	C2	36	5.3	-	1	-	
639	VIID10d	青灰色シルト層	鉄	擂鉢	D1	29.9	6.2	-	2	-	
640	VIID11c	ベルトB第4層no.441	錆	擂鉢	D2	30.4	15.3	11.8	2	4	
641	VIID11c	ベルトB第4層no.432	鉄	擂鉢	?	28	13.9	9.2	10	12	
642	VIID9e	斜面下層	錆	擂鉢		10.0	*3.1	-	1	-	
643	VIID9f	斜面下層	錆	擂鉢		10.3	4.7	4.4	1	1	
644	VIID9g	斜面下層	鉄	擂鉢		14.0	*4.1	-	1	-	
645	VIID9e	斜面下層	錆	擂鉢		-	*2.4	4.4	-	4	
646	VIID9f	斜面下層	錆	擂鉢		-	*1.4	4.2	-	7	
647	VIID9g	斜面（物原）下層	鉄	擂鉢（羽書）	F1	-	-	-	-	-	5個体
648	VIID10b	青灰色砂質土層	鉄	擂鉢	D1	26.5	10.45	9.4	5	12	
649	VIID9f	トレンチD	錆	擂鉢	?	*36.2	*14.0	-	2	-	胎土緻密、硬質
650		試掘T11	自然釉	擂鉢	?	*32.4	*6.95	-	1	-	胎土緻密、硬質
651	VIID9f	トレンチD,T11	鉄	擂鉢	?	*35.8	*6.7	-	2	-	胎土緻密、硬質
652	VIID9e,9f	ベルトE第41層,斜面下層	鉄	水指		12.8	*5.9	-	7	-	
653	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	水指		14.2	6.7	-	4	-	
654	VIID11a	第4層	鉄	建水・水指		15.2	7.5	6.9	1	4	手持ケズリ（丸ノミ）
655	VIID11b	第4層,第6層	鉄	建水・水指		13.2	*5.1	-	3	-	手持ケズリ（丸ノミ）
656	VIID9d	ベルトC第26層	鉄	建水・水指		14	6.8	-	3	-	
657	VIID11a,9d,10c・d,11b,10d,10c	第4層、青灰色砂質土層,青灰色シルト層,暗灰色砂質土層	鉄	建水・水指		14.8	*8.3	8.0	3	5	
658	VIID9d	青灰色シルト層	鉄・灰	建水・水指		14.4	16.2	14.8	1	3	
659	VIID9e	ベルトC第26層	鉄	水指		26.4	*8.3	-	2	-	
660	VIID9f	斜面下層	鉄	水指		22	*7.0	-	2	-	
661		表土	鉄	水指		-	*8.7	-	-	-	
662	VIID9d,10d,10b,11c,11a	第4層,青灰色シルト層,青灰色シルト層,灰灰色砂質土層,サブトレA,トレンチD	鉄	水指		18.4	*15.8	*13.9	2	*	蓋受つき、内面・高台付近油錆釉
663	VIID9e	斜面下層	素焼	風炉		31.0	7.4		2	-	
664	VIID9g,9f,9d	ベルトD第39層,トレンチD,斜面下層,赤土	素焼	風炉		-	15.0	-	-	7	墨書か
665	-	試掘	鉄	風炉		-	*10.1	-	-	-	
666	VIID10d	青灰色シルト層	錆型、窯部材か			6.9	3.0	9.8	-	-	
667	VIID12c	第6層no.472	鉄	土管		14	15.1	-	4	-	
668	VIID9d,e,10e	ベルトC第28,29層,ベルトD第26層,斜面下層,青灰色砂質土,青灰色シルト層	鉄	水壺		33.7	*30.9	-	7	-	
669	VIID10,11,12b,10,12c	第4,6層,青灰色砂質土層	鉄	壺		40.1	27.7	33.1	2	7	
670	VIID11b	第6層	素焼	茶入	F	3.4	9	4.3	11	12	黒焼あり、削込高台
671	VIID11b	第6層	素焼	茶入	F	3.5	*9.9	4.7	6	12	削込高台

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (最・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
672	VIID12b	第6層no.8	素焼	茶入	F	4	9.7	5	8	12	右回転糸切
673	VIID9d	茶褐色シルト層no.31	素焼	茶入	F	3.7	9.8	4.5	12	12	黒炭あり、回転削り
674	VIID9g	第6層	素焼	茶入	F	3.4	9.35	4	5	12	右回転糸切
675	VIID9f,9f北	斜面下層	素焼	茶入	F	3.5	*9.45	-	1	-	
676	VIID12b	第6層no12	素焼	茶入	F	3.8	9.7	4.5	11	12	回転削り
677	VIID11b	第6層	素焼	茶入	F	-	*8.8	4.2	-	3	黒炭あり、右回転糸切
678	VIID12b	第6層no.13	素焼	茶入	F	3.9	9	5	4	12	黒炭あり、ヘラ描、右回転糸切
679	VIID11b	黄灰色砂質土層	素焼	茶入	F	4.4	8.2	4.1	5	6	回転削り
680	VIID10g	黄灰色細砂層	素焼	茶入	F	3.6	8.4	4.4	12	12	回転削り
681	中央部	南側トレンチ内	素焼	茶入	F	-	*7.5	3.3	-	12	右回転糸切
682	VIID11b	第6層	素焼	茶入	F	3.4	*4.1	-	3	-	黒炭あり
683	VIID9f	トレンチD	素焼	茶入	F	3	*3.2	-	3	-	
684	VIID9e	斜面下層	素焼	茶入	F	3.4	*3.5	-	3	-	
685	VIID9f	斜面下層	素焼	茶入	F	-	*2.8	3.9	7	7	右回転糸切
686	VIID9f	ベルトE第48層	鉄	茶入	B	3.1	*4.1	-	12	-	
687	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入	B	2.9	*2.9	-	2	-	
688	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	B	2.5	*2.7	-	4	-	
689	VIID11d	第4層no.227	鉄	茶入	B	-	*7.4	3.4	-	12	回転削り
690	VIID9f北	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*1.9	3.2	-	12	回転削り
691	試掘	T18	鉄	茶入	B	-	*4.6	3.1	-	8	回転削り
692	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*3.3	2.7	-	6	右回転糸切
693	VIID12c	第4層	鉄	茶入	B	3.5	8.6	3.8	1	12	右回転糸切
694	VIID10e	第6層	鉄	茶入	B	3.2	9.8	4.6	12	12	回転削り
695	VIID9g	斜面下層	鉄	茶入	B	3.8	*5.8	-	2	-	
696	VIID12c	第4層	鉄	茶入	B	-	*6.1	3.8	-	5	回転削り
697	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	茶入	B	3	*3.6	-	-	-	
698	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	B	3.3	*3.3	-	2	-	
699	VIID10b	第4層no.131	鉄	茶入	B	3.8	8.8	3.6	5	12	右回転糸切
700	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	茶入	B	-	*7.6	3.8	-	5	回転削り
701	VIID9f	ベルトE第40層	鉄	茶入	B	3.4	*4.1	-	12	-	
702	VIID9f北	斜面下層	鉄	茶入	B	3.8	*4.5	-	3	-	
703	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*7.35	3.6	-	-	（回転削り）
704	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*4.2	3.3	-	5	回転削り
705	VIID10b	第4層no.136	鉄	茶入	B	-	*7	3.4	-	12	右回転糸切
706	VIID9f北	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*4.15	3.45	-	6	回転削り
707	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*5.2	3.4	-	12	右回転糸切
708	VIID12b	第6層	鉄	茶入	B	-	(5.3)	3.4	-	12	右回転糸切
709	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*5.2	4	-	4	回転削り
710	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入	B	-	*3.2	4	-	12	回転削り
711	VIID9h	表土	鉄	茶入	A	2.3	6.2	2.6	12	6	右回転糸切
712	VIID9f北 10f	表土 トレンチ	鉄	茶入（甑単）	A	2.3	*5	-	8	-	
713	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	茶入（甑単）	A	2.4	*3.6	-	1	-	
714	VIID9f	トレンチD	鉄	茶入（甑単）	A	-	*4	2.5	-	7	右回転糸切
715	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	茶入	A	1.8	*4.7	-	12	-	
716	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	A	-	*5.1	2	-	12	右回転糸切
717	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入	A	-	*4.05	2.5	-	12	右回転糸切
718	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入(丸壺)	A	2.7	*4.8	-	3	-	
719	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入(丸壺)	A	-	*4.4	3	-	4	右回転糸切
720	VIID9f北	斜面下層	鉄	茶入(丸壺)	A	-	*4.1	2.6	-	5	右回転糸切
721	VIID9f北	斜面下層	鉄	茶入	A	2.5	*4.7	-	6	-	
722	VIID9f	トレンチD	鉄	茶入	A	2.2	*3.7	-	3	-	
723	VIID9f	ベルトD第44層	鉄	茶入	A	2.3	*3.9	-	12	-	
724	VIID9f北	斜面下層	鉄	茶入	A	2.8	*4.4	-	2	-	
725	VIID10f	トレンチD	鉄	茶入	A	-	*5.3	2.5	-	12	右回転糸切
726	VIID9h	斜面上層	鉄	茶入（鍋首）	A	2.9	5.85	2.5	10	12	右回転糸切
727	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	茶入（提瓶）	A	3.4	*2.8	-	3	-	
728	VIID9e	第28層	鉄	茶入（提瓶）	A	3.5	*3	-	4	-	
729	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	茶入	A	3.2	*4	-	3	-	
730	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	A	2.6	*4.5	-	12	-	
731	VIID9h	表土	鉄	茶入 灰釉	A	2.4	*5.1	-	5	-	
732	VIID9g	斜面（物原）上層	鉄	茶入	A	2.6	*5.7	-	4	-	
733	VIID9f	トレンチD	鉄+灰	茶入	A	-	*5.3	2.6	-	5	右回転糸切
734	VIID9g	撹乱土	鉄	茶入（耳付）	A	4.6	7.1	3.6	12	12	右回転糸切
735	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入（耳付）	A	2.8	*2.8	-	2	-	
736	VIID9e	斜面下層	鉄(釉)	茶入（耳付）	A	3	*3.1	30529	3	-	
737	VIID10e	第28層	鉄	茶入	A	2.6	*3.8	-	9	-	
738	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	茶入	A	2.9	*5.2	-	9	-	
739	VIID9f	ベルトE第43層	鉄	茶入	A	-	*4.8	4.8	-	12	右回転糸切
740	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	A	-	*3.3	-	-	12	（右回転糸切）
741	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	A	2.8	*3.5	-	5	-	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径（縦・上部）	器高（厚み）	底径（横・下部）	口/12（上部）	底/12（下部）	備考
742	VIIID9g	ベルトD第40層	鉄	茶入	A	2.8	*3.9	-	8	-	
743	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	A	3.2	*3.8	-	1	-	
744	VIIID9f	トレンチD	鉄	茶入	A	4	*3.2	-	3	-	
745	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入	A	3.4	*4.6	-	6	-	
746	VIIID10g	ベルトD第40層	鉄	茶入	A	3.2	*4.6	-	3	-	
747	VIIID11b	灰色砂質土層	鉄	茶入(?)	A	3.4	*3.7	-	4	-	
748	VIIID11b	第6層	鉄	茶入	A	3	7.6	3.8	12	12	回転削り
749	VIIID11b	第6層	鉄（錆）	茶入	A	3.3	9.1	3.1	11	12	右回転糸切
750	VIIID9d	ベルトC第26層 青灰色シルト層	鉄	茶入	A		*5.05	4.15		12	削込高台、輪糸切
751	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	2.2	*4.6	-	5	-	
752	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入（鬆単）	C	2	*2.6	-	6	-	
753	VIIID9g	斜面上層	鉄	茶入(丸壺形？)	C	3.9	*4	-	1	-	
754	VIIID10f	斜面（物原）上層	鉄二重掛	茶入(丸壺)	C	3	*6.1	-	1	-	
755	VIIID9f	斜面下層	鉄二重掛	茶入（胴締形）	C	3	*5.4	-	2	-	
756	VIIID9g	ベルトD第37層	鉄	茶入（胴締形）	C		*3.6	-	-	-	
757	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*3.4	2.3	-	12	右回転糸切
758	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入(丸壺)	C	-	*3.35	2.3	-	8	右回転糸切
759	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*2.6	2.2	-	12	右回転糸切
760	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入(丸壺)	C	-	*4.2	2.5	-	2	右回転糸切
761	VIIID9d	青灰色シルト層	鉄	茶入	C	5.6	*3.2		3	-	
762	VIIID10c 9d	北壁 地山直上	鉄	茶入（横首?）	C	2.8	*7.4		7	-	
763	VIIID9f	斜面（物原）下層	鉄	茶入（燈座）	C	2.8	*3.4		5	-	
764	VIIID9e	斜面（物原）下層	鉄	茶入（燈座）	C	3.1	*3.5		1	-	
765	VIIID11e	第4層no.388	鉄	茶入	C		*3.95	3.8		12	右回転糸切
766	VIIID10c	第4層	鉄	茶入（耳付）	C	2.7	*6.8	-	8	-	
767	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	3.4	*3.9	-	4	-	
768	VIIID9f	表土	鉄	茶入	C	-	*3.6	3	-	3	
769	VIIID11c	ベルトB第18層	鉄+灰	茶入（灰那？）	C	-	*4.1	3.2	-	12	右回転糸切
770	VIIID12b	第6層no.11	鉄	茶入	C	3.9	9.1	5	6	12	右回転糸切
771	VIIID9f北	斜面（物原）下層	鉄	茶入	C	3.8	*5.3	-	4	-	
772	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	4	*5.7	-	1	-	
773	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入	C	4	*2.2	-	6	-	
774	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*6.5	3.7	-	9	右回転糸切
775	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*5.4	4.5	-	12	回転削り
776	VIIID9e	第6層	鉄	茶入	C	3.9	9.6	4.4	12	12	不明
777	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入	C	3.5	*5.5	-	4	-	
778	VIIID13a	灰赤粗粒砂層	鉄	茶入	C	2.7	*7.2	-	2	-	
779	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入	C	4	*7.3	-	6	-	
780	VIIID11d	青灰色砂質土層	鉄	茶入	C	-	8.7	4.9	-	12	不明
781	VIIID10e	第4層no.345	鉄	茶入	C	3.6	8.1	3.5	10	12	右回転糸切
782	VIIID9e	第28層	鉄	茶入	C	3.1	8	3.1	2	12	右回転糸切
783	VIIID9f	斜面上層	鉄	茶入	C	3	*6.4	-	2	-	
784	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入	C	2.9	*5.3	-	12	-	
785	VIIID12b	第4層	鉄	茶入	C		*5.2	3.4		12	右回転糸切
786	VIIID11b	第6層	鉄	茶入	C	-	*5.5	3.4	-	8	回転削り
787	VIIID11b	第6層	鉄	茶入	C	4.4	8.6	3.7	4	12	右回転糸切
788	VIIID10e	第6層	鉄	茶入	C	3.4	8.4	3.7	6	12	回転削り
789	VIIID9f	トレンチD	鉄	茶入	C	2.9	*7.4	-	2	-	
790	VIIID9f	斜面（物原）下層	鉄	茶入	C	3.4	*7.7	-	6	-	
791	VIIID9f	斜面（物原）下層	鉄	茶入	C	2.8	*4.5	-	5	-	
792	VIIID9f	斜面下層・トレンチD	鉄	茶入	C	3	8	2.4	3	7	右回転糸切
793	VIIID9e	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*6.9	2.5	-	12	右回転糸切
794	VIIID9f	トレンチD	鉄	茶入	C		*6.1	2.5		5	右回転糸切
795	VIIID9e	表土	鉄	茶入	C		*4.4	2.7		12	右回転糸切
796	VIIID9d	ベルトC第26層	鉄	茶入	C		*6.9	2.8		12	右回転糸切
797	VIIID9f	トレンチD	鉄	茶入	C	-	*5.7	2.8	-	7	右回転糸切
798	VIIID9g	ベルトD第40層	鉄	茶入	C	2.4	*6.8	-	4	-	
799	VIIID9e	表土	鉄	茶入	C	3	*3.1	-	4	-	
800	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	2.8	*4.9	-	6	-	
801	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	2.5	*3.35	-	6	-	
802	VIIID9f	トレンチD	鉄	茶入	C	-	*6.9	2.3	-	8	右回転糸切
803	VIIID9f	トレンチD	鉄	茶入	C	-	*3.6	2.7	-	12	右回転糸切
804	VIIID9d	ベルトC第26層	鉄	茶入	C		*6.75	2.4		12	右回転糸切
805	VIIID9f	斜面下層	鉄	茶入	C	2.6	*5.9	-	9	-	
806	試掘	T8	鉄	茶入	C	2.1	*4.9	-	12	-	
807	VIIID9f	トレンチD	鉄	茶入	C	2.6	*4.9	-	4	-	
808	VIIID9f	トレンチ	鉄	茶入	C	-	*6.7	2.6	-	6	右回転糸切

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
809	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*4.4	2.6	-	12	右回転糸切
810	VII09g	ベルトD第41層	鉄	茶入	C		*3.3	2.8		6	右回転糸切
811	VII09e	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*5.8	4.2	-	5	右回転糸切
812	VII09f	斜面上層	鉄	茶入(字字)	C	2.7	*5.2	-	2	-	
813	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	C	2.5	*5.1		5		
814	試掘	T3	鉄	茶入	C	2.2	*4.5	-	12		
815	VII09f	表土	鉄	茶入	C	-	*5.6	3.2	-	6	右回転糸切
816	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*5.2	2.6	-	12	右回転糸切
817	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	C	-	*4.4	3	-	9	右回転糸切
818	VII09g	ベルトB第40層	鉄	茶入	C		*5.5	3		12	右回転糸切
819	VII011b	第6層	鉄	茶入	C		*4.8	4.1		12	右回転糸切
820	VII012c	第6層no.481	鉄	茶入	C		*3.1	3.2		12	右回転糸切
821	中央部	南側トレンチ内		茶入 (酷単)	D	2.8	*7.3	-	5	-	
822	試掘		鉄	大海茶入		8.9	7.6	5.8	12	12	削込高台
823	VII09f	ベルトE第54層	鉄	茶入	D	2.7	8.9	3.6	1	9	右回転糸切
824	VII010d	第4層no.215	鉄	茶入	D	3.5	9.3	4.5	9	12	右回転糸切
825	VII010d	第4層	鉄	茶入	D	4.2	11.25	4.4	9	12	右回転糸切
826	VII011d,12b	第4,6層	鉄	茶入 (胴締形)	D	3.4	8.4	3.4	2	12	右回転糸切
827	VII011c 14c	第4層	鉄+灰	茶入	D	3	9	4.4	1	7	右回転糸切
828	試掘		鉄	茶入	D	3	8.6	3.2	12	12	右回転糸切
829	VII09d	青灰色シルト層	鉄	茶入	D	3.4	8.3	4.1	6	6	回転削り
830	VII011b	第4層no.46	鉄	茶入	D	3.3	8.3	3.5	11	12	右回転糸切
831	VII010e	第4層no.346	鉄	茶入	D	3.5	8.4	3.9	7	12	回転削り
832	VII09h	表土	鉄	茶入		2.6	6.7	3.2	4	5	右回転糸切
833	VII011b	暗灰色砂質土層	鉄	茶入	D	3.6	7.3	3.2	4	12	右回転糸切
834	VII09f北	斜面（物原）下層	鉄	茶入	D	4.3	8	4.8	6	6	右回転糸切
835	VII09f	斜面（物原）下層	鉄	茶入	C	3.7	8.6	4.6	4	5	回転削り
836	VII011b	第6層	鉄	茶入	D	3.3	8.7	4.6	9	12	右回転糸切
837	VII011c	第4層	鉄	茶入	D	4	8.5	4.2	11	12	右回転糸切
838	VII09d	青灰色シルト層	鉄	茶入	D	3.8	*7.8	-	3	-	
839	VII011c	ベルトB第18層	鉄	茶入	D	3.4	*7.7	-	7	-	
840	VII09e	斜面下層	鉄	茶入	D	3.6	*7.7	-	3	-	
841	VII09f	表土	鉄	茶入	D	3.6	*5.9	-	3	-	
842	VII09e	斜面（物原）下層	鉄	茶入	D	3.4	*3.9	-	4	-	
843	VII09f北	斜面下層	鉄	茶入	D	3.8	*4.7		6		
844	VII09f	表土	鉄	茶入	D	3.8	*6.65	-	2	-	
845	VII011c	第4層,ベルトC第20層	鉄	茶入	D	3.1	*7.5		6		
846	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	D	4.8	*3.5		1		
847	VII09d	ベルトC第26層	鉄	茶入	D	3.8	*7.1	-	4	-	
848	VII09e	第23層	鉄	茶入	D	-	*7.4	3.8	-	12	右回転糸切
849	VII09f	ベルトE第22,23層	鉄	茶入	D	3.2	*6.7		6		
850	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	D	-	*7.8	-	-	-	
851	VII011c	第4層	鉄	茶入	D		*7.2	3.5		12	回転削り
852	VII09d	ベルトC第26層	鉄	茶入	D		*7.2	3.8		12	回転削り
853	VII011b	第6層	鉄	茶入	D		*7.8	4.4		12	右回転糸切
854	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	D		*5.8	4.6		12	右回転糸切
855	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	D	2.9	*1.6	-	1	-	
856	VII011b	第6層	鉄	茶入	D	-	*7.4	3.6	-	12	右回転糸切
857	VII09e	斜面下層	鉄	茶入	D	-	*4.7	3.1	-	12	右回転糸切
858	VII09e	第4層	鉄	茶入	D	3.4	10.2	4.1	1	12	右回転糸切
859	VII011b	第6層	鉄	茶入	D		*8.85	3.8		5	右回転糸切
860	VII011b	第6層	鉄	茶入	D	-	*8.3	4.1	-	7	右回転糸切
861	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	D		*4.7	3.7		12	右回転糸切
862	VII09d	ベルトC第26層	鉄	茶入	D		*6.5	4		12	回転削り
863	VII09f	表土	鉄	茶入	D	-	*5.8	3.2	-	5	回転削り
864	VII011b	暗灰色砂質土層	鉄	茶入	D		*8.1	3.1		12	右回転糸切
865	VII09f	ベルトD最底土	鉄	茶入	D		*7	3.2		5	回転削り
866	VII010c	ベルトB第22層	鉄	茶入	D		*4.9	3.7		12	右回転糸切
867	VII010c	第4層	鉄	茶入	D		*7.8	3.4		6	不明
868	VII010c	青灰色砂質土層	鉄	茶入	D	-	*7.6	2.8	-	12	右回転糸切
869	VII09e	斜面下層	鉄	茶入	D	-	*6	2.3	-	12	右回転糸切
870	VII011a	暗灰色砂質土層	鉄	茶入	D	-	4.1	3.4	-	8	右回転糸切
871	VII010d	青灰色シルト層	鉄	茶入	D		*4.9	3.6		5	右回転糸切
872	VII09e	斜面下層	鉄	茶入	D	-	*5.2	3.6	-	12	右回転糸切
873	VII09e	斜面下層	鉄	茶入	D		*4.9	5.9		6	右回転糸切
874	VII010c	第4層	鉄	茶入	D	2.8	7.3	3.1	1	12	削込高台
875	VII09e	トレンチE	鉄	茶入	D	-	*7.1	3	-	12	削込高台
876	VII09f	斜面下層	鉄	茶入	D	-	*3.1	-	-	-	削込高台
877	VII09f	トレンチ	鉄	茶入	D	2.5	*5.5	-	6	-	
878	VII09f	斜面下層,表土	鉄	茶入	D	4	*5.6	-	9	-	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
879	VIID11c	ベルトB第18層	鉄	施入	D		*6.3	3.4		12	回転削り
880	VIID9f	斜面下層	鉄	施入	D	3.95	*5.7	-	12	-	
881	VIID9f	斜面下層	鉄	施入	D	4	*4.9	-	3	-	
882	VIID9f	斜面下層	鉄	施入	D	3.7	*5	-	3	-	
883	VIID10f	第6層	鉄	施入	D		*6.2	5		12	回転削り
884	VIID9f	トレンチD,ベルトD(崩落土)	鉄	施入	D	-	*6.5	5.5	-	7	右回転糸切
885	VIID11d	第4層	鉄	施入	D	3.2	*5.6	-	3	-	
886	VIID9e	斜面下層	鉄	施入	D	3.5	*4.4	-	3	-	
887	VIID9f北	表土	鉄	施入	D		*5.7	2.9		12	右回転糸切
888	VIID11a	暗灰色砂質土層	鉄	施入	D	-	4.9	4.2	-	8	右回転糸切
889	VIID11c	トレンチB	鉄	施入	D		*5.4	4.3		12	右回転糸切
890	VIID10c,d	第4層	鉄	施入	E	2.7	4.3	3.8	5	12	右回転糸切
891	VIID9h	ベルトF斜面下層	鉄	施入（胴締形）	E	-	*5.6	3.8	-	12	右回転糸切
892	VIID11c	第4層no.105,トレンチB	鉄	施入	E	3.7	9.7	4.1	2	12	右回転糸切
893	VIID10e	斜面下層	鉄	施入	E	3.6	9.3	3.9	2	12	右回転糸切
894	VIID9f	ベルトE第55層	鉄	施入	E	3.3	9.3	4.2	12	12	右回転糸切
895	VIID11b	第6層	鉄	施入	E	3.4	8.6	3.8	12	10	回転削り
896	VIID9d	ベルトC第26層	鉄	施入	E	-	*8.7	4.4	-	11	右回転糸切
897	VIID9e	斜面下層	鉄	施入	E	-	8.15	3.8	-	6	右回転糸切
898	VIID11b	第6層	鉄	施入	E	4.8	8.2	3.9	7	12	右回転糸切
899	VIID11a	第6層no.5	鉄	施入	E	3.55	8.4	4.4	12	12	右回転糸切
900	VIID11c	ベルトB第4層no.444 第18層	鉄	施入	E	4.2	8.65	4	6	4	右回転糸切
901	VIID12b	第6層no.51	鉄	施入	E	3.5	8.2	4.2	5	12	右回転糸切
902	VIID12b	第6層no.9	鉄＋灰	施入	E	3.4	8.3	3.8	10	12	右回転糸切
903	VIID9e	トレンチE	鉄	施入	E	3.8	8.2	4.5	9	12	右回転糸切
904	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	施入	E		*7.4	3.5		8	回転削り
905	VIID9f	斜面下層	鉄	施入	E	3.7	8.1	4.2	2	12	右回転糸切
906	VIID11g	第4層	鉄	施入	E	3.1	6.1	3.2	6	5	右回転糸切
907	VIID9e 9f	斜面下層	鉄	施入	E	2.9	7.4	3.8	3	12	右回転糸切
908	VIID12c	第6層no.190	鉄	施入	E	3.7	7.45	4.2	8	12	回転削り
909	VIID9d	ベルトC第26層	鉄	施入	E		*7.2	3.8		12	右回転糸切
910	VIID9d	焼山層上	鉄	施入	E		*6.3	3.6		12	回転削り
911	VIID9g	表土	鉄	施入	E	3.5	*6.2	-	4	-	
912	VIID9f	トレンチD	鉄	施入	E	3	*4.8	-	1	-	
913	VIID9f,9f北	トレンチ,斜面下層	鉄	施入	E	3.4	*4.6	-	7	-	
914	VIID9e	斜面下層	鉄	施入	E	2.9	*5.5		6	-	
915	VIID9f	トレンチD	鉄	施入	E	3	*5.9	-	3	-	
916	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	施入	E	3.2	*6.8	-	2	-	
917	VIID9h	斜面上層	鉄	施入	E		*7.3	3.4		12	右回転糸切
918	VIID9d	ベルトC第26層	鉄	施入	E	4	8.85	3.8	2	12	右回転糸切＋手持削り
919	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	施入	E	3.7	8.35	4	6	12	右回転糸切
920	VIID9g	第6層	鉄	施入	E	3.2	*5.7	-	12	-	
921	VIID9f	トレンチ	鉄	施入	E	3	*3.4	-	10	-	
922	VIID9d	ベルトC第26層	鉄	施入	E	3.6	*7.9	-	6	-	
923	VIID11a	第4層	鉄	施入	E	4	*4	-	5	-	
924	VIID12b	第6層	鉄	施入	E	3.3	*6.6	-	3	-	
925	VIID9f	斜面下層	鉄	施入	E	-	*5.7	5.3	-	12	右回転糸切
926	VIID9f	表土	鉄	施入	E	3.3	*5.3	-	4	-	
927	VIID9f北	斜面下層	鉄	施入	E	-	*4.9	3.1	-	12	回転削り
928	VIID11b	第6層	鉄(胎釉)	施入	E	3.8	*5.7	-		-	
929	VIID10e	ベルトC第25層	鉄	施入	E	3.6	*5.6	-	6	-	
930	VIID11a	第4層	鉄	施入	E	3.6	*8.2	-	2	-	
931	VIID9e	斜面下層	鉄	施入	E		*6.9	4.5		12	右回転糸切
932	VIID9e	第2b層	鉄	施入	E	3.2	*4.2	-	9	-	
933	VIID10d	第4層	鉄	施入	E	4	*7.1	-	4	-	
934	VIID9f	斜面下層・トレンチD	鉄	施入	E	3.5	*4.5		6	-	
935	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	施入	E		6.7	4.6		12	右回転糸切
936	VIID9f北	斜面下層	鉄	施入	E	-	*5.4	3.5	-	12	右回転糸切
937	VIID11,12b	第6層	鉄	施入	E	4.2	8.3	5.2	1	8	右回転糸切
938	VIID9e	第2b層	鉄	施入	E	3.1	8.6	4.5	7	12	右回転糸切
939	VIID11d	第4層	鉄	施入	E	3	8.6	5.2	1	12	右回転糸切
940	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	施入	E	4.05	*5		6		
941	VIID9f	斜面下層	鉄	施入	E	3.7	*5.8	-	5	-	
942	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	施入	E		*7.4	3.5		12	右回転糸切
943	VIID10e	ベルトC第25層	鉄(胎釉)	施入(手子?)	E	4	*7.5	-	4	-	
944	VIID9f	トレンチD	鉄	施入	E	4.7	*3.8	-	8	-	
945	VIID9f 9e	斜面下層	鉄	施入	E	5	*3.1		6		

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
946	VIID11d	第4層	鉄	茶入(挿子?)	E	3	*4.4	-	5	-	
947	VIID9g	ベルトD第39層	鉄	茶入	E		*4.7	3.3		5	右回転糸切
948	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入	E		*5.7				
949	VIID9f2c	斜面下層	鉄	茶入	E	-	*4.3	4	-	6	右回転糸切
950	VIID10c	青灰色砂質土層	鉄	茶入	E		*4.9	3.2		12	削込高台
951	VIID9e	斜面下層	鉄	茶入	E		*4	3.2		12	右回転糸切
952	VIID10e	斜面下層	鉄	茶入	E		*4.5	3.7		12	右回転糸切
953	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	E	-	*3.5	3.4	-	12	右回転糸切
954	VIID9f	斜面下層	鉄	茶入	E	-	*4.3	3.5	-	4	右回転糸切
955	VIID9e	斜面（物原）下層	錆	瓦		18.0	2.3	18			
956	VIID9g,9e	ベルトD第26層,第6層	錆	瓦		21.6	1.8	15			
957	VIID10b	第4層no.148	錆	瓦		17.0	1.8	14.8			
958	VIID11c	ベルトB第18層	錆	瓦		10.6	1.8	12.6			
959	VIID9d	青灰色シルト層	錆	瓦		15.6	1.7	8.5			
960	VIIdf9e,9d,12b	斜面下層,ベルトC第26層、第4層	錆	瓦		15.0	1.5	23			
961	VIID10b	第4層	錆	瓦		7.9	1.4	4.7			
962	VIID10c,10d,12c	青灰色シルト層,第6層,青灰色砂質土層	鉄	瓦		25.8	1.7	29.7			
963	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄	瓦		24.0	2.0	40			
964	VIID10b	青灰色砂質土層	鉄	瓦		11.2	1.9	29.2			
965	VIID10c	青灰色砂質土層	錆	瓦		13.0	2.0	15.5			
966	VIID9f	斜面（物原）下層	錆	磚		17.2	2.5	14			
967	VIID10b	青灰色シルト層	鉄	瓦		3.8	1.6	5.1			
968	VIID9h	表土	鉄	磚		22.7	2.1	15.9			
969	VIID9d	土壁	錆	瓦		10.0	1.7	9.3			
970	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	瓦		16.8	1.8	11.8			
971	VIID10b	青灰色砂質土層	錆	瓦		11.1	1.5	15			
972	VIID9d	青灰色砂質土層	鉄	瓦		10.7	1.5	12			
973	VIID9e	斜面（物原）下層	錆	瓦		14.0	2.0	14.3			
974	VIID13a	トレンチ	錆	瓦		9.8	1.6	15			
975	VIID10c,12b	第4層,青灰色砂質土層	錆	瓦		21.1	1.6	6.9			
976	VIID9d	土壁	鉄	瓦		15.1	1.7	10.4			
977	VIID9d	青灰色砂質土層	鉄	瓦		7.4	1.7	7.3			
978	VIID10b	第4層	鉄	瓦		4.7	1.8	7			
979	VIID9d	ベルトC第26層	錆	茶釜		-	6.6	-	-	-	980と同一個体
980	VIID9e,10e	斜面下層	錆	茶釜		12.6	18.5	11.8	4	2	979と同一個体
981	VIID10c,11b,9f,12b,11c	ベルトB第24層,22層,トレンチB,トレンチD,青灰色砂質土層,褐灰色砂質土層,第4層,第6層,焼出面	-	茶釜		13	20	-	2	-	スス、コゲ付着
982	VIIdf9e,9d,12b	斜面（物原）下層,ベルトC第26層,第4層	錆	茶釜		-	3.4	-	-	-	
983	VIID10b,12a,12b	第4層,第6層,褐灰色砂質土層	-	茶釜		14.5	13.8	-	5	-	スス付着
984	VIIdf9e,9g	斜面上層,斜面下層、ベルトD第41層	無釉	茶釜		13.8	*9.4		2		スス、コゲ付着
985	VIID9f	表土		内耳鍋		23.6	10	-	1	-	スス付着
986	VIID9f	斜面（物原）下層	土師質	皿		12.2	3.3	5.3	3	12	スス付着
987	VIID10d	青灰色シルト層no.43	土師質	皿		10.2	3.25	5.4	11	12	スス付着
988	VIID9e	トレンチC東サブトレ	土師質	皿		6.6	1.4	4.1	9	12	
989	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	5.2	0.9	3.8	8	12	
990	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	5.3	0.9	4.2	12	12	
991	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	5.1	0.9	3.9	12	12	
992	VIID10h	ベルト下第6層	土師質	皿	B	4.9	0.8	3.9	8	12	
993	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	4.6	1	3.7	12	12	
994	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	4.7	0.8	3.7	12	12	
995	VIID10h	第6層	土師質	皿	B	5.1	0.8	3.7	9	12	
996	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	4.8	0.7	4.2	11	12	
997	VIID9g	ベルトD第45層	土師質	皿	B	5	0.85	3.7	10	12	
998	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	4.6	0.8	3.8	9	9	
999	VIID9h	第6層	土師質	皿	B	4.9	0.8	4	9	12	
1000	VIID10c	第4層	土師質	内耳鍋		23	2.8	-	1	-	
1001	VIID11b	第4層	土師質	内耳鍋		24	*3.7	-	1	-	
1002	VIID10g	斜面（物原）下層	土師質	内耳鍋		22	*5.2	-	2	-	スス、コゲ付着
1003	VIID11b　11c	第4層　褐灰色砂質土層	土師質	内耳鍋		23.3	13.6	9	5	10	スス、コゲ付着
1004	VIID11b	第4層	土師質	鍋		22.4	2.8	-	2	-	スス付着
1005	VIID10c	青灰色砂質土層	土師質	焙烙		28	*4.5	-	1	-	
1006	VIID11b,12b,13b	第4層	土師質	焙烙		29.4	6	14	1	10	スス付着
1007	VIID9f	斜面下層	土師質	焙烙		40	*3.5	-	3	-	
1008	VIID9e	斜面（物原）下層	土師質	焙烙		-	*	-	1	-	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径（縦・上部）	器高（厚み）	底径（横・下部）	口/12（上部）	底/12（下部）	備考
1009	VIID10b	青灰色シルト層	土師質	焙烙		-	"	-	1	-	
1010	VIID9e	斜面（物原）下層	土師質	焙烙		-	"	-	1	-	
1011	VIID9e	表土	土師質	焙烙		-	"	-	1	-	
1012	VIID9h	第6層,ベルトF	土師質	皿	A	10.7	2.4	5.1	5	7	
1013	VIID9e	第6層	土師質	皿	A	10.4	2.35	4.8	5	7	
1014	VIID9e	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	10.8	2.3	5.4	4	3	
1015	VIID9g	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	10.8	2.15	5.8	2	5	
1016	VIID9g	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	10.8	2.35	5.4	4	5	
1017	VIID9g	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	11	5.8	6.1	8	9	
1018	VIID9g	ベルトD第45層	土師質	皿	A	11.1	2.4	5.5	5	6	
1019	VIID9g	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	10.8	2.4	5	6	12	
1020	VIID9g	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	10	2.2	5	5	6	
1021	VIID9j	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	10.1	1.8	1.8	3	3	
1022	VIID9h	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	10.9	2.3	5.1	1	5	破面が摩滅
1023	VIID9f	ベルトE第55層	土師質	皿	A	10.7	2.2	5.7	10	12	
1024	VIID9g	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	10.7	2.5	6	1	4	
1025	VIID9g	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	10.4	2.4	4.9	3	4	
1026	VIID10e	第28層	土師質	皿	A	11	2.4	5.8	2	5	
1027	VIID9h	第6層	土師質	皿	A	-	1.9	5.3	-	12	
1028	VIID9h	ベルトF第6層	土師質	皿	A	11.2	2.4	5.3	2	5	
1029	VIID9e	第6層	土師質	皿	A	10.85	1.95	5	6	8	
1030	VIID9g	第6層	土師質	皿	A	10.9	2.2	5	2	3	
1031	VIID9g	第6層	土師質	皿	A	10.6	2.05	5.2	9	12	
1032	VIID9g	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	11.2	2.4	5.8	4	5	
1033	VIID9g	崩落土	土師質	皿	A	11.1	2.6	6.5	4	4	
1034	VIID9h	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	11.2	2.2	5.2	3	4	
1035	VIID9h	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	10.7	2.3	5.2	11	12	
1036	VIID10e	第4層	土師質	皿	A	11	2.3	5.6	4	5	
1037	VIID9g	崩落土	土師質	皿	A	11	2.2	5.8	3	5	
1038	VIID9h	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	11	2.4	5.6	4	3	
1039	VIID9g	第6層	土師質	皿	A	11.3	2.2	5.1	10	12	
1040	VIID9g	第6層	土師質	皿	A	10.8	2.1	5.8	2	2	
1041	VIID9g	第6層,斜面上層	土師質	皿	A	10.8	2.3	6	2	6	
1042	VIID10f	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	11	2.2	7	4	3	
1043	VIID9h	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	10.9	2.3	5.4	7	6	1022と同一個体
1044	VIID9g	第6層	土師質	皿	A	11.3	2.4	6	3	3	
1045	VIID12b	排水溝	土師質	皿	A	11.2	2.6	6.8	3	6	内面全体にスス付着
1046	VIID12b	第6層	土師質	皿	A	11.6	2.35	6.3	5	9	
1047	VIID9h	第6層,ベルトF	土師質	皿	A	11.3	2.5	5.3	5	7	
1048	VIID9e	表土	土師質	皿	A	11.6	2.45	6	3	4	
1049	VIID9e	第6層	土師質	皿	A	11.6	2.15	6	4	4	
1050	VIID9g	崩落土	土師質	皿	A	11.3	2.4	5.5	1	3	
1051	VIID9h	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	11.6	2	-	2	-	
1052	VIID10e	第4層	土師質	皿	A	12	2.35	5.8	3	2	
1053	VIID9g	斜面（物原）下層	土師質	皿	A	11.6	1.9	-	3	-	
1054	VIID9g	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	11.8	2.1	5.9	3	3	
1055	VIID9h	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	11.8	2.1	5.7	6	6	
1056	VIID9g	斜面（物原）上層	土師質	皿	A	11.2	2.3	5.9	7	7	
1057	VIID9h	第6層	土師質	皿	A	10	2.1	4.8	2	4	
1058	VIID11b	暗灰色砂質土層	鉄	水滴		7.1	1.9	5.6	-	-	
1059	VIID10c 11a	第4層 暗灰色砂質土層	古野	水滴か		6.8	0.7	4.8			
1060	VIID10d	第4層	灰	皿		4.8	1.8	3.8			
1061	VIID10f	ベルトE第48層no.488	鉄	人形（牛）		6.5	4.2	2.8			
1062	VIID9f	斜面（物原）下層	請	人形（馬）		8.6	3.5	2.7			
1063	VIID9d	青灰色砂質土層	鉄	人形頭部		3.1	3.65	2.9	-	-	
1064	VIID10c	青灰色砂質土層　第4層 no.214	請	狛犬		4	8.1	6.8	-	-	
1065	VIID11a	第4層no.7	鉄	狛犬		4.2	5.1	7.1	-	-	
1066	VIID9d	ベルトC第28層	鉄	狛犬下顎		4.7	2.8	1.5	-	-	
1067	VIID10e	斜面（物原）下層	無釉	陶製硯		11.35	2.2	10.9	-	-	
1068	VIID12c	第6層no.220	なし	陶製硯		11.5	9.9	1.4	-	-	
1069	VIIC13t	第4層no.427	鉄	鬼卸		13.6	10.2	3.7	-	-	
1070	中央部	南側トレンチ内	灰	人形（臥牛）			4.6				
1071	VIID12b	第6層no.77		擂鉢	IIA	19.9	11.5	15.6	2	5	
1072	VIID12b	第6層no.52		擂鉢	IIA	19.8	15.6	17.6	12	12	
1073	VIID11e	第4層no.403		擂鉢	IIA	21.3	12.6	15.2	5	4	
1074	VIID9h	表土		擂鉢	IIA	23.1	12.15	19.5	6	6	
1075	VIID9g	第6層		擂鉢	IIA	11.7	10.35	10.7	2	12	
1076	中央部	南壁トレンチ		擂鉢	IIB	10.4	11.2	9.5	4	12	
1077	VIID13a	トレンチA		擂鉢	IIB	21.5	16.8	19	3	6	

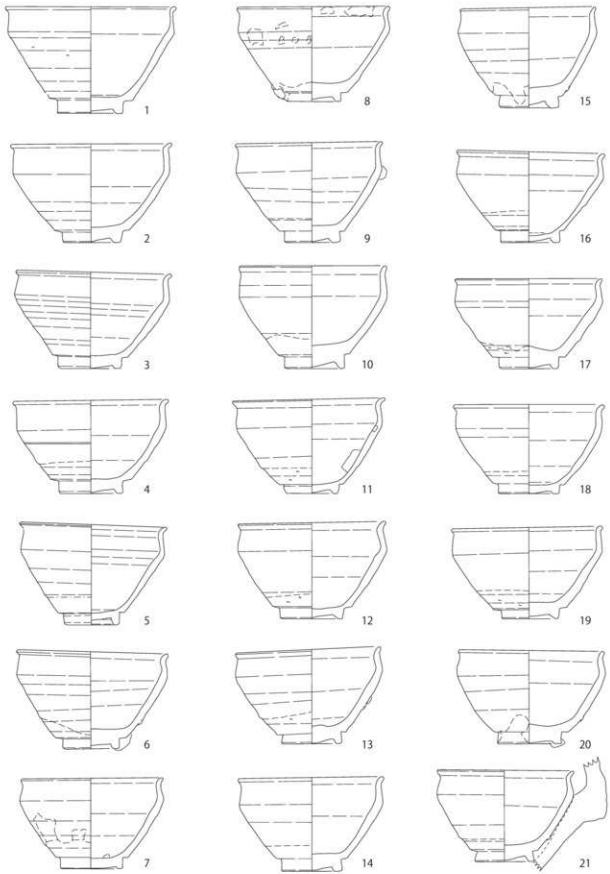
登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径（蓋・上部）	器高（厚み）	底径（幅・下部）	口/12（上部）	底/12（下部）	備考
1078	VIID12b	第6層no.252,264,268		壺鉢	IIA	16.9	6.1	15.7	11	12	
1079	VIID9g	斜面（物原）下層		壺鉢	I	11.2	7.5	11.5	10	12	
1080	VIID11e	第4層no.363		壺鉢	I	15.2	10.4	12.8	3	5	
1081	VIID11c	第6層no.192		壺鉢	I	14.4	11.3	13.8	11	12	
1082	VIID9g	第6層		壺鉢	I	16	1.1		12	12	
1083	VIID11b	第4層		壺鉢	I	19.2	14.1	17.9	7	12	
1084	VIID9h	斜面（物原）上層		壺鉢	IIB	22	18	18.2	4	12	
1085	VIID11f	第4層no.371		壺鉢	IIB	16.5	11.9	16.8	2	5	
1086	VIID9f	斜面（物原）上層		壺鉢	IIB	17.8	11.8	17	4	6	
1087	VIID9g	表土		壺鉢	IIB	18.4	13.05	16.7	4	12	
1088	VIID9g	斜面（物原）下層		壺鉢	IIB	18.7	12.2	18.2	4	5	
1089	中央部	表土		壺鉢	IIB		*7.9	18.6		2	
1090	VIID9g	表土		壺鉢	IIB	17.4	13	18.4	1	4	
1091	VIID9g	表土		壺鉢	IIB	20.2	12.6	21	2	5	
1092	VIID11e	第4層no.356		壺鉢	IIB	18.8	12.4	18.3	5	6	
1093	VIID9h	表土		壺鉢	IIB	18	11.6	17.8	4	5	
1094	VIID9g	第6層		壺鉢	IIB	18.7	12.4	17.7	4	6	
1095	VIID9h	表土		壺鉢	IIB	-	*11.8	18.8	-	3	
1096	VIID9g	表土		壺鉢	IIB	17.8	12.4	17.8	2	3	
1097	VIID11h	第4層no.411		壺鉢	IIB	-	9.1	17.3	-	6	
1098	VIID9g	表土		壺鉢	IIB	19	13.1	20	5	5	
1099	VIID9h	斜面（物原）上層		壺鉢	IIB	20.9	12.7	19.5	5	6	
1100	VIID12b	第6層no.48		壺鉢	IIB	20.5	12.9	18.3	5	6	
1101	VIID9f	トレンチD		壺鉢	IIB	22	16.7	18.9	3	3	
1102	VIID9g	ベルトD第41層		エプタ		19	19.6	1.95	-	-	
1103	VIID9f	ベルトD第39層		エプタ		17.4	17.5	2.4	-	-	
1104	VIID9g	表土		エプタ		19.2	19.6	2.2	-	-	
1105	VIID9h	斜面（物原）上層		エプタ		21.9	15.7	3.1	7	-	
1106	中央部	表土掘削		エプタ		11.0	2.1	10.3			
1107	VIID9f	斜面上層		エプタ		-	*	-	-	-	
1108	VIID9g	ベルトD第36層		エプタ		19.5	21	3.3	-	-	
1109	VIID9g	表土		エプタ		22.0	2.9	10.3			
1110	VIID9f	ベルトE第39層		エプタ		19.5	17.5	2.5	10	-	
1111	VIID9g	斜面（物原）上層		エプタ		12	10.2	2.2	-	-	
1112	VIID9	第6層	自然釉	壺鉢	I	16	14.2	16	12	12	
1113	VIID9f	斜面（物原）下層		エプタ		10.5	19.5	2.4	-	-	
1114	VIID9g	斜面（物原）下層	自然釉	壺鉢	I	15.9	10.8	13.4	2	12	
1115	VIID9f	トレンチD	自然釉	壺蓋		-	*	-	2	2	
1116	VIID9f	斜面下層,斜面上層北部	無釉	エプタ？		19.9	3.1	13	3	3	
1117	VIID9g	表土		足付鉢トチ	A	13.8	2.1	-	6	-	
1118	VIID12b	第6層no.254		足付鉢トチ	A	13	2	-	5	-	
1119	VIID9g	斜面（物原）下層		足付鉢トチ	A	11.3	3.2	-	12	-	
1120	VIID9f	斜面（物原）上層	鉄	足付鉢トチ	A	9.5	1.8	-	12	11	
1121	VIID11f	第4層no.389	鉄	足付鉢トチ	A	9	1.8	-	12	-	
1122	VIID9g	表土		足付鉢トチ	A	8.35	1.75	-	12	11	
1123	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄?	足付鉢トチ	A	8.3	2	-	12	-	
1124	VIID9f	斜面（物原）下層		足付鉢トチ	C	8.8	2.1	-	11	-	
1125	VIID9e	斜面（物原）下層		足付鉢トチ	D	6.5	2.45	-	10	-	
1126	中央部	表土		足付輪トチ		8.8	2.5				
1127	VIID9f	斜面（物原）下層		足付輪トチ		8.7	2	-	12	-	
1128	VIID9h	斜面（物原）下層	鉄	大皿と輪トチ		-	6.4	15.4	-	12	
1129	VIID9e	ベルトC第28層	降灰	輪トチ		3.6	3.5	0.8			
1130	VIID9f	トレンチD		輪トチ		5	4.85	0.9			
1131	VIID9f	トレンチD		輪トチ		4.4	4.9	0.9			
1132	VIID9g	表土		輪トチ		5.1	5.2	1.2			
1133	VIID10f	斜面下層		輪トチ		5.8	1.1	5.3			
1134	VIID9f	トレンチD		輪トチ		5.8	5.45	1.6			
1135	VIID9f北	斜面（物原）下層	自然釉	輪トチ		8.6	9.4	3.7			
1136	VIID9f	トレンチD	降灰	輪トチ		7.6	7.4	1.8			
1137	VIID9f	トレンチD	鉄	輪トチ		8.65	7.95	2.8			
1138	VIID9g	表土	鉄	輪トチ（色見？）		3.6	7.8	1.2			
1139	VIID9f	トレンチD	-	輪トチ		-	11.6	2.3			
1140	VIID9h	第6層	-	焼台		8	8.2	4.2			
1141	VIID9f	トレンチD	自然釉	焼台		7.1	9	5			
1142	VIID9g	斜面（物原）下層	-	焼台		7	7.1	2.9			
1143	VIID9f	斜面（物原）下層	-	焼台		8.8	9.2	6			
1144	VIID9f	斜面（物原）上層	-	焼台		14	13.7	9.6			
1145	VIID12b	第6層no.307		焼台		13.6	13.7	10.7			
1146	VIID9f	斜面下層		壺鉢	IIIC	5.8	8.9	-9.5	12	4	
1147	VIID9e	斜面下層		壺鉢	IIIC	6.2	10.3	8.7	12	1	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縦・上部)	器高 (厚み)	底径 (横・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
1148	VIID10d	青灰色シルト層		埦鉢	IIIA	6.5	10.35	-9.4	3	7	1149と同一個体
1149	VIID10d	青灰色シルト層		埦鉢	IIIA	9.2	9.9	6			1148と同一個体
1150	VIID9h	表土　斜面上層		埦鉢	IIIB	5.9	11.4	9.5	2	12	
1151	VIID9f　10f	斜面下層　　トレンチD		埦鉢	IIIA	9	12	9.2	12	2	
1152	VIID9g	斜面上層		埦鉢	IIIC	6.7	*3.3	-	12	-	
1153	VIID9f	斜面（物原）下層		埦鉢	IIIC	6.8	*3.4	-			苔入溶着
1154	VIID9e	斜面下層		埦鉢	IIIA	-	*5.3	8.4	-	5	
1155	VIID9f	トレンチD		埦鉢	IIIC	6.0	11.0	-			苔入溶着
1156	VIID10f	トレンチD		埦鉢	IIIC	6.5	*5.5	-	12	-	
1157	VIID9g	斜面上層		埦鉢	IIIC	6.8	*4.6	-	12	-	
1158	VIID9f	斜面（物原）下層		埦鉢	IIIC	6.6	*3.9	-	12	-	
1159	VIID9f	トレンチD		埦鉢	IIIC	6.8	*7.6	-	12	-	
1160	VIID9f	斜面下層		埦鉢	IIIC	6.7	*6.2	-	12	-	
1161	VIID9f	斜面下層		埦鉢	IIIC	7.1	*8.1	-	12	-	
1162	VIID9f	斜面（物原）上層		埦鉢	IIIC	-	8.5	6.3	-	-	
1163	VIID9f	斜面下層		埦鉢	IIIA	6	7.7	-	6	-	
1164	VIID9f	トレンチD		埦鉢	III	5.8	8.9	-9.5	12	4	
1165	VIID9g	斜面上層		埦鉢	III	-	*5.4	8.8	-	2	
1166	VIID9f	ベルトE第41層		埦鉢	III	8.6	5.6	-	-	3	
1167	VIID9g	斜面上層		埦鉢	III	-	8.5	9.3	-	4	
1168	VIID9f	斜面下層		埦鉢	III	-	*7.4	8.8	3	-	
1169	VIID9f	斜面下層		埦鉢	III	-	*6.8	9.9	4	-	
1170	VIID9f	斜面下層		埦鉢	III	-	*7.45	-10	-	2	
1171	VIID9g	斜面上層		埦鉢	IIIC	6.7	*5	-	12	-	
1172	VIID9f	斜面下層		埦鉢	IIIC	6.3	6.5	-	12	-	
1173	VIID9f	ベルトE第40層		埦鉢	IIIC	6	*5.8	-	12	-	
1174	VIID9e	斜面下層		埦鉢	IIIC	6.5	4.6	-	12	-	
1175	VIID11b	第4層	鉄	不明		3.6	1.85	3.8	12	12	鉄釉が付着
1176	VIID11b	暗灰色砂質土層	鉄	不明		3.5	2.1	3.5	12	12	
1177	VIID11a	第4層	鉄+灰	不明		4.3	2.1	3.2	2	12	
1178	VIID10b	青灰色シルト層	鉄+灰	不明		2.3	2.6	3.4	4	12	
1179	VIID11c	第4層no.219	鉄	不明		3.4	2.6	3.2	11	12	
1180	VIID11a	第4層	鉄	不明、色見か		*1.6	4.5	-	12	-	
1181	VIID11c	ベルトC第18層	鉄	色見		5.1	1.05	3	4	4	
1182	VIID9g	表土	鉄	色見		5.9	3.6	2.6	9	12	
1183	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	色見		-	3.6	2.5	-	12	
1184	VIID9g	斜面上層	鉄	色見		-	3	-	-	-	
1185	VIID9g	表土	灰	調整具（皿）		-	*1.5	8.2	-	-	
1186	VIID9f	斜面（物原）上層	鉄	色見		11.6	5.7	8.4	2	-	
1187	VIID9f	トレンチD	灰	色見		11.2	2.2	7.65	-	3	
1188	VIID9g	表土	鉄	色見		31	*	-	1	-	
1189	VIID9e	斜面（物原）下層	鉄+灰	色見			*	-	1	-	
1190	VIID9g	斜面（物原）上層	鉄	色見		-	3.4	-	1	-	
1191	VIID11b	暗灰色砂質土層	鉄	色見		-	5	-	-	-	
1192	VIID9f	ベルトD第6層	鉄	色見		-	7.3	-	-	-	
1193	VIID9d	地山面上	長石	色見		-	1.55	6.85	-	12	
1194	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	色見		-	*1.7	4.8	-	12	
1195	VIID9d	北壁精査	長石	色見		-	1.6	6.45	-	12	
1196	VIID9d	ベルトC第26層	長石	色見		12.1	2.7	6	1	3	
1197	VIID10g	斜面（物原）下層	長石	色見		11.6	2.1	7.6	2	3	
1198	VIID9f	ベルトD第45層	鉄	色見		-	2.9	-	-	-	
1199	VIID9f	ベルトD第6層	長石	色見		11.2	2.2	7.65	3	3	
1200	VIID9f	斜面上層		足付板トチ	B	6.7	2.5	6.2	-	12	
1201	VIID10f	トレンチD		足付板トチ	B	7	2.4	-	11	-	
1202	VIID9f,E	斜面（物原）下層		足付板トチ	B	7	2.6	-	11	-	
1203	VIID9g	斜面（物原）下層		足付板トチ	B	7.2	2.75	-	11	-	
1204	VIID9f	第41層		足付板トチ	B	6.1	3.2	-	12	-	
1205	VIID9f	斜面（物原）下層		足付板トチ	B	6.9	2.8	-	12	-	
1206	VIID9f	斜面（物原）下層		足付板トチ	B	7	2.6	-	11	-	
1207	VIID9f	斜面（物原）下層		足付板トチ	B	7.5	2.5	-	11	11	
1208	VIID9f	斜面（物原）下層		足付板トチ	B	6.95	1.6	-	11	11	
1209	VIID9g	ベルトD第40層		足付板トチ	B	6.7	2.0	-	11	-	
1210	VIID10d	青灰色シルト層		陶トチ		7	4.3	5	2	6	
1211	VIID10e	斜面（物原）下層		陶トチ		6.8	4.6	5.6	-	12	
1212	VIID9h	表土		陶トチ		6.3	4.6	5	11	12	
1213	VIID9h	斜面（物原）上層		陶トチ		7.5	4.55	5	2	12	
1214	VIID9d	ベルトC第26層	鉄	乳棒		-	5.8	-	-	12	留め釘用の穴
1215	VIID12b	第6層no.313		乳棒		5.2	8.8	-	5	12	
1216	VIID11e	第4層no.395	鉄	常滑具か		4.45	0.95	3.9	12	12	
1217	VIID10e	斜面下層		常滑具か		7	1.9	6.6	5	6	

登録番号	グリッド	遺構no.	釉薬	器種	分類	口径 (縁・上部)	器高 (厚み)	底径 (幅・下部)	口/12 (上部)	底/12 (下部)	備考
1218	VIID9c	第4層	鉄・灰	不明		6.6	2.2	6	10	12	
1219	VIID9h	表土		小皿		6	12	3.7	11	12	
1220	VIID9h	斜面（物原）下層		小皿		6.2	1.3	3.7	9	12	
1221	VIID9h	斜面（物原）下層		小皿		6	1.4	3.8	8	12	
1222	VIID9h	斜面（物原）上層		小皿		6.2	1.2	4	10	12	
1223	VIID9g	ベルトD第35層		トチ		4.7	7.2	2.1			
1224	VIID9f	第6層	-	トチ		3.8	1.5	3.2	-	-	
1225	VIID9e	斜面（物原）下層	-	トチ		4.7	2.7	3.5	-	-	
1226	VIID11b	第4層	鐵	トチ		4.5	2.8	4.9			
1227	VIID9g	表土	-	トチ		2.35	0.9	6.9	-	-	
1228	VIID9g	斜面（物原）下層	-	トチ		8.1	1.4	6.2	-	-	
1229	VIID9f北	斜面下層	-	トチ		4.3	1.3	4.9	-	-	
1230	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	トチ		4	3.25	4	-	-	
1231	VIID9g	ベルトD第35層	鉄	トチ		4.3	3.7	3.8			
1232	VIID9g	斜面下層	-	トチ		6.8	1.45	7.2	-	-	
1233	VIID9h	表土	-	トチ		6.3	2.2	6.95	-	-	
1551	VIID9h	斜面（物原）下層	磁器	碗		9.2	4.7	-	5	-	
1552	VIID9g	斜面（物原）下層	磁器	碗		10.9	2.4	4.5	1	5	
1553	VIID9g	斜面（物原）上層	磁器	碗		11	5.6	4.2	1	12	
1554	VIID11a	表土	陶器	染付壺		-	5.45	5.05	-	10	
1555	VIID9e	ベルトC第28層,斜面下層	陶器	蕎麦猪口		7.5	5.7	4.9	4	12	
1556	VIID9e	斜面（物原）下層	長石	不明		6	6.3	4.1	3	5	
1557	VIID11b	第4層	磁器	小杯		-	*3.3	1.8	-	12	
1558	VIIC11r	黄褐色土層		須恵器有台杯		-	2.6	8.7	-	3	
1559	VIID9e	斜面下層		加工円盤		6.2	0.9	5.8			
1560	VIID9d	青灰色砂質土層		加工円盤		4.9	1.0	5.3			
1561	VIID9h	表土		加工円盤		5.1	0.95	4.8			
1562	VIID10c	第4層	鉄	加工円盤(碗)		3.6	0.6	3.4	-	-	
1563	VIID10h	ベルトF第6層	鉄	加工円盤		2.2	0.65	2.3	-	-	
1564	VIID12d	第6層no.224		クレ		21.6	26.5				
1565	VIID9f	斜面（物原）下層	鉄	丸碗		12.4	5.9	-	5	-	
1566	VIID9d	青灰色シルト層	鉄	混入	D	-	3.0	3.8	-	10	輪糸切？
1567	VIID12b	第6層no.2	-	焼鉢（丸底）		17.4	9.9	13.4	8	12	
1568	VIID11c	第6層 no.100	鉄	擂鉢		31.0	12.5	10.0	3	12	
1569	VIID12b	第6層 no.23	鉄	擂鉢		36.1	16.5	14.0	12	7	
1570	VIID11c	第6層 no.102	鉄	擂鉢		33.1	14.15	12.8	9	12	

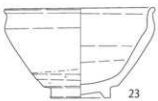
金属製品・石製品

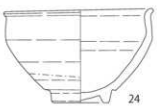
登録番号	グリッド	遺構no.		器種		長さ	厚さ	幅・径			
2009	VIID11c	第４層no.197		煙管		17.2		0.9			雁首、羅宇、吸口
2010	VIID11c	第４層no.471		煙管		7.6		1.0			雁首
2011	VIID9e	第６層		銭貨（寛永通宝）				2.5			
2012	VIID12b	第６層no.16		銭貨（寛永通宝）				2.4			
2013	VIID10c	青灰色砂質土層		銭貨（寛永通宝）				2.5			
2014	VIID11a	暗灰色砂質土層		砥石（泥質凝灰岩）		6.15	1.45	2.7			
2015	VIID9f	第46層		砥石（凝灰質泥岩）		6.4	0.7	3.8			
2016	VIID9h	斜面上層		砥石（凝灰質泥岩）		4.9	0.8	3.75			
2017	VIID11a	暗灰色砂質土層		砥石（凝灰質泥岩）		2.6	0.65	3.7			

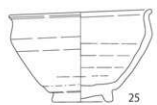


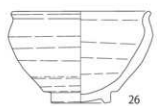
NR01 出土資料（1） 天目茶碗Ⅰ類 S=1/3

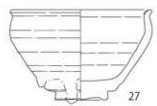
22

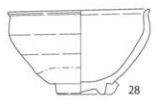

23

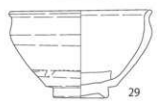

24

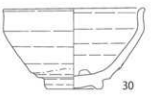

25


26

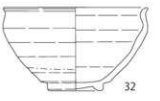

27

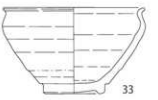

28


29

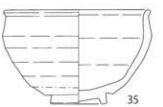

30

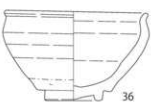
31

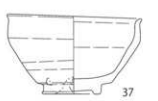

32

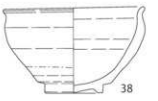

33

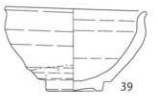
34

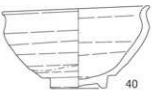

35

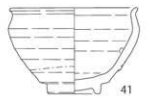

36


37

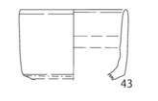

38


39

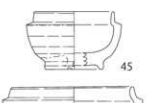

40

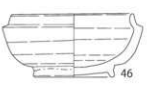

41

42

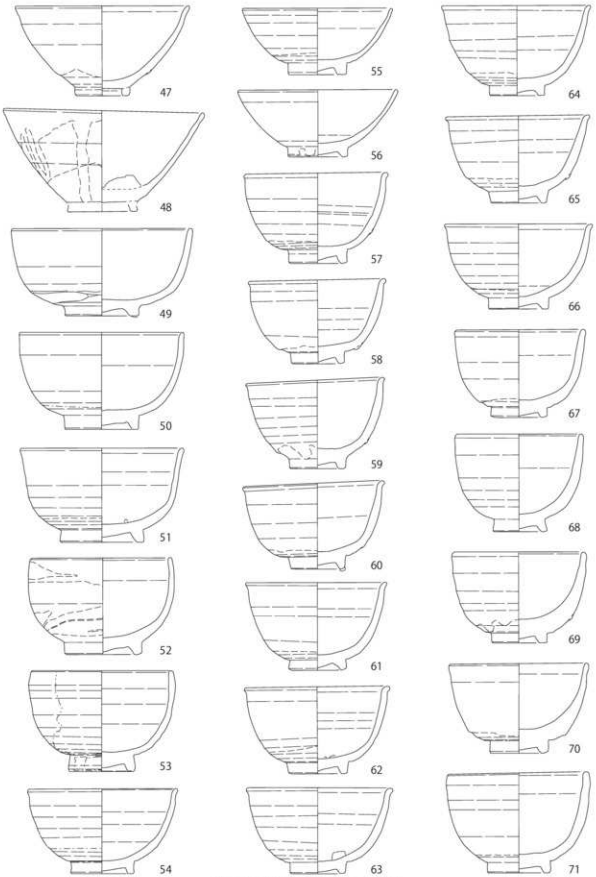

43

44

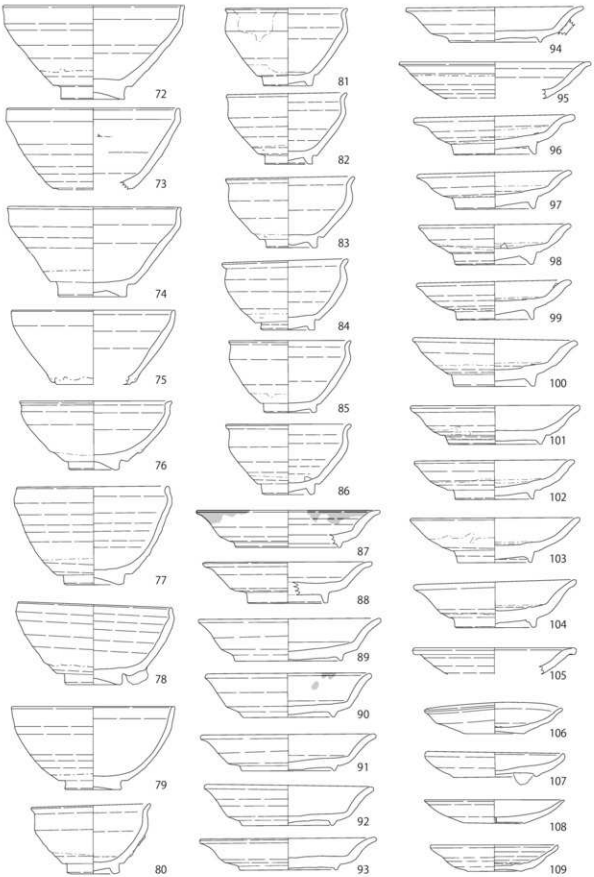

45


46

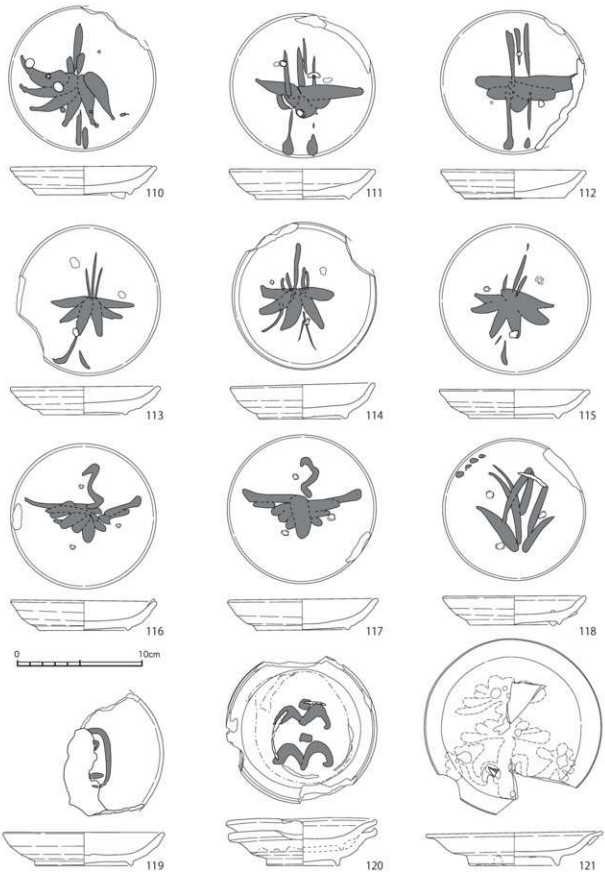
NR01 出土資料（2） 碗類 S=1/3



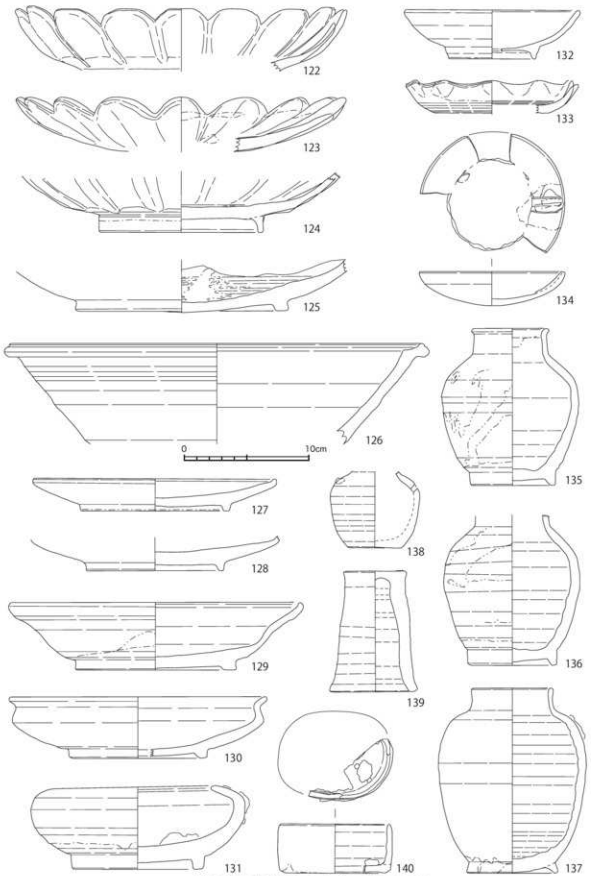
NR01 出土資料（3） 碗類 S=1/3



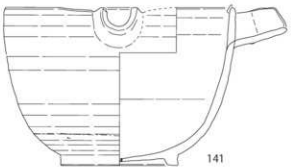
NR01 出土資料（4） 碗・皿類 S=1/3

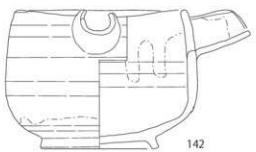


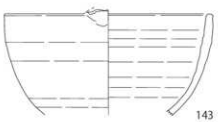
NR01 出土資料（5） 鉄絵皿 S=1/3

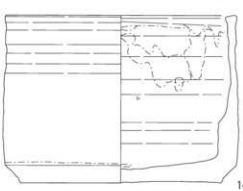


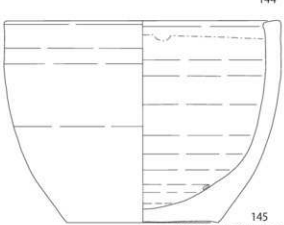
NR01 出土資料（6） 皿・鉢・壺類 S=1/3

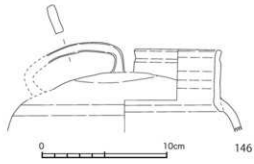

141


142

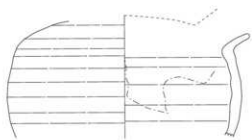

143

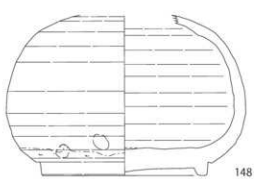

144

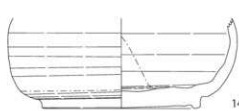

145

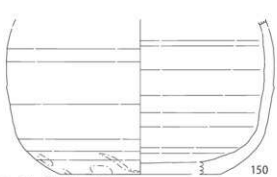


146

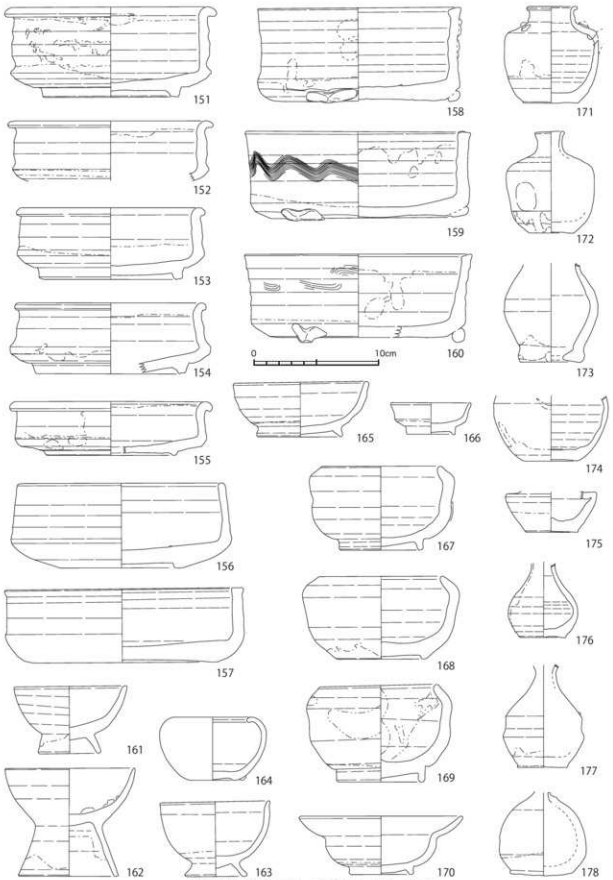

147


148

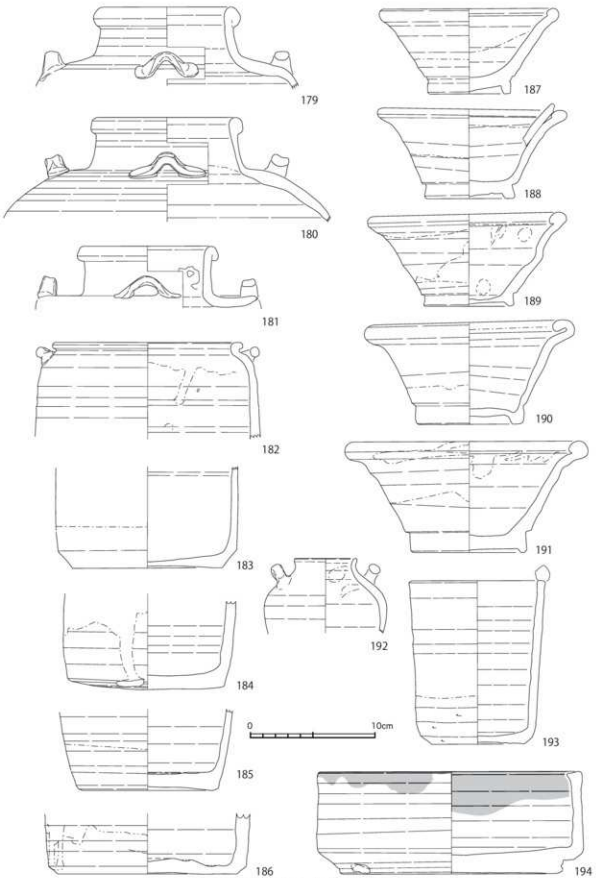

149


150

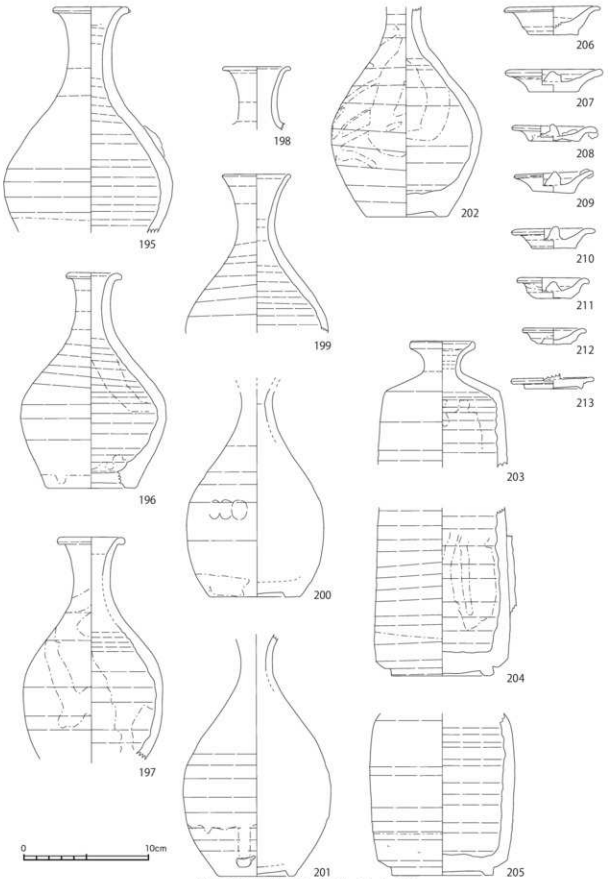
NR01 出土資料（7） 片口・鉢・瀧瓶類 S=1/3



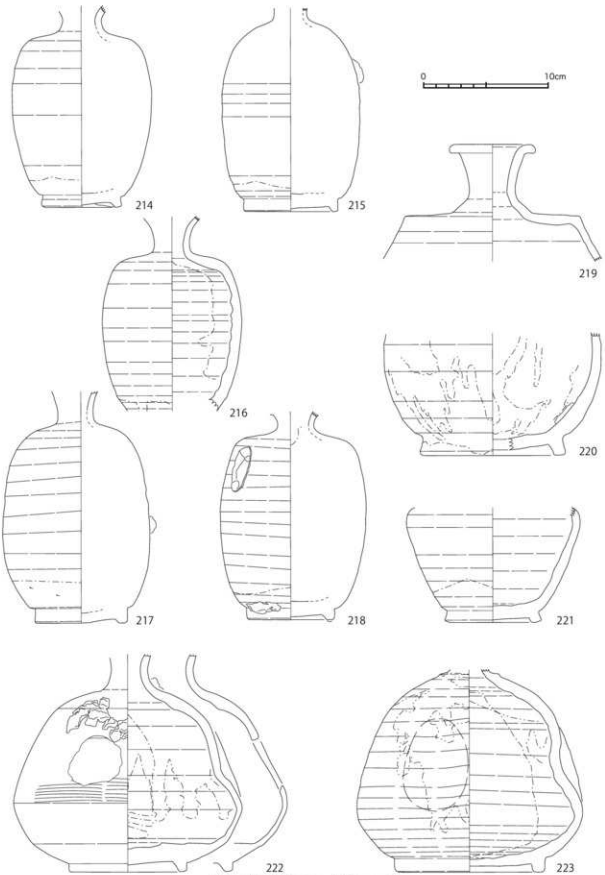
NR01 出土資料（8） 香炉・壺・瓶類 S=1/3



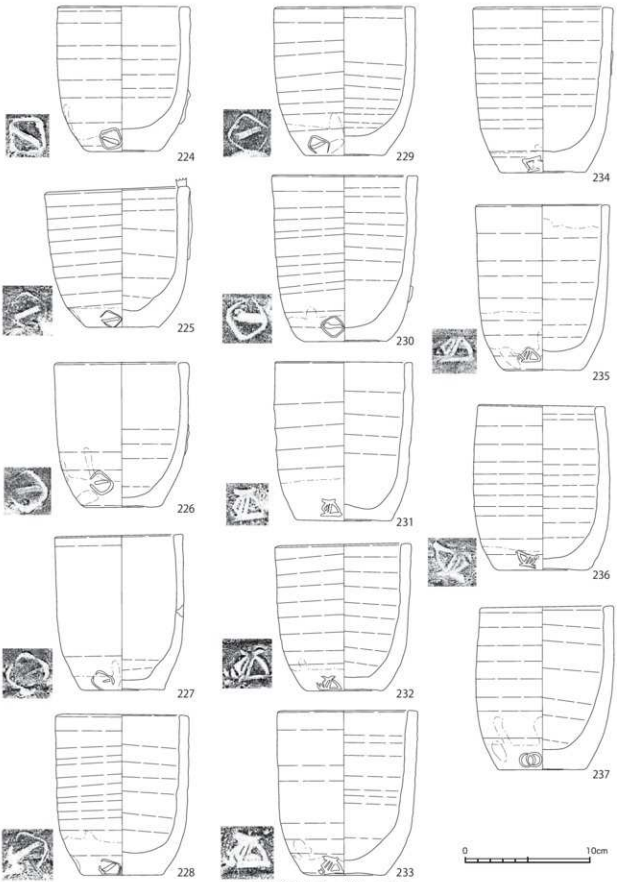
NR01 出土資料（9） 煙硝擂・壺類 S=1/3



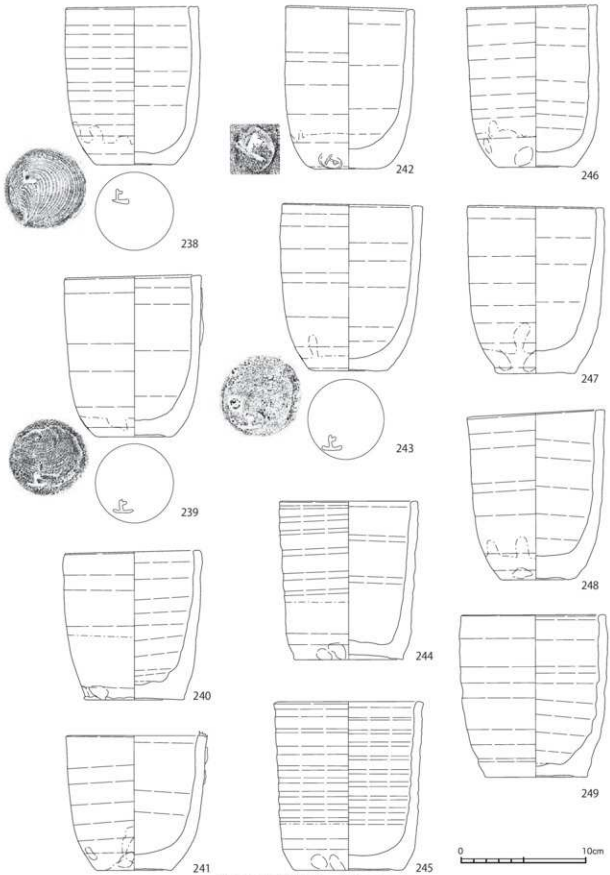
NR01 出土資料（10） 徳利・蓋 S=1/3



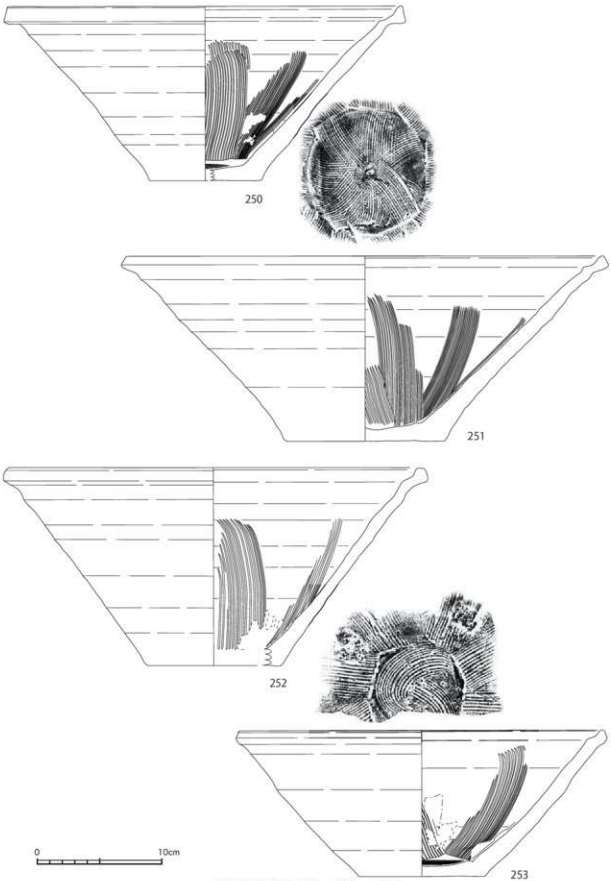
NR01 出土資料（11） 徳利 S=1/3



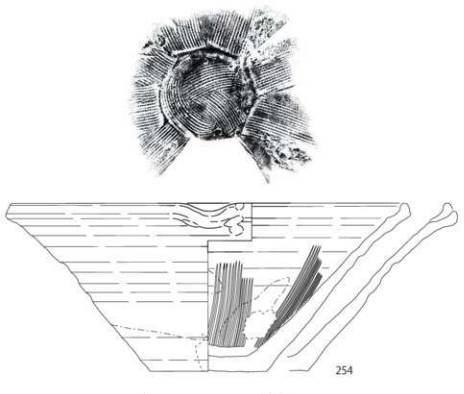
NR01 出土資料（12）　銭甕　S=1/3



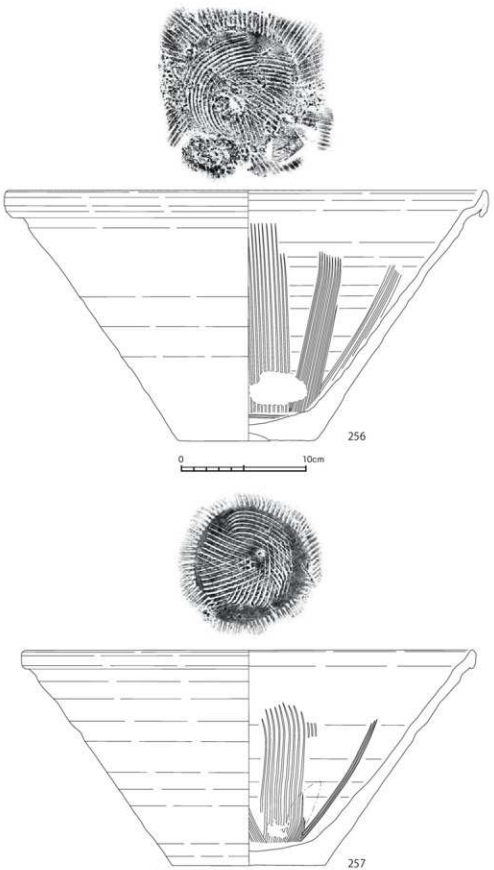
NR01 出土資料（13） 銭甕 S=1/3



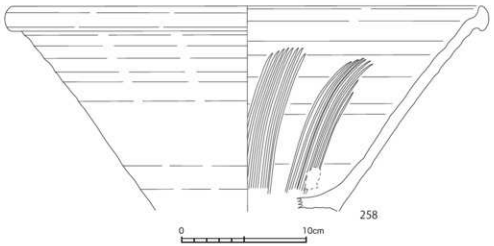
NR01 出土資料（14）　擂鉢　S=1/3

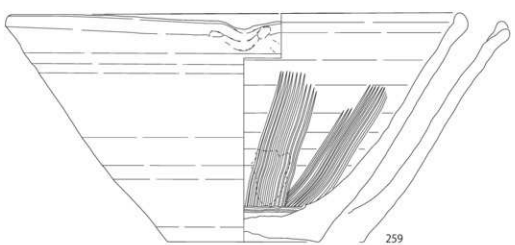


NR01 出土資料（15）　擂鉢　S=1/3

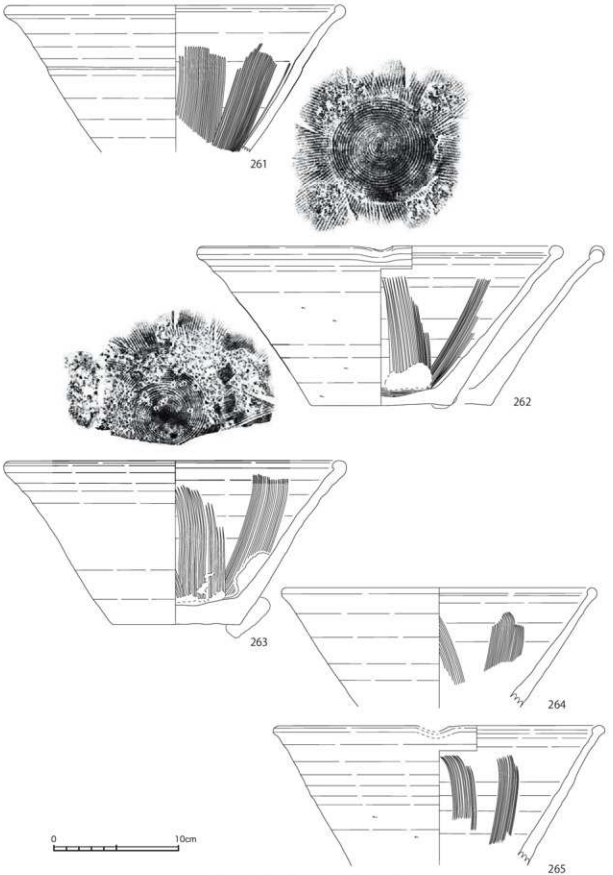


NR01 出土資料（16）　擂鉢　S=1/3

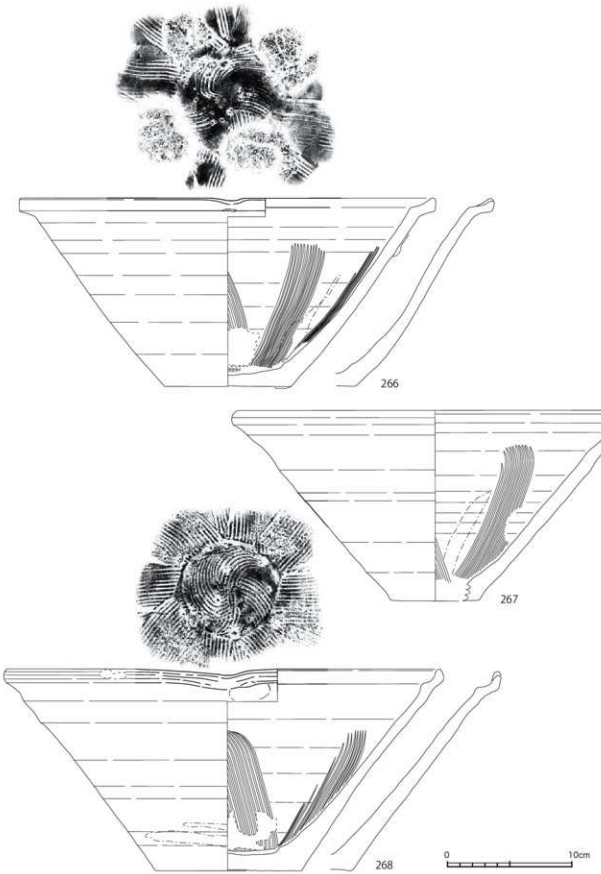




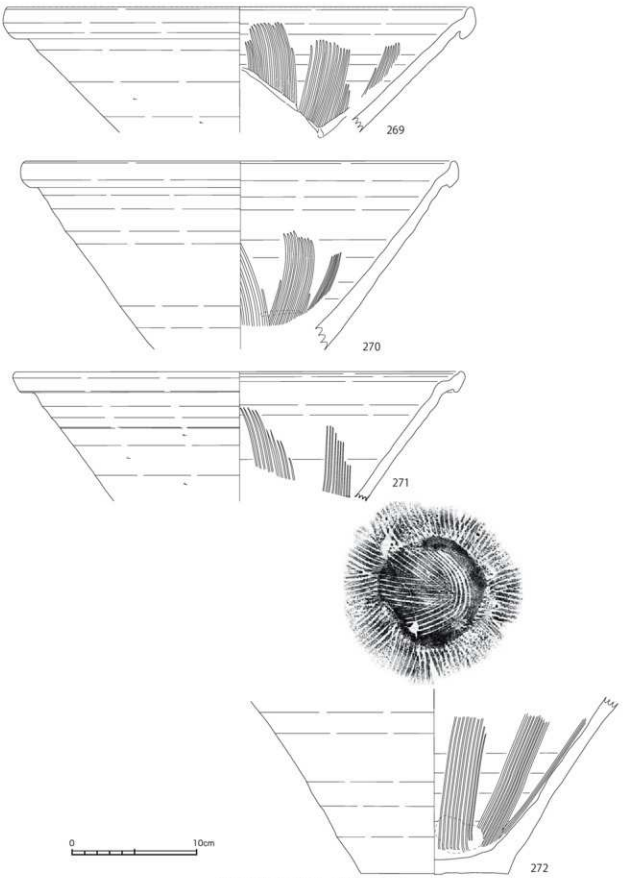
NR01 出土資料（17）　擂鉢　S=1/3



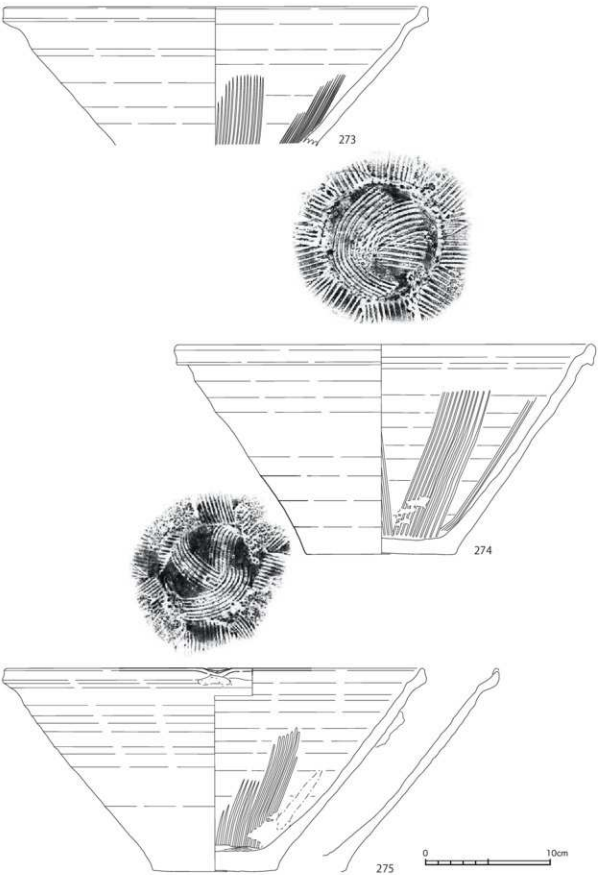
NR01 出土資料（18） 擂鉢 S=1/3



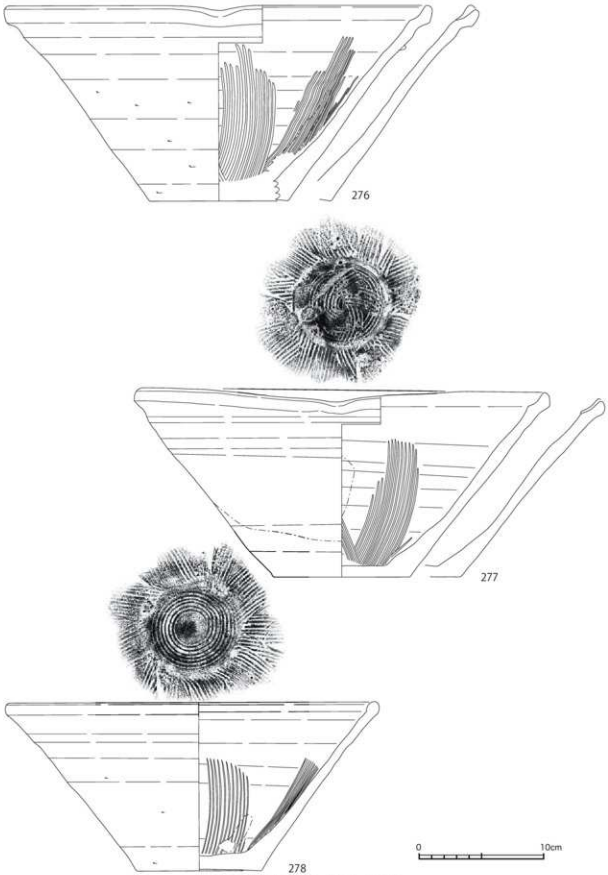
NR01 出土資料（19） 擂鉢 S=1/3



NR01 出土資料 (20)　擂鉢　S=1/3

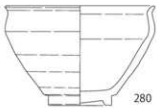


NR01 出土資料（21） 擂鉢 S=1/3

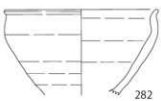


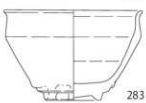
NR01 出土資料（22）　擂鉢　S=1/3

279

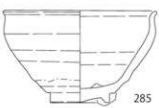

280

281


282


283

284

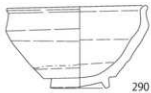

285

286

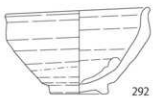
287

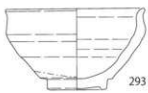
288

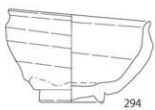
289


290

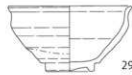
291

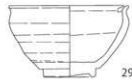

292


293


294

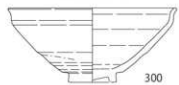
295

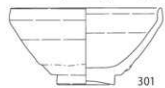

296

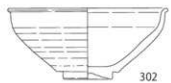

297

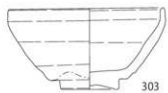
298

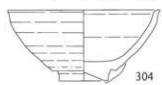
299


300


301


302


303


304

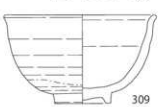
物原 出土資料（1） 天目茶碗 S=1/3

305

306

307

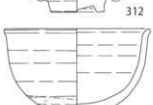
308

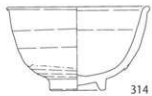

309

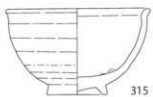
310

311

312


313


314


315

316

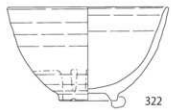
317

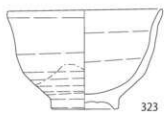
318

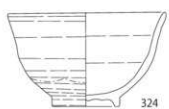
319

320

321


322


323


324

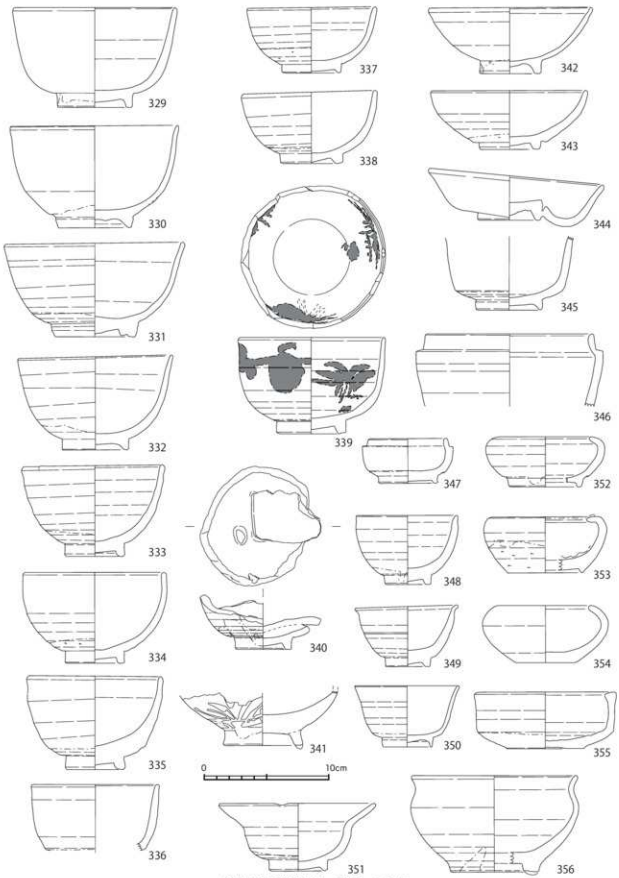
325

326

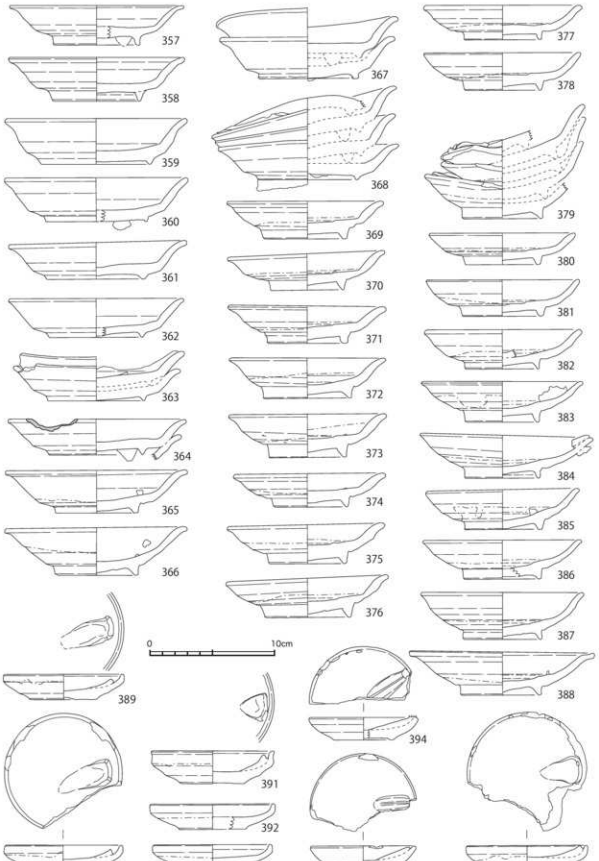
327

328

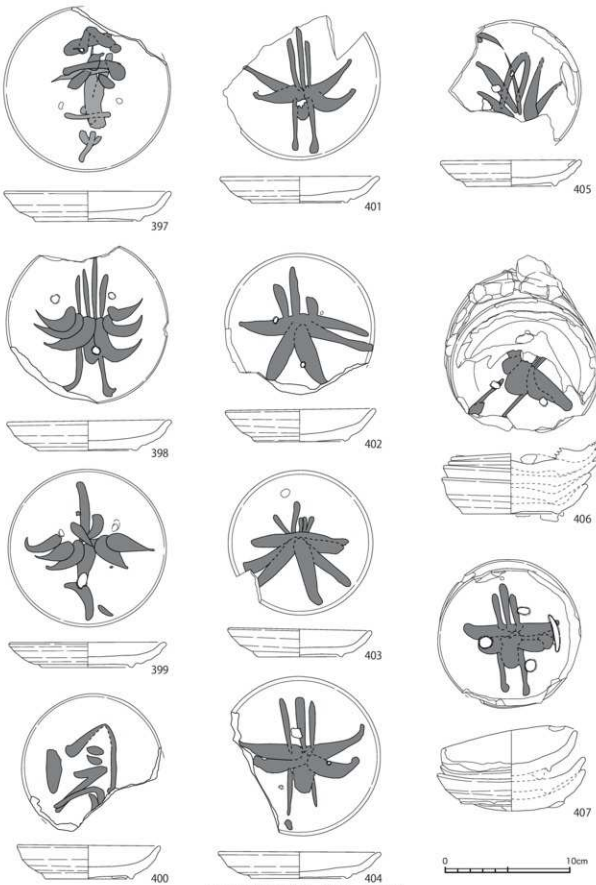
物原 出土資料（2） 碗類 S=1/3



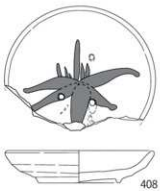
物原 出土資料（3） 碗類 S=1/3

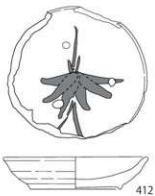


物原 出土資料（4） 皿類 S=1/3

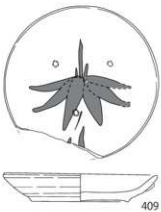


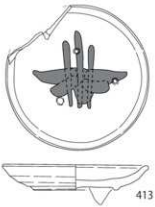
物原 出土資料（5） 鉄絵皿 S=1/3

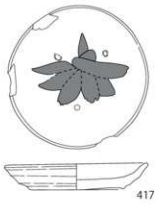

408


412

416

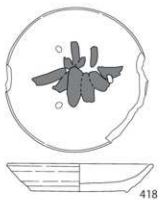

409


413

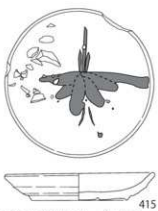

417

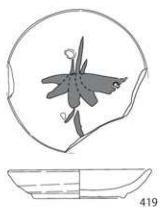
410

414

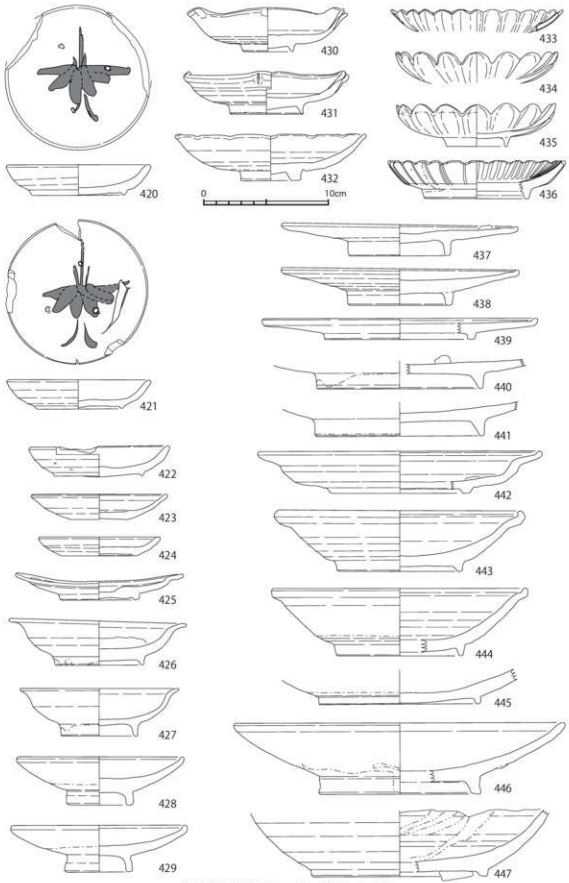

418

411

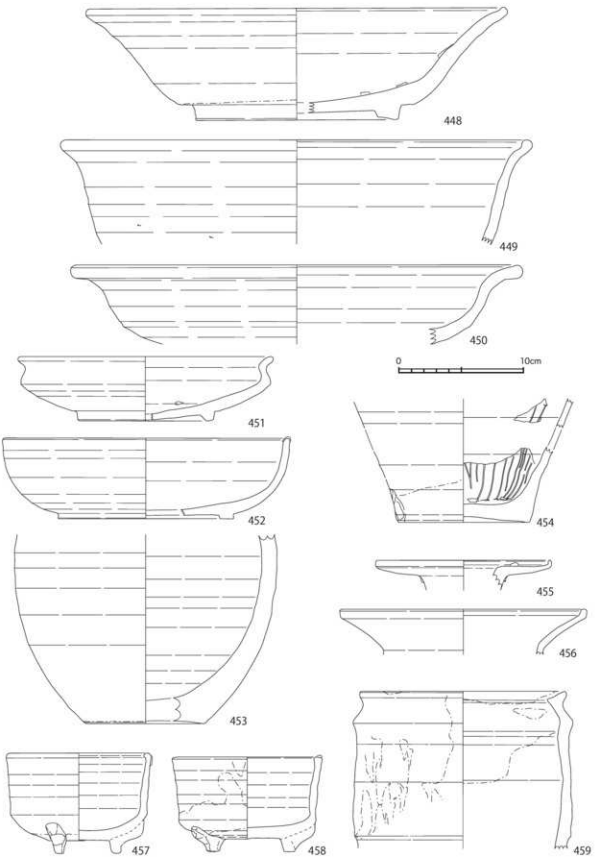

415


419

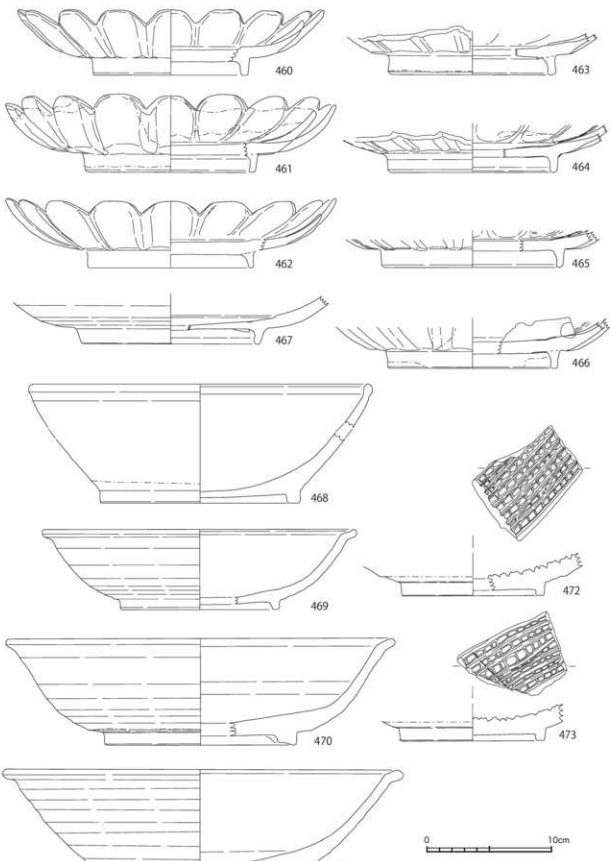
物原 出土資料（6） 鉄絵皿 S=1/3



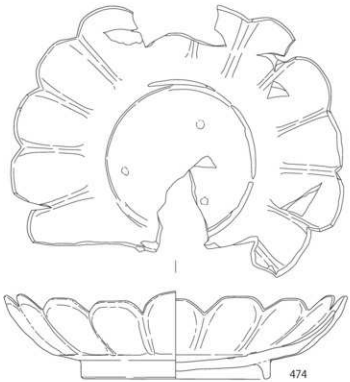
物原 出土資料（7） 皿・盤類 S=1/3



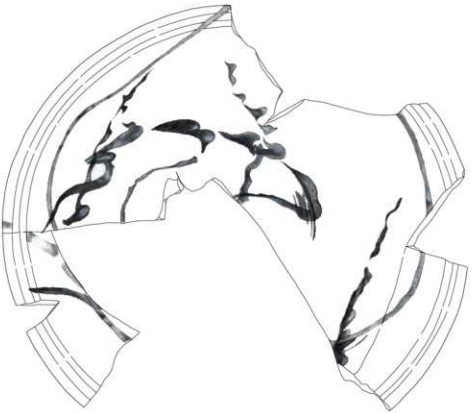
物原 出土資料（8） 鉢・香炉・花瓶・壺類 S=1/3

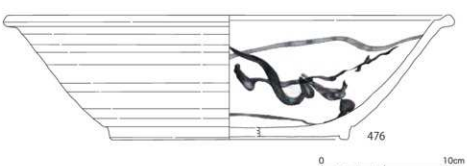


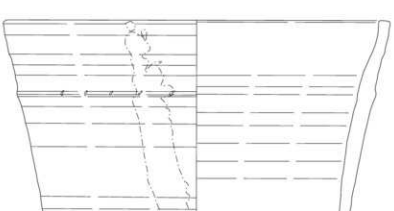
物原 出土資料（9） 大皿・鉢類 S=1/3



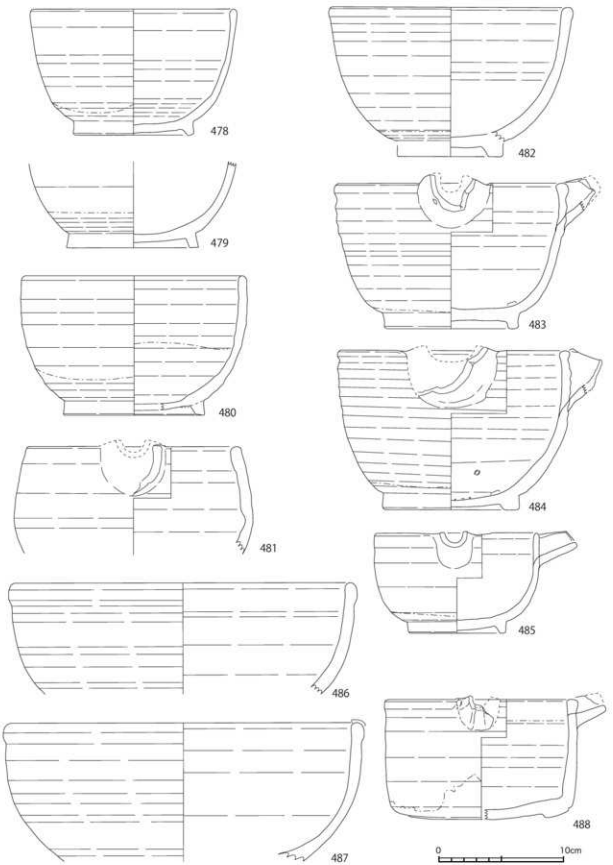
物原 出土資料（10） 型打皿 S=1/3



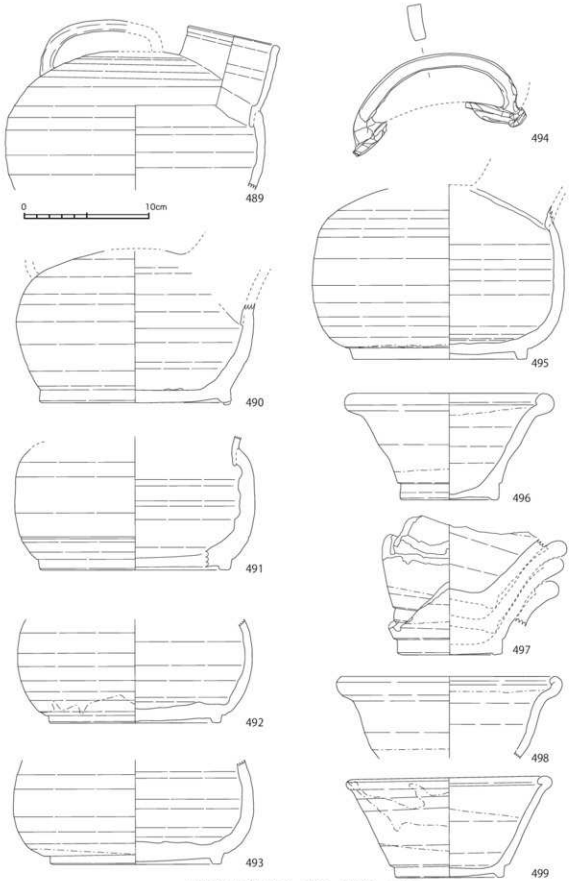




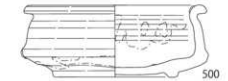
物原 出土資料（11） 鉄絵皿・桶 S=1/3



物原 出土資料（12） 片口 S=1/3



物原 出土資料（13） 漫瓶・煙硝擂 S=1/3


500

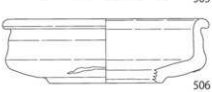
501

502

503

504

505

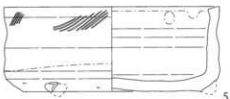

506

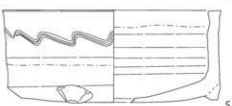
507

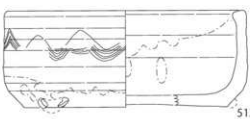
508

509

510


511


512


513

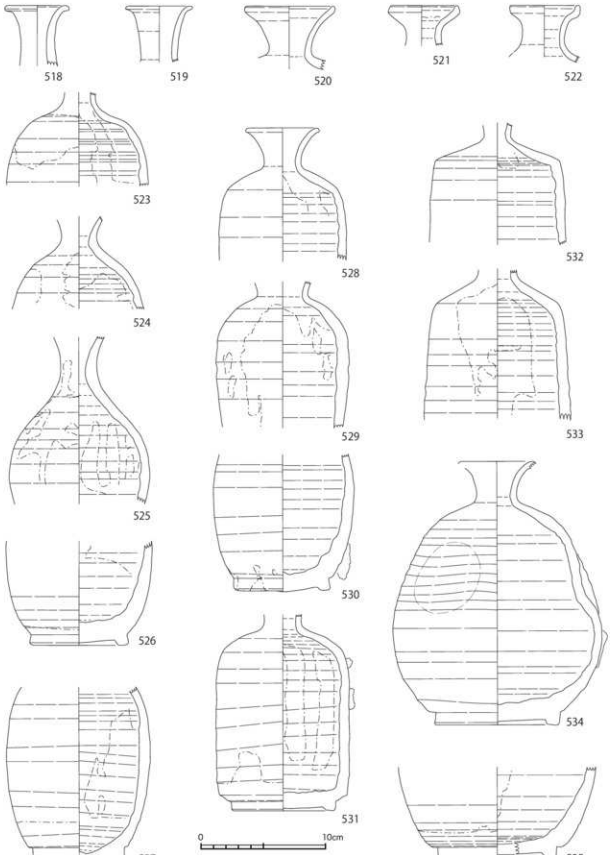
514

515

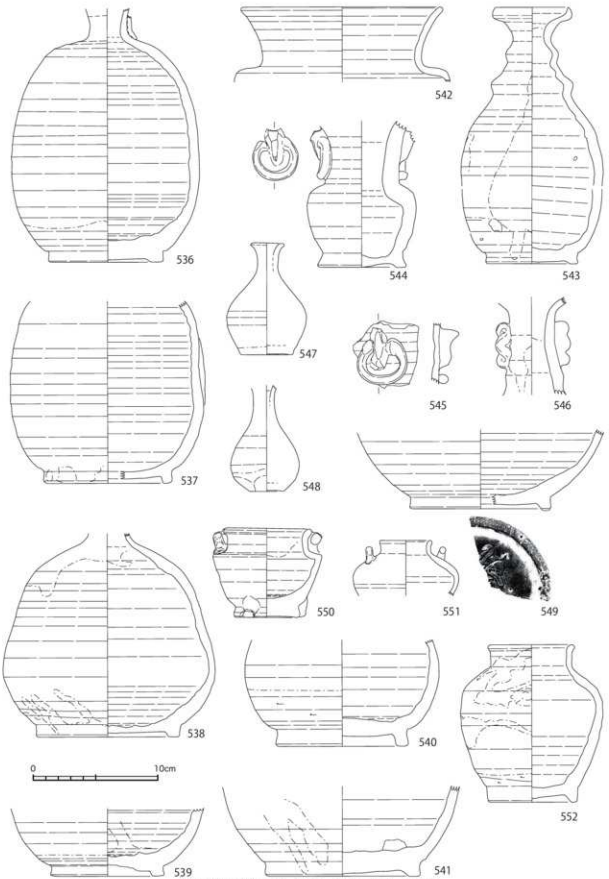
516

517

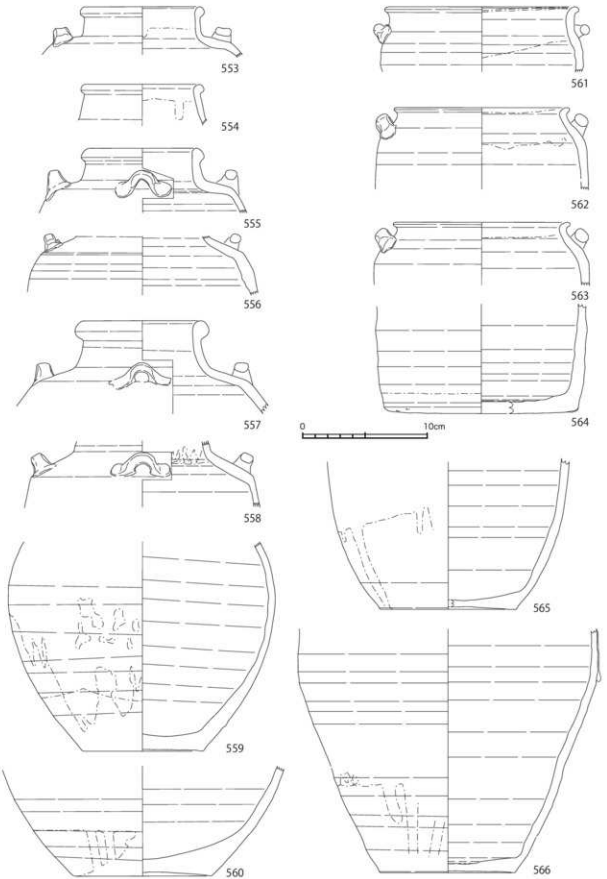
物原 出土資料（14） 香炉 S=1/3



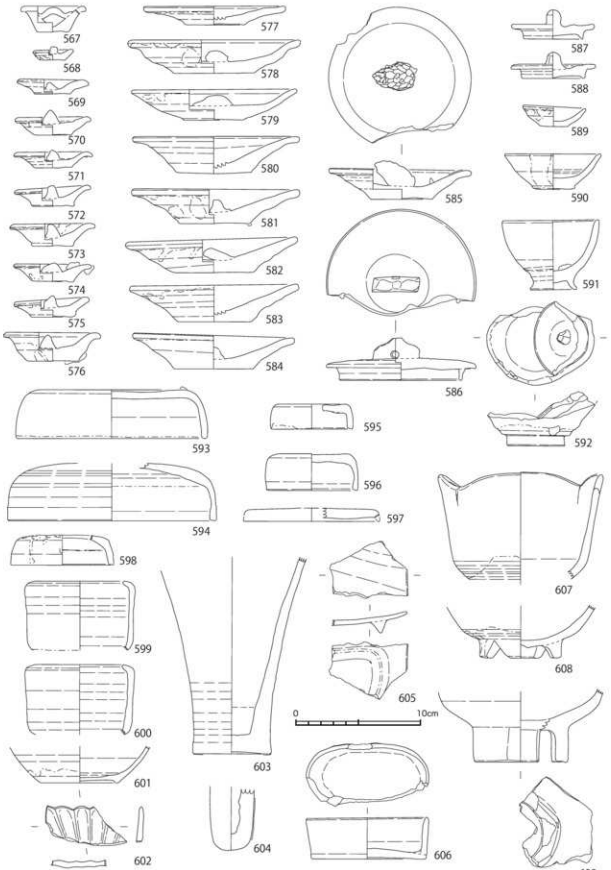
物原 出土資料（15） 徳利・花瓶 S=1/3



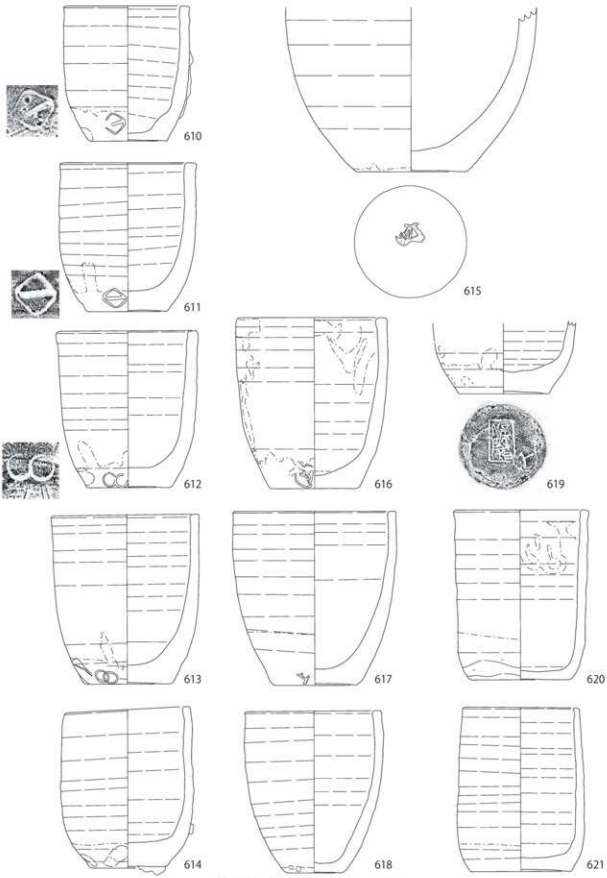
物原 出土資料（16） 徳利・花瓶・瓶類 S=1/3



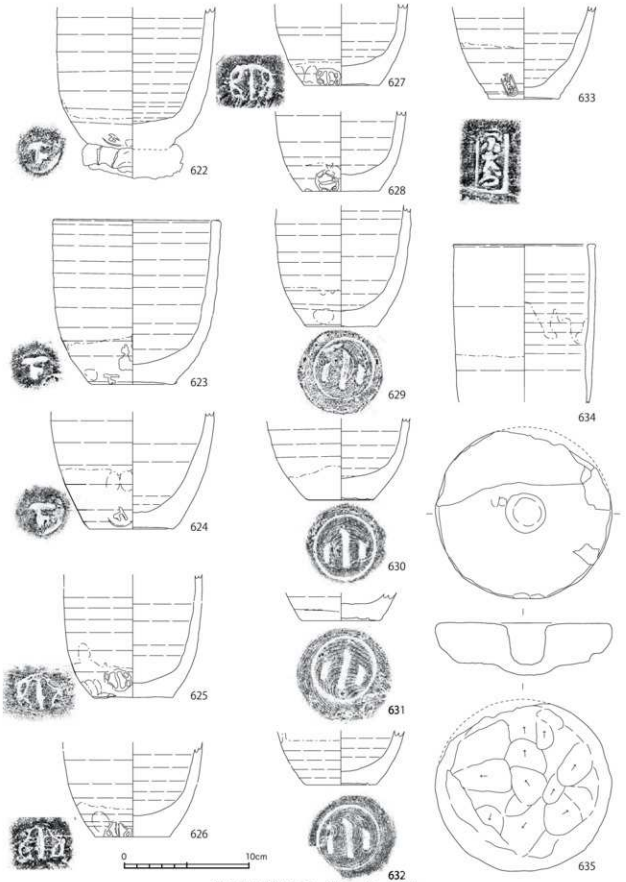
物原 出土資料（17） 壺類 S=1/3



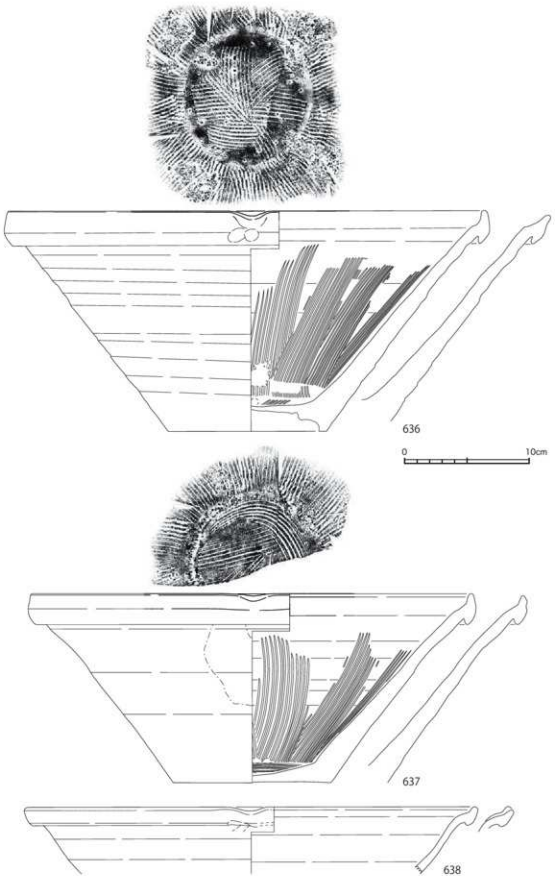
物原 出土資料（18） 蓋・その他 S=1/3



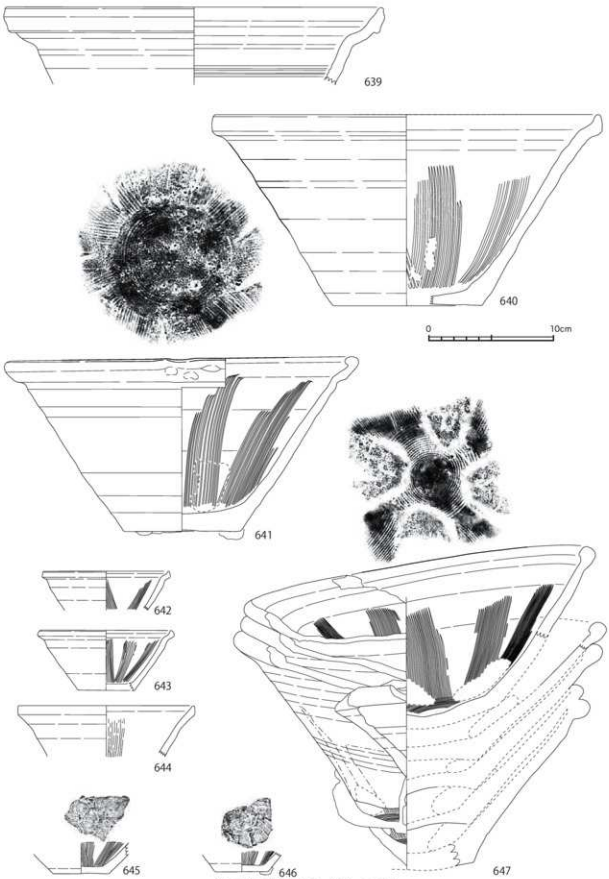
物原 出土資料（19） 銭褒 S=1/3



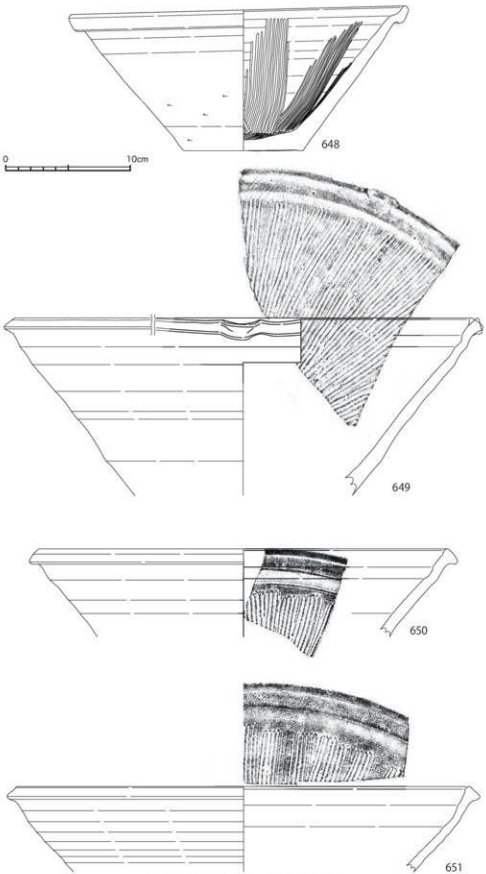
物原 出土資料（20） 銭貨・栓 S=1/3



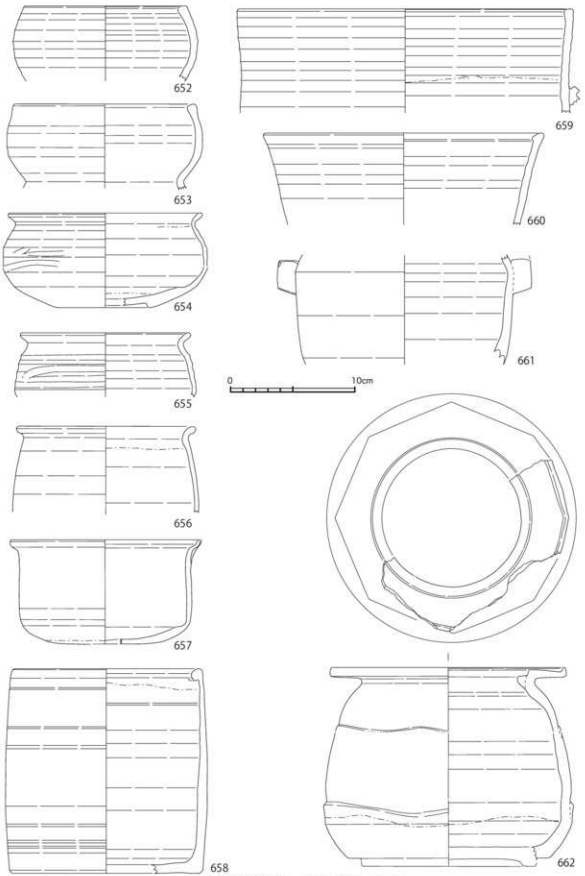
物原 出土資料（21） 擂鉢 S=1/3



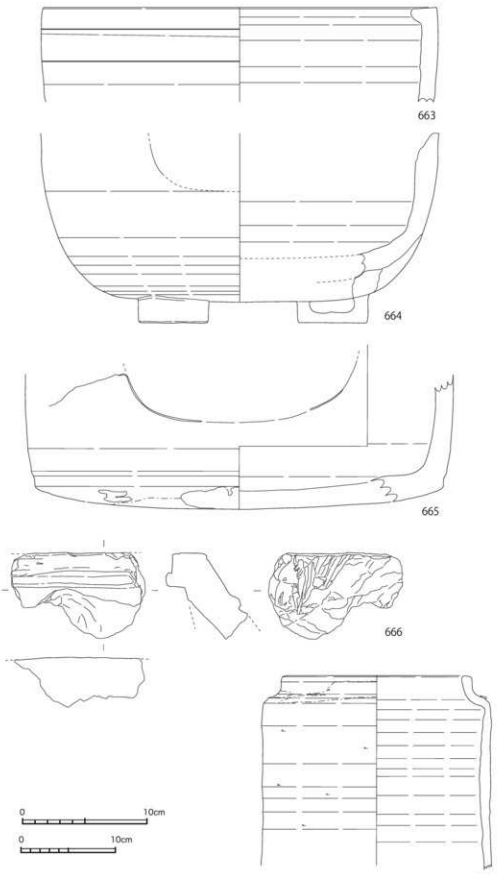
物原 出土資料（22） 擂鉢 S=1/3



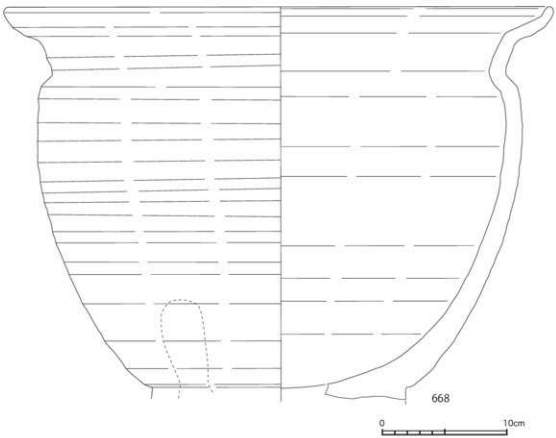
物原 出土資料（23） 擂鉢 S=1/3



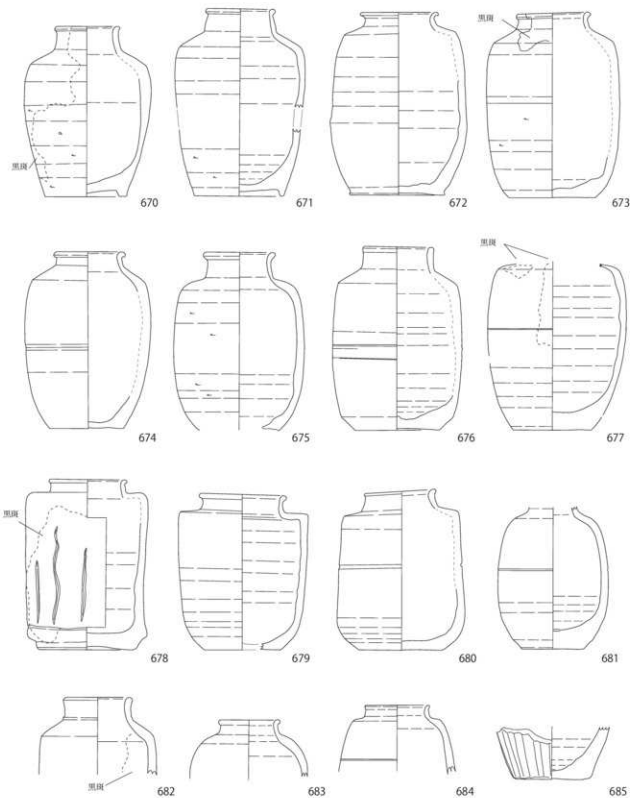
物原 出土資料（24） 水指・建水 S=1/3



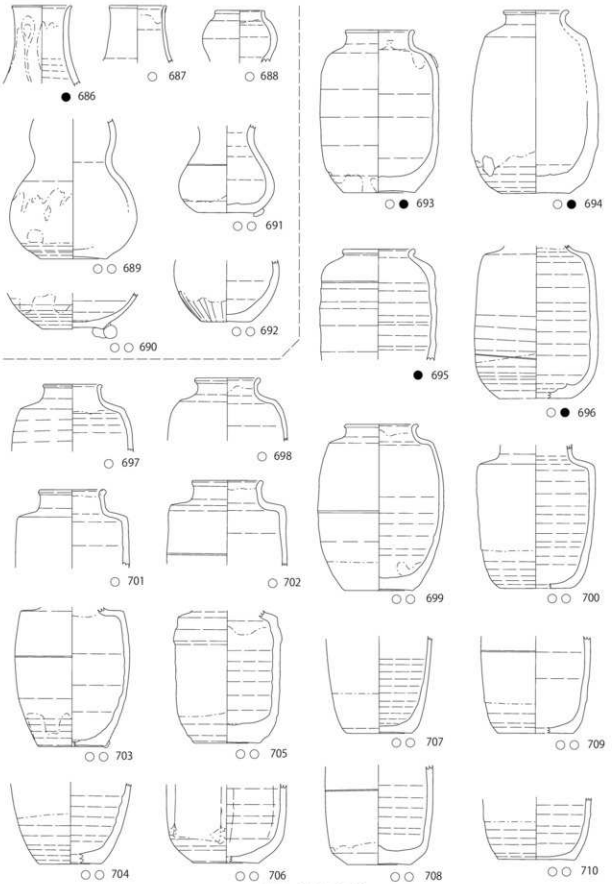
物原 出土資料（25） 風炉・土管・その他 S=1/3, 667 のみ S=1/4



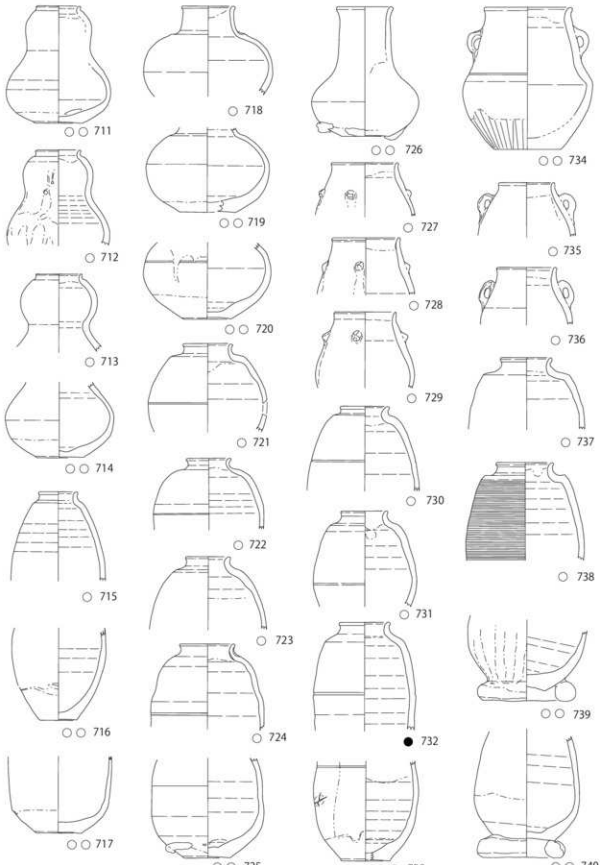
物原 出土資料（26） 甕類 S=1/3


黒斑
670
671
672
黒斑
673
674
675
676
黒斑
677
黒斑
678
679
680
681
黒斑
682
683
684
685
0
10cm
茶入の施釉範囲
外面腰部
内面
無釉、露胎
外面（地釉）と同釉
錆釉

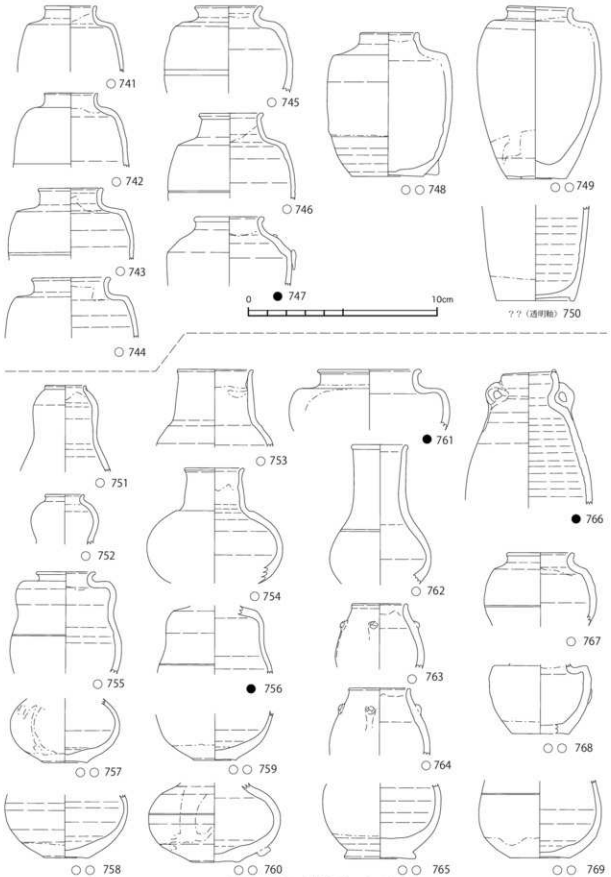
茶入　F類　S=1/2


● 686
○ 687
○ 688
○ ● 693
○ ● 694
○ ○ 689
○ ○ 691
● 695
○ ● 696
○ ○ 690
○ ○ 692
○ 697
○ 698
○ 701
○ 702
○ ○ 699
○ ○ 700
○ ○ 703
○ ○ 705
○ ○ 707
○ ○ 709
○ ○ 704
○ ○ 706
○ ○ 708
○ ○ 710

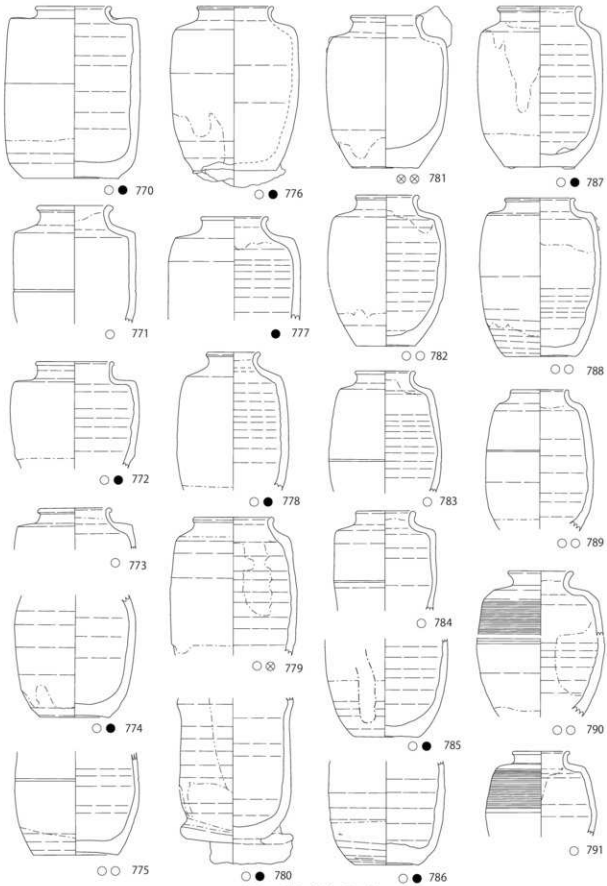
茶入　B類　S=1/2


711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740

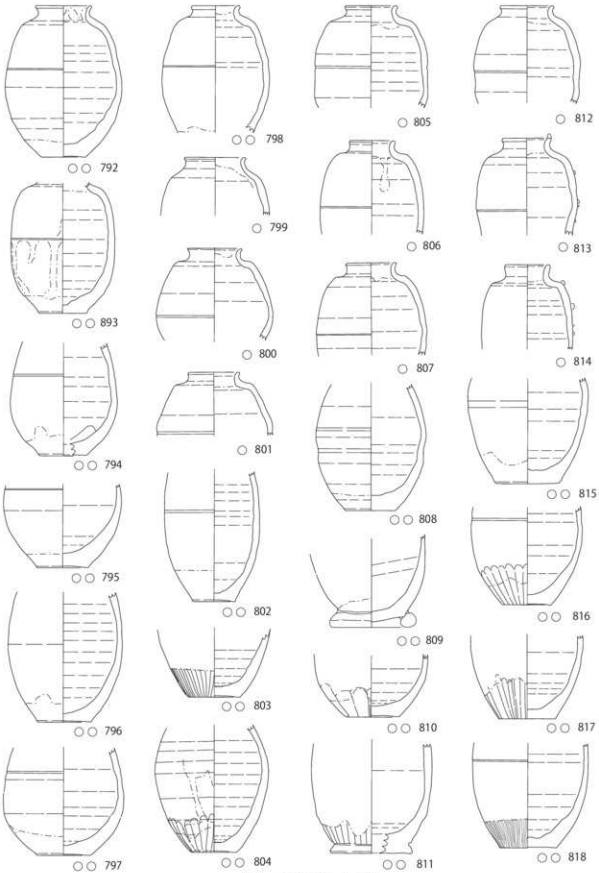
茶入　A類　S=1/2


741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
??（透明釉）
0
10cm
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769

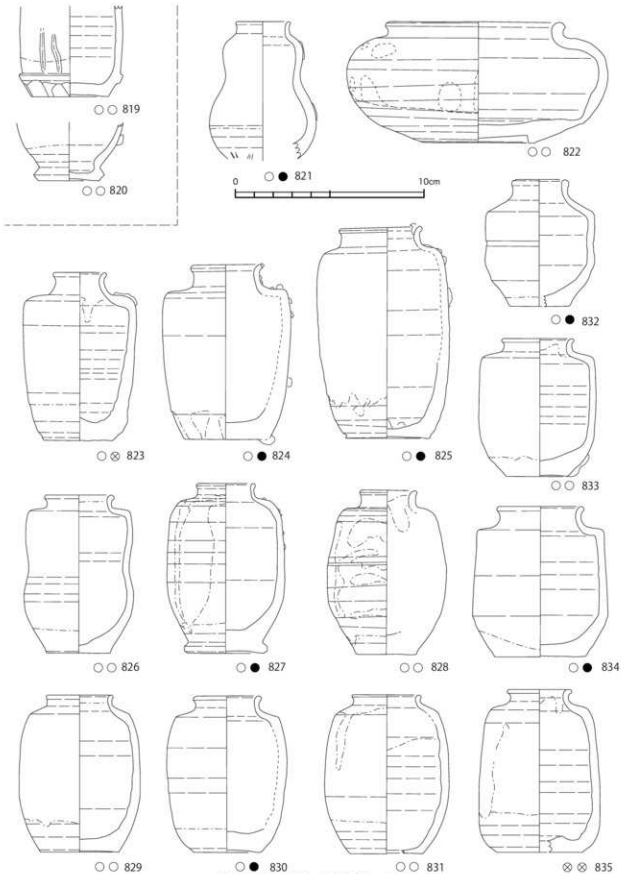
茶入　A類・C類（1）　S=1/2


○● 770
○● 776
⊗⊗ 781
○● 787
○ 771
● 777
○○ 782
○○ 788
○● 772
○● 778
○ 783
○○ 789
○ 773
○ 784
○⊗ 779
○● 774
○● 785
○○ 790
○○ 775
○● 780
○● 786
○ 791

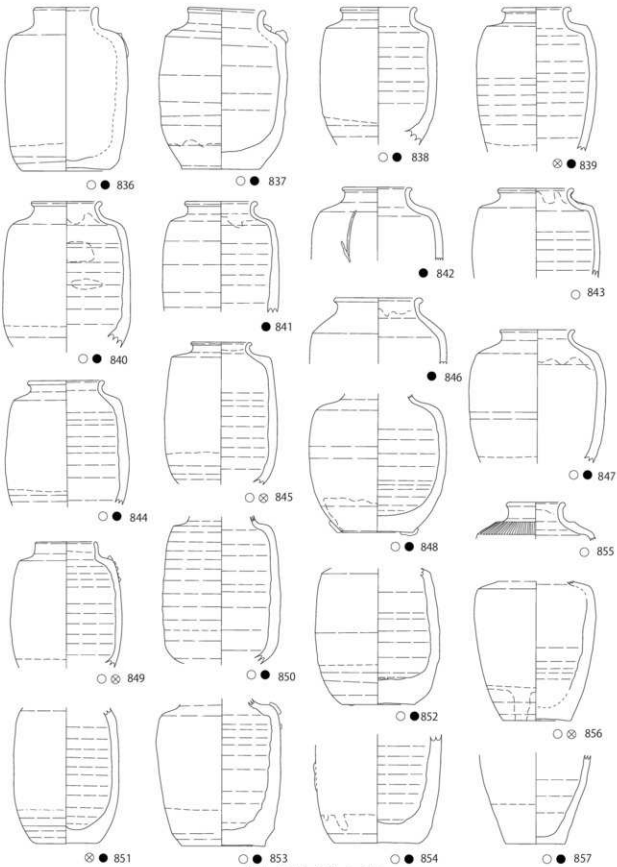
茶入　C類（2）　S=1/2


792
798
805
812
799
806
813
893
800
807
814
794
801
808
815
795
802
809
816
796
803
810
817
797
804
811
818

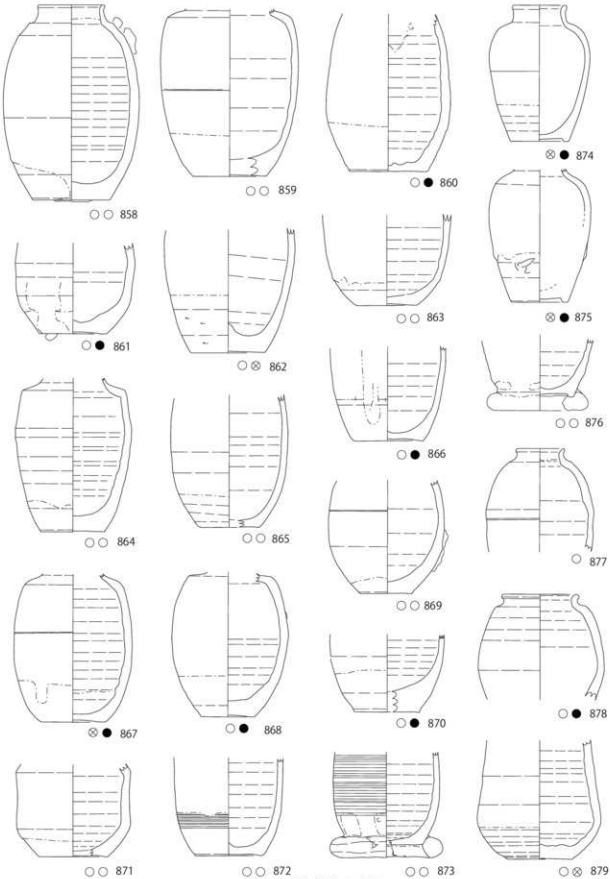
茶入　C類（3）　S=1/2



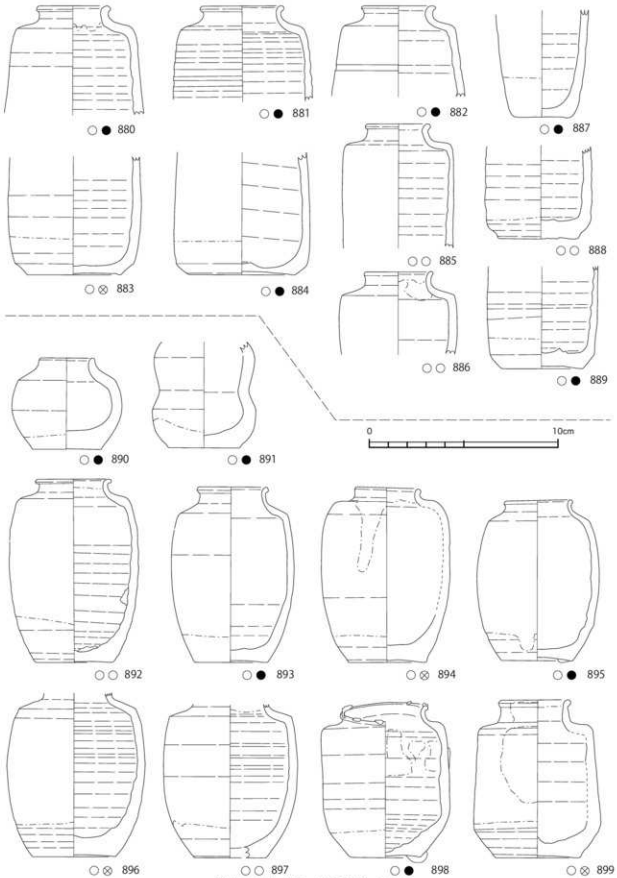
茶入　C類（4）・D類（1）　S=1/2


○ ● 836
○ ● 837
○ ● 838
⊗ ● 839
● 840
● 841
● 842
○ 843
● 844
○ ⊗ 845
● 846
○ ● 847
○ ● 848
○ 855
○ ⊗ 849
○ ● 850
○ ● 852
○ ⊗ 856
⊗ ● 851
○ ● 853
○ ● 854
○ ● 857

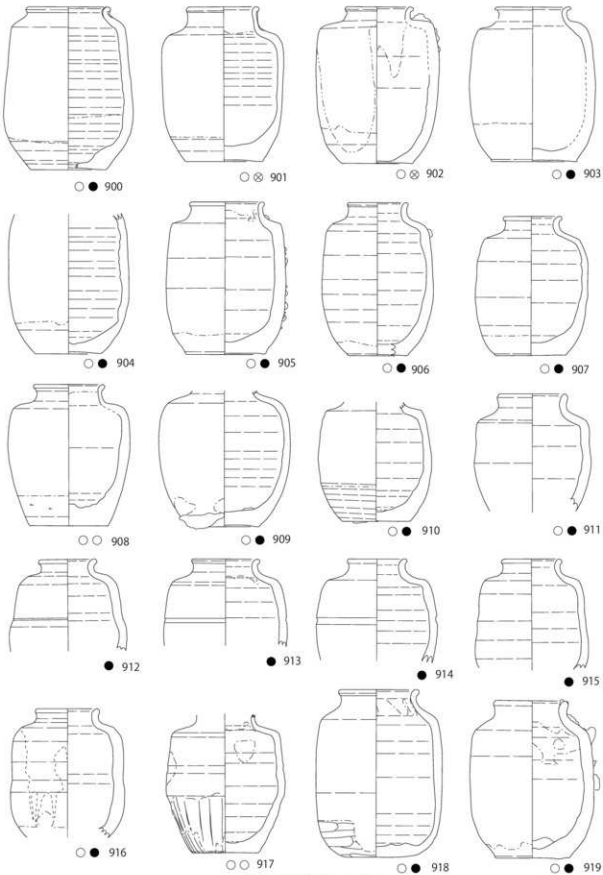
茶入　D類（2）　S=1/2


○○ 858
○○ 859
○● 860
⊗● 874
○● 861
○⊗ 862
○○ 863
⊗● 875
○○ 876
○● 866
○○ 864
○○ 865
○○ 869
○ 877
⊗● 867
○● 868
○● 870
○● 878
○○ 871
○○ 872
○○ 873
○⊗ 879

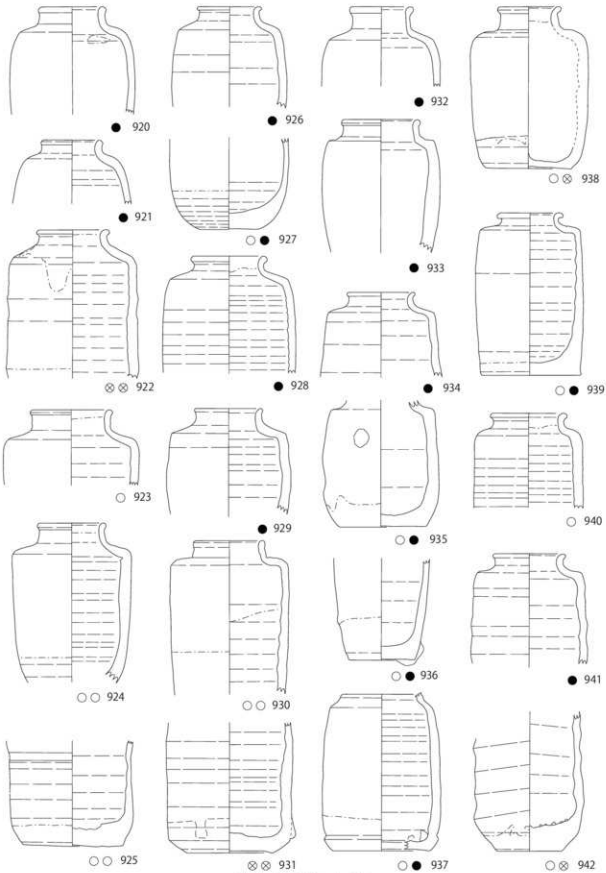
茶入　D類（3）　S=1/2



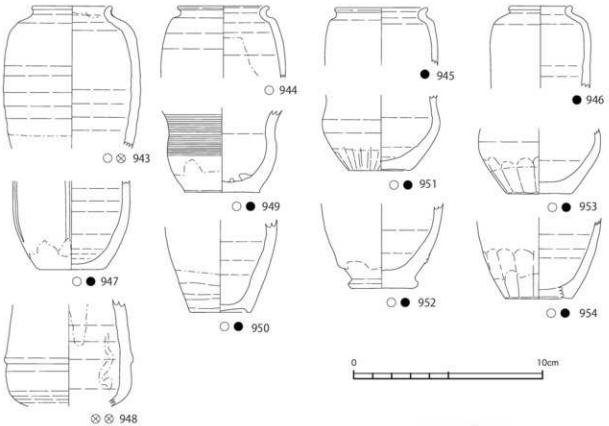
茶入　D類（4）・E類（1）　S=1/2

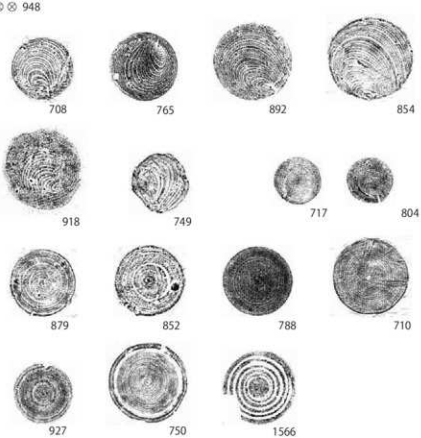

○● 900
○⊗ 901
○⊗ 902
○● 903
○● 904
○● 905
○● 906
○● 907
○○ 908
○● 909
○● 910
○● 911
● 912
● 913
● 914
● 915
○● 916
○○ 917
○● 918
○● 919

茶入　E類（2）　S=1/2

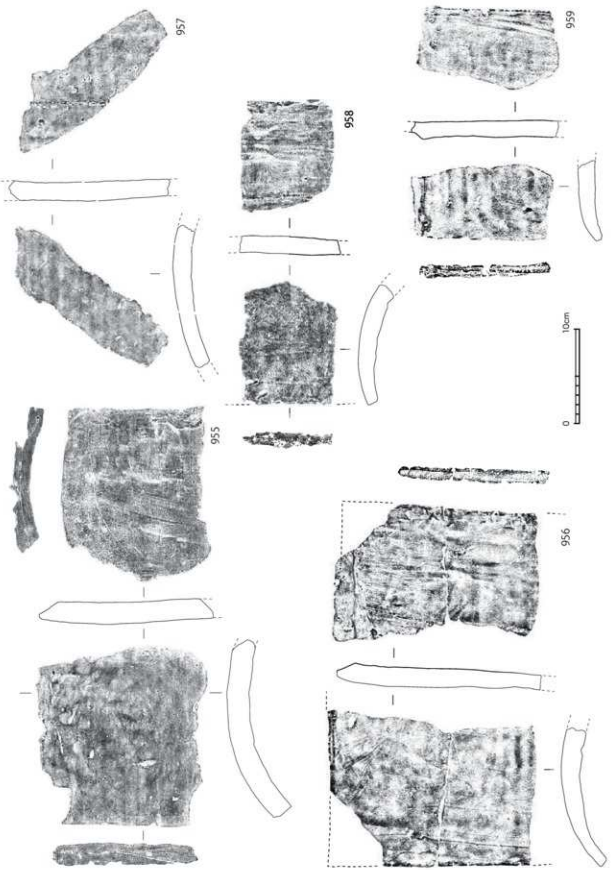

920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942

茶入　E類（3）　S=1/2

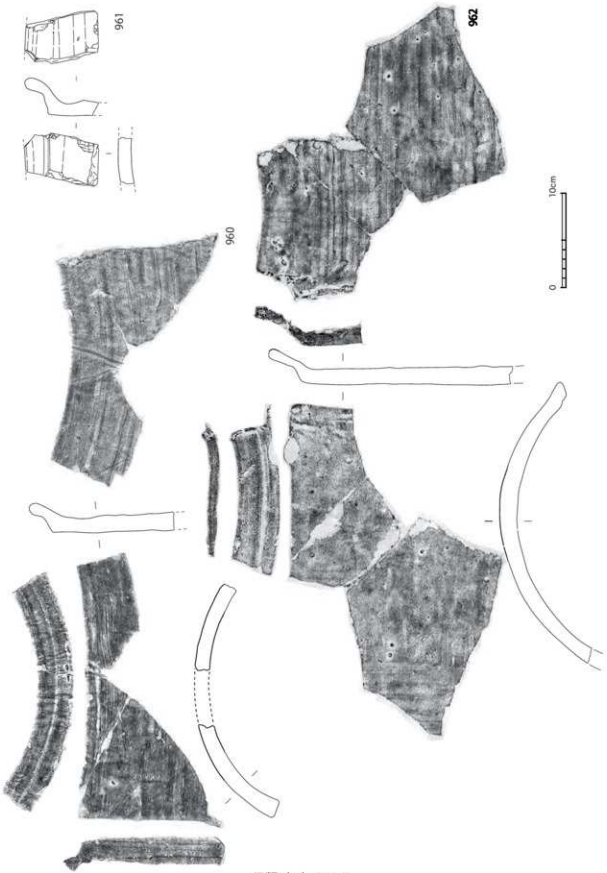




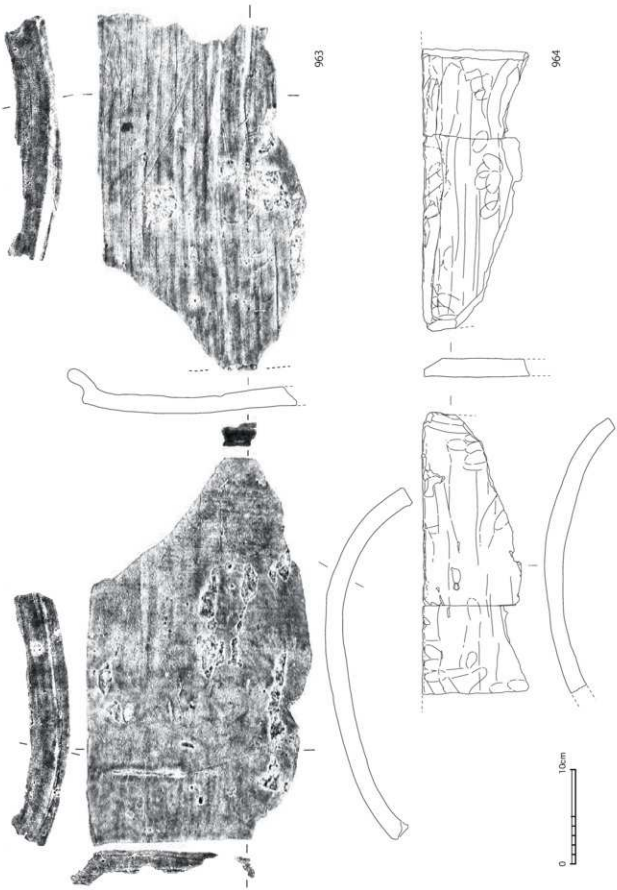
茶入　E類（4）・底部拓本　S=1/2



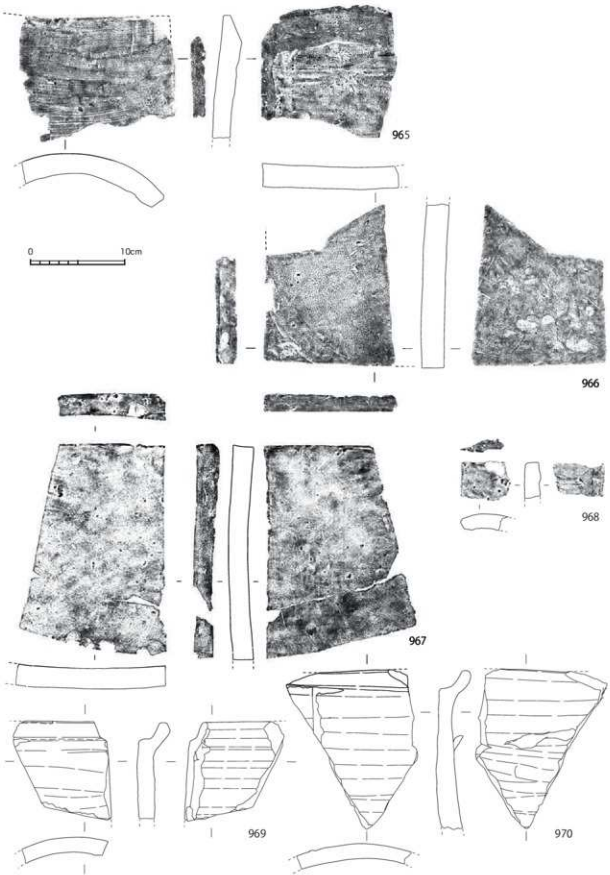
瓦類（1） S=1/4



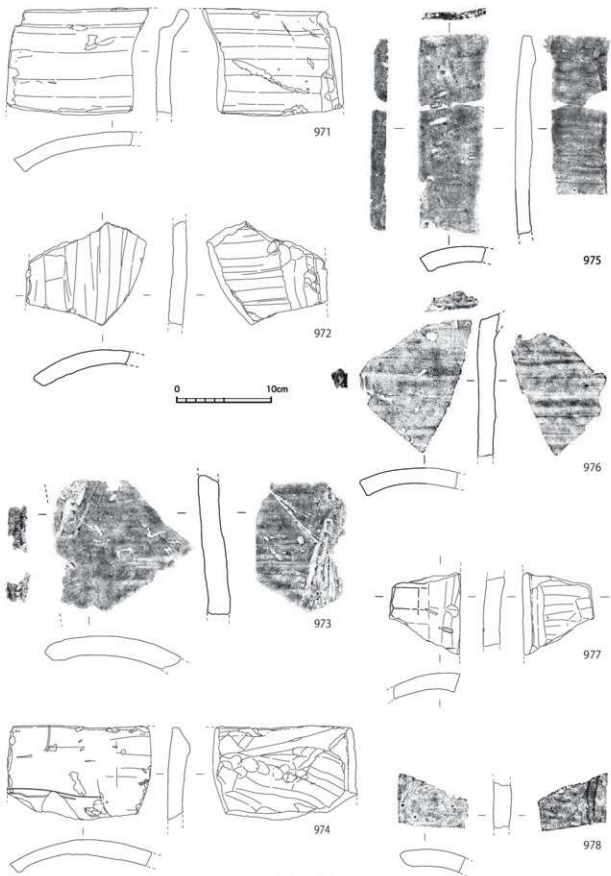
瓦類（2） S=1/4



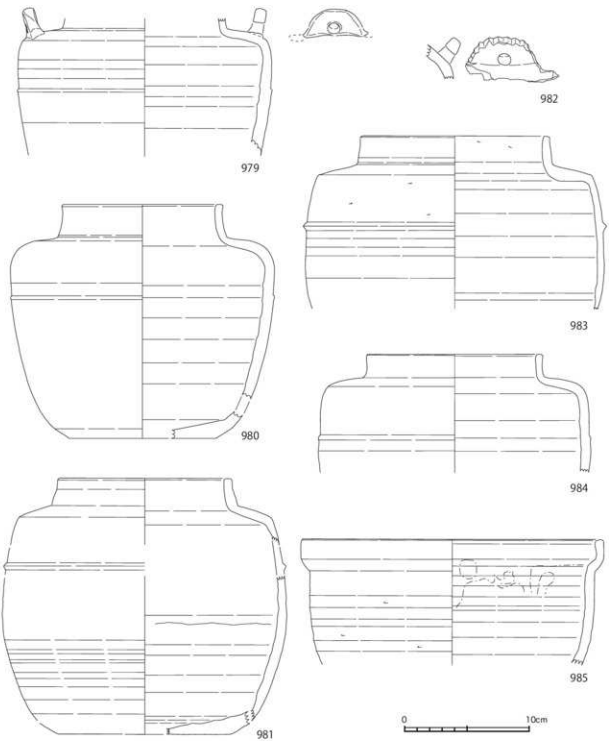
瓦類（3） S=1/4



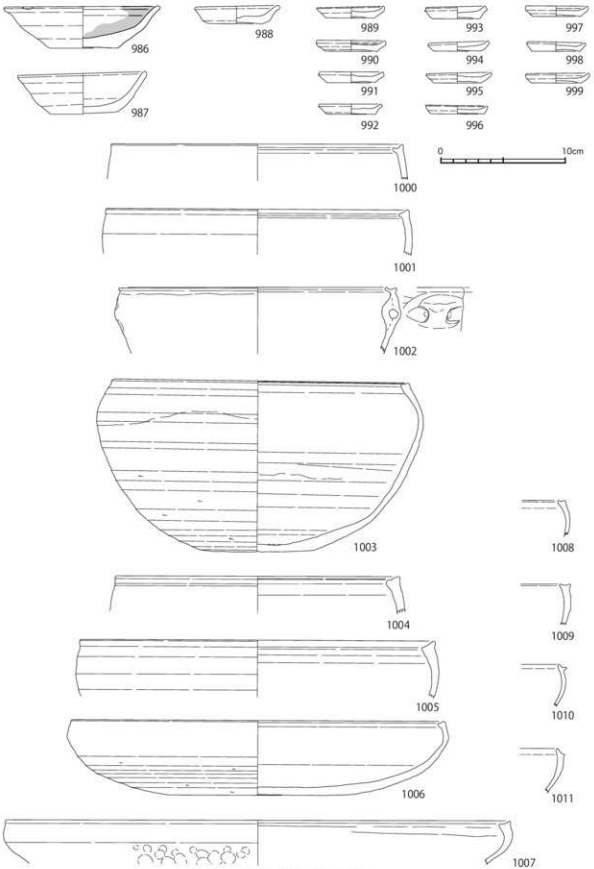
瓦類（4） S=1/4



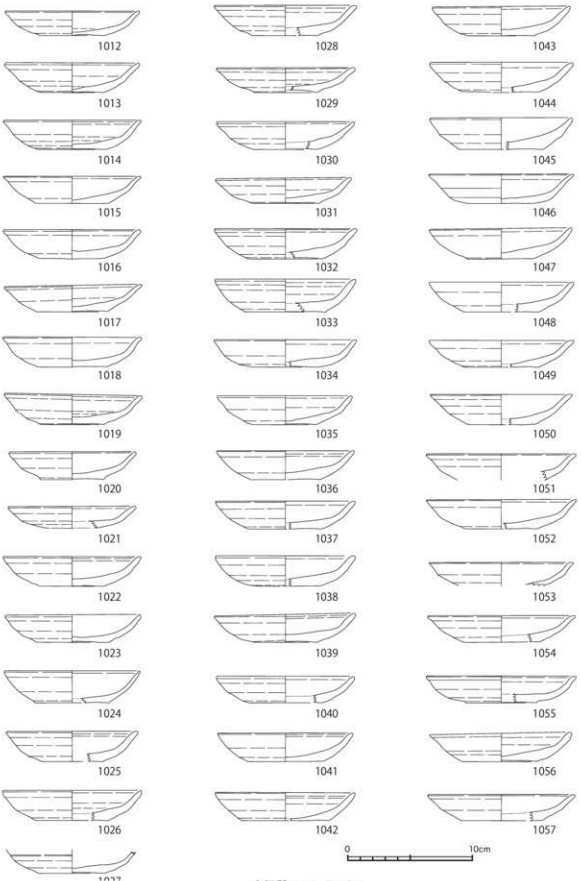
瓦類（5） S=1/4



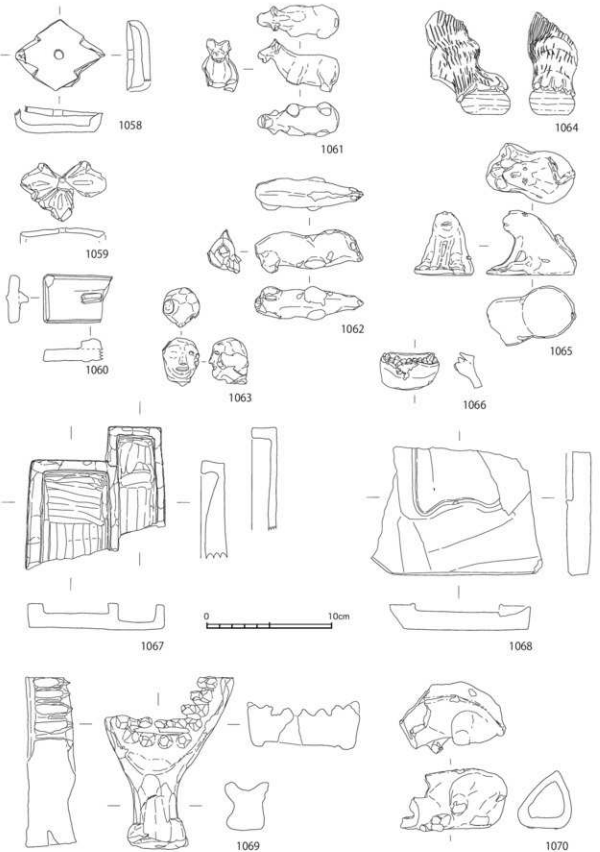
鍋・釜類　S=1/3


986
988
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
987
0
10cm
1000
1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011

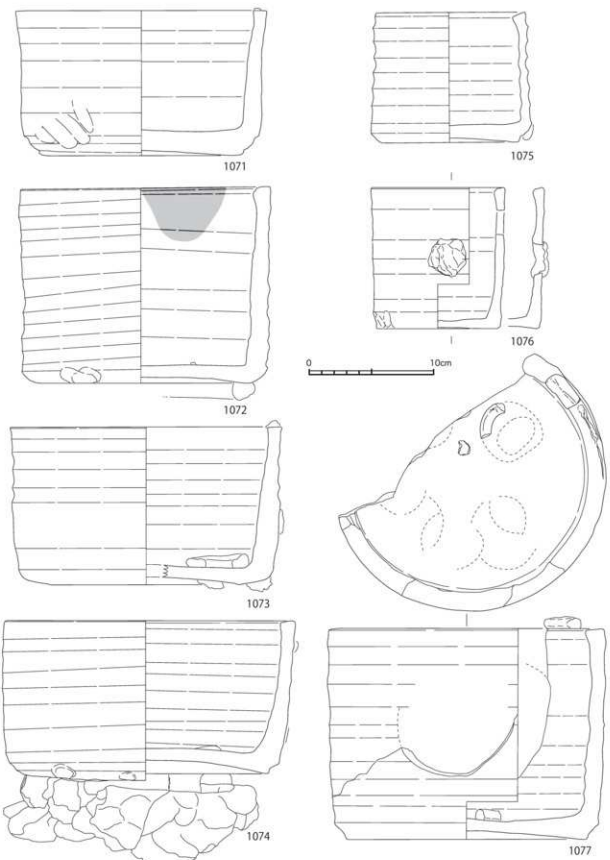
土師質　鍋・皿　S=1/3


1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036
1037
1038
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
0
10cm

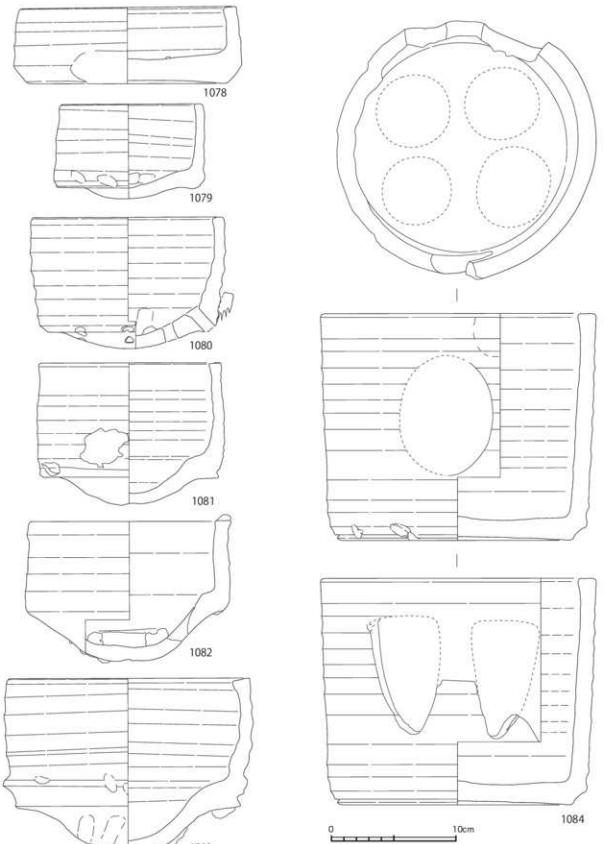
土師質　皿　S=1/3


1058
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
0
10cm
1068
1069
1070

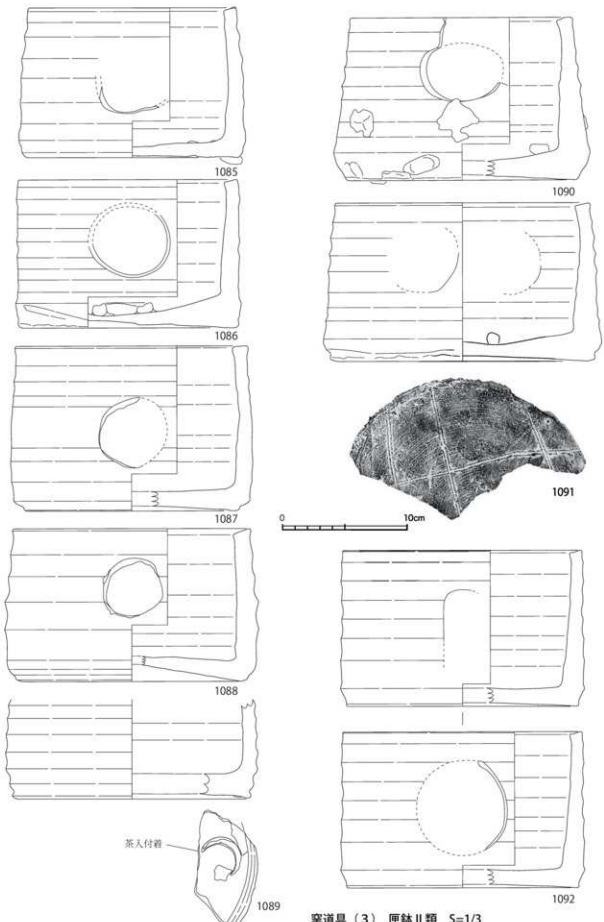
人形類　S=1/3



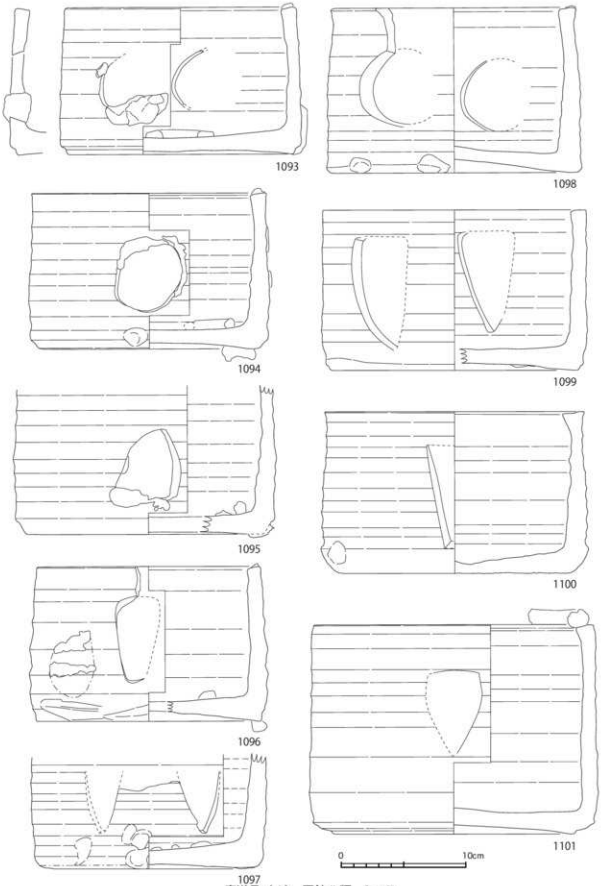
窯道具（1） 匣鉢Ⅱ類 S=1/3



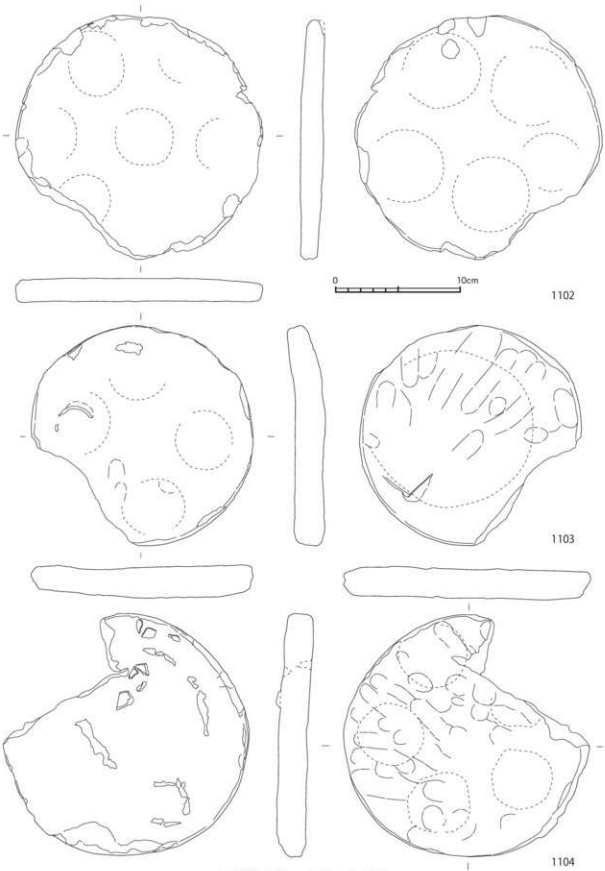
窯道具（2） 匣鉢Ⅰ・Ⅱ類 S=1/3



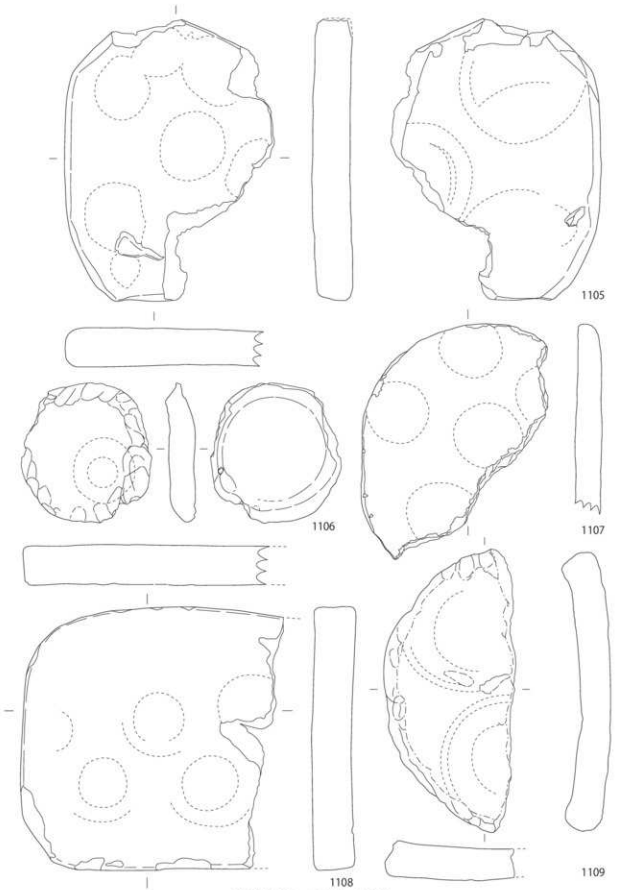
窯道具（3） 匣鉢Ⅱ類 S=1/3



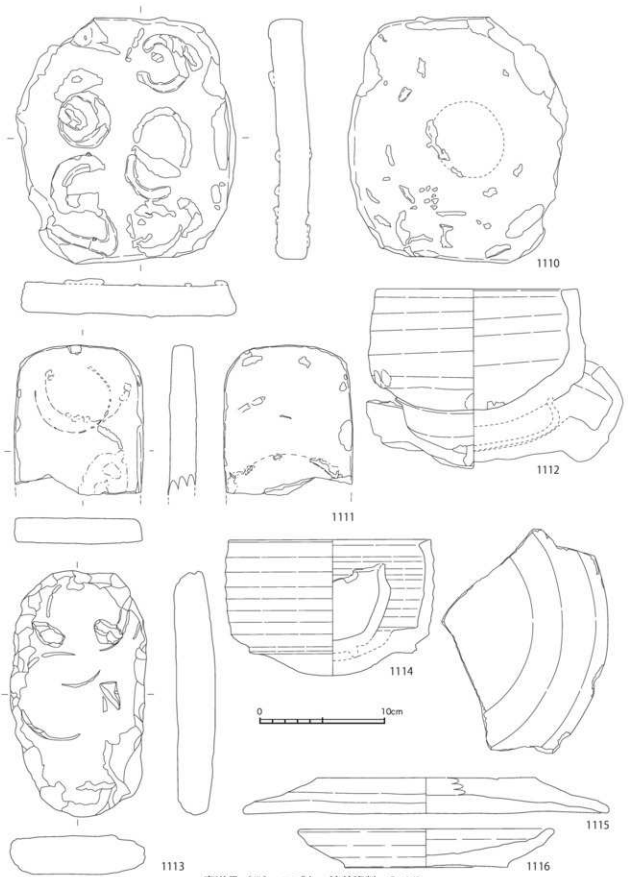
窯道具（4） 匣鉢Ⅱ類 S=1/3



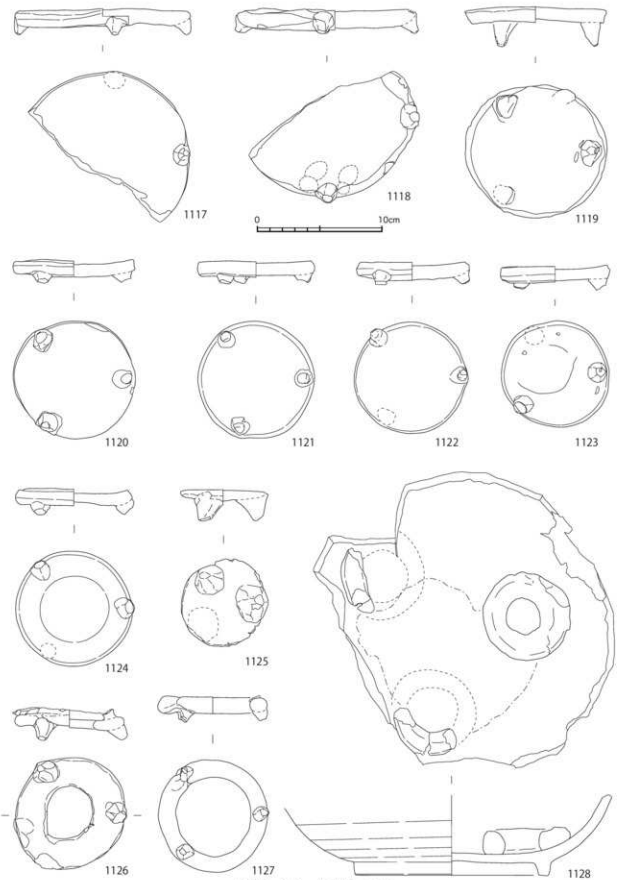
窯道具（5） エブタ S=1/3



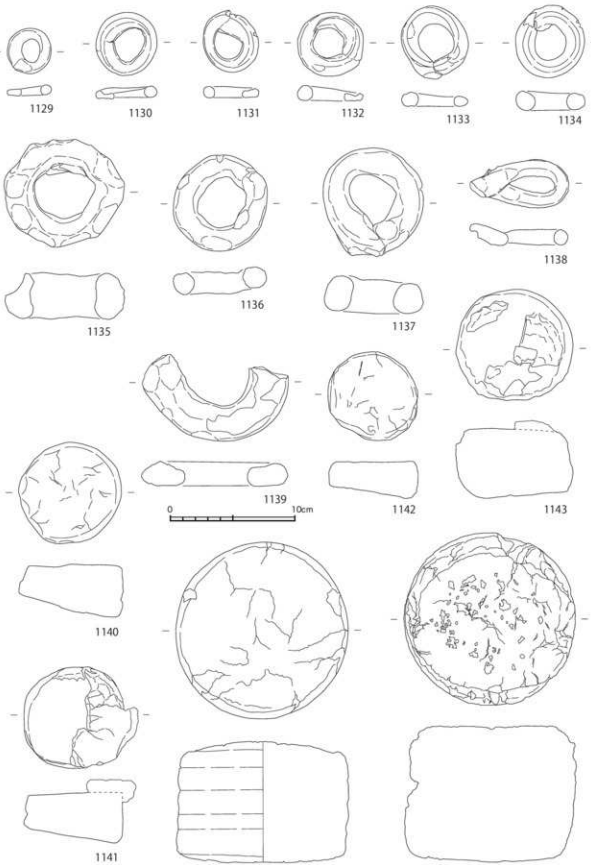
窯道具（6） エブタ　S=1/3



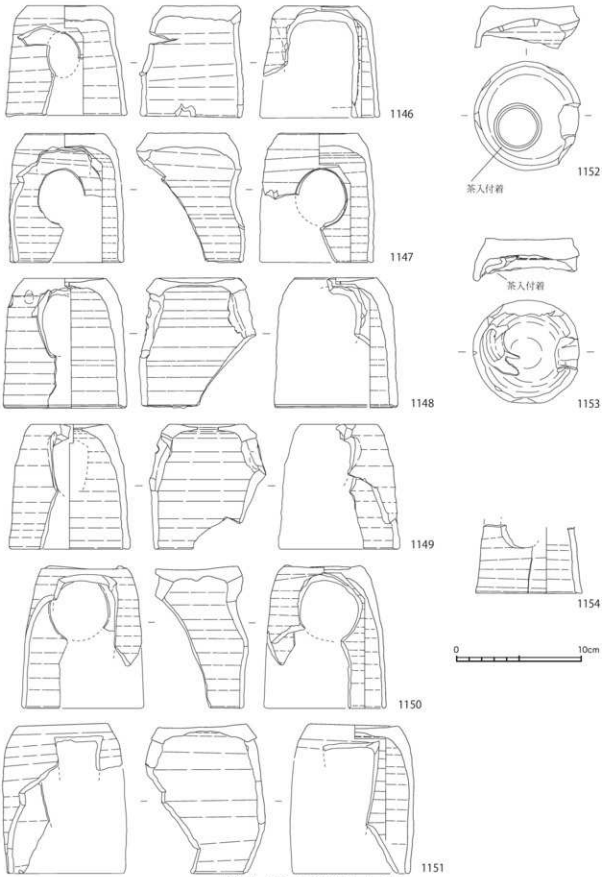
窯道具（7） エブタ・溶着資料 S=1/3


1117
1118
0
10cm
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128

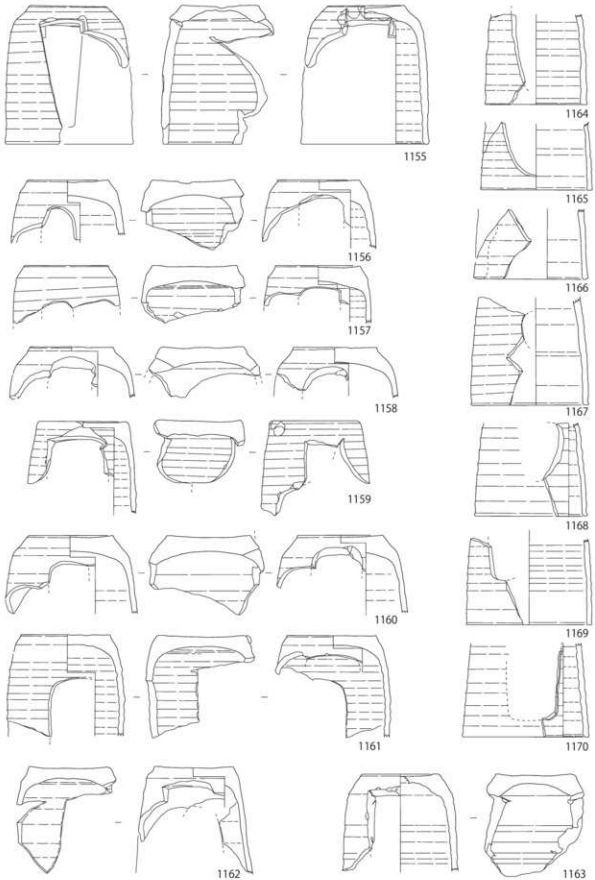
窯道具（8） トチ類 S=1/3



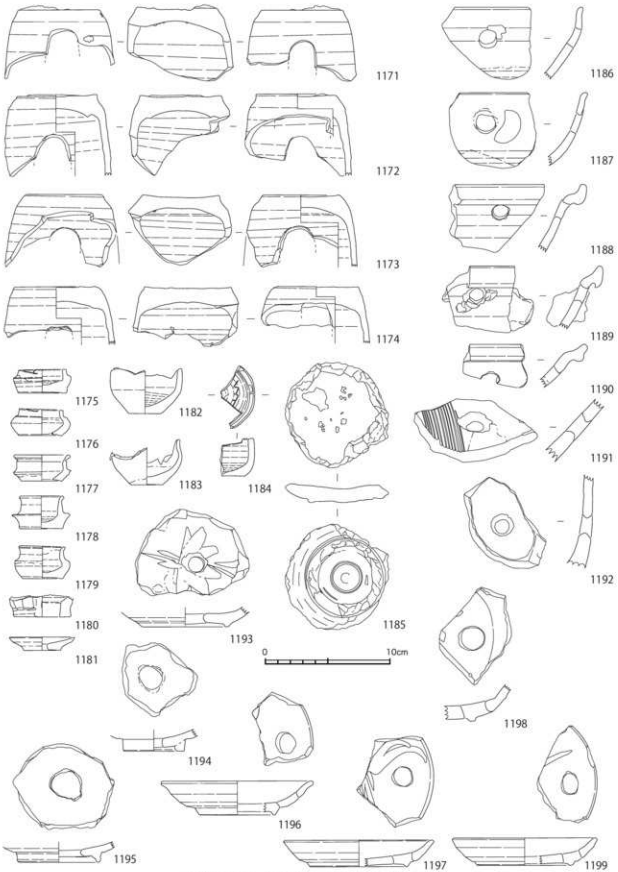
窯道具（9） トチ・焼台類 S=1/3



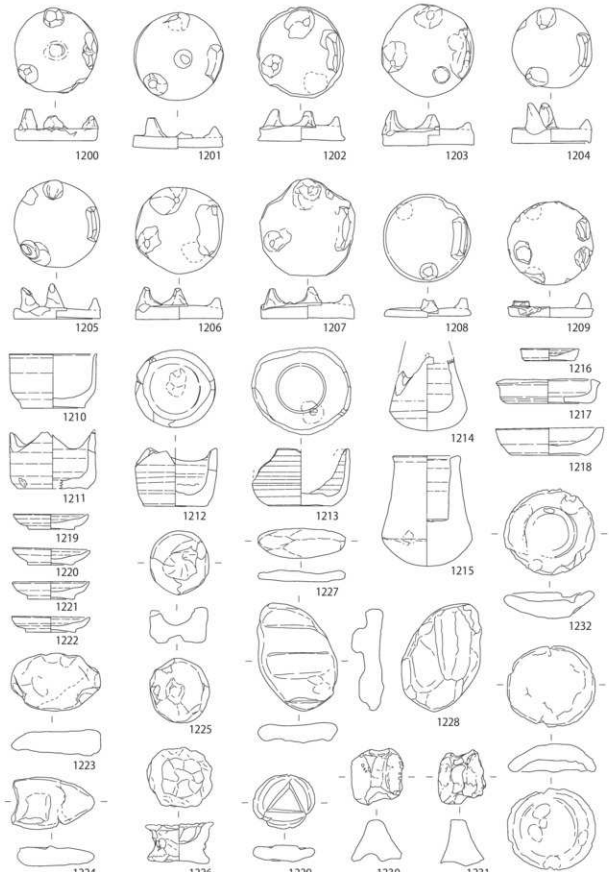
窯道具（10） 匣鉢 III 類 S=1/3



窯道具（11） 匣鉢 III 類 S=1/3



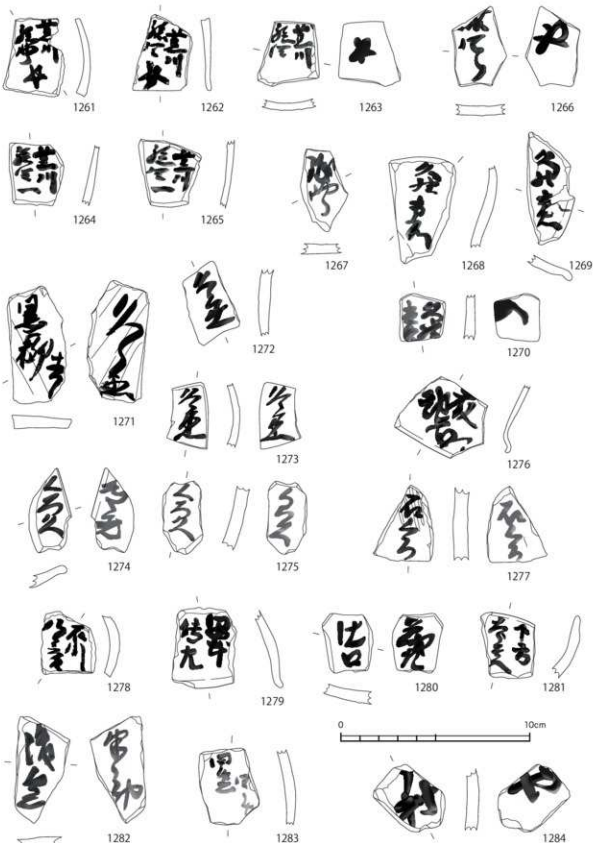
窯道具（12） 匣鉢 III 類・色見・その他 S=1/3



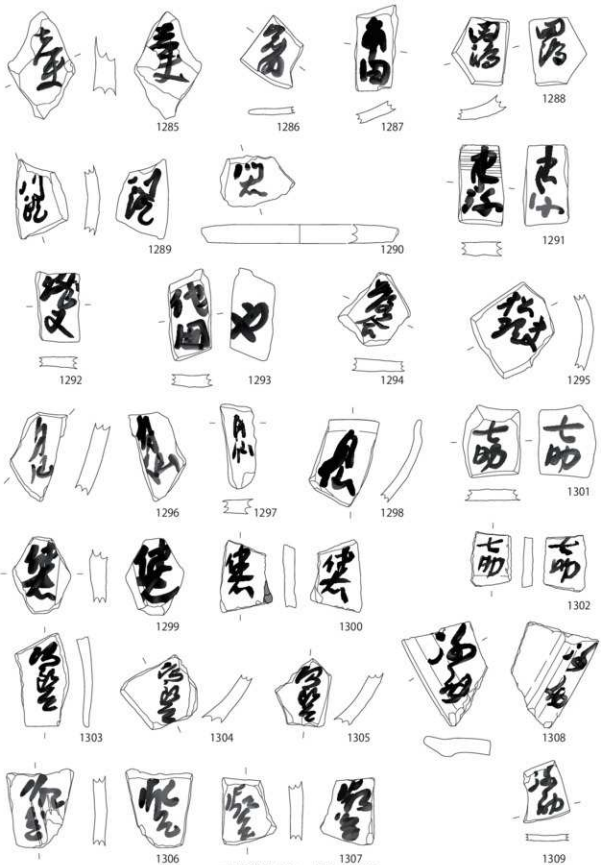
窯道具（13） 足付き板トチ B 類・その他 S=1/3

1234
1235
1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1254
1255
1249
1250
1256
1251
1252
1253
1257
1258
1259
1260
0
10cm

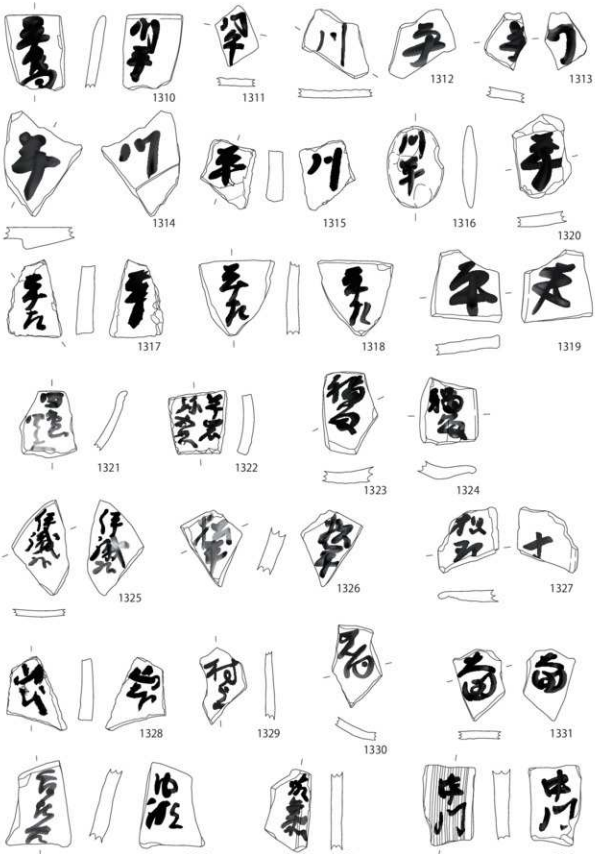
文字資料（1） Ⅰ類　S=1/2


1261
1262
1263
1266
1264
1265
1267
1268
1269
1272
1270
1271
1273
1276
1274
1275
1277
1278
1279
1280
1281
0
10cm
1282
1283
1284

文字資料（2） Ⅰ類 S=1/2


1285
1286
1287
1288
1289
1290
1291
1292
1293
1294
1295
1296
1297
1298
1301
1299
1300
1302
1303
1304
1305
1308
1306
1307
1309

文字資料（3） Ⅰ類 S=1/2


1310
1311
1312
1313
1314
1315
1316
1320
1317
1318
1319
1321
1322
1323
1324
1325
1326
1327
1328
1329
1330
1331
1332
1333
1334

文字資料（4） Ⅰ類 S=1/2

1335
1336
1337
1338
1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1350
1351
1352
1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361

文字資料（5） Ⅰ類　S=1/2

1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1380
1381
1382

文字資料（6） Ⅰ類　S=1/2

1383
1384
1385
1386
1387
1388
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1396
1397
1398
1399
1401
1403
1400
1402
1404

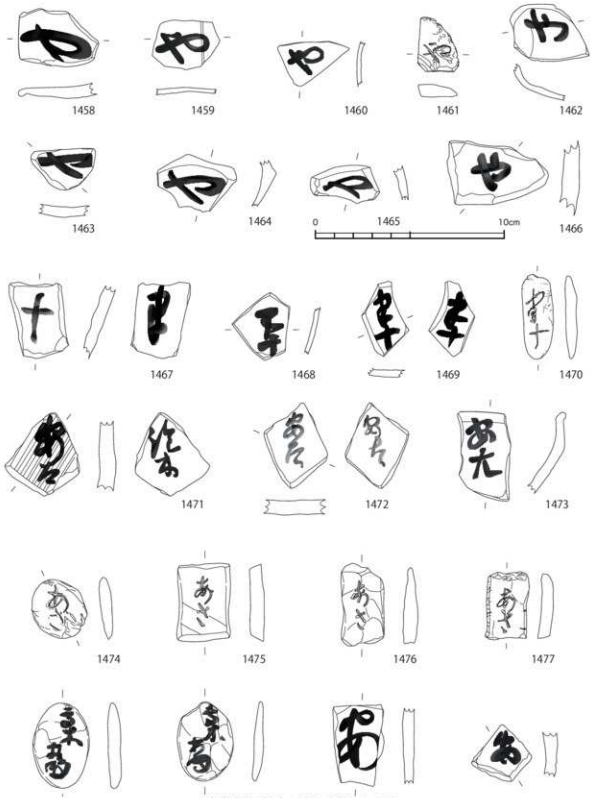
文字資料（7） Ⅰ類　S=1/2

1405
1406
1407
1408
1409
1410
1411
1412
1413
1414
1415
1416
1417
1418
1419
1420
1421
1422
1423
1424
1425
1428
1429
1426
1427
1430
0
10cm

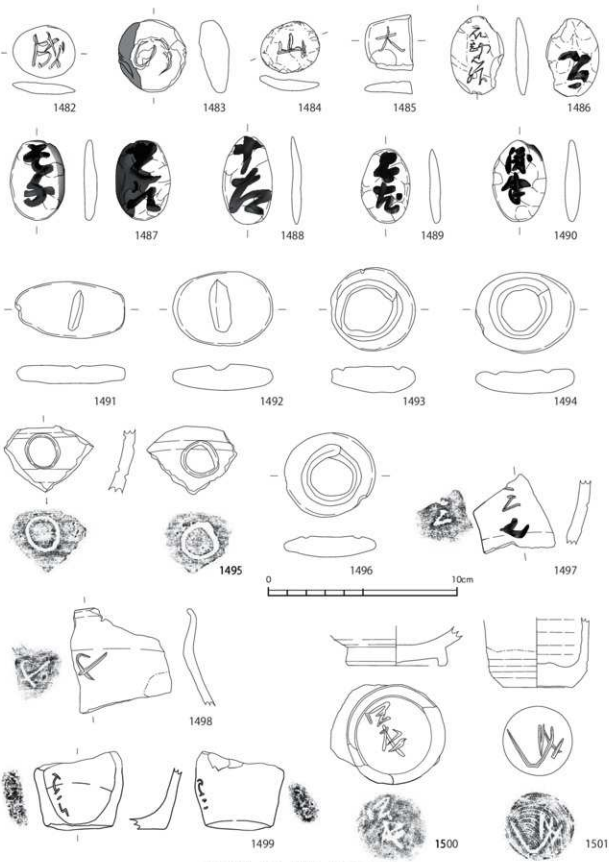
文字資料（8） Ⅰ類 S=1/2

1431
1432
1433
1434
1435
1436
1437
1438
1439
1440
1441
1442
1443
1444
1445
1446
1447
1448
1449
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457

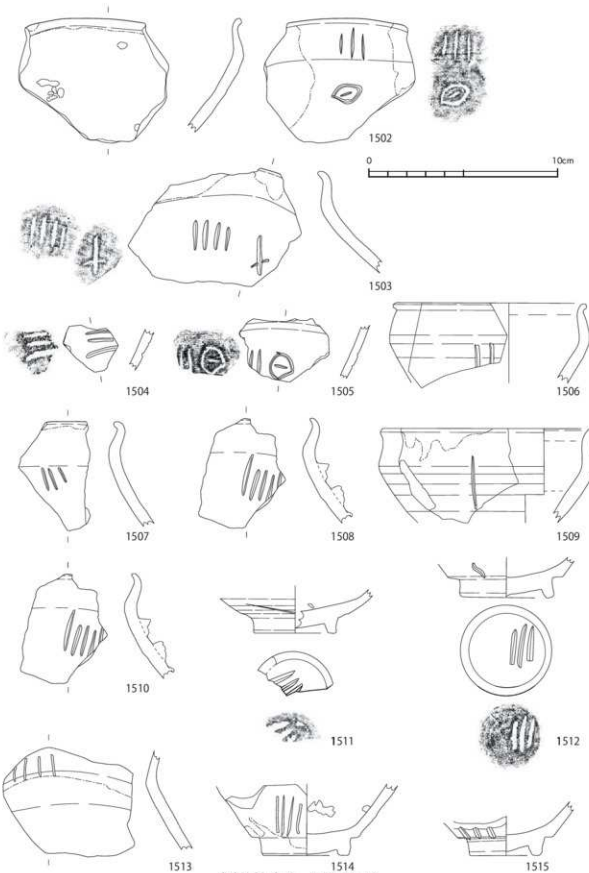
文字資料（9） Ⅰ類　S=1/2



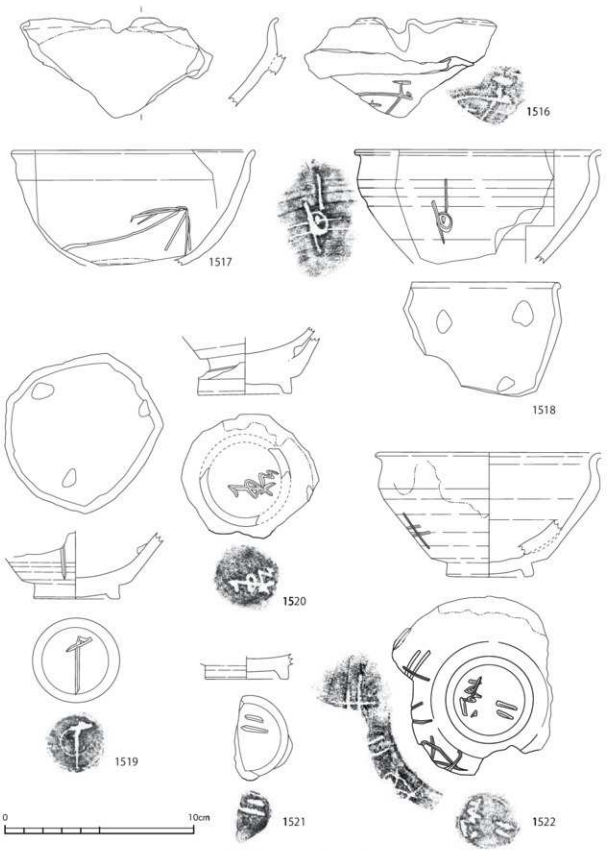
文字資料（10） Ⅰ類・Ⅱ類 S=1/2



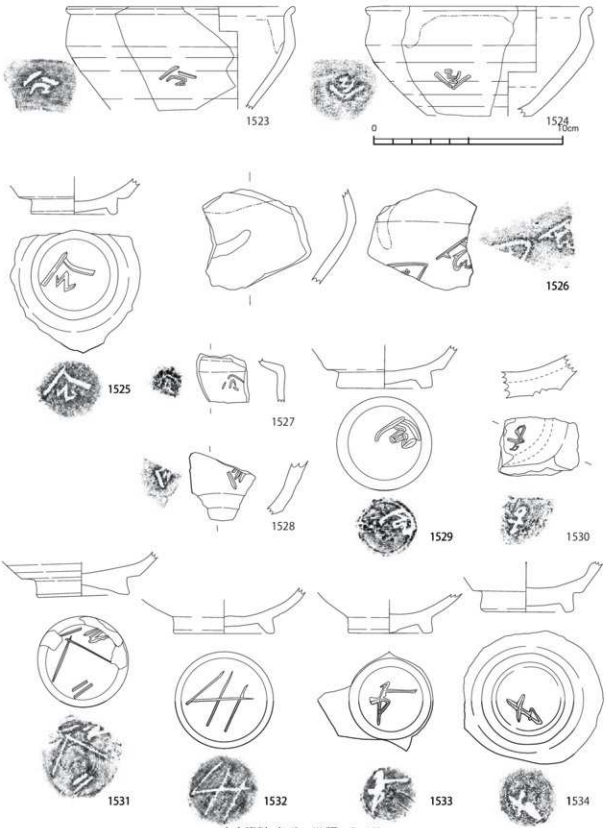
文字資料（11） Ⅱ類・Ⅲ類　S=1/2



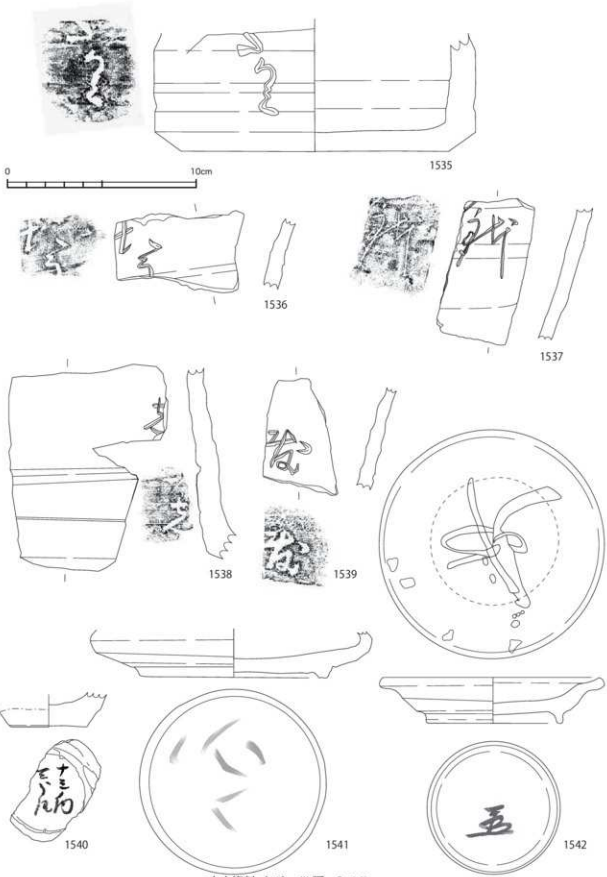
文字資料（12） III類　S=1/2



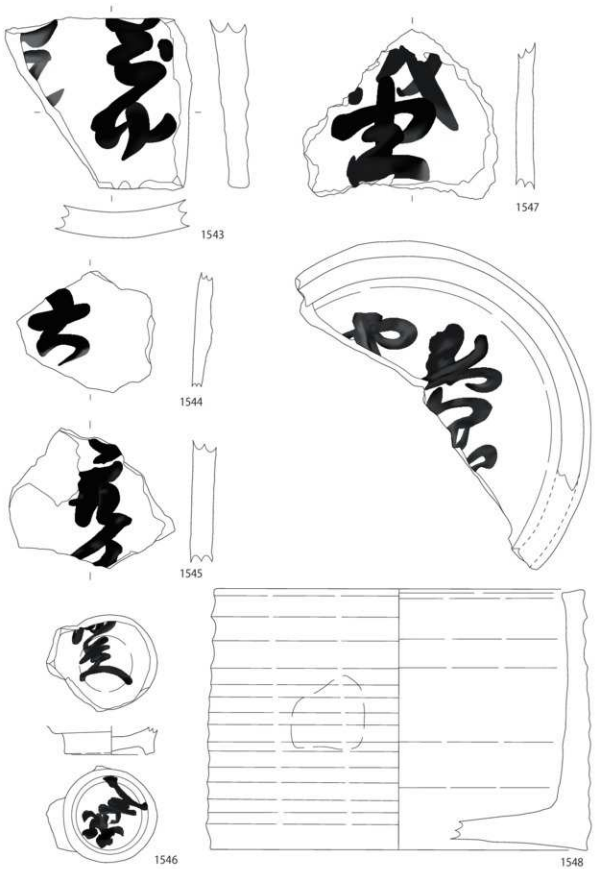
文字資料（13） III類　S=1/2



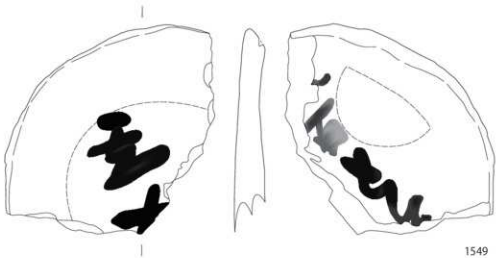
文字資料（14） III類 S=1/2

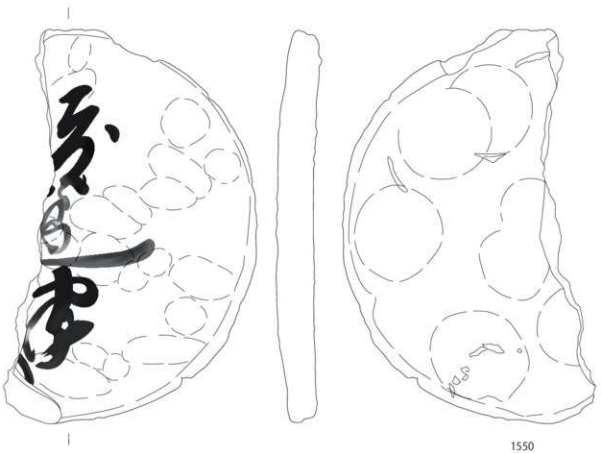


文字資料（15） Ⅲ類 S=1/2

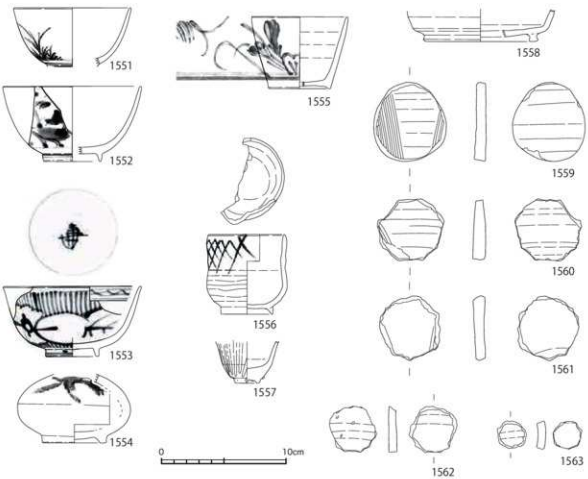


文字資料（16） III 類 S=1/2

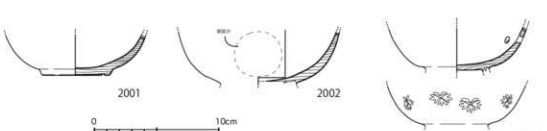




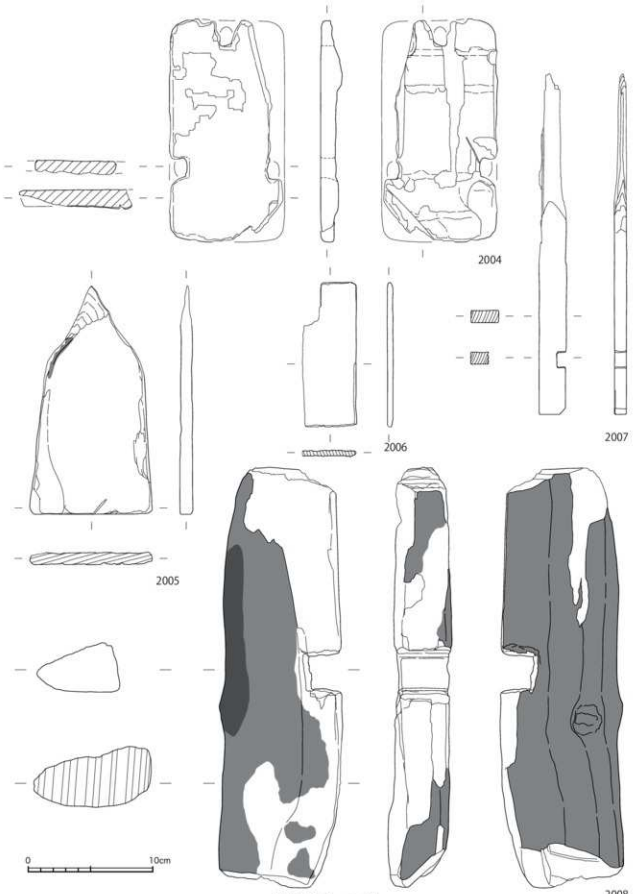
文字資料（17） III類 S=1/2



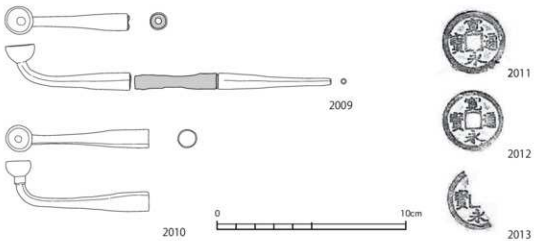
その他 陶磁器類　S=1/3



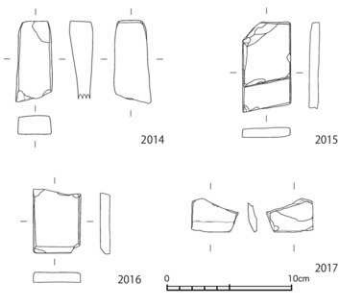
木製品（1） 漆椀　S=1/3



木製品（2） S=1/3



金属製品　煙管・銭貨　S=1/2



石製品　砥石　S=1/3

調査前風景　西から　（左手前の低い傾斜地が物原末端。谷入口方向から撮影）

調査前風景　東から　（中央奥に赤津集落が見える。右手前ブルーシートは盗掘坑）

完掘状況　西から

（左側、窯体のほぼ正面を流路は挟るように流れる。右側花崗岩礫の周辺にも遺物の集中がみられた。）

完掘状況　東から

物原付近完掘状況　南から　（壁面右端の地山より左側が物原堆積層。ブルーシートは盗掘坑）

完掘状況　南西から　（調査区外左手は作業場とされる平坦面が続く）

物原堆積状況　南から（上から表土および盗掘による撹乱土、物原堆積層、谷地形の自然堆積層）

物原堆積状況　南から（盗掘による撹乱が著しく壁面が崩落、足元はNR01 黒色土）

ベルト A 壁面　NR01 の堆積状況　東から（腐食質を含む黒色土層より上が 17 世紀以降の遺物包含層）

同上　（鉄絵皿は第 6 層に含まれる）

ベルト A　東から　（上層は近世～現代水田耕作土を含む）

ベルト A　東から　（谷の右岸にあたる。画面外、右上に作業場跡とされる平坦面。）

ベルト C　西から　（黒色粘土層以下は近世遺物が含まれない。）

ベルト D　西から
（物原の堆積が最も厚くなる地点で谷右岸は調査範囲外となる。ベルトに続く砂層は噴砂跡。）

自然流路（NR01）下層　遺物出土状況
銭甕・擂鉢の集中する地点

作業場下方の流路部分　遺物出土状況
漆椀の入った匣鉢などを含む

自然流路（NR01）下層　遺物出土状況
碗・徳利・銭甕の集中する地点

自然流路（NR01）下層　遺物出土状況
茶入と下駄

自然流路（NR01）下層　遺物出土状況
煙管　中央に羅宇の木質部分（竹）が残る

自然流路（NR01）下層　遺物出土状況
物原末端部分　擂鉢集中地点

自然流路（NR01）下層　遺物出土状況
銭甕など集中する地点

ベルトコンベアー　設置状況
東から

トレンチ A 掘削状況
南西から

作業準備　朝礼

物原末端付近　表土掘削

物原の掘削作業
（大規模な盗掘坑の斜面下にあたり、
撹乱が著しい。）

同上

3

9

4

290

11

80

84

83

21

299

305

303

76

302

304

30

13

285

291

12

293

20

81

7

71

68

337

338

70

59

58

64

314

60

312

65

63

313

57

48

315

349

62

331

42

332

326

323

324

342

607

422

89

91

92

364

365

366

103

388

378

385

382

104

371

97

376

372

375

96

373

98

131

I
122

462
124

111

399

117

407

398

116

118

114

416

397

121

120

390

428

125

1221

429

446

1222

132

443

1219

425

129

1220

437

127

471

474

475

162

161

163

46

351

166

1179

1

476

1178

139

603

172

548

547

135

552

137

142

483

141

144

195

534

222

199

202

223

197

543

538

196

217

557

203

544

180

237

238

241

239

229

618

612

610

501

226

242

500

151

614

620

516

159

512

194

188

190

191

189

208

207

210

570

572

576

569

579

581

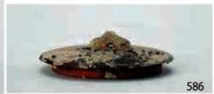
584

582

585

568

588


586

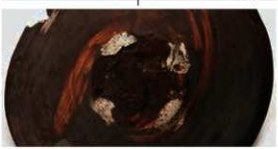
593

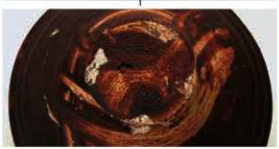
641

636

266

268





277

259

647

275

668

669

988

992

999

1019

1023

1035

1017

990

995

993

996

1039

1031

987

986

1006

1003

1058

1059

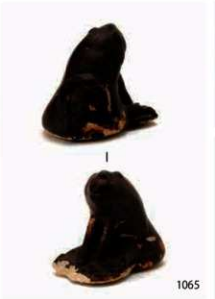
1060

1067

1068

1069

1061

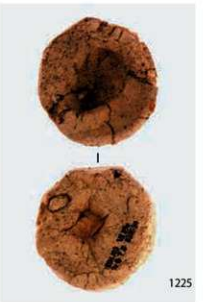

1065

1063

1215

1231 1230

1228 1223 1227


1225

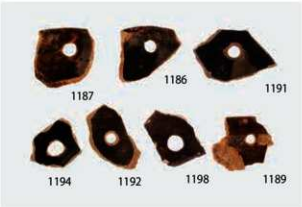
1210

1213

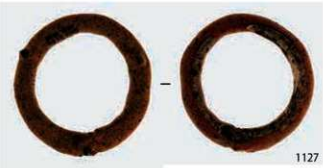
1211

1212

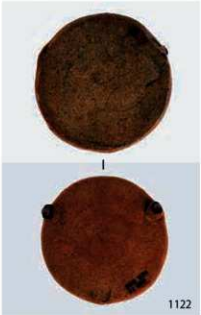
1195
1196
1199
1188
1193
1197


1187
1186
1191
1194
1192
1198
1189

1135
1137
1136
1129
1130
1132
1134


1127

635


1122

1120
1121

1119

1125

1206

1205

1201

1207

1202

1204

1174

1152

1150

1147

1171

1151

1146

1083

1079

1081

1082

1112

1072

1567

1114

1074

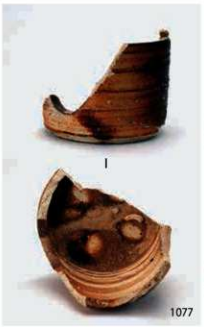
1075

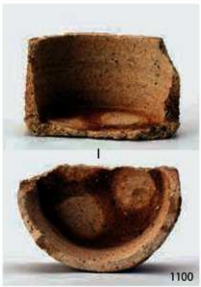
1080

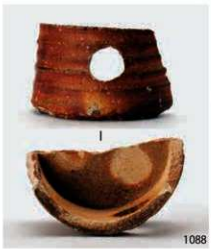
157

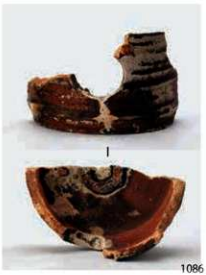
1073

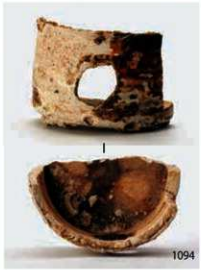
1084


1077


1100

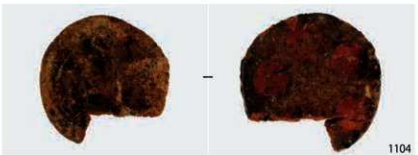

1088

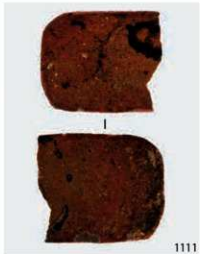

1086

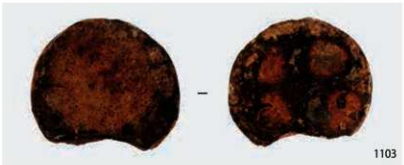

1094

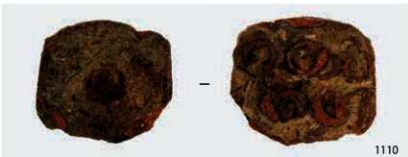
1113

1102

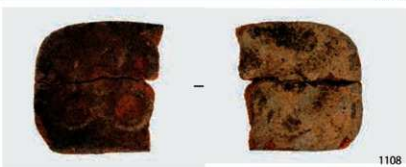

1104


1111


1103


1110

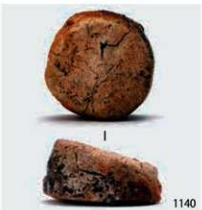
1105


1108

1145

1144

1141


1140

1142

1143

1235

1239

1234

1250

1247

1252

1248

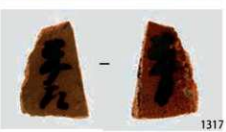
1261

1262

1271

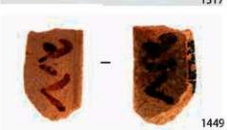
1322

1278


1317

1302

1303


1449

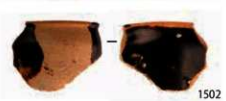
1483

1482

1490

1285

1374


1502

1346

1470

1547

1543

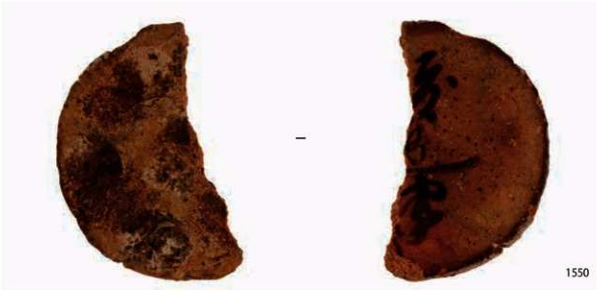
1545

I

1548

619

1540


—
1550

828

711

699

734

822

830

899

903

901

908

938

894

836

770

900

748

782

787

837

895

831

825

749

828

830

699

908

831

938

899

901

770

836

782

734

903

825

749

787

895

837

894

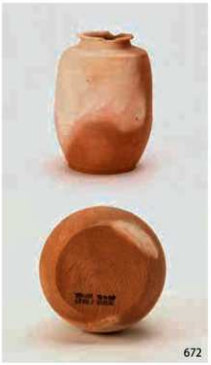
748

766

680

676

726


672

670

689

674

673

873

691

765

757

734

715

723

738

806

814

745

809

725

740

811

818

792

700

703

796

716

697

886

708

843

880

701

875

791

928

883

705

872

864

849

834

842

848

824

732

776

823

893

858

781

918

944

828

905

839

898

693

694

829

835

832

860

695

919

936

833

902

942

1564

匣鉢 IIIA 類の内面天井部
（赤変部分が少ない）

匣鉢 IIIB 類の内面天井部
（内面全体が変色）

1553

1554

1555

匣鉢 IIIC 類の内面天井部
（赤変範囲は部分的）

ふりがな	へいじかまあと
書　　名	瓶子窯跡
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第135集
編 著 者 名	武部真木・森　勇一・鵜飼雅弘・堀木真美子・鬼頭　剛
編 集 機 関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒498-0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
へいじかま 瓶子窯	あいちけんせとし 愛知県瀬戸市 たこやまちょう 凧山町	23204	03504	35度 13分 18秒	137度 8分 4秒	2003.4.1 ～ 2003.6.30	1,300	道路建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瓶子窯跡	古窯跡	江戸時代 前期	物原・自然流路	陶器・窯道具	茶陶(茶入)の注文生産に関する資料

文書番号	発掘届出(14埋セ第155号 2003.3.1) 通知(14教生第72-13号 2003.3.7) 終了届・保管証・発見届(15埋セ第29号 2003.7.2) 監査結果通知(15教生72-13 2003.12.25)

要　　約	連房式登窯、大窯・連房連結窯の2基の窯体の前方に広がる物原の調査。17世紀半ば～後半に操業し、擂鉢、銭甕など日常品を量産する一方で、茶入や各種碗など茶陶の注文生産を行っていた。注文者を示すと思われる「付け札」が出土した。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第 135 集

瓶子窯跡

2006 年 3 月 31 日

編集・発行　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　西濃印刷株式会社